

博士論文

論文題目 雨の詩人 陸游  
—その作品と生涯—

氏 名 三野 豊浩

雨の詩人 陸游 ―その作品と生涯― 目次

はじめに

論文の構成と各章の概要

主な先行研究の紹介

備考

第一部 陸游と范成大の交流

第一章 成都時代以前の陸游と范成大

第一節 陸游と范成大の誕生から出会いまで

第二節 臨安での出会いと別れ

第三節 陸游の入蜀と范成大の使金

結び

第二章 成都に於ける陸游と范成大

第一節 成都での再会

第二節 淳熙三年春の交流

第三節 淳熙三年秋の交流

第四節 淳熙四年春の交流

第五節 陸游と范成大の別れ

結び

〔補論〕淳熙三年の陸游の経歴に関する小考

第一節 諸家の年譜に於ける記述の異同

第二節 諸家の年譜の問題点

結論

第三章 成都を離れた後の陸游と范成大

第一節 別れた後の陸游と范成大

第二節 范成大之死と陸游の范成大追悼

第三節 晩年の陸游による范成大回想

結び

第四章 陸游・范成大と楊万里の交流

結び

第一部 今後の課題と目標

八	七	五	二	一	九	九	八	二二	二二	二二	二四	二九	三五	三八	四五	四六	四六	五〇	五五	五七	五七	五七	六八	七一	七五	七六	八六	八九
---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

## 第二部 雨の詩人 陸游

九〇

序章 陸游以前の主な雨の詩

九一

第一節 先秦から漢代までの主な雨の詩

九一

第二節 魏晉南北朝時代の主な雨の詩

九四

第三節 唐代および五代の主な雨の詩

一〇〇

第四節 宋代の主な雨の詩（南宋中期まで）

一〇九

結 び

一一七

第一章 「夜雨を聴く」詩でたどる陸游の生涯

一一九

第一期の「夜雨を聴く」詩（創作の開始から淳熙五年まで）

一二〇

第二期の「夜雨を聴く」詩（淳熙五年から淳熙十六年まで）

一二七

第三期の「夜雨を聴く」詩（淳熙十六年から嘉定二年まで）

一三三

結 び

一四四

第二章 「夜雨滴空階」考

一四六

第一節 唐代および五代の「夜雨滴空階」の詩

一四八

第二節 宋代の「夜雨滴空階」の詩

一五二

第三節 陸游自身の「夜雨滴空階」の詩

一五六

結 び

一六一

参考資料（各種の一覧表）

一六二

陸游詠雨詩年表

一七一

第二部 今後の課題と目標

一九三

執筆を終えるにあたって

一九四

主要参考文献一覧

一九五

## はじめに

この論文は、南宋（一一二七～一二七九）の詩人陸游（一二二五～一二二〇）に関する論考をまとめたものである。陸游は、特に現代中国において「偉大なる愛国詩人」として認識され、論じられる傾向が顕著であるが、その一方で、陸游がそれだけに限定されない多様さを備えた詩人であることも事実である。この論文は、そうした陸游の作品と生涯に別の角度から迫り、従来とは異なる陸游像を呈示することを試みるものである。

まず最初に、陸游という人物を簡単に紹介しておこう<sup>①</sup>。

陸游、字は務観、号は放翁。越州山陰（浙江省紹興）の人。南宋を代表する詩人であり、北宋を代表する蘇軾（一〇三七～一一〇二）と「蘇陸」と並び称される<sup>②</sup>。また陸游は、南宋の詩壇においては、同時代の三人の詩人たち、尤袤（一一二七～一一九四）、楊万里（一一二七～一二〇六）、范成大（一一二六～一一九三）らと「尤楊范陸」と並び称され<sup>③</sup>、「中興四大家」の一人に数えられる。

陸游は、三十四歳で福州寧徳（福建省）の主簿となり、仕官の道に入る。福州を離れた後、行在所の臨安（浙江省杭州）で勤務するが、皇帝の機嫌を損ねて地方に左遷された後、失脚して故郷の山陰に帰り、数年の閑居生活を送る。四十六歳の時に蜀（四川省）に入り、前後して南鄭（陝西省漢中）の王炎と成都（四川省）の范成大的幕府に身を寄せた。五十四歳で蜀を離れ東に帰った後、さらに出仕と失脚を繰り返すが、六十五歳の時に弾劾され失脚した後晩年の時間の大部分を故郷で過ごし、八十五歳で世を去る。

陸游は、敵国の金（一一一五～一二三四）に奪われた北宋時代の旧領土を奪回することを生涯の悲願とし、悲憤慷慨の詩を書き続けた。その主張は、辞世の七絶「示兒（兒に示す）」<sup>④</sup>（劍南八五）<sup>⑤</sup>に集約されている。そうした情熱的な人柄と作品のため、一般には「愛国詩人」の通称で知られるが、いわゆる「悲憤激昂」の詩の他に、日常生活の興趣を細やかな筆致でうたう「閒適細膩」の詩も多く存在する<sup>⑥</sup>。慷慨と閑適の二つの側面が

① 錢鍾書著、宋代詩文研究会訳注『宋詩選注3』（平凡社、二〇〇四）陸游解説（九二頁）および『世界人名大辞典』（岩波書店、二〇一三）の陸游の項参照（三二〇四頁）。いずれも原稿執筆は筆者。

② 清・乾隆帝御撰『唐宋詩醇』は、蘇軾と陸游のみを宋詩の「大家」とし、彼らの詩を、唐代を代表する「李杜韓白」、すなわち李白（七〇一～七六二）、杜甫（七一二～七七〇）、韓愈（七六八～八二四）、白居易（七七二～八四六）の四人の詩と共に収録している。

③ 尤袤、楊万里、范成大、陸游の順に並ぶのは、漢語の「平上去入」の四声の順に文字を並べる習慣のためで、陸游の成就が他の三人より低いわけではない。むしろその成就是諸家の上にある。

④ 陸游「示兒」：「死去元知万事空、但悲不見九州同。王師北定中原日、家祭無忘告乃翁。」『宋詩選注3』一九一頁参照。訳注担当は筆者。

⑤ 以下、陸游『劍南詩稿』は「劍南」、『渭南文集』は「渭南」、范成大『石湖居士詩集』は「石湖」、楊万里『誠齋詩集』は「誠齋」と略記する。たとえば（劍南八五）は、その詩が『劍南詩稿』巻八十五所収であることを意味する。

⑥ 『宋詩選注3』陸游解説（九二頁）および歌碩宇『陸游・陸詩に関する研究——「閑適」説と「憤激」説をめぐって——』（日本僑報社、二〇〇五）参照。

微妙なバランスで混在している所に、陸游の作品世界の特色と魅力があると言えよう。また陸游は中国詩歌史上最も多作な詩人としても知られ、九千首を超える作品が現存する<sup>①</sup>。詩集として『劍南詩稿』八十五巻があり、文集として『渭南文集』五十巻、『入蜀記』六巻、『放翁詞』二巻を含む<sup>②</sup>がある他、『老学庵筆記』十巻、『南唐書』十八巻などがある。『宋史』巻三五九に伝がある。

### 論文の構成と各章の概要

この論文は、第一部と第二部から成る。前者は陸游の生涯と交友に関する考察、後者は陸游の詩作の特色に関する考察である。以下、それぞれの内容について簡単に説明する。

第一部「陸游と范成大の交流」は、陸游と同世代の詩人の交流に関する論考である。

范成大、字は至能<sup>③</sup>、号は石湖居士。吳郡吳縣〔江蘇省蘇州〕の人<sup>④</sup>。孝宗の乾道六年、華北の金朝に臨時の使者として赴き、困難な交渉に当たった。有能な行政官として各地の地方長官を歴任した他、朝廷では、ごく短期間ながら参知政事（副宰相）をつとめている。詩人としては、同世代の陸游・楊万里らと共に、南宋の「中興四大家」に数えられる。若い頃から晩年に至るまで農民・庶民の生活に関心を寄せる詩を書き続け、七絶の連作「四時田園雜興六十首」（石湖二七）を代表作とする「田園詩人」として知られる。

総じて、陸游の作風は豪放で情熱的であり、時に感傷的である。これに対し、范成大的作風は端正かつ抑制的で、幾分晦渋である。二人の氣質や作風はいろいろな点で違っており、ある面では対照的すらある。吉川幸次郎氏は、そうした二人の作風の差異を評して、「のちの時代の文学なり芸術が、いわゆる呉派すなわち江蘇派と、浙派すなわち浙江派として示す差違の、早く現れたものであるかも知れない」と述べている<sup>⑤</sup>。こうした違いにもかかわらず、二人は心の通う友人同士であり、少なからぬ作品を応酬している。なお二人の年齢は一歳違いで、陸游は范成大より一歳年長である。

陸游と范成大の交流は、紹興三十二年の出会いに始まり、紹熙四年の范成大的死に至るまで、約三十年に及ぶ。しかし二人は、その間始終一緒にいられたわけではない。地位の差こそあれ、宋代の文人官僚として、それぞれに地方への赴任と故郷での閑居を繰り返す生活であり、蜀の成都で親しく交わった約二年間を除けば、親密な交流を保つことがで

① 村上哲見編『陸游「劍南詩稿」詩題索引』（奈良女子大学中国文学会、一九八四）によれば、九一三五首。ただし集外詩を除く。

② 『宋史』「范成大伝」は「范成大、字致能」と記す。しかし、実際の用例は圧倒的に「至能」が多く、陸游・楊万里の詩題における表記も、すべて「至能」になっている。于北山『范成大年譜』（上海古籍出版社、一九八七）は、「范成大、字至能（作「致」者非）」と記す。范成大については、『宋詩選注3』范成大解説および宋詞研究会『風絮』第五号（二〇〇九）范成大伝記を参照（三四一頁）。いずれも原稿執筆は筆者。

③ 范成大的本籍地については崑山など異説もあるが、いずれにせよ現在の江蘇省蘇州に属する。なお、この論文では、蘇州を当時の呼称である「平江」で呼ぶことにする。

④ 吉川幸次郎『宋詩概説』（岩波書店、一九六二）第五章第二節「范成大」参照。

きた時間はごく限られている。ここでは、成都時代<sup>①</sup>を中心とする陸游と范成大の交流を、二人の詩文をはじめとする各種の資料によって再構成し、なるべく客観的に記述した上で、その友情のあり方について考察する。

第一章「成都時代以前の陸游と范成大」では、陸游と范成大の誕生から、乾道九年までのそれぞれの人生の歩みについて記す。この時期は二人の友情の萌芽期であり、成都時代の交流のための準備段階である。

第二章「成都に於ける陸游と范成大」は、第一部の核心部分である。ここでは、陸游と范成大が最も親しく交わった成都時代の状況について詳しく記す。成都に於ける陸游と范成大の交流は古くから佳話として知られるだけに、この時期の二人の交流の実態を正しく考えることは、重要な課題となる。

〔補論〕「淳熙三年の陸游の経歴に関する小考」は、第二章の補足である。清・銭大昕の「陸放翁先生年譜」以来、陸游が淳熙三年六月に台州崇道観の祠祿（宋代特有の、寺社の管理を名目とする一種の恩給）を領したとする年譜が多いが、六月とする根拠はきわめて薄弱であり、秋（九月）になってから祠祿を領したとする欧小牧・市河寛斎らの年譜が正しいと筆者は考える。陸游と范成大の生涯にわたる交流の流れの中では些細な問題かも知れないが、成都時代の交流を考える上では避けて通れない問題なので、補足として記した。

第三章「成都を離れた後の陸游と范成大」は、二人が成都を離れてから范成大が世を去るまでの状況について記す。この時期は、言わば成都時代の余韻である。成都を離れた後、二人は二度と成都時代のような交流を持つことはなかったが、友情の名残を二人の作品から読み取ることができる。

第四章「陸游・范成大と楊万里の交流」は、陸游・范成大と、当時を代表するもう一人の詩人楊万里の交流について記す。淳熙五年から紹熙五年までの三者三様の軌跡を確認することで、陸游と范成大の交流もより立体的に把握できるのではないかと思われる。

成都に於ける范成大との交流は、陸游の詩人としての成長に大きな役割を果たした。有名な「放翁」の号も、范成大との唱和から生まれている。范成大との交わりなくして、陸游は「放翁」たり得なかつたのである。陸游と范成大の成都に於ける交流は、陸游の免職など一定の波乱もあつたにせよ、文学史的には大変意義深いものであつたと総括できよう。

ただし、陸游と范成大の間には友人とはいふものの一定の距離があり、唐の元稹と白居易のような、生涯にわたる一蓮托生の関係にはなり得ていないことは、注意しなければならない。国を憂える心情は同じでも、二人は政治的立場や考え方が異なっており、対等の友人として交わるには、互いに難しい関係にあつた。その点、范成大と楊万里は科挙の「同年」（同じ年の科挙で進士に合格した者同士）であり、范成大にしてみれば、破格の人材である陸游よりも交際しやすい相手であつたと想像される。しかし、陸游は最晩年になつても范成大との思い出を詩文に記しており、その友誼はやはり決して浅からぬものであつたと考えられる。

① 淳熙二年六月から淳熙四年六月までの約二年間、陸游と范成大は成都で共に過ごし、多くの詩文を応募した。この論文では、この期間を特に「成都時代」と呼ぶことにする。

第二部「雨の詩人 陸游」は、陸游の雨の詩についての論考である。

宋代の詩人たちが雨を好んでうたうことは、吉川幸次郎氏が指摘している通りである<sup>①</sup>。その中でも陸游は屈指の存在であり、『劍南詩稿』には実に膨大な雨の詩が収録されている。陸游の雨の詩は単にその数が多いのみならず、内容や表現においても多種多様である。雨の詩の中に陸游の世界の縮図があるとと言っても、決して過言ではない。控えめに言っても、それらは陸游の作品世界の重要な一部を占めており、詳細な研究に値する。しかし、膨大な雨の詩を全面的に検討することは困難なので、この論文では、陸游が最も頻繁にうたう夜雨の詩を研究の中心に置くことにしたい。

序章「陸游以前の主な雨の詩」では、陸游の雨の詩を論じる前提として、まず『詩経』『楚辞』から漢魏晋南北朝、唐五代を経て南宋中期に至るまでの歴代詩人たちの雨の詩を概観する。その上で、陸游の雨の詩の特色について考える。言うまでもなく、陸游の雨の詩は、これら先人たちの種々の影響の下に書かれている。ただし、雨を人生の不遇や逆境と結びつける例は多くとも、雨を憂国の主題と直結させる例は、陸游以前にはほとんどなく、范成大や楊万里など、陸游と同時代の詩人たちにも例が乏しい。この点こそは、陸游の雨の詩の一大特色であると考えられる。

第一章「夜雨を聴く」詩でたどる陸游の生涯」は、第二部の核心部分である。ここでは、陸游の夜雨の詩、特に夜雨を聴くことをうたう詩を中心とし、代表的な作品を年代順に紹介しながら、雨に彩られた陸游の生涯をたどる。その上で、詩人と雨の関係が、時と共にどのように変化して行ったのかを考察する。

陸游の詩に於ける「夜雨を聴く」という主題の発展は、大きく三つの段階に分けて考えることができる。現存する作品を見る限り、陸游が夜雨をうたう最初の詩は、入蜀前の「聞雨」である。しかしこの時点では、夜雨を自覚的に聴くという姿勢は、まだ必ずしも明確ではない。陸游が夜雨を自覚的に「聴く」ことをうたう最初の詩は、淳熙五年、蜀から山陰に帰った直後に書かれた「冬夜聴雨戲作」である。同じ主題は時と共に発展し、淳熙十三年には名作「臨安春雨初霽」が書かれる。淳熙十六年の失脚の後、長く続く閑居生活の中で、夜雨を聴くという主題は更なる深化を遂げる。陸游は、折りに触れては夜雨の音に自分の心情を投影させ、詩にうたい続けた「雨の詩人」であると言えよう。

第二章「『夜雨滴空階』考」は、第一章の補足である。ここでは、陸游が「建安」以上と絶賛する梁・何遜の詩句「夜雨滴空階」が、歴代の詩人・詞人たちによっていかに愛好され、模倣・翻案されたかについて考察する。何遜の詩句の模倣は中晩唐に始まり、宋代へと受け継がれて行く。その系譜をたどり、最後に陸游自身の「空階」の用例について検討する。陸游は、いかなる詩人にもまして何遜の詩句を自家葉籠中のものとし、自由自在にうたっていることが確認できる。

「参考資料」（各種の一覧表）は、序章から第二章までの各章の理解を助けると思われる各種の一覧表を、まとめて掲載する。

「陸游詠雨詩年表」は、三十代から没年に至るまでの陸游の雨の詩の詩題を列挙し、あわせて陸游の人生の概略を記す。

① 吉川幸次郎『宋詩概説』序章第十二節「宋詩における自然」参照。

## 主な先行研究の紹介

次に、陸游に関する先行研究を簡単に紹介する。ただし、陸游は何と言っても南宋を代表する詩人であり、当然その研究は内外あわせて膨大な数に上る。ここでは、第一部と第二部のそれぞれの内容に関連する論考のみを紹介し、それ以外の著書・論文・資料などについては、必要に応じ文中で言及することにした。

まず、第一部関係の先行研究を紹介する。中国で、陸游と范成大の生涯にわたる交流を研究の対象とする論文としては、次の二つがある。

- 龔放「陸游与范成大交游考」(『南京大学学報』哲学社会科学増刊、一九八六年)
- 王紅玉「陸游給范成大・楊万里・尤袤的唱酬詩」  
(紹興市文聯『陸游論集』吉林文史出版社、一九八七年)

特に前者は、独自の見解も含めて陸游と范成大の交流の全体を論じており、参考になる。また、研究書の一部で陸游と范成大の交流に触れるものとしては、次の二つがある。

- 張劍霞『范成大研究』(台湾学生書局、一九八五年)

第一章「范成大之生平」第四節「思想交遊」に陸游と范成大の交友に関する記述がある。

- 李致洙『陸游詩研究』(文史哲出版社、一九九一年)

第四章「陸游詩的主要内容」第三節「倫情」二、「朋友之情」に陸游と范成大の交友に関する記述がある。

また陸游・范成大それぞれの交友関係について書かれた論文としては、次のものがある。

- 孔凡礼「陸游交游録」(『文史』第二十一輯、一九八三年)
- 孔凡礼「范成大早期事跡考」(『文学遺產』第一期、一九八三年)「四 交旧」
- 于北山「范成大交游考略」(『中華文史論叢』第二輯、一九八三年)

両氏は中国の代表的な陸游・范成大研究者であり、孔凡礼氏には『范成大年譜』(齊魯書社、一九八五年)が、于北山氏には『陸游年譜(増訂本)』(上海古籍出版社、一九八五年)および『范成大年譜』(上海古籍出版社、一九八七年)がある。

目を日本国内に転じれば、関連する研究として次のものがある。

- 村上哲見『円熟詩人陸游』(集英社、一九八三年)



第六章「蜀中八年」第四節「范成大との交遊」で、成都に於ける陸游と范成大的交流について記す。二人の立場の違いについての見解は、的を射たものであると思われる。

○ 越野三郎『詩伝陸放翁』（スリーエーネットワーク、一九九六年）

著者は必ずしも専門家ではないが、「放翁」の章で、成都に於ける陸游と范成大的交流について記す他、二人の生涯にわたる交流についても基本的な流れを把握している。

○ 甲斐雄一「陸游と四川人士の交流——范成大的成都赴任と関連して——」  
（『日本中國學會報』第六十二集、二〇一〇年）

陸游と張續・范成大らの交流を、蜀に於ける「俠」を尊ぶ気風、宋代の蜀の閉鎖性などの観点から捉え直し、大胆な考察を展開している。

この論文は、以上を参考にしつつ、陸游と范成大的生涯にわたる交流の概略を、より緻密に跡付けることを目指した。

次に、第二部関係の先行研究を紹介する。吉川幸次郎『宋詩概説』に於ける雨の詩への言及にはすでに触れたので、ここでは紹介しない。

○ 小川環樹『中国詩文選 20 陸游』（筑摩書房、一九七四年）

陸游に関する論文・随想および代表作選集。その「静寂・黙想・雨」の一節は、陸游の雨の詩の基本的な特徴を総合的に論じている。小川氏は、「晩雨」「小雨」などの陸游の雨の詩を紹介し、最後に「臨安春雨初霽」を詳説して全体を結んでいる。文中に見える「陸游には雨の詩がはなはだ多い。そのことは彼みずから言っている。」「陸游に在っては、雨の音は心のわずらいをすべて忘れさせ、精神を高めるはたらきをするものであって、特別の意義が与えられていると知る。」「彼は雨の音に心の声を聞いたのである。」などの指摘は、いずれも陸游の雨の詩を考える上での大前提である。

第一部とは紹介する順序が逆になるが、近年の中国に於ける陸游の雨の詩に関する論考としては、次のものがある。

○ 張大燭「論陸游詩歌 雨 意象的審美内涵」  
（『放翁新論』海峽文藝出版社、二〇〇九年）

張氏は、陸游の雨の詩をその思想的內容によって大きく「抗金復国的理想寄托（金に抵抗し国土を恢復するという理想を託したもの）」、「壮志難酬的情感抒發（壮志が報われ難いという感情の表現）」、「民胞物与的情懷写照（一般の人々を思いやる気持ちの表れ）」の三つに分類し、それぞれについて論じている。

また、中国古典文学に於ける雨の詩を研究の対象とした論文として、次のものがある。

○ 矢嶋美都子「豊作を言祝ぐ詩 — 『喜雨』詩から『喜雪』詩へ —」  
（『日本中國學會報』第四十九集、一九九七年）

魏晋南北朝時代<sup>①</sup>の「喜雨」詩についての論考。建安の曹植以来、魏晋南北朝時代の歴代の詩人たちによって、豊作を言祝ぐ「喜雨」の詩が書かれている<sup>②</sup>。それらがやがて「喜雪」の主題へと移り行く過程を論じたもの。筆者とは関心の所在が異なるが、魏晋南北朝時代の雨の詩を整理してある部分は、序章を執筆する上で参考になった。なお、矢嶋論文は同氏の著書『庾信研究』（明治書院、二〇〇〇年）に組み込まれている。

○ 加納留美子「夜雨對牀 — 蘇軾兄弟を繋いだもの —」  
（『日本中國學會報』第六十一集、二〇〇九年）

中唐・韋応物に端を発する「夜雨對牀」の主題の展開を、蘇軾・蘇轍兄弟の場合を中心に考証した論考<sup>③</sup>。唐宋の夜雨の詩の実例が少なからず紹介されている上、唐代の「聞雨」詩について丹念な考証がなされており、参考になった。

この論文は、以上の先行研究の成果をふまえつつ、更に一步踏み込んで陸游の雨の詩の特色を解明することを目指した。

## 備考

一、この論文に於ける陸游詩の引用は、すべて銭仲聯『劍南詩稿校注』（上海古籍出版社、一九八五年）による。また、必要に応じ同書の底本である明・汲古閣刊の宋板翻雕『劍南詩稿』（帙入本）を参照した。ただし表記は、原則として新字体に改めた。

一、引用した陸游詩の製作時期は、すべて『劍南詩稿校注』の題解による。

一、この論文では『劍南詩稿』八十五卷に収録されている作品のみを研究の対象とし、制作時期不明の集外詩（『放翁逸稿』および『逸稿続添』）は考察の対象としない。

一、『渭南文集』は『陸游全集校注』（浙江教育出版社、二〇一一年）を底本とし、必要に応じ明・汲古閣刊『渭南文集』（帙入本）を参照した。ただし表記は、原則として新字体に改めた。

一、この論文に引用する詩の形式は、四言古詩は四古、五言古詩は五古、五言律詩は五律、五言排律は五排、五言絶句は五絶、六言絶句は六絶、七言古詩は七古、七言律詩は七律、七言絶句は七絶、雑言古詩は雑古と、それぞれ略記する。

① 「六朝時代」という呼称もあるが、本論文では「魏晋南北朝時代」を用いる。  
② 陸游にも「喜雨」と題する詩が複数あり、やはり農業との関係でうたわれているものが多い。ただし、この論文では陸游のそうした方向の雨の詩は考察の対象としない。  
③ 陸游の夜雨の詩の中にも、遠方の旧友や息子を雨の夜に思う詩がある。しかし、陸游の夜雨の詩はあくまでも自分自身の感慨の吐露を基調とし、「夜雨對牀」のような兄弟愛や友情の主題との関連は稀薄なようである。また陸游の詩における「對牀」の用例は五古「別後寄季長」（劍南九）に「對牀得晤語」とある一例のみであり、しかも「夜雨」とは結びついていない。

第一部  
陸游と范成大の交流

## 第一章 成都時代以前の陸游と范成大

北宋・欽宗の靖康元年（一一二六）十一月、女真族の金王朝の北方からの侵略により、北宋は領土を蹂躪される。首都開封〔河南省開封〕は陥落し、徽宗・欽宗をはじめ主な王族のほとんどが北方に拉致され、北宋は滅亡する。世に言う「靖康の変」である<sup>①</sup>。

靖康二年（一一二七）、欽宗の弟の康王が、応天府〔河南省商丘〕で即位する。これが、南宋の初代皇帝高宗（趙構）在位一一二七～一一六二である。南宋政権が発足すると、靖康二年は建炎元年と改められる。なおも金との戦闘が継続される不安定な状況の中、高宗は江南の各地を転々とする。

紹興二年（一一三二）、高宗は、ようやく臨安〔浙江省杭州〕を行在所とし、ここを拠点とする。美しい西湖のある水の都は、これ以後事実上の南宋の首都となる。

紹興十一年（一一四二）十一月、講和派の宰相秦檜（一一九〇～一一五五）の主導の下、金朝との間に「紹興の和議」が成立する。この和議により、宋は金に臣下の礼をとること、宋金両国は東方の淮河から西方の大散関までの線を国境線とすること、宋は金に対し毎年銀二十五万両・絹二十五万匹の歳幣を献上すること、などが定められた。この屈辱的な条件の和議により、南宋は広大な北方の領土を放棄し、いわゆる「半壁の天下」となるが、政権の基盤はようやく安定する。

同年十二月、金に反撃して武功を立てた岳飛（一一〇三～一一四一）が、秦檜の謀略により殺害される。こうしてみずから反撃の力を封じた南宋は、これ以後弱体な軍事力と為政者の怯懦の下、平和維持に汲々としつつ、辛うじてその命脈を保っていくことになる。以上が、これから記す陸游と范成大的交流の前提となる時代背景である。

### 第一節 陸游と范成大的誕生から出会いまで

「靖康の変」の起こる前年、徽宗の宣和七年（一一二五）十月十七日、陸游は、淮河を航行する船の上で生まれる。ちょうど大変な暴風雨が吹き荒れていたが、陸游の誕生とものにそれが収まったと、後に陸游みずから記している<sup>②</sup>。

陸氏がはじめて山陰に移り住んだのは、陸游の七代前の陸忻の時で、以来陸氏は山陰の名族として知られるようになる。中でも、王安石の門人であった祖父の陸佃（一一〇二～一一〇二）は、徽宗の治世の始めに礼部侍郎・尚書左丞となり、楚国公の爵位を授けられている。しかし、父の陸宰（一一〇八～一一四八）の代からは没落し、経済的にも恵まれない生活であったという。陸宰は陸佃の第五子であり、陸游は陸宰の第三子である。

北宋滅亡の後、江南は一時完全な無政府状態となり、陸游の一家は戦乱を避けて東陽〔浙江省金華〕まで疎開した。辛酸をなめた幼年時代の避難体験を、後に陸游は七古「三山杜

① 以下の論述における時代背景に関する記述は、宋史提要編纂協力委員会『宋代史年表（北宋）』（東洋文庫、一九六七）『宋代史年表（南宋）』（東洋文庫、一九七四）その他を参照した。

② 陸游の七絶の詩題「十月十七日、予生日也。孤村風雨蕭然、偶得二絶句。予生於淮上、是日平旦大風雨駭人。及予墜地、雨乃止」（劔南三三）参照。

門作歌「三山に門を杜して作れる歌」(劍南三八) 其一にうたっている<sup>①</sup>。

陸游は、十二歳で詩文をよくし、蔭補<sup>いんほ</sup>によって登仕郎<sup>とうしろう</sup>(正九品)になる<sup>②</sup>。十三歳の頃には、陶淵明<sup>とうえんめい</sup>の詩に親しんで食事を忘れるほどであったとみずから記している<sup>③</sup>。また十七歳の頃には、王維<sup>おうい</sup>の詩に親しんでいたという<sup>④</sup>。十八歳の頃には、江西詩派<sup>せいはい</sup>の流れをくむ詩人の曾幾<sup>そうき</sup>(一〇八四〜一一六六)に出会い、その門に学んでいる<sup>⑤</sup>。次に、范成大について記す。

「靖康の変」の起こった靖康元年(一一二六)六月四日、范成大は平江<sup>へいこう</sup>(江蘇省蘇州)に生まれる。「岳陽樓の記」で知られる北宋の名臣范仲淹<sup>はんちゆうえん</sup>(九八九〜一〇五二)を出した呉郡の范氏は、蘇州の名門である。范成大はその一族であるが、范仲淹の直系ではなく、父の范雱<sup>はんかう</sup>(?〜一一四三)以前の家系は、よくわからない<sup>⑥</sup>。范雱は、左奉議郎<sup>さほうぎろう</sup>・秘書郎<sup>ひしよろう</sup>(正八品)という低い官位で終わっている。また范成大之母の蔡氏は、北宋の書家蔡襄<sup>さいしょう</sup>(一一〇一〜一〇六七)の孫娘である。なお、陸游が四人兄弟の三男であるのに対し、范成大は五人兄妹の長男である(弟二人、妹二人)。

范成大は十二歳で遍く経史を読み、十四歳で詩文をよくした<sup>⑦</sup>。しかし范成大は生来病弱で、十四歳の時に大病を患い、あやうく死にかけたという<sup>⑧</sup>。また同じ頃、父と母を失っている。このため范成大は悲嘆にくれ、十年の間世に出ようとせず、二人の妹を嫁がせることに意を用い、科挙に応じる意志を持たなかった<sup>⑨</sup>。

若き日の范成大は、崑山<sup>こんざん</sup>の薦巖寺<sup>せんがんじ</sup>にこもって読書し、唐・賈島<sup>かとう</sup>の五絶「尋隱者不遇(隱者を尋ぬるも遇わず)」の詩句にちなみ、みずから「此山居士」と号し、地元の詩社に参加

① 陸游「三山杜門作歌」(劍南三八) 其一：「我生学步逢喪乱、家在中原厭奔竄。淮辺夜聞賊馬嘶、跳去不待鷄号旦。人懷一餅草間伏、往往經句不炊爨。嗚呼、乱定百口俱得全、孰為此者寧非天。」

② 『宋史』「陸游伝」：「年十二、能詩文。蔭補登仕郎。」以下、官品は『宋史』「職官志八」による。

③ 陸游「跋淵明集」(渭南二八)：「吾年十三四時、侍先少傅、居城南小隱。偶見藤床上有淵明詩、因取讀之、欣然会心。日且暮、家人呼食、讀詩方樂、至夜卒不就食。」

④ 陸游「跋王右丞集」(渭南二九)：「余年十七八時、讀摩詰詩最熟。後遂置之者六十年。今年七十七、永昼無事、再取讀之、如見旧師友、恨間闊之久也。」

⑤ 陸游と曾幾の関係については、朱東潤『陸游研究』(中華書局、一九六一)所収の論文「陸游与曾幾」参照。また小川環樹『陸游』(筑摩書房、一九七四)「陸游の詩学とその変化」参照。

⑥ 范成大の曾祖父の范澤は太子少保を、祖父の范師尹は太子少傅を、父の范雱は少師を、それぞれ贈られている。しかしこれらはいずれも、范成大が出世した後位を追贈されたものであり、彼らが実際に高位高官だったわけではない。

⑦ 周必大「資政殿大学士贈銀青光祿大夫范公成大神道碑」(以下「范公神道碑」と略記)：「年十二、徧読経史。十四能文詞。」

⑧ 范成大「問天医賦」(石湖三四) 序：「余幼而氣弱、常慕同隊兒之強壯、生十四年、大病瀕死。」

⑨ 周必大「范公神道碑」：「是歳、秦国(母。筆者注)薨。明年、少師(父。筆者注)薨。公毅然哀慕、十年不出。竭力嫁二妹。無科举意。」ただし孔凡礼・于北山いずれの『范成大年譜』も、范雱が世を去つたのは范成大が十八歳の時とする。

するなどしていた<sup>①</sup>。しかし、息子の仕官を望んでいた父の遺志にそむいてよいのか、という亡父の友人王葆<sup>おうほ</sup>（二〇九八〜一一六七）の忠告により、科挙受験を志すようになる<sup>②</sup>。

当時、科挙に応じるためには、「挙業<sup>きよぎょう</sup>」と称する特別の受験勉強が必要であった。これに反し、陸游と范成大は二人とも好きな詩文の世界に没頭しがちであり、受験には消極的であった。裕福とは言えないまでも、それなりの資産を有する官僚地主家庭の出身で<sup>③</sup>、若い頃から隱遁志向が強く、実社会との関わりを持つとうとしなかった青少年時代のあり方は、二人に共通しているようである。

以下、陸游と范成大のそれぞれの動向を、年表の形で記す。

○ 紹興二十三年（一一五三） 癸酉 陸游二十九歳 范成大二十八歳

この年、科挙の漕試<sup>そうし</sup>（地方試験）が開催される。陸游は両浙漕試に首席で合格する。一方、范成大は建康〔江蘇省南京〕の漕試に赴く。

○ 紹興二十四年（一一五四） 甲戌 陸游三十歳 范成大二十九歳

この年、科挙の省試<sup>しょうし</sup>（中央試験）が開催される。陸游は進士科に応じるが、宰相の秦檜に退けられ、落第する<sup>④</sup>。一方范成大は、楊万里と共に進士に合格する。陸游は帰郷の後、雲門<sup>うんもん</sup>の草堂にこもり、研鑽の時を過す。

○ 紹興二十五年（一一五五） 乙亥 陸游三十一歳 范成大三十歳

十月、それまで南宋の朝廷で絶大な権力をふるっていた秦檜が世を去る。

この年、范成大は徽州司戸參軍（従九品）に任命される。

年末、范成大は平江を出発し、徽州〔安徽省歙県〕に向かう。

○ 紹興二十六年（一一五六） 丙子 陸游三十二歳 范成大三十一歳

① 周必大「范公神道碑」：「取唐人『只在此山中』之語、自号『此山居士』。賈島「尋隱者不遇」〔全唐詩〕卷五七四）：「松下問童子、言師採藥去。只在此山中、雲深不知處。」なお范成大<sup>②</sup>の詩社における活動については、孔凡礼「范成大早期事跡考」〔『文学遺産』第一期、一九八三〕参照。

② 周必大「范公神道碑」：「友生御史王公彥光勉之曰、『子之先君、期爾祿仕、志可違乎。』因課以卒業、遂中紹興二十四年進士第。」また范成大『吳郡志』卷二十六：「左丞相周益公必大、初第、以女妻之。知其為国器也。成大以早孤廢業、一日呼前、喻勉切至、加以詰責。留之席下、程課甚嚴、未幾、亦忝科第。」

③ 陸游の家が大変な蔵書家であったことは、小川環樹『陸游』「書齋・菜園・菓草」参照。また吳郡の范氏には、同族扶助のための「義莊」があった。遠藤隆俊『宋代蘇州の范氏義莊について―同族的土地所有の一側面―』（宋代史研究会研究報告第四集『宋代の知識人』汲古書院、一九九三）参照。

④ 『宋史』「陸游伝」：「鎖廡薦送第一。秦檜孫埴適居其次、檜怒、至罪主司。明年試礼部、主司復置游前列、檜頭黜之、由是為所嫉。」この年の試験で、状元の張孝祥以下、三五六名が進士に合格している。なお、陸游はこれ以前、紹興十三年（一一四二）にも科挙を受験している（当時十九歳）。

春、范成大は徽州に着任する。これ以後范成大は、紹興三十年まで同地で勤務する。地方知事の属官として地味な職務をこなした徽州時代は、范成大にとって下積みの時代である<sup>①</sup>。この時期に、後の名地方長官となる素地が培われたものと思われる。

○ 紹興二十七年（一一五七）丁丑 陸游三十三歳 范成大三十二歳

陸游は山陰に、范成大は徽州にいる。

○ 紹興二十八年（一一五八）戊寅 陸游三十四歳 范成大三十三歳

四月、范成最大の最初の上司である李植<sup>りしよく</sup>が徽州を離任する。

六月、范成最大の二番目の上司となる潘莘<sup>はんしん</sup>が徽州に着任する。

冬、陸游は初めて出仕し、福州寧徳県〔福建省〕の主簿<sup>しゆぼ</sup>（従九品）となる<sup>②</sup>。

○ 紹興二十九年（一一五九）己卯 陸游三十五歳 范成大三十四歳

この年、陸游は福州決曹<sup>けつそう</sup>に転任する。

閏六月、潘莘は諫官に非議されて辞任する。

九月、范成最大の三番目の上司となる洪适<sup>こうかつ</sup>（一一一七～一一八四）が、徽州に着任する。

洪适は当時名の知られた文人で、弟の洪遵<sup>こうじゆん</sup>・洪邁<sup>こうまい</sup>と共に「三洪」と並び称されていた。

洪适は范成道を高く評価し、しばしば職務の合間に范成大と時事を談論し、范成大到「君

はいずれは政権の枢要に参画すべき器量の持ち主だから、自愛するように」と語った<sup>③</sup>。

洪适の知遇は、范成大にとって大きな励ましとなったであろう。

○ 紹興三十年（一一六〇）庚辰 陸游三十六歳 范成大三十五歳

正月、陸游は福州を離任し、山陰に帰る。

五月、陸游は臨安に赴き、勅令所刪定官<sup>ちよくれいしやんていいかん</sup>（正八品）となる<sup>④</sup>。

冬、范成大は徽州司戸参軍の任期が満了し、徽州を離任して平江に帰る<sup>⑤</sup>。

① 徽州時代の范成大については、浦金洲『歴代詩人と安徽』（黄山書社、一九八六）参照。范成最大の代表作である七古「催租行」（石湖三）「後催租行」（石湖五）は、いずれも徽州時代の作品である。

② 『宋史』「陸游伝」…「檜死、始赴福州寧徳簿。」

③ 周必大「范公神道碑」…「調徽州司戸参軍、歴三守、李植、潘莘、洪文恵公。…洪公博洽精明、每以訟牒付公、必問一牒幾人、姓名云何。公由此究心熟吏事、洪公喜、日与公商榷古今、常曰、『吾視君齒、必致兩府地、其自愛。』」「兩府」は、中書省と樞密院。

④ 『宋史』「陸游伝」…「以推者除勅令所刪定官。」

⑤ この時、洪适は范成大のために五古「送范至能」（『盤州文集』卷四）を書いている。

## 第二節 臨安での出会いと別れ

○ 紹興三十一年（一一六一）辛巳 陸游三十七歳 范成大三十六歳

春、范成大は一時臨安へ赴き、從仕郎となる。

七月、陸游は大理司直兼宗正寺主簿となる。

九月、金の第四代皇帝海陵王（完顔亮 在位一一四九～一一六一）の軍勢が、大挙して南侵する。迎え撃つ宋軍は最初劣勢であったが、十一月、虞允文が金軍を采石〔安徽省〕で破ると、勢いに乗じ、各地で敵を撃破する。海陵王は部下に裏切られて暗殺され、遠征は失敗に終わり、金軍は北へ撤退する。海陵王に替わり帝位についたのが、「小堯舜」と呼ばれる世宗（完顔雍 在位一一六一～一一八九）である。世宗は即位すると、年号を「大定」（一一六一～一一八九）と改める。

十月、陸游は免職され、一時山陰に帰郷するが、冬末、再び臨安に入り、史官となる。

○ 紹興三十二年（一一六二）壬午 陸游三十八歳 范成大三十七歳

春、范成大は臨安に赴き、太平惠民和劑局監となる。

陸游と范成大が臨安で初めて出会ったのがどの時点なのか、正確にはわからない。しかし、二人に共通の友人である周必大（一一二六～一二〇四）の詩集には、紹興三十二年春、花の贈答をめぐって陸游・范成大との間で応酬された七絶が収録されており、この頃には、三人の間に相互に面識があったと考えられる<sup>①</sup>。

范成大と同年生まれの周必大は、范成大より三年早い紹興二十一年（一一五一）の進士で、紹興二十七年（一一五七）には博学宏詞科にも合格している。周必大は文章の才能を高宗に評価され、紹興三十年九月、秘書省正字に任命されている<sup>②</sup>。

范成大に科挙の受験を勧めた王葆は、范成大の父の「同年」（科挙の同年合格者）であり、また周必大の外舅（妻の父）にあたる。このため、周必大と范成大との間に親しい交際が

① 紹興三十二年二月、周必大は陸游にあてて七絶「以紅碧二色桃花送務観」（『省齋文稿』卷二）を書く。この詩に范成大が次韻し、七絶「次韻周子充正字館中緋碧兩桃花」（石湖八）を書く。周必大はさらにこれに次韻し、七絶「范致能以詩求二色桃、再次韻二首」を書く。范成大はこれに次韻し、七絶「明日子充折贈、次韻謝之」「明日大雨復折贈、再次韻」（石湖八）を書く。また同年閏二月、陸游は周必大にあてて七絶「周洪道學士許折贈館中海棠、以詩督之」（劍南一）を書く。周必大はこれに次韻し、七絶「許陸務観館中海棠未与而詩来、次韻」（『省齋文稿』卷二）を書く。こうしたことから、紹興三十二年春の時点で、陸游・范成大・周必大は相互に面識があったことが確実と考えられる。孔凡礼『范成大年譜』紹興三十二年の項参照。：「二至四月間、与周必大（子充）有倡酬。与陸游（務観）当亦有往来。」（一〇六頁）

② 『鶴林玉露』丙編卷五に「周文陸詩」の項があり、朱熹（一一三〇～一二〇〇）が同時代の詩文中で、周必大の文と陸游の詩のみを高く評価していたことが記されている。：「朱文公於当世之文、独取周益公、於当世之詩、独取陸放翁。蓋二公詩文、氣質渾厚故也。」



あったことを、周必大は范成大の神道碑に記している<sup>①</sup>。

六月、高宗は前年の戦争をめぐって主戦派と主和派の意見が対立して收拾のつかなくなつた政局を打開するべく退位し、皇太子に譲位する。これが、南宋の第二代皇帝孝宗（趙昀 一一二七～一一九四。在位一一六二～一一八九）である。

九月、陸游は枢密院編修官兼編類聖政所檢討官に任命される。

十月、陸游は史浩・黄祖舜の推薦により、孝宗から特別に進士出身の資格を賜る<sup>②</sup>。

また前述の周必大は、臨安の官舎（百官宅）では陸游と隣同士で、親密な往来があった。羅大經の『鶴林玉露』は、孝宗が周必大に「近ごろの詩人で李白ほどの者がいるか」とたずねたところ、周必大が親しくしていた陸游を孝宗に紹介した、という逸話を記している<sup>③</sup>。新帝の知遇は、陸游にとって大きな希望となつたであろう。しかし、張り切りすぎた陸游は、大きなつまづきを経験する。

○ 隆興元年（一一六三）癸未 陸游三十九歳 范成大三十八歳

孝宗即位の翌年、年号は「隆興」と改められる。

三月、陸游は孝宗の寵愛する側近を批判したことで孝宗の機嫌を損ね、左通直郎通判鎮江府に任命される<sup>④</sup>。

四月、范成大は編類聖政所檢討官となり、陸游の同僚になる。しかしこの時点で陸游の鎮江への左遷はすでに決定していたわけで、陸游と范成大が同僚として交わることができたのは、ごく短い期間であつたことになる。

夏、陸游は臨安を離れる。ただしすぐには鎮江（江蘇省）に赴任せず、ひとまず山陰に帰り、欠員が出るまで待機することになる。この時范成大は、五律「送陸務観編修監鎮江郡帰会稽待闕」（陸務観編修の鎮江郡を監し、会稽に帰りて闕を待つを送る）（石湖九）二首

① 周必大「范公神道碑」：「某与公齐年，御史王公，予外舅也，以是与公善。」ちなみに范成大と周必大の出会いはより早く、紹興二十三年（一一五三）、二人が二十八歳の時に遡る。孔凡礼『范成大年譜』紹興二十三年の項参照。：「是年，周必大親迎崑山。成大与之相識，当自是時始。」（五九頁）

② 『宋史』「陸游伝」：「孝宗即位，遷枢密院編修官，兼編類聖政所檢討官。史浩・黄祖舜薦游善詞章，諳典故，召見，上曰、『游力学有聞，言論剴切。』遂賜進士出身。」

③ 『鶴林玉露』甲編卷四「陸放翁」：「陸務観，農師之孫，有詩名。寿皇嘗謂周益公曰、『今世詩人亦有如李太白者乎。』益公因薦務観，由是擢用，賜出身為南宮舍人。」「寿皇」は孝宗、「周益公」は周必大。また陸游「祭周益公文」（渭南四）：「得居連墻，日接嘉話。：淡交如水，久而不壞。」

④ 『宋史』「陸游伝」：「時龍大淵曾觀用事，游為枢臣張燾言，觀大淵招權植黨，燾惑聖聽，公及今不言，異日將不可去。燾遽以聞。上詰語所自来，燾以游對。上怒，出通判建康府。」建康府は鎮江府の誤り。なお同年三月、周必大も曾觀らの専横に嚴重に抗議し、臨安を離れている。范成大は、周必大の送別のために七律「送周子充左史奉祠歸廬陵」（石湖九）を書いている。また周必大は五律「次韻陸務観送行」二首（『省齋文稿』卷三）を書いている。これは、陸游が書いた送行の詩に周必大が次韻したものと思われるが、これに対応する陸游の原作は、現在の『劔南詩稿』では確認できない。

を書き、陸游を見送る<sup>①</sup>。これが、今日確認できる陸游と范成大の友誼を表現する最初の作品である。

宝馬天街路	宝馬 <small>ほうば</small> 天街 <small>てんがい</small> の路 <small>みち</small>
煙篷海浦心	煙篷 <small>えんぼう</small> 海浦 <small>かいほ</small> の心
非関愛京口	京口 <small>けいこう</small> を愛するに <small>あら</small> 非 <small>あ</small> ず
自是憶山陰	自 <small>おのずか</small> らは是れ山陰を憶 <small>おも</small> う
高興余飛動	高興 飛動を余し
孤忠有照臨	孤忠 照臨有らん
浮雲付舒卷	浮雲 付 <small>つ</small> きて舒卷 <small>じよけん</small> たり
知子道根深	知る 子 <small>こ</small> が道根 <small>みちね</small> の深 <small>ふか</small> きを

都の大通りを美しく飾った馬に乗って闊歩している今でも、あなたは、もやのかかった海辺に浮かぶ小舟に思いを馳せているのでしょうか。このたびの異動は、京口（鎮江）の地を愛するためではなく、あなたはおのずと、故郷の山陰をなつかしく思っておいでです。あなたの高い志操は、なお飛翔の力を余しており、孤独な忠義の心は、必ずや天の知る所となるでしょう。浮き雲があなたに付き従ってゆるやかに伸び縮みしているのを見につけても、あなたの道徳の基礎が深遠なものであることがわかるのです。

見説雲門好	説 <small>うんもん</small> かる 雲門 <small>うんもん</small> は好 <small>よ</small> く
全家住翠微	全家 翠微 <small>すいび</small> に住むと
京塵成歳晚	京塵 <small>けいじん</small> 歳 <small>さい</small> の晩 <small>ばん</small> るるを成し
江雨送人帰	江雨 <small>かうう</small> 人 <small>ひと</small> の帰 <small>かへ</small> るを送る
辺鎖風雷動	辺鎖 <small>へんさ</small> 風雷 <small>ふうらい</small> 動き
軍書日夜飛	軍書 日夜 飛ぶ
功名袖中手 <sup>②</sup>	功名 袖中 <small>しゆうちゆう</small> の手なるも
世事巧相違	世事 巧 <small>たが</small> みに相 <small>あ</small> い違 <small>ちが</small> う

雲門寺はとてすばらしい所で、  
あなたは一家で青い山の上に住んでいるとのこと。

① 以下、范成大の詩の引用は、すべて富寿菘『范石湖集』（上海古籍出版社、二〇〇六）による。表記は、陸游の場合と同様、原則として新字体に改めた。なお同じ時に、陸游の年長の友人韓元吉（一一一八～一一八七）も、送別の七律「送陸務観得倅鎮江帰還越」二首を書いている（『南澗甲乙稿』卷五）。

② 「袖中手」の解釈は、周汝昌『范成大詩選』（人民文学出版社、一九五九）に「袖中手、言其可操勝券」とあるのに従う。ただし、高海夫『范成大詩選注』（建宏出版社、一九九六）は「袖中手、操於手中」と注した上で「功名」の句を「功名的抱負只能暫藏袖裏」と訳しており、この場合「功名のことは、しばらく袖の中に手をしましうしかない」と、逆の意味になる。

都の塵ほこりは、年月が過ぎ去るのをうながし、川に降る雨は、親しい人が帰って行くのを見送っているかのようです。国境地帯の関所では、風雲急を告げ、軍事機密を記した文書が、日夜飛ぶように伝達されています。あなたならば、功名を立てるのは袖の中の手をつかむようにたやすいはずなのに、世の中の事は、なかなか思い通りには行かないものですね。

これらの詩からは、范成大が国情を憂慮する陸游の心情に理解を示し、その境遇に同情していたことがうかがえる。一方、この時に陸游が范成大に与えた詩は残されていない。五月、陸游が山陰に帰るのと前後して、張浚の北伐が開始される<sup>①</sup>。前年の戦勝の勢いに乘じ進撃した南宋の軍であったが、敵を深追いし過ぎたため、宿州〔安徽省〕の符離鎮で金軍に大敗する。孝宗は一時親征の詔勅まで発するが、宿州での大敗を聞くとたちまち動揺し、六月には「罪己詔〔己を罪する詔〕」を発する始末であった。

七月、孝宗は講和派の湯思退（？～一一六四）を参知政事に任命し、ひそかに和議の交渉を進める。孝宗の抗戦の意志が堅固なものでなかったため、戦争はうやむやのうちに終息し、和議の締結へと方針転換する。

十二月、再三にわたる交渉の末、宋と金の間に新しい和議が成立する。これが「隆興の和議」である。「紹興の和議」では宋と金は君（金）臣（宋）の関係であったが、新しい和議では両国は叔父（金）と甥（宋）の関係に改善された。また毎年の歳幣は、従前の二十五万から二十万に減額された。ただし、国境は「紹興の和議」の取り決めのままである。ともあれ、この和議の締結により宋金両国間の緊張は緩和され、平和が実現する。以後、寧宗の開禧二年（一二〇六）に韓侂胄が無謀な北伐を行うまでの間、宋金両国の間に大規模な戦争は起こらない。

○ 隆興二年（一一六四） 甲申 陸游四十歳 范成大三十九歳

二月、陸游は鎮江に着任する。

二月、范成大は枢密院編修官に任命される。

十二月、范成大は秘書省正字に任命される。

○ 乾道元年（一一六五） 乙酉 陸游四十一歳 范成大四十歳

孝宗が失地回復の理想を掲げた「隆興」はわずか二年で終わり、「乾道」と改元される。

三月、范成大は校書郎に遷る。

六月、范成大は国史院編修官を兼任する。

① 張浚の北伐の顛末については、周密『齊東野語』卷二「張魏公三戰本末略」参照。

七月、陸游は新たに通判隆興軍事となり、隆興（江西省南昌）に転任する<sup>①</sup>。  
十一月、范成大は著作左郎に遷り、なおも国史院編修官を兼任する。

○ 乾道二年（一一六六）丙戌 陸游四十二歳 范成大四十一歳

二月、范成大は尚書吏部員外郎兼国史院編修官に任命される。

三月、范成大は罷免され、平江に帰る<sup>②</sup>。

四月、陸游は、失敗に終わった隆興の北伐の責任者張浚を支持する言動があったことを理由に弾劾され、免職となり、山陰に帰る<sup>③</sup>。これ以後、乾道六年まで山陰で過ごす。

○ 乾道三年（一一六七）丁亥 陸游四十三歳 范成大四十二歳

十二月、范成大は新たに処州（浙江省麗水の西）の知事に任命される。

○ 乾道四年（一一六八）戊子 陸游四十四歳 范成大四十三歳

八月、范成大は処州に着任する<sup>④</sup>。

○ 乾道五年（一一六九）己丑 陸游四十五歳 范成大四十四歳

五月、范成大は臨安に戻り、礼部員外郎兼崇政殿説書に任命され、国史院編修官を兼任する。

十二月、范成大は起居舍人（従六品）兼侍講に抜擢され、実録院檢討官と国史院編修官を兼任する。侍講は、皇帝のそばに控えて経書の講義を受け持つ役目であり、范成大がこれに任命されたことは、孝宗の篤い信頼を意味する。

十二月、陸游は夔州（四川省奉節）通判に任命される。しかし、任地があまりに遠い

① 乾道元年秋、陸游は七古「往在都下時、与鄒德章兵部同居百官宅、無日不相従。僕来佐豫章、而德章亦謫高安、感事述懷、作歌奉寄」（劍南二）を書き、臨安時代の交友を回想している。しかし、そこで回想しているのは林黄中・劉韶美・周必大の三人であり、范成大には言及していない。∴「黄中掀髯語激烈、韶美堅坐書縱横。子充清言喜置酒、赤梨綠柿相扶擎。」「子充」は周必大の字。

② 『宋会要輯稿』第一〇一冊「職官七一・黜降官八」∴「乾道二年」三月四日詔、新除吏部郎中范成大放罷。以言者論其巧官幸進、物論不平故也。」周必大「范公神道碑」は「九月、言者罷、乃主管台州崇道觀」と記すが、孔凡礼「于北山いづれの『范成大年譜』も三月とする。

③ 『宋史』「陸游伝」∴「尋易隆興府。言者論游交結台諫、鼓唱是非、力説張浚用兵、免歸。」

④ 処州在任中、范成大は北宋・秦觀ゆかりの鶯花亭にちなみ、七絶「次韻徐子礼提舉鶯花亭」（石湖一〇）六首を書いている。陸游は其五に次韻し「鶯花亭」一首を書いているが、これは『劍南詩稿』に収録されていない逸詩なので、ここでは詳述しない。龔放氏は、その論文「陸游范成大交遊考」の中に「范陸『鶯花亭』詩考」の一節を設け、この詩をもとに陸游が処州の范成大を訪問している可能性について考察しているが、結論部分ではみずからその可能性を疑問視している。そもそも陸游は『入蜀記』に「相別八年」と明記しているから、閑居中にわざわざ范成大を訪ねて行ったとは考えにくいであろう。

ので、病気を理由に翌年夏まで出発を延期する<sup>①</sup>。

### 第三節 陸游の入蜀と范成大の使金

○ 乾道六年（一一七〇）庚寅 陸游四十六歳 范成大四十五歳

五月、范成大は起居郎に任命され、国史院編修官と実録院檢討官を兼任する。

閏五月九日、范成大は孝宗の命令により、金朝の都に使者として赴く。使命は二つあった。一つは、「靖康の変」以来、金に占領されたままになっている北宋歴代皇帝の陵墓の返還について交渉すること。もう一つは、南宋の皇帝が金の国書を受け取る際の儀礼の改善について交渉すること<sup>②</sup>。どちらも大変な難題である。『宋史』『范成大伝』は、当時の事情を次のように記す。

隆興再講和、失定受書之礼、上嘗悔之。遷成大起居郎、仮資政殿大学士、充金祈請国信使。国書専求陵寢、蓋泛使也。上面諭受書事、成大乞并載書中、不從。

隆興年間に再び講和条約を結んだ時、「金の」国書を受け取る際の儀礼について取り決めをしなかったことを、主上（孝宗）はいつも悔やんでいた。「そこで」范成大を起居郎に遷し、仮に資政殿大学士（正三品）の肩書を与え、金祈請国信使に任命した。国書にはもっぱら陵墓の返還を要求することが書かれてあるだけで、しかも平常時の使者である。主上は范成大に向かつて、国書の授受の事を言い含めた。范成大はそのことも国書の中に併記してくれるように願い出たが、「孝宗は」聴き従わなかった。

儀礼的な定時の使者ではない上に、使命が非常に重大なものである。范成大は決死の覚悟で北に向かう<sup>③</sup>。この時に范成大が書いた旅行記が、『攬轡録』（石湖三録の一）である。

閏五月十八日、陸游は山陰を出発し、夔州に向かう。范成大が臨安を出発したのと、ほぼ同時である。この時に陸游が書いた旅行記が、『入蜀記』六卷である。

六月二十八日の午前中、陸游と范成대는、鎮江の金山でつかの間の再会を果たす。次に、『入蜀記』巻一より六月二十八日の記事を示す。

奉使金国起居郎范至能至山。遣人相招、食於玉鑑堂。至能名成大、聖政所同官、相

① 陸游『入蜀記』巻一：「乾道五年十二月六日、得報差通判夔州。方久病、未堪遠役、謀以夏初離郷里。」

② 『宋史』『孝宗本紀二』：「（乾道六年閏月）戊子、遣范成大等使金求陵寢地、且請定受書礼。」

③ 『統資治通鑑』巻一四一：「臨行、帝謂之曰、『卿氣宇不群、朕親加選挾。聞官属皆憚行、有諸。』成大曰、『臣已立後、為不還計。』帝曰、『朕不發兵敗盟、何至害卿。嗚雪餐氈或有之。』成大請国書併載受書礼一節、弗許、遂行。」范成大の旅記および詩については、大西陽子「南宋期の紀行文に於ける時空間表現をめぐって―表現行為としての記録―」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第八号、一九八九）および「范成大に於ける紀行詩―紀行文『石湖三録』との関連を中心に―」（名古屋大学『中国語学文学論集』第五輯、一九九二）参照。

別八年。今借貸政殿大学士提举万寿觀侍誥、為金国祈請使云。

奉使金国起居郎の范至能が、金山にやって来た。人をやって招待させ、玉鑑堂ぎよくかんどうで会食をした。至能は、名を成大という。聖政所の同僚で、別れて八年になる<sup>①</sup>。今は、資政殿しせい殿大学士提举万寿觀侍誥の肩書を借り、金国祈請使きんこくきせいしとなっているとのことである。

陸游の記述はごく簡潔であり、またこの時応酬された詩などは残っていない。一方、范成大の『攬轡録』には、陸游との再会についての記録はない。これは、二人の身分・立場の違いと共に、陸游の旅行記が私的な性格のものであるのに対し、范成大のそれは、任務を果たした後、朝廷に提出するための公的な性格のものであることが理由かと思われる。二人が成都で再会するまでに、それから更に五年の歳月が流れる。

八月、范成大は国境線の淮河を渡る。

九月、范成大は金の中都ちゆうと〔北京〕の燕山えんざんに到着する。范成大は、正式な国書とは別に、要求事項を書いた意見書をふところにしのばせ、金の世宗との会見に赴く。次に、『宋史』「范成大伝」の一節を示す。

初進国書、詞氣慷慨、金君臣方傾聽、成大忽奏曰、「両朝既為叔姪、而受書札未称、臣有疏」。搢笏出之。金主大駭曰、「此豈獻書処耶」。左右以笏擿起之、成大屹立不動、必欲書達。既而帰館所、金主遣伴使宣旨取奏。成大之未起也、金庭紛然、太子欲殺成大、越王止之、竟得全節而帰。除中書舍人。

国書を献上することになったばかりの時、「范成大は」張りのある声で朗々と読み上げた。金の君臣が耳を傾けている最中に、范成大は突然奏上し、「両朝はすでに叔父と甥の関係となりましたのに、国書の受けわたしの儀礼がいまだに整っておりません。私に〔別に〕意見書がございます」と言って、笏に意見書をひっかけてこれを提出した。金主（世宗）はひどく驚き、「ここは書状をさしだす場所ではないぞ」と叫んだ。「世宗の」左右の家来たちが、笏でその意見書をたたき落とした。しかし范成大は直立不動で、何としても書状を世宗に届けようとした。范成大が宿舎に帰ってから、金主は伴使（范成大に同行した金側の使者）を遣わして「世宗の」意向を伝えさせ、「范成大の」上奏文を受け取らせた。范成大がまだ出発せずにいた時、金の朝廷は騒然となり、皇太子は范成大を殺そうとしたが、越王がこれを制止し、結局節を全うして帰ることができた。〔功劳により〕中書舍人ちゆうしよしゃんに任命された。

交渉の結果、金の朝廷は欽宗の柩を返還することは承諾したが、儀礼の変更は認めなかった<sup>②</sup>。范成大は必ずしも使者の目的を達成できなかったが、終始毅然とした態度で交渉にあたり、使命を辱めなかった。

① この場合、別れた年を一年と数える。

② 『宋史』「孝宗本紀二」：「金許以遷奉及帰欽廟梓宮而不易受書札。」なお范成大の金における交渉の模様については、『宋史』の他羅大経『鶴林玉露』巻一「范石湖使北」にも記事がある。また入谷仙介『宋詩選』（朝日新聞社、一九六七）范成大「州橋」の解説参照。

十月下旬、范成大は南宋に帰還し、臨安の朝廷に復命する<sup>①</sup>。この時の功績が評価され、范成大は中書舎人（正四品）兼同修国史兼实录院同修撰に任命される。

一方、范成大と別れた陸游は長江を遡り、任地の夔州を目指す。

十月二十七日、陸游は夔州に到着する<sup>②</sup>。これ以後陸游は、淳熙五年春まで蜀〔四川省〕に滞在する。

○ 乾道七年（一一七二）辛卯 陸游四十七歳 范成大四十六歳

三月、范成大は外戚の張説ちやうえつを枢密院に任命することに反対する。范成大の主張は受け入れられたが<sup>③</sup>、おそらくこの一件で朝廷の実力者との間に感情的な衝突があったのである。これ以後范成大は事実上朝廷に居場所を失い、約十年の間、各地の地方長官を歴任することになる。

八月、范成大は集英殿修撰（正六品）として知静江府广西経略安撫使しやんせいこうふに任命され、平江に帰る。

○ 乾道八年（一一七二）壬辰 陸游四十八歳 范成大四十七歳

正月、陸游は夔州通判の任期が満了し、再び失職する。そこへ、四川宣撫使しせんせんぶしの王炎おうえんから誘いがあった。王炎は主戦派の重鎮で、当時、国境線に近い南鄭なんてい〔陕西省漢中〕で金と対峙していた。陸游は喜んで夔州を出発し、南鄭に向かう。

三月、陸游は南鄭に到着し、王炎の幕府に入る。肩書きは、権四川宣撫使ごんしせんせんぶし司幹弁公事兼ししかんべんこうじ検法官である。南鄭での生活は半年余りに過ぎないが、陸游の生涯のうちで最も昂揚した時期であった。陸游は、この時期の体験をしばしば回想し、詩にうたっている<sup>④</sup>。

しかし同年十月、王炎は臨安に召還される。南鄭の幕府は解散し、幕僚たちは離散する。陸游は、新しく成都府路安撫使せいとふろあんぶし司参議官しさんぎかんに任命される。

十一月、陸游は南鄭を離れ、年末に成都〔四川省〕に到着する。陸游はその後、成都とその周辺の小都市の間を往来する。

十二月七日、范成大は平江を出発し、静江せいこう〔广西壮族自治区桂林〕に向かう<sup>⑤</sup>。この時に范成大が書いた旅行記が、『騶鸞録』〔石湖三録の二〕である。

- ① 『宋史』「孝宗本紀二」は范成大的帰還を九月とするが、『攬轡録』は「戊午、渡淮矣。」と記す。小川環樹訳『呉船録・攬轡録・騶鸞録』（平凡社、二〇〇二）によれば「戊午」は十月十二日。周必大の「范公神道碑」も「十月、公還」と記す。
- ② 陸游『入蜀記』卷六：「（十月）二十七日。早、至夔州。」夔州時代の陸游については、入谷仙介「夔州における陸游」参照。同論文は『詩人の視覚と聴覚 王維と陸游』（研文出版、二〇一一）所収。入谷氏は「夔州時代は、陸游にとって、一種の禁獄時代であった」と総括する。
- ③ 『宋史』「范成大伝」：「張説除簽書枢密院事、成大当制、留詞頭七日不下、又上疏言之、説命竟寢。」
- ④ 一例として、「九月一日夜読詩稿有感、走筆作歌」（劍南二五）：「四十従戎駐南鄭、酣宴軍中夜連日。打毬築場一千步、閱馬列廐三万疋。：詩家三昧忽見前、屈賈在眼元歴歴。」
- ⑤ 范成大『騶鸞録』：「石湖居士、以乾道壬辰十二月七日、発吳郡、帥広西。」

○ 乾道九年（一一七三）癸巳 陸游四十九歳 范成大四十八歳

春、陸游は蜀州〔四川省崇慶〕に赴任し、ほどなく成都に戻る。

三月十日、范成大は静江に着任する<sup>①</sup>。

夏、陸游は嘉州〔四川省乐山〕に赴任し、四十日の間知事代行を務めた後、成都に戻る。

## 結 び

以上、成都時代以前の陸游と范成大人の人生の軌跡を記した。

ここまでの段階では、二人の交流を物語る資料はまだ少なく、接点も限られている。応酬された詩歌は、陸游が臨安を離れる際に范成大が贈った五律二首のみであり、その後は、陸游の『入蜀記』に簡単な再会の記録があるのみである。しかし、范成大は後に陸游と別れる際、出会いと別れの周期性について語っているから〔↓四二頁〕、この時の再会に一定の印象を抱いていたことは疑いない。二人は、最初は周必大を介して知り合った間接的な友人同士であったかも知れないが、別れと出会いを繰り返す中で、徐々にお互いを理解するようになって行ったのではないかと思われる。この時期は、陸游と范成大人の友情の萌芽期であり、成都に於ける交流の準備段階であると言えよう。

次の第二章では、いよいよ二人の成都に於ける交流について記すことにしたい。

① 范成大『騷轡録』：「三月十日、入城、交府事。」



## 第二章 成都に於ける陸游と范成大<sup>①</sup>

### 第一節 成都での再会

○ 淳熙元年（一一七四）甲午 陸游五十歳 范成大四十九歳

乾道年間は九年で終わり、翌年、年号は「淳熙<sup>じゆんき</sup>」と改められる。  
孝宗の淳熙元年春、陸游は蜀州に戻る。

冬、陸游は榮州<sup>えいしゅう</sup>（四川省榮県）に赴任する。

冬十月、静江に赴任していた范成大は、新たに四川制置使兼成都府に任命される<sup>②</sup>。

これは、成都を中心とする四川盆地一帯を統括する地方長官の職務で、非常に大きな権限を有し、同時に重い責任を担うものである。范成大は赴任に先立ち、すでに蜀に入っていた陸游を、自分の参議官とする手はずを整えていた<sup>③</sup>。

除夜、陸游は榮州で成都への赴任を促す蜀の長官の檄を受け取る<sup>④</sup>。

○ 淳熙二年（一一七五）乙未 陸游五十一歳 范成大五十歳

正月十日、陸游は榮州を出発し、成都に向かう<sup>⑤</sup>。

正月二十八日、范成大は静江を出発し、成都に向かう。

六月七日、四箇月を越える長旅の末、范成大は成都に到着する<sup>⑥</sup>。成都に到着した范成大を陸游は当然出迎えたであろうが、この時の再会を記念する詩は残されていない。かつて臨安時代の同僚であった范成大は、こうして陸游の上司となった<sup>⑦</sup>。陸游に与えられた肩書きは、成都府路安撫使参議官兼四川制置使司参議官である。これ以後、范成大が成都を離任するまでの約二年間、二人の間に親密な交流が維持される。

成都に着任した范成大は、長旅の疲れを癒す間もなく、太守としての激務をこなして行く。陸游の「范待制詩集序」（渭南一四）によれば、成都は広大な土地と莫大な人口を抱えており、仕事は他の都市の十倍はある。その上、周辺には各種の異民族が居住し、北方に

① 本章は、拙稿「成都における陸游と范成大的交流」（『日本中國學會報』第四十八集、一九九六）を基礎とする。

② 周必大「范公神道碑」：「淳熙元年十月、除敷文閣待制、四川制置使、知成都府。」

③ 当時、幕府の長に任命された者は、私的な人間関係によつて自分の幕府を編成する権限が与えられていた。村上哲見『巴熟詩人陸游』（集英社、一九八三）第六章「蜀中八年」第四節「范成大との交遊」の項参照。また錢仲聯『劍南詩稿校注』第二冊五一頁参照。

④ 陸游「乙未元日」（劍南六）自注：「除夕得制司檄、催赴官。」「乙未」は淳熙二年。

⑤ 陸游「別榮州」（劍南六）自注：「正月十日。」

⑥ 范成大『桂海虞衡志』序：「航瀟湘、絶洞庭、湖灩澦、馳驅兩川、半年達於成都。」また范成大「与五一兄書」……「成大自正月起離廣西、六月七日方入成都府。」

⑦ 『宋史』「職官八・官品」によれば、范成大は敷文閣待制で従四品、陸游は朝奉郎で正七品。

は敵国の金が控えているので、いつ不測の事態があってもおかしくない。そこで幕府では日夜文書を作成し、その対応に苦慮していた<sup>①</sup>。このため、栄州ではのんびりした生活を満喫していた陸游も<sup>②</sup>、今や公務に精勤しなければならなかった。

秋、陸游は七律「書懷」(劍南六)を書き、当時の生活を次のようにうたう。

身留幕府還家少 身は幕府に留まり 家に還ること少なく  
眼乱文書把酒稀 眼は文書に乱れ 酒を把ること稀なり

我が身は幕府に残り、家に帰ることは少なく、  
目は文書に乱され、酒杯を手にとることは滅多にない。

張浚の北伐が失敗に終わり、金朝との間に「隆興の和議」が結ばれて以来、朝政は一貫して講和派に主導されている。太守としての范成大の政治姿勢は、当時の政府の方針に沿う穏健なものである。不測の事態に備え、武器の製造や兵卒の訓練にも力を入れたが、ことさら周囲と事を構えるようなことはせず、人材の登用を積極的に推進し、内政の充実に努めた<sup>③</sup>。着任以来幾月もしないうちに范成大声望は四方に轟き渡り、秋の収穫も豊作であったと、陸游は記している<sup>④</sup>。

范成大の五古「九月十九日衙散回、留大将及幕属、飲清心堂觀晚菊、分韻得諫暮字。暮字作樂府」(九月十九日 衙 散回し、大将及び幕属を留め、清心堂に飲し晚菊を觀、韻を分かちて諫暮の字を得たり。暮字は樂府を作る) (石湖一七)の一節は、そうした范成大的自負を次のようにうたう。

開辺吾豈敢 辺を開くは 吾れ 豈に敢えてせんや  
自治有余巧 自ら治むるには 余巧有り

ことさら辺境を切り開くことなど、私はどうしてしようか。  
しかし、内治にかけては十二分にうまくやってのけるつもりだ。

この時、范成大的「幕属」の一人として、陸游も清心堂の宴席にいたのである。「分韻」とあるからには、陸游も当然即席の詩を求められたに違いない。しかし、今日の『劍南詩稿』には、淳熙二年九月、清心堂で書かれた詩は確認できない。

- ① 陸游「范待制詩集序」(渭南一四)：「石湖居士范公待制數文閣來帥成都。兼制置成都潼川利夔四道。成都地大人衆。事已十倍他鎮。而四道大抵皆帶蠻夷。且北控秦隴。所以臨制捍防。一失其宜、皆足致變、故於呼吸顧眄之間。以是幕府率窮日夜力。理文書。応其会。而故時巨公大人、亦或不得少休。」
- ② 陸游「別榮州」(劍南六)：「偶落山城無事處、暫還老子自由身。」
- ③ 周必大「范公神道碑」：「公日夜閱士、製器甲、督辺郡、次第行之。」また于北山『范成大年譜』淳熙二年の項：「日夜閱士卒、製器甲、大抵以守辺為先務、不欲輕啓事端、貪功冒賞。」(一九八頁)
- ④ 陸游「范待制詩集序」：「及公之至也、定規模、信命令。弛利惠農、選將治兵。未數月、声震四境。歲復大登、幕府益無事。」

第二節 淳熙三年春の交流

○ 淳熙三年（一一七六）丙申 陸游五十二歳 范成大五十一歳

春二月、范成大とその幕僚たちは、成都にある西園の錦亭で夜宴を催した。この時、陸游は七古「錦亭」（劍南七）を書く①。

天公為我齒頰計  
遺飲黃甘与丹荔  
又憐狂眼老更狂  
令看広陵芍薬蜀海棠  
周行万里逐所楽  
天公於我元不薄  
貴人不出長安城  
宝帯華纓真汝縛  
樂哉今従石湖公  
大度不計聾丞聾②  
夜宴新亭海棠底  
紅雲倒吸玻璃鍾  
琵琶弦繁腰鼓急  
盤鳳舞衫香霧湿  
春醪凸盞燭光揺  
素月中天花影立  
遊人如雲環玉帳  
詩未落紙先伝唱  
此邦句律方一新  
鳳閣舍人今有様

天公 我が為に齒頰を計り  
黄甘と丹荔とに飲かしむ  
又た狂える眼の老いて更に狂うを憐れみ  
広陵の芍薬と蜀の海棠とを看しむ  
周行すること万里 樂しむ所を逐い  
天公 我に於て 元より薄からず  
貴人は出でず 長安の城  
宝帯 華纓 真に汝を縛る  
樂しき哉 今 石湖公に従うは  
大度にして 聾丞の聾なるを計らず  
夜宴 新亭 海棠の底  
紅雲 倒しめに吸う 玻璃の鍾  
琵琶 弦 繁く 腰鼓 急に  
盤鳳 舞衫 香霧に湿る  
春醪 凸盞 燭光 揺れ  
素月 中天 花影 立つ  
遊人 雲の如く 玉の帳を環らし  
詩 未だ紙に落ちざるに 先に伝え唱う  
此の邦の句律 方に一新せん  
鳳閣の舍人 今に様有り

天の神は、私のために食い扶持を与えてくださり、黄色い蜜柑と赤い荔枝をたらふく食わせてくださった。また狂った眼が年老いて一層狂おしくなったことを憐れみ、広陵（揚州）の芍薬と、蜀の海棠を見せてくださった。私は万里を経巡って樂しみを追い求めており、天の神は、私に対して元々つれなくはない。身分ある方々は長安の町を出ることもなく、宝の帯と小ぎれいな冠ひもで、我が身を縛っている。

① この詩については、入谷仙介『宋詩選』陸游「錦亭」の項参照。

② 『漢書』「黄覇伝」…「許丞廉吏、雖老、尚能抃起送迎。正頗重聽、何傷。」

ああ楽しいことだ、今こうして石湖公（范成大）に従うのは。  
太っ腹なお方で、幕僚の私の耳の遠さも気になさらない。

海棠の花の下、新しくできた亭で夜宴を催し、  
赤くたなびく花がすみの中で、ガラスの杯を逆さまにし、ぐっと飲み干す。  
琵琶の弦はしきりにかき鳴らされ、腰の細い鼓も速いテンポで打ち鳴らされる。  
踊り子たちの盤鳳のまげと薄い舞装束は、香り立つ夜霧にしっとり濡れている。

春のにごり酒は底の盛り上がった杯になみなみとつがれ、蠟燭の光はゆらゆら揺れ、  
白く輝く月が中空にかかり、花の影がくつきり浮かび上がる。

遊覧の人々は雲のように群れ集まって玉のとぼりを張りめぐらし、  
我々が詩を作りまだ紙に筆を落とさないうちに、もうそれを聞き伝えて口ずさむ。

この国の詩の風格は、今まさに刷新されようとしている。  
鳳閣の舎人様は、今の世にも詩のお手本を示しているのだ。

二十句から成るこの奔放な古詩は、陸游が成都に於ける范成大との友誼を表現した最初の作品である。陸游は、情熱的な筆致で華やかな夜宴の情景を描写し、太守としての范成対する信頼と、詩人としての范成大に対する賛美とをうたい上げている。「鳳閣舎人」すなわち中書舎人は、唐代には文士にとって非常に名誉ある地位とされていた<sup>①</sup>。ここで陸游は、范成大を唐の詩人になぞらえつつ、その文才を称えている。また、詩の中で陸游は范成大の「大度」を称揚しているが、これは必ずしもお世辞ではない。事実、范成大は度量のある太守であり、些細な欠点にこだわらず有能な人士を登用し、人望を集めたと、周必大は記している<sup>②</sup>。

陸游の「錦亭」が書かれたのと同じ宴席での作であろうか。范成大は、七絶「錦亭然燭觀海棠〔錦亭にて燭を然やし海棠を觀る〕」（石湖一七）を書いている。

銀燭光中万綺霞	銀燭 <small>ぎんしよく</small> の光中 <small>こうちゆう</small>	万綺霞 <small>ばんき</small>
醉紅堆上缺蟾斜	醉紅 <small>すいこう</small> の堆上 <small>たいじゆう</small>	缺蟾 <small>けつせん</small> 斜めなり
従今勝絶西園夜	今より勝絶 <small>きんより</small> なり	西園 <small>さいえん</small> の夜
压尽錦官城裏花	压し尽 <small>おさ</small> くす	錦官城裏 <small>きんかんじょうり</small> の花

銀のろうそくの光の中、たくさんの美しい衣裳がおぼろにかすみ、  
ほんのり酔ったように赤みを帯びた花のかたまりの上、欠けた月が斜めにかかっている。  
これからは、西園の夜こそが最高にすばらしい。  
その美しさは、成都の町のすべての花を圧倒してしまうほどだ。

陸游の詩と同じく、華やかな夜宴の雰囲気伝えるが、陸游の奔放なうたいぶりとは対照的に、行儀良く端正にまとめられている。陸游が「今に様有り」とほめたたえるのは、

① 盛唐・賈至および晩唐・杜牧がこの地位についている。『全唐詩』卷二三五賈至小伝：「肅宗拔擢為中書舎人。」『全唐詩』卷五二〇杜牧小伝：「拜考功郎中知制誥。遷中書舎人卒。」

② 周必大「范公神道碑」：「凡人才可用者、公悉羅致幕下、用其所長、不以小節拘之。」

あるいはこの詩のことであろうか。范成大は、このように盛大な宴会を催しては、幕僚や賓客たちに振る舞うことを好んだらしい<sup>①</sup>。詩風からは端正さ・几帳面さを感じさせる范成大であるが、多分に派手好きで豪放磊落な一面もあったと思われる。

陸游は、幕僚として公文書の作成に従事するかたわら、范成大の詩文の友として、私的な文章を手がけることもあった。淳熙三年春三月、上巳の日（三月三日）付けで、陸游は范成大のために「范待制詩集序」（渭南一四）を書く。その後半を示す。

公時従其属及四方之賓客、飲酒賦詩。公素以詩名一代。故落紙墨未及燥、士女万人、已更伝誦、被之樂府絃歌、或題写素屏团扇、更相贈遺。蓋自蜀置帥以來、未有也。

或曰、「公之自桂林入蜀也、船車鞍馬之間、有詩百余篇、号『西征小集』、尤雋偉。蜀人未有見者、盍請於公以伝」。屢請而公不可。弥年、乃僅得之。於是相与刻之、而属某為序。淳熙三年上巳日、朝奉郎成都府路安撫司參議官兼四川制置使司參議官山陰陸某序。

范公は、よくその幕僚及び四方の賓客を従え、酒を飲み詩を賦した。范公は平素より詩によつて一代に有名である。それゆえ紙に詩を書いて墨がまだ乾かないうちに、男女万人、もう互いに伝承しあった。これを歌詞として楽器に合わせて歌ったり、あるいは白い屏風や团扇に書き写し、互いに贈答しあったりした。思うに、蜀に長官を置いて以来、未曾有のことであろう。

ある人が言うには、「范公が桂林から蜀に入られた時、旅の途中で詩百篇余りをものさし、『西征小集』<sup>②</sup>と号しています。大変すぐれた出来栄えとのことですが、蜀の人はまだ見た者がいません。どうして范公にお願いして伝えてくださらないのですか」と。しばしば頼んだが范公はなかなか許してくれず、年を越えて、ようやく許可を得ることができた。そこで一緒にこれを版木に刻み、私に委嘱して序文を作らせたのである。淳熙三年上巳の日、朝奉郎成都府路安撫司參議官兼四川制置使司參議官の山陰の陸某、これを記す。

陸游の序文の前半は范成大の政績を称え、後半は范成大の詩が成都でもてはやされ、空前の流行を呈したことを記している。これは范成大の詩集の序文なので、陸游は、自分自身のことは何も書いていないが、南宋・黄昇の『中興以来絶妙詞選』巻二の陸游小伝に、次のようにある。

至能為蜀帥、務觀在幕府、主賓唱酬、短章大篇、人争伝誦之。

至能（范成大）が蜀の長官となった時、務観（陸游）はその幕府において、主人と客人としてたがいに詩を応酬し、短篇・大作を問わず、人々は争つてこれを伝誦した。

① 范成大『桂海虞衡志』「志酒」：「余性不能酒、士友之飲少者莫予若也、然知酒者亦莫予若也。」これを信じるならば、范成大は下戸だが、決して酒が嫌いではなかったと思われる。

② 『西征小集』は、范成大が桂林から蜀に入る道中の詩をまとめた小詩集である。現在では単行の詩集としては存在しないが、それに収録されていた詩は、現在の『石湖居士詩集』の巻十五及び巻十六に相当すると考えられる。なお、この赴任の旅の時には、『騷鸞録』のような旅行記は書かれていない。

このように、成都に於ける陸游と范成大の唱和は、南宋の当時すでに佳話として喧伝されていた。この春は、陸游と范成大の詩歌の応酬の最初のピークであったと考えられる。しかし、幕府に身を置く陸游には一つの悩みがあった。それは、事務が忙しすぎることである。淳熙三年三月、陸游は七古「遊園覚乾明祥符三院至暮〔園覚・乾明・祥符の三院に遊び、暮れに至る〕」（劍南七）を書き、当時の状況を次のようにうたう。

成都再見春事残	成都にて再び見る	春事の残なわるるを
雖名閑官実不閑	閑官と名づくとも雖も	実は閑ならず
門前車馬鬧如市	門前の車馬	鬧がしきこと市の如く
案上文檄高於山	案上の文檄	山よりも高し

成都の町で、再び春が過ぎ行くのを見送る。

名前は閑官だが、その実まったく閑ではない。

門前に引つ切りなしに訪れる車馬は市場のように騒がしく、机の上の文書は、山のように高く積み上がっている。

詩は、幕府に於ける公務の多忙をうたう。参議官は本来、実質的な職務のない閑官である。しかし、多忙な幕府にあって、陸游も精力的に文書の山と格闘していたことが、その詩句からうかがえる。

それからほどなく、陸游は参議官を辞職する。三月に書かれた七律「飯保福〔保福に飯す〕」（劍南七）の頸聯は、次のようにうたう。

飽飯即知吾事了	飯に飽きて即ち知る	吾が事	了すと
免官初覚此身軽	官を免ぜられて初めて覚ゆ	此の身の軽さを	

腹一杯飯を食べて、私の事業がおしまいになったことを悟り、官職を罷免されて、ようやく身軽に感じられるようになった。

免職が打撃でないはずはないが、この詩を見ると、当時の陸游は、むしろ繁雑な事務から解放されたことを喜んでいようにも見受けられる。免職の具体的な理由、また辞職が自発的なものだったか否かなどは不明であるが、『宋史』『陸游伝』の「文字を以て交わり、礼法に拘わらず」という記事や、この時期の陸游の詩句などから推測して、范成大の幕府に於ける陸游の過度に放埒な言動に一因がある可能性が高い。一例として、免職直前の作と考えられる七絶「題直舍壁〔直舍の壁に題す〕」（劍南七）を示す。

文書那得廢哦詩	文書	那くんぞ詩を哦るを廢するを得ん
羞作群兒了事痴	羞ず	群兒の了事の痴を作すを
付与後人評此翁	後人に付与して	此の翁を評せしめよ

① 『宋史』『陸游伝』…「范成大帥蜀、游為参議官。以文字交、不拘礼法。」

一丘一壑過元規 一丘一壑いっきゆういちがく 元規げんきに過ぎたり

文書の山も、どうして私が詩をうなるのをやめさせることができようか。小僧どもと一緒に馬鹿馬鹿しい事務に精を出すなんぞまっぴらだ。後世の人間に、このじい様を評価させるがいい。

山水に親しむ風流は、庾亮に勝っているのだ。

これは、「詩人陸游」の示威行動である。第二句では、幕僚たちを「群兒ぐんじ」小僧どもと呼び、『晋書』「傅咸伝」の故事をふまえ<sup>①</sup>、公務に精勤することを愚行と冷笑する。一層不穩なのは後半の二句であり、「一丘一壑」の語は『世説新語』「品藻篇」に由来する。

明帝問謝鯤、「君自謂何如庾亮」。答曰、「端委廟堂、使百僚準則、臣不如亮。一丘一壑、自謂過之」。

明帝が謝鯤にたずねた。「君は自分で庾亮と比べてどうだと思うかね」。謝鯤は答えた。

「廟堂を正しくおさめ、百官を規律正しくさせることは、私は庾亮には及びません。しかし、山水に親しむ風流の点では、彼に勝っているのではないかと思います。」

庾亮（字は元規 二八九〜三四〇）は東晋の政治家で、王導（二七六〜三三九）と競い、権勢をふるった人物である<sup>②</sup>。「此翁」は陸游自身を指すであろうから、ここで陸游が自分を謝鯤に、范成大を庾亮にたとえていることは明白である。とすれば陸游は、「范成大は立派な太守かも知れないが、後世の人間は詩人としては自分をより高く評価するだろう」と言っていることになる。しかも陸游はこの詩を官舎の壁に大書したのであり、明らかに常識的な官吏の規範を逸脱した行為である。さすがの范成大も、これには気を悪くしたのではなからうか。前掲「錦亭」を思えば、この詩の内容はまるで正反対である。「錦亭」に於ける范成大への賛美は、単なる社交辞令に過ぎなかったであろうか。あまりに無慮なこの詩は、通常の意味に於ける応酬の詩とは言えないが、これ見よがしに壁に書かれたメッセージは、当然長官の范成大にも伝わったであろう。この詩が書かれたことが免職の直接の原因か否かは不明であるが、これは、当時の陸游の葛藤が、すでに限界に達していたことの表れと言えよう。

陸游と范成大は、どちらも当時一流の詩人である。しかし、役人としても有能であった范成大とは違い、陸游はどちらかと言えば詩に特化した人間であり、無味乾燥な事務には適性がなかったであろう。煩瑣な事務に追われ、自分の創作のための時間がとれないことが、陸游には苦痛であったに違いない。成都に於ける陸游と范成大的交流は、第一に文学の友人としてのものであり、通常の上司と部下の関係からは大きく逸脱していた。陸游はその本質において詩人であり、彼が詩人として成長するにつれ、益々通常の官吏の生活には安住できなくなっていくことが、こうした詩句からも想像される。范成大的幕府に

① 『晋書』傅咸伝：「生子痴、了官事。官事未易了也。了事正作痴、復為快耳。」ちなみに北宋・黄庭堅も七律「登快閣」でこの典故を用いている。：「痴兒了却公家事、快閣東西倚晚晴。」

② 『岩波世界人名大辞典』（岩波書店、二〇一三）二九六四頁参照。

於いて失地回復の実現という自己の願望が満たされないことに加え、公務と詩作の板挟みになった陸游の日常は一層放埒の度合いを増し、それがある限度を越えた時、必然的に免職という結果がもたらされたと考えられる<sup>①</sup>。

三月に書かれた陸游の七律「遣興」（劍南七）の首聯は、次のよううたう。

鶴料無多又掃空　　鶴料<sup>かくりよう</sup>　多きこと無く　又た掃きて空し<sup>むな</sup>  
今年真是浣花翁　　今年<sup>まこと</sup>　真<sup>まこと</sup>に是れ浣花<sup>かんか</sup>の翁なり

もともと多くなかった給料も、これできれいさっぱりなくなり、今年の私は本当に、浣花草堂の老翁（杜甫）と同じ身の上になってしまった。

ここで陸游は、成都に於ける自分の境遇を、杜甫のそれにたとえている。陸游が杜甫ならば、范成大はその庇護者である劍南節度使の嚴武<sup>げんぶ</sup>ということになる。事実、陸游は後に成都時代を回想し、自分を杜甫に、范成大を嚴武にたとえる詩を書いている。（↓七三頁）范成大の庇護の下、陸游は、文人としての生活を保証されていた。陸游が幕府を離れた後も、范成大は陸游を「客」として遇し、何かと援助の手を差し伸べたことと思われる。

### 第三節 淳熙三年秋の交流

淳熙三年秋、九月一日付けで、陸游は范成大のために「籌邊樓の記」（渭南一八）を書く。これは、八月十六日に落成した籌邊樓と、それを建てた范成大の功績を記念するための文章である。その冒頭部分を示す。

淳熙三年八月既望、成都子城之西南新作籌邊樓。四川制置使知府事范公拳酒属其客山陰陸某曰、「君為我記」。

淳熙三年八月の既望の日（十六日）に、成都の子城の西南に、新しく籌邊樓を建てた。四川制置使で成都府知事の范公は、酒杯をあげてその客人である山陰の陸某に委嘱し、「君、私のために記を書いてくれ給え」と言った。

籌邊樓は、もとは晩唐の李德裕（七八七〜八五〇）が建てたものであり、范成大はそれを再建したのである。これに続けて陸游は、范成大がかつて金朝に使いし、使者の大任を立派に果たしたこと、北方の地理・儀礼・法律・制度・風俗その他に精通していることなどを、かつて劍南節度使として成都を治めた李德裕を引き合いに出しつつ、力説している

① 村上哲見氏は、「二人は政治的な見解および立場が違っており、長官と幕僚という関係でいるとお互いにまずいことになるので、純粹の友情を維持するために、双方がなっとくのうで陸游は辞職することになったのだと思う」と述べ、陸游の辞職は比較的円満に行われたと推測している。『円熟詩人陸游』第六章「蜀中八年」第四節「范成大との交遊」参照（二一八頁）。



①。そこからは、范成大が有事の際に重任に堪え得る人材であるとの、陸游の期待を読み取ることができよう。陸游は范成大を詩人としてではなく、むしろ度量と見識ある政治家として高く評価し、その活躍を期待していたと思われる。自分が疎外される分だけ、順調に官途を歩んでいる友人への期待は、大きくならざるを得なかったであろう。すると范成大は、次のように答えたという。

公慨然曰、「君之言過矣。予何敢望衛公、然竊有幸焉。衛公守蜀、牛奇章方居中、每排阻之、維州之功、既成而敗。今予適遭清明寬大之朝、論事薦吏、奏朝入而夕報可。使衛公在蜀、適得此時、其功烈壯偉、詎止取一維州而已哉」。某曰、「請併書公言以詔後世、可乎」。公曰、「唯唯」。九月一日記。

范公は、感慨を催して言った。「君の言葉は間違っている。私がどうして衛公（李德裕）にあやかりたいなどと望もうか。しかし心ひそかに嬉しく思っていることがある。李衛公が蜀を守っていた時には、政敵の牛僧孺が中央にいて、事あるごとに彼を排斥し、州を維持した功績は、成し遂げられたと思うや水泡に帰した。今私はたまたま清明寛大な時代に生まれ合わせ、問題を論じて官吏を推薦すれば、上奏文が朝に朝廷に入ると、夕べには『よろしい』と報じられるほどだ。李衛公を蜀にいさせ、今のこの時代に生まれさせたならば、その功績のすばらしさは、どうしてただ州を維持しただけ、などということがあり得ようか。私が、「閣下の言葉を併せて書き記し、後世に伝えたいと存じます。よろしいでしょうか」と言うと、范公は「ええどうぞ」と言った。九月一日記す。

范成大にとっては、陸游の期待は嬉しくもあり、また煩わしくもあったのではなからうか。范成大は孝宗の信任を得てはいたが、必ずしも当時の朝廷に盤石の基盤があったわけではない。大官になっても、あくまでも慎重に身を処さねばならなかった。この記の中の范成大は、陸游の期待を軽く受け流しているかのようである。

同じ頃、陸游を嘉州の知事に任命する話が持ち上がる。しかし、結局この任命は、陸游の生活態度が「燕飲頹放」（酒ばかり飲んでいてだらしない、の意）であったことを理由に、九月になって取り消される<sup>②</sup>。

ほどなく、陸游は主管台州崇道觀の祠禄を与えられる<sup>③</sup>。こうして陸游は、職務は名目ばかりの恩給生活者となった。決して体制から締め出されたわけではなく、それどころか十分にその恩恵を受けている身ではあったが、失地回復の理想が彼方に遠のいたことを、

① 陸游「籌邊樓記」：「按史記及地志、唐李衛公節度劍南、實始作籌邊樓。…方公在中朝、以洽聞強見擅名一時、天子有所顧問、近臣皆推公對、莫敢先者。其使虜而歸也、盡能道其國禮儀・刑法・職官・宮室・城邑・制度、自幽薊以出居庸・松亭關、並定襄・五原以抵靈武・朔方、古今戰守離合得失是非、一皆究見本末、口講手畫、委西南夷、距成都或不過數百里、一登是樓、在目中矣。」

② 『宋会要輯稿』第一〇一冊「職官七二・黜降官九」：「（淳熙三年）九月、新知楚州胡与可、新知嘉州陸游、并罷新命。…游撰嘉州、燕飲頹放故也。」

③ 清・錢大昕の『陸放翁先生年譜』を踏襲し、この年六月に陸游が祠禄を受けたとする年譜が多いが、筆者はこの説を疑問視する。ここでは、祠禄受領を九月とする欧小牧『陸游年譜』（人民文学出版社、一九八二）に従い、陸游の経歴を記述する。〔補論〕「淳熙三年の陸游の経歴に関する小考」参照。

痛感せざるを得なかったであろう。しかしその反面、繁雑な事務や役所での上下関係に束縛されない自由な身分となり、創作のための時間が確保されたことは、結果的にその詩人としての成長を促したと言える。

淳熙三年秋九月、陸游は范成大の七律六首に次韻している。対応関係は次の通り。なお、これは陸游の詩集を基準にした配列である<sup>①</sup>。

范成大	陸游
有懷石湖旧隱	和范待制月夜有感
新涼夜坐	和范待制秋興（三首）其一
立秋月夜	和范待制秋興（三首）其二
前堂觀月	和范待制秋興（三首）其三
秋雨快晴靜勝堂席上	和范待制秋日書懷二首、游自七月病起蔬食止酒、故詩中及之 其一
秋老四境雨已沛然、晚坐籌邊樓方議祈晴、樓下忽有東界農民數十人、訴山田却要雨、須長吏致禱、感之作詩	和范待制秋日書懷二首、游自七月病起蔬食止酒、故詩中及之 其二

これらの中でも、范成大の「新涼夜坐」（石湖一七）と、これに対応する陸游の「和范待制秋興」（范待制の秋興に和す）（劍南七）其一は、よく知られる。まず、范成大の「新涼夜坐」を示す。

吏退焚香百慮空	吏 退き 香を焚けば 百慮 空し
靜聞虫響度簾櫳	靜かに聞く 虫の響きの簾櫳を度るを
江頭一尺稻花雨	江頭 一尺 稻花の雨
窓外三更蕉葉風	窓外 三更 蕉葉の風
日日老添明鏡裏	日日 老いは添う 明鏡の裏
家家涼入短檠中	家家 涼は入る 短檠の中
簡編灯火平生事	簡編 灯火 平生の事
雪白眇昏奈此翁	雪白 眇昏 此の翁を奈んせん

役人たちが引き下がってから香を焚くと、さまざまな思い煩いから解放される。

虫の鳴き声が、れんじ窓の向こうから聞こえて来るのに、靜かに耳を傾ける。

江のほとりでは、少しばかりの雨が稲の花に降り注ぎ、

窓の外では、真夜中の風が芭蕉の葉にそよいでいる。

一日ごとに、鏡に写る写した自分の顔には老いが加わり、

どの家にも、涼しさが明かりの中に入り込んで来る。

① 范成大の詩集では、「秋雨快晴、靜勝堂席上」「新涼夜坐」「秋老、四境雨已沛然…感之作詩」「立秋月夜」「前堂觀月」「有懷石湖旧隱」の順。なお范成大の詩集では「秋老、四境雨已沛然…感之作詩」と「立秋月夜」の間に七律「西樓夜坐」があるが、陸游はこの詩には次韻していない。

灯火の下、書物に親しむのは、日頃からの習慣だが、  
髪は雪のように白く、目はよく見えない。このじい様をどうしたものか。

端正な表現から、太守の心労がにじみ出る。次に、この詩に陸游が次韻した「和范待制秋興」其一を示す。

策策桐飄已半空	策策として桐飄り	已に半ば空し
啼螿漸覺近房櫺	啼螿漸く覺ゆ	房櫺に近きを
一生不作牛衣泣 <sup>①</sup>	一生作さず	牛衣の泣
万事従渠馬耳風	万事渠に従う	馬耳の風
名姓已甘黄紙外	名姓已に甘んず	黄紙の外
光陰全付緑樽中	光陰全て付す	緑樽の中
門前剥啄誰相覓	門前剥啄として誰か相い覓む	
賀我今年号放翁	我の今年放翁と号するを賀するならん	

さらさらと桐の葉が風に吹かれて散り落ち、もう半ばほどもなくなっている。  
こおろぎの鳴き声が、そろそろ部屋の窓に近くなって来たな、と感ぜられる。  
もう一生、牛の皮にくるまって泣くようなつらい思いはするまい。

すべてを馬耳東風と聞き流して、生きて行くことにしよう。  
自分の姓名が黄色の勅書に記されなくても、構いはしない。  
残された人生の時間は、すべて酒樽の中につき込むのだ。

門の前でコツコツと戸をたたく音がするのは、誰が訪ねて来たのだろう。  
きっと私が今年から放翁と号することにしたのを、お祝いに来たに違いない。

二人ともすでに「知命」の五十を過ぎており、共通して老いの感慨があるのは自然である。「耳順」の六十にはまだ間があるが、陸游は「万事従渠馬耳風」とうたう。その身辺には、相変わらず非難や嘲笑が渦巻いていたのであろうか。だがそれは、主和を国是とする当時の状況の下で、主戦の信念を貫こうとする者の、甘受すべき宿命であった。頸聯は、自分の出世に見切りをつけ、悠々自適の晩年を過ごそうという静かな決意をうたう。この頃から、陸游はみずから「放翁」と号するようになるが<sup>②</sup>、この詩は、その詩歌に於ける初出である。この有名な号が、他ならぬ范成大との唱和から生まれたことは、特筆すべきであろう。范成大の存在あってこそ、陸游は「放翁」たり得たのである<sup>③</sup>。

① 『漢書』「王章伝」：「初、章為諸生学長安、独与妻居。章疾病、無被、臥牛衣中、与妻決、涕泣。」  
② 『宋史』「陸游伝」：「范成大帥蜀、游為參議官。以文字交、不拘礼法。人譏其頹放、因自号放翁。」  
また『鶴林玉露』甲編卷四「陸放翁」：「台評劾其特酒頹放、因自号放翁。」  
③ 清・姚瑩「論詩絶句六十首」其三十二は、成都における陸游と范成大の交際を想像し、次のようにうたう。：「開府題詩范石湖、也如嚴武在東都。務觀礼法因君放、曾与登床一醉無。」「登床」は『新唐書』「杜甫伝」に見える杜甫の嚴武に対する無礼の故事による。小川環樹『唐代の詩人―その傳記』（大修館書店、一九七五）および楊松年『姚瑩「論詩絶句六十首」論析』（文史哲出版社、一九九九）参照。

なお、この秋の唱和の全般的傾向として、二人の作品に役人生活への倦怠感と望郷の思いが色濃く表出されていることが特筆される。陸游は、乾道六年夏に山陰を離れて以来約六年。范成大は、乾道八年冬に呉郡を離れて以来約四年の歳月を経ている。異郷で知己と共に迎えた秋の中、二人は詩文の応酬で互いの心を慰めつつ、感傷に浸っていたように見受けられる。たとえば、范成大の「有懐石湖旧隠〔石湖の旧隠を懐く有り〕」①（石湖一七）は、次のようにうたう。

浩蕩沙鷗久倦飛	浩蕩たる沙鷗	久しく飛ぶに倦み
摧頽櫪馬不勝韉	摧頽たる櫪馬	韉に勝えず
官中風月常虛度	官中の風月	常に虚しく度り
夢裏関山或暫帰	夢裏の関山	或いは暫く帰る
橋社十年霜欲飽	橋社十年霜	飽かんと欲し
鱸江一雨水心肥	鱸江一雨水	心に肥えたるべし
冷雲著地塘蒲晚	冷雲地に著く	塘蒲の晩
誰為披蓑煖釣磯	誰か為に蓑を披て	釣磯を煖めん

はるばると旅して来たかもめは、すでに飛び疲れた。

よぼよぼになった馬は、くつわをかけることもできない。

役人暮らして見る風月は、いつもむなしく過ぎ去るが、

夢の中では関所や山々を越えて、しばらく故郷へ帰る。

故郷のみかんは、十年の間、実を霜に色づかせているだろう。

川の鱸魚は、一雨降った後の水の中で、きつと肥え太っているに違いない。

冷たい雲が地に垂れ込める、蒲の堤の日暮れ時、

一体誰が、蓑を着て、私の釣り場を暖めていることだろうか。

「鱸江」の語は、都の洛陽〔河南省〕で仕官していたが、秋風が吹く頃に故郷の名物の蓴菜のあつものと鱸魚のなますを思い出し、官を辞して帰郷したという西晋・張翰の故事による②。同じ典故は、陸游が范成大に贈った「双頭蓮 呈范至能待制〔范至能待制に呈す〕」詞にも見える③。その後関を示す。

尽道錦里繁華 　　尽く錦里の繁華を道うも

① 前野直彬『宋・元・明・清詩集』（平凡社、一九七三）一一七頁参照。

② 『世説新語』「識鑑」第七：「張季鷹辟齊王東曹掾、在洛。見秋風起、因思吳中菰菜羹・鱸魚膾、曰、「人生貴得適意爾。何能羈宦數千里以要名爵」。遂命駕便歸。俄而齊王敗、時人皆謂為見機。」同じ鱸魚の典故は、この他、陸游の「和范待制秋日書懷二首」（劍南七）其一、「和范待制月夜有感」（劍南七）、范成大が帰郷の旅の途中で書いた七律「鄂州南樓」（石湖一九）の中でも用いられている。

③ 夏承燾・呉熊和『放翁詞編年箋注』（上海古籍出版社、一九八一）が、この詞を淳熙三年の作とするのに従う。「官閒」というのは、名目のみの祠祿の官だからであろう。淳熙二年には、まだ范成大の幕僚として事務に忙殺されていたから、「官閒」ということはあり得ないはずである。

歎官閒昼永 歎ず 官は閒にして昼の永きを  
 柴荊添睡 柴荊に睡りを添え  
 清愁自醉 清愁に自ら酔う  
 念此際 此の際を念うに  
 付予何人心事 何人にか心事を付予せん  
 縦有楚舵呉檣 縦い楚舵と呉檣有りとも  
 知何時東逝 知らず 何れの時にか東に逝かん  
 空悵望 空しく悵望す  
 鱸美菰香 鱸は美に 菰は香ばし  
 秋風又起 秋風 又た起つ

誰もが成都の町の賑わいを語るが、

「名目ばかりの」職務は暇で、日中が長いのが嘆かわしい。

粗末な家の中でうたた寝をしては、

清らかな憂愁におのずと酔いしれる。

こうした境遇を思う時、誰に私の気持ちを託そうか。

たとえ楚の舵と呉の帆柱を備えた船があったとしても、

一体いつ東に帰ることができるやら。

憂いを胸に、空しく「故郷を」眺めやるばかり。

「鱸魚の」なますは美味で、まこものあつものは香ばしい。

ああ、秋風がまた吹き起こる。

祠祿で生活している陸游が「官閒」とうたう一方、范成大は、相変わらず成都太守の激務に忙殺されていた。この秋の范成大の詩には、役人務めの忙しさから来る心労をうたうものが目立つ。一例として、次の詩題を示す（石湖一七）。

秋老、四境雨已沛然、晚坐籌邊樓、方議祈晴、楼下忽有東界農民數十人、訴山田却  
 要雨、須長吏致禱、感之作詩

秋が深まり、成都の四方の土地はどこでも雨がざあざあ降っている。夜、籌邊樓に集まり、ちやうど晴天を祈ることを討議していたところ、樓の下に突然東の地域の農民數十人がやって来て、「山の田地は逆に雨を必要としているので、長官殿に雨乞いのお祈りをしてもらいたい」と訴える。このことに感慨を催し、詩を作る

この詩は、その詩題といい内容といい、「あちらが立てばこちらが立たず」という為政者の心労を物語っていて興味深い。范成大が役人として有能であったのも、この繊細さのゆえであろう。しかし、同時にそれが彼を追いつめてもいた。この詩の尾聯は、激務に耐え続けた范成大の疲労が、そろそろ限界に近づいていたことをうかがわせる。

錦城樂事知多少 錦城の樂事 知んぬ 多少ぞ

憂早憂霖蹙尽眉 早を憂い 霖を憂い 眉を蹙め尽くす

成都の町の楽しみなど、一体どれほどのものだろうか。  
日照りを心配し、長雨を心配し、眉をしかめ尽くす有り様だ。

#### 第四節 淳熙四年春の交流

○ 淳熙四年（一一七七）丁酉 陸游五十三歳 范成大五十二歳

淳熙四年春、范成大は重病になり、生死の境をさまよう<sup>①</sup>。范成大はもともと身体が弱い上に、赴任の長旅や幕府での激務による疲労が徐々に蓄積し、ここに来て、それまでの緊張が一気に崩れてしまったのであろう。この時期の范成大の詩は、老いと病気に対する感慨、それに郷愁が強く表出され、全体的に沈鬱な情緒に支配されている。

この春二月から三月の間に<sup>②</sup>、范成大の病中病後の七律三首に陸游が次韻して応じている。対応関係は次の通り。これも、陸游の詩集を基準にした配列である<sup>③</sup>。なお陸游の詩題の「張正字」は、張績のこと<sup>④</sup>。

范成大	陸游
二月二十七日病後始能扶頭	和范舍人書懷
枕上	和范舍人病後二詩、末章兼呈張正字 其一
病中聞西園新花已茂及竹徑皆成而海棠亦未過	和范舍人病後二詩、末章兼呈張正字 其二

またこの頃から、范成大の詩題に「陸務観」の名が散見されるようになる<sup>⑤</sup>。このことは、范成大の陸游に対する精神的依存の度合いが、次第に大きくなって行ったことを物語る。病床の范成大を陸游はしばしば見舞いに訪れ、元気づけたのであろう。一例として、范成大の詩集には、次のような詩題の七絶二首がある（石湖一七）。

陸務観云、春初多雨、近方晴。碧鷄坊海棠、全未及去年

① 周必大「范公神道碑」：「淳熙」三年春、公大病、求帰。」また范成大『呉船録』六月壬申：「今春病少城、幾殆。僅得更生。」  
② 『石湖居士詩集』卷十七では、七律「丁酉正月二日東郊故事」の直後に七律「二月二十七日病後始能扶頭」が続き、日付を見る限り二箇月近い作詩の空白がある。おそらく范成大の病気はこの間の出来事であるろう。「二月二十七日：」と同じ頃に書かれたと思われる七律「病中聞西園新花已茂：」には「三句高臥信音疎」の句があるから、少なくとも一箇月は病床にあったと考えられる。そして二月の下旬から、病氣は次第に快方に向かったのであろう。

③ 范成大の詩集では、「二月二十七日：」「病中聞西園新花已茂：」「枕上」の順。

④ 張績、字は季長。南鄭で知り合った陸游の友人。陸游と張績の交わりについては、黄錦君「陸游張績交游考」（『宋代文化研究』第五輯。巴蜀書社、一九九五）および甲斐雄一「陸游と四川人士の交流―范成大の成都赴任と関連して―」（『日本中國學會報』第六十二集、二〇一〇）参照。

⑤ 「陸務観」の名を明記する詩は、『石湖居士詩集』卷十七に二題三首、卷十八に四題四首確認できる。

陸務観が言うには、「春の初めは雨が多く、最近になってようやく晴れました。碧鷄坊の海棠の花は、まだ全く去年に及びません」とのことである。

病気で自由に出歩くことのできない范成大は、気になる海棠の花の消息を、見舞いに訪れた陸游に尋ねたのであろう。「碧鷄坊」は成都の海棠の名所であり、陸游が淳熙三年春に書いた七絶「花時遍遊諸家園」〔花時 遍く諸家の園に遊ぶ〕（劍南六）にも見える①。范成大にとって、こうした陸游との雑談は、大きな慰安であったに違いない。

またこの春には、陸游が冬の終わり頃に書いた七古「春愁」（劍南八）に范成大が唱和している。まず、陸游の「春愁」を示す。

春愁茫茫塞天地	春愁 <small>しゅんしゆう</small> 茫茫 <small>ぼうぼう</small> として天地を塞 <small>ふさ</small> ぎ
我行未到愁先至	我 行 <small>い</small> きて未 <small>い</small> だ到 <small>いた</small> らざるに 愁 <small>い</small> い 先 <small>ま</small> ず至 <small>ま</small> る
滿眼如雲忽復生	眼 <small>まなこ</small> に満 <small>み</small> ちて雲 <small>う</small> の如 <small>ごと</small> く 忽 <small>たち</small> ちにして復 <small>ま</small> た生 <small>ま</small> じ
尋人似瘴何由避	人 <small>ひと</small> を尋 <small>たず</small> ぬること瘴 <small>おこり</small> に似 <small>に</small> て 何 <small>なに</small> に由 <small>よ</small> りてか避 <small>ま</small> げん
客來勸我飛觥籌	客 来 <small>き</small> たりて我 <small>われ</small> に勸 <small>すす</small> む 觥 <small>こう</small> 籌 <small>ちゆう</small> を飛 <small>と</small> ばせと
我笑謂客君罷休	我 笑 <small>わら</small> いて客 <small>きやく</small> に謂 <small>い</small> う 君 罷 <small>や</small> 休 <small>め</small> よ
醉自醉倒愁自愁	醉 <small>おの</small> ずか 自 <small>みづか</small> ら醉 <small>おの</small> ずか倒 <small>た</small> れ 愁 <small>おの</small> ずか 自 <small>みづか</small> ら愁 <small>う</small>
愁与酒如風馬牛②	愁 <small>い</small> いと酒 <small>さけ</small> とは風 <small>ふう</small> 馬 <small>ば</small> 牛 <small>ぎゆう</small> の如 <small>ごと</small> しと

春の愁いは際限もなく天地の間に満ちあふれ、私が出かけてまだ到着しないうちに、愁いはもう先にたどり着いている。まるで雲のように目の前いっぱい満ちあふれ、たちまちまた生じ、おこりの病のように人に襲いかかり、どうやって避けることができようか。客人がやって来て、私に大いに酒杯を空けるように勧める。私は笑って客人にこう答える。「君、無駄なことはやめ給え。酔えば自然に酔うし、愁えれば自然に愁える。愁いと酒は、互いに何の関係もないのだよ」と。

これに対し、范成大は七古「陸務観作春愁曲悲甚、作詩反之」〔陸務観「春愁の曲」を作るに、悲しきこと甚だし。詩を作りて之に反す〕（石湖一七）を書き、次のように応じている。

東風本是繁華主	東風 本 <small>もと</small> より是 <small>こゝ</small> れ繁 <small>さか</small> 華 <small>か</small> の主 <small>しゅ</small>
天地元無著愁処	天地 元 <small>もと</small> より愁 <small>い</small> いを著 <small>つ</small> くるの 処 <small>ところ</small> 無し
詩人多事惹閒情	詩人 事 <small>こと</small> 多くして閒 <small>かん</small> 情 <small>じやう</small> を惹 <small>ひ</small> き
閒門自造愁如許	閒門 <small>かんもん</small> に自 <small>みづか</small> ら愁 <small>い</small> いを造 <small>つく</small> ること許 <small>かく</small> の如 <small>ごと</small> し

① 陸游「花時遍遊諸家園」（劍南六）其一：「看花南陌復東阡、曉露初乾日正妍。走馬碧鷄坊裏去、市人喚作海棠癩。」拙稿『宋詩別裁集』に収録された陸游の七言絶句（愛知大学語学教育研究室『言語と文化』第十五号、二〇〇六）参照。

② 『春秋左氏伝』僖公四年：「楚子使与師言曰、『君处北海、寡人处南海。唯是風馬牛不相及也。』」

病翁老矣痴復頑 病翁 老いたり 痴にして復た頑なり  
風前一笑春無辺 風前に一笑すれば 春は辺無し  
糟床夜鳴如落泉 糟床ぞうじょう 夜 鳴りて 落泉らくせんの如し  
一杯正与人相関 一杯 正に人と相い関す

春風は本来繁栄をつかさどる主人であり、天地の間にはもとより愁いを置くべき場所などどこにもありません。詩人は多情でいらざる物思いを引き起こし、閑居していながら、こんな風に自分で勝手に愁いを作り出すのです。病気のご老人よ、年をとられたましたな。愚かでしょうかも頑かたくなことよ。風の前で顔をほころばせて一笑すれば、春はどこまでも果てしなく広がっていますよ。酒を発酵させる糟床は、夜ぼたぼたと音を立てて、まるでしたたり落ちる泉のよう。一杯の酒は、人と大いに関係があるではありませんか。

陸游が「春の愁いは天地に遍く存在する」とうたうのに対し、范成大は「春は本来繁栄の季節であり、愁いは多感で有閑な詩人自身の所産に過ぎない」と反論する。范成大は「聞」の字を二度も用い、「私は忙しくて死にそうな程なのに、あなたは十分暇のあるご身分で、うらやましいですな」と、皮肉を言っているようにも見える。これは次韻の詩ではなく、内容も幾分遊戯的であるが、こうした応酬の詩が存在することは、この時期の二人の関係が相当打ち解けたものになっていたことを物語る。

しかし陸游は、ただ范成大に適当に調子を合わせていたわけではない。時には、精神的に懦弱になっている范成大を叱咤激励することもあった。たとえば、范成大は「枕上」で次のようにうたう。

摧頽豈是功名具 摧頽さいたい 豈に是れ功名具そなわらん  
燒藥炉辺過此生 炉辺ろへんに藥を燒きて 此の生を過あごさん

すっかりやつれ衰えてしまった上は、どうして功名がこの身に備わるものか。罌炉裏端で藥を燒きながら、余生を過あごすことにしよう。

このように范成大が太守らしくもない気弱な言葉をもらすのに対し、陸游は「和范舍人病後二詩、末章兼呈張正字」「范舍人の病後の二詩に和し、末章は兼ねて張正字に呈す」其一人で次のように応じている。

関隴宿兵胡未滅 関隴かんろうに宿兵あり 胡 未だ滅せず  
祝公垂意在尊生 祝す 公の意を垂るるは尊生あに在らんことを

関中〔陝西省〕と隴〔甘肅省〕では争いが続いており、えびすはまだ滅びておりません。どうか閣下の御心は、民生を重んじることに御用いくださいますよう。



陸游は范成大に、太守としての責任を自覚し、人々のための政治をしてくださいと、強い調子で応じている。病み上がりの范成大に対し、かなり手厳しい言葉のようにも感じられるが、これも見方によっては、陸游がこうした忠告をできるほど、二人の関係が成熟していた、ということになるであろう。

### 第五節 陸游と范成大の別れ

淳熙四年二月、胡元質が范成大の後任に任命される<sup>①</sup>。

四月、范成大の帰還を命じる詔が成都に届く。

四月己卯付けで、陸游は「銅壺閣の記」（渭南一八）を書く。陸游はその中で、「立派な樓閣の建築もさることながら、失地回復の大志を忘れぬように」と、重ねて范成大到呼びかけている<sup>②</sup>。

五月末、范成大は成都を出発する。この時陸游は、范成大を慈姥巖まで見送る。この送別の道中は、陸游と范成大の応酬の最後のピークとなる。対応関係は次の通り。

范成大	崇徳廟〔自注〕李太守廟食処也	和范舍人永康青城道中作	七古
	次韻陸務観編修新津遇雨、不得登修覚山、徑過眉州三絶〔自注〕新津館舍、上漏下湿、送客皆不堪憂。修覚一望、人云可見劍門、杜子美所謂西川供客眼処。眉山城中、悉是汚池。	新津小宴之明日、欲遊修覚寺、以雨未果。呈范舍人（二首）	七絶
	中巖	対応する作品なし	五古
	慈姥巖与送客酌別、風雨大至、涼甚。諸賢用中巖韻各賦餞行詩、紛然擊牋。清飲終日、雖無糸竹管絃、而情味有余	対応する作品なし	七古
	次韻陸務観慈姥巖酌別二絶	対応する作品なし	七絶
	玻璃江一首、戲效陸務観作	玻璃江（乾道九年の作）	七律
	余与陸務観自聖政所分袂、每別輒五年、離合又常以六月、似有数者。中巖送別、至揮淚失声。留此為贈	対応する作品なし	七律
	対応する作品なし	送范舍人還朝	七古

① 胡元質、字は長文、長洲の人。范成大の『呉郡志』卷二十七に伝記が見える。

② 陸游「銅壺閣記」：「方閣之成也、公大合衆与賓佐落之。客或举觴寿公曰、『天子神聖英武、蕩清中原。公且以廊廟之重、出撫成師。北举燕趙、西略司并。挽天河之水、以洗五六十腥羶之汚。登高大会、燕劳将士。勒銘奏凱、伝示無極。則今日之事、蓋未足道。』識者以此知公举大事不難矣、其可闕書。四年四月己卯、朝奉郎主管台州崇道観陸某記。」この「客」は陸游の分身であろう。この他、五月一日付けで陸游は「成都府江瀆廟碑」（渭南一六）を書き、范成大の治水工事の功績を称えている。

このうち「中巖」と「慈姥巖与送客酌別」は、陸游も含めて、その場にいた送別客全員に対する送別の詩である。なお、成都を出発してから平江の盤門にたどり着くまでの旅の記録『呉船録』(石湖三録の三)は、陸游の『入蜀記』と並ぶ宋代紀行文の傑作である。以下、『呉船録』の記述に沿って、送別の道中をたどってみよう。

五月二十九日(戊辰)。范成大は、陸游から見送りの一行と共に成都を出発する<sup>①</sup>。

六月三日(辛未)。范成大は永康軍(四川省)の崇徳廟に参拝する<sup>②</sup>。ここには、秦代にこの地の長官となり、都江堰を築いた李冰親子が祀つてある。范成大は、ここで十六句から成る七古「崇徳廟 李太守廟食処也(李太守の廟食する処なり)」(石湖一八)を書いている。陸游はこれに次韻し、七古「和范舍人永康青城道中作(范舍人の永康青城道中の作に和す)」(劍南八)を書いている。

六月九日(丁丑)。范成大は新津(四川省)に到着する。ここで、成都およびこの郡の見送り客と合流する<sup>③</sup>。

六月十日(戊寅)。一行は、新津で送別の宴を催す。陸游の詩題に言う「新津小宴」である。范成大の詩題の自注に「新津館舎、上漏下湿、送客皆不堪憂(新津の館舎、上は漏れ下は湿り、送客 皆な憂いに堪えず)」とあるように、環境は劣悪であったが、皆名残を惜しんで酒宴に興じた。ここで范成大は見送りの一行を帰すが、なおも十五六人が残る<sup>④</sup>。当然、陸游もその中に含まれている。

六月十四日(壬午)。范成大と見送りの一行は眉州(四川省)を出発し、昼に眉州の南六十里にある中巖に到着する。一行は更に五里進み、慈姥巖に至る。巖の前には寺があり、一行はここに宿泊する。范成大は見送り客たちと歓談し、夜中になって散会する<sup>⑤</sup>。六月十五日(癸未)。いよいよ別れの時が近づく。『呉船録』の当日の記事を次に示す。

早食後、与送客出寺。至慈姥巖前徘徊、皆不忍分袂。復班荆小飲巖下。須臾、風雨大至。巖溜垂下如布。雨映松竹、如玉塵散飛。諸賢各即席作詩、不覺日暮。遂皆不成行、下山復入宿寺中。

朝食の後、見送り客たちと寺を出る。慈姥巖の前に来て徘徊するが、皆別れるにしのびず、再び敷き物をしき、岩の下で酒宴を催す。間もなく、激しい風雨がやって来た。岩から流れ落ちる水は、垂れ下がってまるで布のようである。雨が松や竹に映じて、玉のかけらが飛び散ったかのようなのである。諸賢はそれぞれに即席の詩を作り、日の暮れるのも気がつかなかった。とうとう誰も立ち去らず、山を下り、また寺に入って宿泊した。

① 范成大『呉船録』卷上：「石湖居士、以淳熙丁酉歲五月二十九日戊辰、離成都。」

② 范成大『呉船録』卷上：「庚午(六月二日)。…至永康軍。…崇徳廟在軍城西門外山上。秦太守李冰父子廟食処也。辛未(三日)。…出玉壘関、登山謁崇徳廟。」

③ 范成大『呉船録』卷上：「丁丑(六月九日)。…宿新津県。成都及此郡送客畢會。邑中借居、僦舎皆滿、県人以爲盛。」

④ 范成大『呉船録』卷上：「戊寅(十日)。為送客住一日。飲罷、發遣、令各歸、留者尚十五六。新津県廨上雨傍風、無一席寬潔処。送客貪於相從、飲然畢竟日、忘其居之陋也。」

⑤ 范成大『呉船録』卷上：「壬午(十四日)。發眉州、六十里、午至中巖。…凡五里、至慈姥巖。巖前即寺也。…送客復集山中、遂留宿。…与諸人憑欄極談、至夜分散。」

これは、次に示す范成大の七古の詩題（石湖一八）とも一致する。

慈姥巖与送客酌别、風雨大至、涼甚。諸賢用中巖韻各賦餞行詩、紛然擘牋。清飲終日、雖無糸竹管絃、而情味有余  
慈姥巖で見送り客たちと酒を酌みかわし名残を惜しんでいる時に、激しい風雨がやって来て、涼しいことこの上ない。諸賢は中巖の韻を用い、それぞれに餞別の詩を賦そうとし、てんでに紙を裂く。一日中さわやかな気持ちで酒を飲み、管絃の調べはないが、風情は余りある

山靈知我厭塵土  
喚起蟄雷塵午暑  
松風無力雨糸長  
散作毳毳雪塵舞  
巖前懸溜珠簾傾  
安得吹來添玉觥  
詩成酒尽腸亦斷  
休喚佳人唱渭城<sup>①</sup>

山靈 我が塵土を厭うを知り  
蟄雷を喚び起こして 午暑を塵す  
松風は力無く、雨糸は長し  
散じて毳毳たる雪塵と作りて舞う  
巖前の懸溜 珠簾を傾け  
安んぞ得ん 吹き来たりて玉觥に添うるを  
詩成り 酒尽き 腸も亦た断たる  
佳人を喚びて渭城を唱わしむること休かれ

山の神は、私が塵ほこりを嫌っていることを知り、雷を呼び、昼の暑さをすっかり払い去ってくれた。松の木にそよぐ風は力がなく、雨は長く糸を引き、散らばって、ひらひらと舞う雪片のように舞いおどる。岩の前にかかる瀑布は玉のすだれを傾けたようだが、それを吹き寄せ、珠のさかずに添えることなど、どうしてできようか。詩が出来上がり、酒はなくなり、はらわたも断ち切れそうだ。どうか美人を呼んで来て「渭城の曲」を歌わせたりしないでくれ。

以下の詩は、いずれもこの時の宴席で書かれたものと考えられる。まず、范成大の七絶「次韻陸務観慈姥巖酌別」〔陸務観の慈姥巖酌別に次韻す〕二絶〔石湖一八〕其二を示す。

明朝真是送人行  
從此関山隔故情  
道義不磨双鯉在  
蜀江流水貫吳城<sup>②</sup>

明朝 真に是れ人の行くを送る  
此れより関山 故情を隔つ  
道義 磨せず 双鯉 在り  
蜀江の流水 吳城を貫く

① 唐・王維「渭城曲」〔全唐詩〕卷二二八）：「渭城朝雨浥輕塵、客舍青青楊柳春。勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人。」（↓一〇一頁）

② 同様の表現を、范成大は七古「晞真閣留別方道士賓美」（石湖八）の末尾でも用いている。：「只有双魚相問訊、歛江之水通吳江。」

明日の朝こそは、本当に旅人を送る別れの時。  
それから先は、立ちほだかる関所や山々が、私たちの友情を遠く隔てることになる。  
だが、友人としての道義は摩滅することなく、気持ちを伝える手紙もある。  
蜀江を流れる水は、私の故郷の呉の町にも通じているのだ。

これは、范成大の陸游に対する友情の表現である。成都に在る間は、重責ある太守と、その下僚もしくは賓客という関係であった。しかし、今や范成大は重責から解放され、一個の詩人としての自分を取り戻したかのようである。当然、年齢の近い陸游と、対等の立場で唱和に興じることのできるのである。

また范成大は、陸游が乾道九年に書いた七古「玻璃江」（劍南四）を模倣し、七古「玻璃江一首 戲效陸務観作」（玻璃江一首 戲れに陸務観に效いて作る）（石湖一八）を書いてゐる。

玻璃江頭春淥深	玻璃江頭 春淥 深し
別時汎流到今	別れの時 汎流として流れて今に到る
祇言日遠易排遣	祇だ言う 日に遠ければ排遣し易しと
不道相思翻苦心	道わず 相い思いて苦心を翻すと
烏頭可白我可去	烏頭 白かるべくんば 我は去るべし
菖花易青君易尋	菖花 青かり易きがごとく 君の尋ね易からんことを
人生若未免離別	人生 若し未だ離別を免れずんば
不如碌碌無知音	如かず 碌碌として知音無きに

玻璃江の川辺には、緑色の春の水が深く流れている。

その水のように時はとどまることなく別れ、ついに今別れの時がやって来た。

「日が経てば、気持ちも晴れることでしょう」と言うばかりで、

「互いに相手を思い、つらい気持ちになる」とは言わない。

烏の黒い頭が白くなるようなことがあれば、私も君から離れるだろう。

菖蒲の花が青くなりやすいように、君をたやすく訪ねられればよいのだが。

もし人生の別れが避けられぬものならば、

ぼんやりして知己など持たずにいる方がましだ。

この詩が陸游の模倣として成功しているかはともかく、作風の模倣は、その対象である相手への親近感を表現するものに違いない。末尾二句は、端正で温雅な表現に終始しながら范成大にしては、珍しく率直に自分の生の感情を表出した例と言える。相手が陸游だけに、こうした表現が自然と口をついて出たのであるうか。詩題で「戯れに」と言うのは言葉のあやであり、実は范成大自身の平静な作風を突破し、感傷にわが身を委ねなければ、この時の気持ち表現できなかつたのかも知れない。末句では、范成大が陸游を「知音」と呼んでいることが注目される。

同じ時、范成大はもう一首の興味深い七律（石湖一八）を書いている。

余与陸務觀自聖政所分袂、每別輒五年、離合又常以六月、似有數者。中巖送別、至揮淚失聲。留此為贈

私と陸務觀とは、聖政所で袂を分かつて以来、別れるたびに五年が経ち、出会いと別れは決まって六月であり、まるで何か決まった因縁があるかのようである。中巖で送別し、涙を流し、声をつまらせるに至った。この詩を残し、記念とする

宦途流轉幾沈浮	宦途 <small>かんと</small> に流轉 <small>るてん</small> して	幾たびか沈浮 <small>ちんぷ</small> する
鷄黍何年共一丘	鷄黍 <small>けいしよ</small> 何れの年か	一丘を共にせん
動輒五年遲遠信	動 <small>うご</small> もすれば輒 <small>すなわ</small> ち五年にして	遠信 遅く
常於三伏話羈愁	常に三伏 <small>さんぷく</small> に於て	羈愁 <small>きしゆう</small> を話す
月生後夜天応老	月 後夜 <small>こうや</small> に生 <small>な</small> ずれば	天 応 <small>まさ</small> に老ゆべし
淚落中巖水不流	淚 中巖 <small>ちゆうがん</small> に落ちなば	水 流れざらん
一語相開仍自解	一語 相 <small>あ</small> い開 <small>ひら</small> きて	仍 <small>な</small> お自 <small>みづか</small> ら解 <small>か</small> す
徐書聞已趣刀頭	徐書 <small>じよしよ</small> 聞 <small>き</small> くならく	已 <small>すで</small> に刀頭 <small>とうとう</small> を趣 <small>うなが</small> すと

役人の世界をめぐり歩く間に、何度の浮き沈みを経験して来たことか。いつになったら、親しい友と一緒に古巣に帰ることが出来るのだろう。ともすれば別れのたびに五年が過ぎ、遠方からの便りは滞りがち。いつも一年で一番暑い三伏（六月）の頃に、旅愁を語り合う。月が夜中に出る時には、きつとお互いに深く思い合うことだろう。涙が中巖に流れ落ちれば、川の水も流れなくなるに違いない。それでも一言を發し、自分を慰めるのだ。

「勅書はすでにあなたの帰還を促しているそうですよ」と。

隆興元年夏、范成大は臨安で山陰に帰る陸游を見送る。（↓一四頁）

その七年後の乾道六年六月、二人は鎮江で再会する。（↓一八頁）

さらに五年後の淳熙二年六月、二人は成都で再会する。（↓二二頁）

その二年後、まためぐり来た六月に、二人は新たな別れの時を迎えようとしている。「每別輒五年、離合又常以六月」という述懐は必ずしも厳密ではないが、この言葉は、范成大が陸游との交流を一つの流れとして把握していたこと、そして離合の規則性に不思議な因縁を感じていたこと、それだけ陸游を親しい友人として意識していたことを物語る。たとえ完全には同調できない信念の持ち主でも、范成大にとって陸游は、やはりかけがえのない知己だったのである。五十歳を過ぎた老詩人が涙に声をつまらせたというのだから、ただ事ではない。

① 「刀頭」には「環」があり、音が「還」に通じる。『玉台新詠』卷十所収「古絶句四首」其一に「何当大刀頭、破鏡飛上天」とある。范成大のこの句は、この時点ですでに范成大が陸游の帰還予定を把握していたことを示唆するものであり、興味深い。

范成大との別れに際し、陸游は二十句から成る七古「送范舍人還朝〔范舍人の朝に還るを送る〕」（劍南八）を書いている。

平生嗜酒不為味 聊欲醉中遺万事 酒醒客散独凄然 枕上屢揮憂國淚 君如高光那可負 東都兒童作胡語 常時念此氣生癭 況送公歸觀明主 皇天震怒賊得長 三年胡星失光芒 旄頭下掃在旦暮 嗟此大議知誰當 公歸上前勉畫策 先取關中次河北 堯舜尚不有百蛮 此賊何能穴中國 黃扉甘泉多故人 定知不作白頭新 因公併寄千万意 早為神州清虜塵	平生 酒を嗜むは 味の為ならず 聊か酔 中に万事を遺れんと欲すればなり 酒 醒め 客 散じて 独り凄然たり 枕上 屢々揮う 憂国の涙 君は高光の如く 那んぞ負くべけん 東都の兒童 胡語を作す 常時 此れを念えば 氣 癭を生ず 沉んや 公の歸りて明主に 觀ゆるを送るをや 皇天 震怒すれば 賊 長かるを得んや 三年 胡星 光芒を失う 旄頭の下掃すること 旦暮に在り 嗟 此の大議 知んぬ 誰か当たらん 公 上の前に歸らば 画策に勉めよ 先ず 關中を取り 次には河北 堯 舜すら 尚お百蛮を有せず 此の賊 何ぞ能く中國に穴まんや 黃扉 甘泉 故人多し 定めて知る 白頭の新を作さざらんと 公に因りて 併せて寄す 千万の意 早く神州の為に 虜塵を清めよ
--	--

日頃から酒をたしなむのは、その味のためではありません。  
ほんのつかの間、酔いの中に万事を忘れ去ろうと思えばのことです。  
酒がさめて客たちも散り、ただ一人興ざめた気持ちになり、  
寢床の中でしばしば国を憂える涙を流すのです。

天子は前漢の高祖や後漢の光武帝のようなお方、どうして背くことなどできましようか。  
それなのに、洛陽の小僧どもは、えびすの言葉を話しているとは。  
いつもながらこのことを思えば、腹立ちのあまりこぶができそうなほど。  
ましてや閣下が都に帰り、明主にお目通りするのを見送るのですから、なおさらです。  
天が怒りに震えれば、賊どもはどうして長らえることができましよう。  
もう三年も、えびすの星はその輝きを失っているではありませんか。  
敵を滅ぼすのは、もはや時間の問題でしょう。

ああ、このような大任を、一体どなたが担当なさるのでしょうか。  
閣下が天子様のもとに帰られましたなら、失地回復の画策に力を注いでください。  
まず關中を奪取し、その次は河北です。  
堯舜ですら、蛮族どもを支配下におくことはできませんでしたが、

この賊どもを、どうして中国に住ませることなどできましようか。  
朝廷の役人たちの中には、昔からの友人も多いはず。

きっと、白髪頭になってから初対面の挨拶を交わすようなことはないでしょう。

閣下なればこそ、わが胸中の千万の思いをお寄せ申し上げます。

どうかわが中国のために、えびすの巻き起こす塵を清めてください。

この詩の中で陸游は、臨安の朝廷に帰還した後の范成大に対する多大な政治的期待を表明している。同じ道中で書かれた他の詩と比較する時、その内容および情緒が突出していることは、一目瞭然である。成都時代に陸游が范成大に贈った詩全体の中でも、これほど露骨に自己の政治主張を述べたものは他にない。范成大は、陸游との応酬に於いて、政治的な発言は極力避けている<sup>①</sup>。それは、太守として重責を担う以上、やむを得ないことであつた。陸游も、范成大の責任ある立場を思い、普段はそうした范成大の姿勢に譲歩していたであろう。しかし今は、目の前にいる友人に直接自分の心情を訴えることができる最後の機会かも知れないのである。この時、陸游の精神も極度に高揚していたに違いない。六月十六日（甲申）朝、二人はついに袂を分かつ<sup>②</sup>。この別れの後、二人の詩人は二度と成都時代のような交流の機会を持つことはなかった。陸游にとつても范成大にとつても、中巖での万感の別れは、人生の大きな区切りとなるのである。

陸游と別れた范成大は、同日中に嘉州（四川省乐山）に下る。ここは、陸游が知事代行を務めた町である。嘉州に数日滞在した後、范成大は一週間ほど峨眉<sup>がびえん</sup>山を遊覧し、それからまた嘉州に戻る。出帆する間に、范成大は陸游が在任中に建てた月榭<sup>げつしゃ</sup>を訪れ、詩を書いている<sup>③</sup>。嘉州を離れた范成大は、一路平江を目指す<sup>④</sup>。

一方、范成大を見送った陸游は、翌年春まで成都に留まる。

① 于北山『陸游年譜』淳熙四年・注（八）：「所可注意者、成大在蜀期間、与務観倡酬之作、只着重私人情誼、絶不涉及国事、尤諱言抗金問題、与務観詩意頗相鑿柄。」（二二八頁）また齐治平『陸游』（上海古籍出版社、一九七八）第四章「成都幕府」：「陸游主張隨時作着軍事準備、一有機會、就要北伐。而范成大的態度則是雍容坐鎮、不求有功、但求無過。陸游以幕僚的身分、雖然也不免写些応酬之作、但他主要的是拿詩來傾訴自己的滿腔忠憤、作為戰鬪的武器。這種矛盾、被兩人的友誼掩蓋了起來、范成大对他総還是很客氣、很優待。」（二九頁）

② 范成大『吳船録』卷上：「甲申（十六日）。早出山至江歩、与送客先歸者別。」

③ 范成大「別後寄題漢嘉月榭」（石湖一八）自注：「陸務観所作。」また『吳船録』卷上：「壬寅（七月五日）。將解纜、嘉守王元子蒼留看月榭。前權守陸游務観所作、正対大峨、取李太白『峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流』之句。」

④ 范成大の帰還の道中の詩をまとめた『石湖蜀中詩』と題する和刻本があり、その内容は現在の『石湖居士詩集』の卷十八および卷十九に対応する。長澤規矩也『和刻本漢詩集成』第十五輯（汲古書院、一九七六）所収。

## 結 び

以上、成都に於ける陸游と范成大の交流について記した。

成都時代は陸游と范成大が最も親しく交わった時期であり、交流から生まれた詩文は多数に上る。この時、范成大は形の上では陸游の上司もしくは庇護者であるが、文学の上では対等の風雅の交わりを結んだ<sup>①</sup>。陸游の詩人としての能力の高さもさることながら、范成大の太守としての度量の大きさをなくして、それは決して実現しなかったであろう。

南鄭での抗戦の夢が破れ、詩人として生きる覚悟をした陸游にとつて<sup>②</sup>、自己とは異質な個性を持つ范成大との交流は、その詩人としての成長に大きな影響を及ぼしたと考えられる。その意味で成都時代は、南鄭時代に勝るとも劣らず、陸游の人生に重要な意義を持つ時期である。「放翁」の号も、范成大との唱和から生まれていることを忘れてはならない。成都時代は、文学史的には大変意義深い時空であったと言える。

しかし、陸游の詩人としての成熟は、政治上の抱負実現の道が閉ざされたことと表裏一体の関係にあった。それゆえ陸游は、順調に官途を歩んでいる范成大に、自己の悲願実現のために一層の期待をかけることになる。もちろん、范成大には重責ある地方長官としての立場があり、陸游の過激な主張には安易に同調できない。それでも、その真摯な憂国の心情には一定の理解を示し、詩文の友として陸游を尊重し、厚遇した。

陸游を「愛国詩人」として論ずる場合、成都に於ける范成大との交流は、陸游の主戦論を友誼によつて封殺したものととして、必ずしも肯定的評価が与えられていない。しかし、一定の波乱はあつたにせよ、二人の間の精神的紐帯は、やはり「友情」と呼ぶにふさわしいものであり、それを過小評価することはできない。ただ友情は、本来対等の関係の上になり立つ感情であるが、実際には二人の地位に隔たりがあり、また政治的な主張にも温度差があつたため、その表現は一定の屈折・偏向を帯びざるを得なかつたのである。

陸游と范成大の交流は、成都時代の終焉と共に、大きく一段落する。

① 対等どころか、場合によっては陸游が范成大をしのぐことすらあつた。前掲「題直舍壁」詩や、第三章第三節で紹介する蘇軾詩注をめぐる問答などは、その好例である。こうした、見ようによっては僭越で放埒な言動が、「燕飲頽放」と指弾された一因かも知れない。

② 陸游「劍門道中遇微雨」（劍南三）：「此身合是詩人未、細雨騎驢入劍門。」拙稿「雨の詩人 陸放翁」参照（愛知大学文学会『文学論叢』第一一六輯、一九九八）。



## 〔補論〕 淳熙三年の陸游の経歴に関する小考<sup>①</sup>

前章で検討したように、陸游と范成大は、淳熙二年夏から四年夏までの約二年間、蜀の成都で親しく交わり、少なからぬ作品を応酬している。

筆者は、陸游と范成大の交流について研究を続ける過程で、淳熙三年の陸游の経歴に関し、諸家の年譜の記述の間に看過し難い食い違いが存在することに気づき、整理の必要を強く感じた。淳熙三年は、陸游と范成大の交流にとってきわめて重要な意義を持つ年であるだけに、この年の陸游の経歴について考えることは必要不可欠であると思われる。以下、淳熙三年の陸游の経歴について、諸家の年譜を検討しながら考察することにした。

### 第一節 諸家の年譜に於ける記述の異同

元末に撰修された『宋史』の「陸游伝」は、成都時代に於ける陸游の行状について次のように記す。

范成大帥蜀、游為参議官。以文字交、不拘礼法。人譏其類放、因自号放翁。

范成大が蜀の長官となった時、陸游はその参議官となった。詩文によつて交わり、礼節にこだわらなかつた。人がその放縦な態度を非難したので、「それを逆手にとり」みずから「放翁」と号した。

このように『宋史』の記述はきわめて簡潔なものであり<sup>②</sup>、淳熙三年の陸游の経歴について考証するには、より詳細な年譜に頼らなければならない。現存する陸游の年譜のうち最も古いものは、趙翼<sup>ちゆうよく</sup>（一七二七〜一八一四）の『陸放翁年譜』と錢大昕<sup>せんたいきん</sup>（一七二八〜一八〇四）の『陸放翁先生年譜』の二つである。趙翼と錢大昕は、いずれも清の乾隆<sup>けんりゆう</sup>（一七三六〜一七九五）の進士である。趙翼は『甌北詩話』の著者として知られ、錢大昕は清朝考証学の泰斗として知られる。

(一) 趙翼「陸放翁年譜」

まず、趙翼『甌北詩話』巻七所収『陸放翁年譜』から淳熙三年の記事を全文引用する<sup>③</sup>。

三年丙申

先生年五十二。作「范待制集序」及「籌邊樓記」、繫銜書「朝奉郎成都府路安撫司

① 本章は、拙稿「淳熙三年の陸游の経歴に関する小考―なぜ錢大昕は祠禄受領を六月としたのか―」（愛知大学文学会『文学論叢』第一四一輯、二〇一〇）を基礎とする。

② 陸游の伝記資料として、錢仲聯『劍南詩稿校注』（上海古籍出版社、一九八五）は、『宝慶会稽統志』『宋史陸游列伝』『山陰陸氏族譜』の三種を収録している。このうち『宝慶会稽統志』には成都時代の記事はなく、『山陰陸氏族譜』は「范成大帥蜀、又辟為参政官」と簡潔に記すのみである。

③ 江守義・李成玉『甌北詩話校注』（人民文学出版社、二〇一三）三〇四頁。

参議官兼四川制置使司参議官」。是年、有「飯保福院」詩云、「飽飯即知吾事了、免官初覺此身閒」。又「閒中偶題」詩、「七千里外新聞客、十五年前旧史官」。「病中戲書」云、「免從官乞飯、且喜是閒身」。又有「蒙恩奉祠桐柏」詩云、「罪大初聞収郡印、恩寬俄許領家山」。蓋縁事不復攝州、別領桐柏祠祿。

(淳熙)三年丙申ひのえとし

(陸游)先生五十二歳。「范待制集序」及び「籌邊樓の記」を作り、その肩書に「朝奉郎成都府路安撫司参議官兼四川制置使司参議官」と記す。この年、「保福院に飯す」詩があり、「飯に飽きて即ち知る 吾が事 了すと、官を免ぜられて初めて覚ゆ 此の身の閒なるを」とうたう。また「閒中 偶たま題す」詩は、「七千里外 新聞の客、十五年前 旧史の官」とうたう。「病中にて戯れに書す」詩は、「免ぜられて官より飯を乞い、且く喜ぶ 是れ閒身なるを」とうたう。また「恩を蒙りて桐柏を奉祠す」詩があり、「罪大きくして初めて聞く 郡印を収むると、恩 寛くして俄かに許さる 家山を領するを」とうたう。おそらく、何らかの事情によつて再び(嘉)州知事の代行となることなく、別に桐柏觀の祠祿を与えられたのであろう。

このように趙翼の年譜は、陸游の詩文を主な根拠として書かれている。年譜は、まず陸游が淳熙三年に書いた二篇の文章に触れ、次いで同年に書かれた陸游の詩題および詩句を列挙し、任命の取り消しと奉祠(祠祿を与えられること)に触れている。

この年譜は一見よく書かれているが、子細に検討するならば問題なしとしない。まず、引用された詩文の表記が正確ではない。「范待制集序」は「范待制詩集序」、「飯保福院」は「飯保福」、「此身閒」は「此身輕」が、それぞれ正しい。次に、「朝奉郎成都府路安撫司参議官兼四川制置使司参議官」という長い肩書は、「范待制詩集序」の末尾には記されているが、「籌邊樓記」の末尾には記されていない<sup>①</sup>。最後に、より重大な問題として、一年の出来事が無造作に圧縮して記述されており、しかも時期(季節、月日など)がまったく特定されていない。このため、何の予備知識もなしに読むと、春の出来事と秋の出来事を混同してしまうおそれがある。たとえば、「范成待制詩集序」は上巳の日(三月三日)に書かれ、「籌邊樓記」は九月一日に書かれている。また「飯保福」「閒中偶題」「病中戲書」の三首は、いずれも三月から四月にかけての作であるが、「蒙恩奉祠桐柏」は九月の作であり、制作時期に約半年の開きがある。しかし趙翼の年譜では、これらが何の断りもなく列挙されているのである。

(二) 錢大昕「陸放翁先生年譜」

次に、錢大昕の『陸放翁先生年譜』から、やはり淳熙三年の記事を全文引用する<sup>②</sup>。

三年丙申五十二歳

在成都任。人日、飲昭覺寺。春晴海棠盛開、遍遊諸家園。三月一日、府宴学射山。

① 同前『甌北詩話校注』三二〇頁の注〔五〕に、「渭南文集」卷十八『籌邊樓記』則無甌北所言之『銜書』とあるのを参照。

② 錢大昕『洪文敏公陸放翁王伯厚王弇州四家年譜』(廣文書局、一九八〇)所収。頁番号なし。

未幾、以事去官。有「七千里外新聞客、十五年前旧史官」之句。六月得報、主管台州桐柏山崇道觀。賦詩有「罪大初聞収郡印、恩寬俄許領家山」之句。是歲、始号放翁。「和范待制秋興」詩有「門前剥啄誰相覓、賀我今年号放翁」之句。

(淳熙)三年丙申、(陸游)五十二歲。

(陸游は)成都の任にある。人日、昭覺寺で酒を飲む。春の晴れ空の下、海棠が盛んに開き、あまねく諸家の園を遊覧する。三月一日、学射山で成都府の宴会が催される。ほどなくして、事情により官を去る。「七千里外 新聞の客、十五年前 旧史の官」の句がある。六月、主管台州桐柏山崇道觀に任命するとの知らせを受ける。詩を賦して、「罪大きくして初めて聞く 郡印を収むると、恩 寛くして俄かに許さる 家山を領するを」の句がある。この年、始めて放翁と号する。「范待制の秋興に和す」詩に、「門前 剥啄として誰か相い覓むる、私の今年 放翁と号するを賀するならん」の句がある。

錢大昕の年譜は、やはり陸游の詩句を主な根拠として書かれている。前半の記事は、この春の陸游に「人日飯昭覺(人日 昭覺にて飯す)」「花時遍遊諸家園(花時 遍く諸家の園に遊ぶ)」及び「三月一日府宴学射山(三月一日 学射山にて府宴す)」の諸作(以上すべて劍南七)があることを根拠としている。錢大昕の年譜には、趙翼のような表記の誤りや、春の出来事と秋の出来事を一まとめにするような杜撰さはなく、全体としてより整然とした印象を受ける。唯一の問題点は、後述するように、「六月に」陸游が崇道觀の祠禄を与えられた、とする根拠が不明確なことである。

### (三) 二十世紀中国の陸游研究者たちの年譜

以上の二つの年譜を嚆矢とし、以後、様々な陸游研究者によって様々な陸游年譜が作成され、今日に至っている<sup>①</sup>。それらの年譜は、おおむね以上二種類の年譜を原型とし、その双方もしくは一方を参考に書かれている。しかし、二つの年譜の記述の間にすでに微妙なずれがあり、またそれぞれに問題点があるため、これらをどのように解釈し統合するかによって、実に様々なバリエーションが派生する結果となっている。本稿を執筆するにあたり、筆者は少なからぬ陸游年譜を参照した。しかし、それらをすべて列挙することは繁雑でもあり、無意味でもある。したがってここでは、中国の代表的な陸游研究者によって書かれた四種類の年譜のみをあげることにする。すなわち、朱東潤、于北山、錢仲聯、欧小牧の四氏の年譜である。朱東潤・錢仲聯両氏の年譜については淳熙三年の記事の全

① 本文中に紹介した年譜の他、中国(台湾を含む)および韓国の陸游研究者の年譜として、以下のものを参照した。黄逸之『陸游詩』(商務印書館、一九三二) 附録「年譜」、夏承燾・吳熊和『放翁詞編年箋注』(上海古籍出版社、一九八二) 附録「陸游年譜簡編」、郭光『陸游伝』(中州書画社、一九八二) 附録「陸游年譜」、陸堅『陸游詩詞賞析集』(巴蜀書社、一九九〇) 附録「陸游年譜簡編」、刁抱石『宋陸放翁先生游年譜』(台湾商務印書館、一九九〇)、李致洙『陸游詩研究』(文史哲出版社、一九九二) 第一章「陸游的生平」、高利華『亘古男兒 陸游伝』(浙江人民出版社、二〇〇七) 附録「陸游大事年表」、鄒志方『陸游研究』(人民出版社、二〇〇八) 附録「陸游年譜」。以上敬称略。これ以外の陸游年譜については、黄秀文『中国年譜辞典』(百家出版社、一九九七) 参照。日本の代表的な陸游研究者の年譜もおおむね参照したが、紙幅の都合で紹介を控える。

文を引用するが、于北山・欧小牧両氏の年譜は長大なため、以下の議論に必要と思われる部分のみを引用する。…は、筆者が省略した部分を意味する。なお、論述の都合により、順序を適宜調整した。

・朱東潤『陸游選集』（上海古籍出版社、一九六二年）附録「陸游簡歷」

除知嘉州事。未到任、以言官指其前在嘉州任内燕飲頽放、罷免、改為主管台州桐柏山崇道觀。是年自号放翁。

嘉州の知事に任命される。まだ赴任しないうちに、以前嘉州在任中に「燕飲頽放」であったことを指弾されて罷免され、改めて主管台州桐柏山崇道觀となる。この年、みづから放翁と号する。

・于北山『陸游年譜（増訂本）』（上海古籍出版社、一九八五年）<sup>①</sup>

三月一日府宴学射山、有詩。為范成大詩集作序。…未久、免官。…六月、得領祠祿、主管台州桐柏山崇道觀。始自号放翁。有知嘉州之命、九月、遭臣僚論罷、…賦詩因有「罪大初聞収郡印」之句。

三月一日、学射山で成都府の宴が催され、詩を賦す。范成大の詩集のために序文を作る。…ほどなくして、免官となる。…六月、祠祿を与えられ、主管台州桐柏山崇道觀となる。始めてみづから放翁と号する。嘉州の知事に任命されるが、九月、幕僚たちの議論のために取り消される。…それゆえ、詩を賦して「罪 大きくして初めて聞く 郡印を収むると」の句がある。

・錢仲聯『劍南詩稿校注』（上海古籍出版社、一九八五年）附録「陸游年表」

六月、免官、奉祠、主管台州桐柏山崇道觀。九月、有知嘉州新命、未到任、以臣僚言其代理知嘉州時燕飲頽放、罷新命、改為主管台州桐柏山崇道觀、因自号放翁。

六月、免官され、祠祿を与えられ、主管台州桐柏山崇道觀となる。九月、新しく嘉州の知事に任命されるが、まだ赴任する前に、幕僚が「以前陸游が」嘉州の知事代理であった時に「燕飲頽放」であったことを指摘し、新しい任命を取り消され、改めて主管台州桐柏山崇道觀となり、そこでみづから放翁と号する。

・欧小牧『陸游年譜』（人民文学出版社、一九八一年）

春、先生居参議職。花時遍遊諸家園。…春末、小病、遂解職閑居。…始自号放翁。…秋、奉詔主管台州崇道觀。

春、「陸游」先生は参議の職にある。花の時節にあまねく諸家の庭園を遊覧する。…春

① 于北山『陸游年譜』は、一九六一年に中華書局から初版が発行されているが、ここには、一九八五年上海古籍出版社発行の増訂本を引用した。その後、二〇〇六年に同じく上海古籍出版社から新版が出ているが、その内容は増訂本と同じである。

② 欧小牧『陸游年譜』は、その後一九九八年に天地出版社から補正版が出ている。しかし、春末に解職され閑居した、という記述が削除されているなど内容に変更があるため、ここでは変更前の旧版（人民文学出版社）を引用した。

の終わり頃、軽い病気になる、解任されて閑居する。∴始めてみずから放翁と号する。  
∴秋、詔を奉じて主管台州崇道観となる。

このように、わずかに四種類の年譜を見比べただけでも、細部にさまざまな異同があることがわかるであろう。次に、諸家の年譜（年表）の要点を整理しておこう。

- ・朱東潤 陸游は嘉州知事に任命されたが、赴任する前に取り消され、あらためて祠禄を与えられた。
- ・于北山 陸游は三月に免官となった後、六月に祠禄を与えられ、九月に嘉州知事代理の任命を取り消された。
- ・錢仲聯 陸游は六月に免官され、祠禄を与えられた後、九月になってまた免官され、再び同じ祠禄を与えられた。
- ・欧小牧 陸游は春に免官となり、秋になって祠禄を与えられた。

言うまでもなく、これらの年譜の記述は互いに食い違い矛盾しており、すべてを肯定することはできない。それでは、一体どの年譜の記述が正しいのだろうか。議論をなるべく簡潔にするために結論を最初に述べるならば、筆者は、右にあげた中では、欧小牧氏の年譜の記述が最も正確かつ穏当である、と考える。以下、こうした立場から前掲諸家の年譜の問題点を検討し、淳熙三年の陸游の経歴について考証することにした。

## 第二節 諸家の年譜の問題点

### (一) 朱東潤「陸游簡歴」

まず最初に、朱東潤氏の年譜について検討する。前述のように、朱東潤氏の年譜は、陸游が嘉州知事に任命されたが、赴任する前に取り消され、あらためて祠禄を与えられた、と記すのみで、事件の起こった時期を特定していない。しかし、朱東潤氏は、その『陸游伝』（上海古籍出版社、一九六〇年）では、陸游は「九月に」嘉州知事の任命を取り消され、崇道観の祠禄を与えられた、と記している。

是不是因為他的生活太散漫了、還是因為他對敵作戰的要求太積極了、终于在這年九月里受到一次嚴厲的処分。本来陸游知嘉州的官職已經發表了、言官們指出他在嘉州的時候「燕飲頹放」、因此他得到罷免的処分。他的新任務是主管台州桐柏山崇道観。

彼（陸游 筆者注）の生活があまりに奔放過ぎたためか、あるいは彼の敵と戦いたいという要求があまりに積極的過ぎたためか、とうとうこの年九月に、厳しい処分を受けることになった。本来、陸游が嘉州の知事となることはすでに発表されていたが、幕僚たちが、彼が嘉州にいた時「燕飲頹放」であったことを指弾したため、彼は任命取り消しの処分を受けた。彼の新しい職務は、主管台州桐柏山崇道観である。

朱東潤氏が陸游の任命取り消しを九月とする根拠は、清・徐松<sup>じしよしょう</sup>の『宋会要輯稿』<sup>そうかいようしゅうこう</sup>であ

ろう。同書第一〇一冊「職官七二・黜降官九」<sup>ちゆうこうかん</sup>に、次のようにある。

九月、新知楚州胡与可、新知嘉州陸游、并罷新命。以臣僚言、与可罷黜墨月、旧愆未贖、游攝嘉州、燕飲頽放故也。

(淳熙三年) 九月、新しく楚州の知事に任命された胡与可<sup>こよか</sup>と、新しく嘉州の知事に任命された陸游が、いずれも任命を取り消された。幕僚たちが、「胡与可は罷免されて何箇月も経つのに以前の過失をつぐなわず、陸游は嘉州の知事を代行した際に、酒ばかり飲んでいてだらしかなかった」と指弾したためである。

一方、朱東潤氏は、陸游が同年三月に参議官を罷免されたことには一切言及していない。しかし、前掲の趙翼年譜に引用された「飯保福」「閒中偶題」「病中戲書」の三首は、いずれも春の免職の直後の感慨をうたうものである。錢仲聯氏の『劍南詩稿校注』の題解によれば、「飯保福」は三月の作であり、「閒中偶題」と「病中戲書」は四月の作である<sup>①</sup>。仮に同氏の考証に頼らずとも、『劍南詩稿』所収の詩は原則として制作年代順に並んでいるから、前後関係だけからでも、おおよその制作時期を特定できる。「飯保福」の十六首前には「三月十六日作」と題する詩があり、また「病中戲書」の六首後の「晚過五門〔晩に五門を過ぐ〕」詩には「四月乳鳩啼綠樹〔四月乳鳩綠樹に啼く〕<sup>な</sup>」という句がある。したがって、間には含まれたこれら三首は、いずれも三月後半(晩春)から四月のはじめ(初夏)にかけての作と、大まかに判断できる。内容的にも、これらの詩はいずれも晩春もしくは初夏の情趣をうたっており、推定に矛盾しない。とすれば、趙翼の年譜に引用された三首の詩は、明らかにこの時期に於ける陸游の免職を物語っていることになる。ちなみに、前掲の錢大昕年譜は「三月一日、府宴学射山。未幾、以事去官。有『七千里外新聞客、五年前旧史官』之句」と記し、趙翼があげた三首のうち一首(「閒中偶題」)を引用し、陸游が三月に免官となったことの根拠としている。以上の考察から、陸游が春の終わり頃に免官されたことは明らかであり、この点にまったく触れていない朱東潤年譜には、問題があることがわかる。これはおそらく、春の出来事と秋の出来事を無造作に圧縮して記述する趙翼の年譜を踏襲したために生じた誤りではないか、と思われる。

## (二) 于北山『陸游年譜』

次に、于北山氏の年譜について検討しよう。于北山氏が、三月、陸游が范成大の詩集のために序文を書き、ほどなくして免官となった、と記していることは、特に問題はない。問題は、于北山氏が「六月、祠禄を与えられ、主管台州桐柏山崇道觀となる」と記している点である。前述のように、陸游が六月に祠禄を与えられた、とする説の嚆矢は、清・錢大昕の「陸放翁先生年譜」であり、于北山年譜が錢大昕年譜を踏襲していることは、この記述の根拠として、錢大昕年譜同様、陸游の七律「蒙恩奉祠桐柏〔恩を蒙りて桐柏を奉祠す〕<sup>ちゆうひく</sup>」(劍南七)の対句を示していることから明らかである。次に、同詩の全体を示す。

① 錢仲聯『劍南詩稿校注』第二冊五七五頁～五七七頁参照。

少年曾綴紫宸班	少年 曾 <small>かつ</small> て綴 <small>つづ</small> る 紫宸 <small>ししん</small> の班
晚落危途九折艱	晚 <small>きと</small> に危途 <small>きと</small> に落 <small>お</small> つ 九折 <small>きゅうせつ</small> の艱
罪大初聞収郡印	罪 大きくして 初 <small>はじ</small> めて聞 <small>き</small> く 郡印 <small>ぐんいん</small> を収 <small>おさ</small> むると
恩寬俄許領家山	恩 寛 <small>ひろ</small> くして 俄 <small>にわ</small> かに許 <small>ゆる</small> さる 家山 <small>かさん</small> を領 <small>りやう</small> するを
羈鴻但自思煙渚	羈 <small>きこう</small> 鴻 <small>こう</small> 但 <small>ただ</small> 自 <small>おのずか</small> ら煙渚 <small>えんしよ</small> を思 <small>おも</small> う
病驥寧容著帝閑	病驥 <small>びようき</small> 寧 <small>いずく</small> んぞ容 <small>いら</small> れんや 帝 <small>てい</small> に著 <small>つ</small> きて閑 <small>い</small> なるを
回首觚稜渺何処	回首 <small>こりよう</small> 觚稜 <small>かいしゆ</small> を回 <small>か</small> い首 <small>しゆ</small> すれば 渺 <small>びよう</small> として何 <small>いずこ</small> 処 <small>こ</small> にかある
従今常寄夢魂間	今より常に寄 <small>よ</small> せん 夢魂 <small>むこん</small> の間に

かつて若い頃には、朝廷で歴史記録を作成する職務に従事していたが、晩年になって危険な道に陥り、数々の苦難を味わうことになった。

私の罪は大きく、知事の印を没収された（任命を取り消された）と聞いたと思つたら、朝廷の恩は寛大で、今度は急に故郷の天台山の祠祿をいただけることになった。

旅を続けるおおとりは、ただおのずともやのたなびく渚を思う。

病気の駿馬も、どうして皇帝陛下の御恩を受けながら安閑としていられようか。

都の宮殿を振り返つて眺めれば、はるか彼方、一体どこにあるのだろうか。

今からは、夢を見ている間に、いつも立ち寄ることになしよう。

この詩は、錢仲聯『劍南詩稿校注』の題解によれば、淳熙三年九月の作である。ここで陸游は、祠祿を与えてくれた朝廷の寛大な措置に感謝の意を表明している。「郡印」とは嘉州知事（知嘉州事）の印であり、「家山」と言うのは、崇道觀が陸游の故郷に近い天台山にあるためである。

しかし一読して明らかかなように、この詩のどこにも「六月」の文字はない。したがつてこの詩は、陸游が奉祠したことの根拠とはなり得ても、陸游が「六月に」奉祠したことの根拠とはなり得ない。また陸游のその他の詩文を調べてみても、「私は六月に祠祿を与えられた」と陸游自身が語っている資料は確認できない。それでは、なぜ錢大昕は、この詩を陸游が「六月に」奉祠したことの根拠としたのであろうか。

やはり結論を先に述べるならば、錢大昕は、「蒙恩奉祠桐柏」そのものではなく、この詩に近接する別の詩題および詩句に「六月」の語が見えることを根拠として、この詩を不用意に六月の作と判断した可能性が高い。錢大昕が陸游の詩句を主な根拠として陸游の年譜を作成していることは、前述の通りである。その際、錢大昕がいかなる版本で『劍南詩稿』を参照したかは不明であるが、最も信頼できるテキストとされる明・汲古閣本『劍南詩稿』<sup>①</sup>卷七の「蒙恩奉祠桐柏」の前後の詩の配列は、次のようになっている。

詩題	詩形	制作時期
龍挂	七古	淳熙三年六月
芳華樓夜宴	七律	同六月
遣興	七律	同六月

① 錢仲聯『劍南詩稿校注』も、汲古閣本『劍南詩稿』を底本としている。

六月九日夜歩月至朝真觀	七律	同六月
十日夜月中馬上作	七律	同六月
百歲	七律	同七月
独飲醉臥、比覺已夜半矣、戲作此詩	七律	同七月
蒙恩奉祠桐柏	七律	同九月
和范待制月夜有感	七律	同九月
和范待制秋興（三首）	七律	同九月
和范待制秋日書懷二首、游自七月病起蔬食止酒故詩中及之（二首）	七律	同九月

このうち最初の「龍挂」詩の冒頭は、「成都六月天大風」とうたう。その三首後の「六月九日夜、歩月至朝真觀」〔六月九日夜、月に歩みて朝真觀に至る〕<sup>ちようしんかん</sup>は詩題に六月と明記されており、その次の「十日夜月中馬上作」〔十日夜 月中馬上の作〕も六月十日を意味すると考えてよい。とすれば、その後に並ぶ数首もすべて六月の作のように思えたとして、不思議ではない。陸游は多作な詩人であり、時にはわずか一箇月の間にも何十首という作品を書いている。陸游の年譜を作成する目的でこの頁を瞥見した錢大昕が、「六月九日夜歩月至朝真觀」「十日夜月中馬上作」のわずか三首後にある「蒙恩奉祠桐柏」を、前後関係から、やはり六月の作であると判断した可能性は、きわめて高いと思われる。

しかし注意して読むならば、「十日夜月中馬上作」の次の「百歲」詩には「一年鼎鼎又清秋」〔一年 鼎鼎として又た清秋〕の句があり、ここからが秋の詩になっていることは明らかである（旧暦では夏は四々六月、秋は七々九月）。またその次の「独飲醉臥、比覺已夜半矣、戲作此詩」〔独飲して醉臥し、覺むる 比 已に夜半なり、戯れに此の詩を作る〕には「臥聴空廊絡緯声」〔臥して聴く 空廊 絡緯の声〕の句がある。「絡緯」（コオロギ）が秋の虫であることは言うまでもない。おそらく錢大昕は、陸游の年譜を作成するために『劔南詩稿』を急ぎ足で通読したものの、一首一首の内容を時間をかけて吟味する余裕はなく、そのため、このような不注意が生じる結果となったのではなからうか。

錢大昕ともあるう者がそんな初歩的な誤りを犯すはずがない、と思われる方は、是非ここに述べた以外の判断の根拠をお示し願いたい。「蒙恩奉祠桐柏」を六月の作とする根拠は、他にはどうしても見つからないのである。六月説を踏襲するその他の年譜を見ても、他に納得の行く根拠を提示しているものは皆無と言つてよい<sup>①</sup>。

陸游が六月に奉祠した、とする説を筆者が懷疑する根拠は、もう一つある。陸游は、淳熙三年上巳の日（三月三日）に書いた「范待制詩集序」の末尾には、「朝奉郎成都府路安撫司参議官兼四川制置使司参議官」という当時の肩書を記しており、また淳熙四年四月に書いた「銅壺閣の記」の末尾にも「朝奉郎主管台州崇道觀」という当時の肩書を記している。ところが、淳熙三年九月一日に書いた「籌邊樓の記」の末尾には、「九月一日記」とあるのみで、肩書が記されていない。「↓三〇頁」主管台州崇道觀は名目ばかりの官職とは言え、朝廷から与えられる正式の官職には違いないから、正真正銘の無位無官とは異なる。したがって、もし陸游が六月に奉祠しているならば、九月一日に書かれた「籌邊樓の

① 于北山『陸游年譜』は、「蒙恩奉祠桐柏」以外に陸游の七絶「天台院有小閣、下臨官道、予名曰玉霄」（劔南八）の自注を引用しているが、その内容は崇道觀の所在に関するものである。



記」の末尾にも、当然「銅壺閣の記」と同様の肩書きを記すはずである。そうでないということは、つまり陸游は六月にはまだ奉祠しておらず、九月一日の時点でも、まったくの無位無官（失業中）であった、ということになるのではなからうか。当時の陸游には、「范成大の客」という以外の身分はなかったのだと思われる。

この他、于北山年譜の問題点は、もう一つある。それは、陸游が六月に主管台州崇道觀の祠祿を与えられた後、九月になって嘉州知事代理の任命を取り消された、と記していることである。これは、「知事の任命を取り消されたと思ったら、今度は急に祠祿をいただけることになった」とうたう前掲「蒙恩奉祠桐柏」の内容と前後関係が逆転しており、明らかに矛盾している。この問題について、邱鳴臯氏は次のように述べている<sup>①</sup>。

对于陸游這一段生活經歷——由罷知嘉州之命改為奉祠桐柏崇道觀、有些著作或語焉不詳、或顛倒了先後次序。其實、「蒙恩奉祠桐柏」中的「罪大」「恩寬」兩句已將兩者次序交代得十分清楚、「俄許」一詞尤為關鍵。

陸游のこの段階の生活の経歴、すなわち、嘉州知事の任命を取り消されてから、改めて奉祠桐柏崇道觀の祠祿を与えられるまでについて、ある種の著作は記述が明確でなく、またあるものは前後の順序を逆にしてしまっている。その実、「恩を蒙りて桐柏を奉祠す」の中の「罪大」  
大きくして「恩 寛くして」の二句は、すでに両者の順序をきわめて明確に示しているの  
であり、「俄かに許さる」の一語は、とりわけ鍵となる。

これも結局は、六月に祠祿を与えられた、とする錢大昕年譜を絶対視するがゆえに生じる矛盾なのである。「蒙恩奉祠桐柏」は、あくまでも秋九月に於ける任命の取り消しと奉祠を裏付ける資料と考えるべきなのである。そうすれば、『宋会要輯稿』の記述と矛盾することもなく、問題は解決するのである。

### (三) 錢仲聯「陸游年表」

最後に、錢仲聯氏の年表について検討しよう。この年表は、これまでにあげた年譜のいづれにも増して問題が大きい。錢仲聯氏は、陸游は六月に免官され、祠祿を与えられた後、九月になってまた免官され、再び同じ祠祿を与えられた、としている。『劍南詩稿校注』の著者である錢仲聯氏が筆者は尊敬するが、この年表には疑問を感じざるを得ない。まず、陸游が六月に免官された、というのがおかしい<sup>②</sup>、それにもまして、同じ祠祿を六月と九月の二度与えられた、というのが不自然である。おそらく錢仲聯氏は、錢大昕年譜に記された六月の奉祠を事実と考へ、また『宋会要輯稿』に記された九月の任命取り消しと、「蒙恩奉祠桐柏」に記されたその直後の奉祠をも事実と考へ、同じ祠祿を二度与えられた、という結論に達したのではなからうか。しかしこの説は、結果的に六月と九月の奉祠の根拠として同じ「蒙恩奉祠桐柏」をあげる、という矛盾を生じることになり、到底承認でき

① 邱鳴臯『陸游評伝』（南京大学出版社、二〇〇二）第三章「生命之旅的里程碑」参照（二五〇頁）。  
② 陸游が春ではなく夏に免官となったと記す年譜は、他にもある。一例として、小川環樹氏の年譜は「夏、免官となり、祠祿（年金）を受け、なお成都に居住。これより放翁の号を用いる」と記す。『陸游』二六三頁参照。しかし小川氏も、六月に陸游が免官になったとする根拠を明示していない。

ない。これも于北山年譜の場合と同様、陸游が六月に奉祠した、とする錢大昕年譜を否定しさえすれば、問題は解決するのである。  
ちなみに錢仲聯氏は、「遣興」（劍南七）の注釈では、次のようにみずからの疑問を記している<sup>①</sup>。

按『宋会要輯稿』、游罷嘉州新命、在淳熙三年九月、而此詩作於三月、已有『鶴料掃空』之語、同月所作『飯保福』詩亦有『免官初覺此身輕』語。豈三月間已被劾罷官、九月統有新命而又被論罷歟。

『宋会要輯稿』によれば、陸游が嘉州知事の任命を取り消されたのは、淳熙三年九月のことである。ところが、この詩は三月に作られていながら、すでに「鶴料掃きて空し」という言葉が見え、同じ月に作られた「保福に飯す」詩にも、「官を免ぜられて初めて覚ゆ此の身の軽きを」という言葉がある。三月中にすでに弾劾されて免官となった上、九月になって新しく任命され、またしても弾劾されて任命を取り消された、と言うのだから、うか。

しかし、同氏の「陸游年表」には、三月の免職に関する記事はない。錢仲聯氏が免職の時期を六月とする根拠は不明であるが、三月の免職の有無については結局確証が持てなかったため、判断を保留し、年表には記入しなかったのではないかと思われる。

思うに、錢仲聯氏は膨大な文献を渉猟し、それらを何とか整合させようとして思い悩んだのであろう。しかし、かえってそのために、年表はいかにも不自然なものになってしまったのではなからうか。

## 結論

以上を整理し、筆者の考える淳熙三年の陸游の経歴をまとめると、次のようになる。

淳熙三年（一一七六）丙申、陸游五十二歳。

上巳の日（三月三日）、范成大のために「范待制詩集序」を書く。その末尾に「朝奉郎成都府路安撫司参議官兼四川制置使司参議官」の肩書が記されており、この時点では、まだ范成大の幕僚であったと考えられる。

三月、参議官を免官となり、以後約半年の間、失業状態となる。

九月一日、范成大のために「籌邊樓記」を書く。その末尾には肩書が記されていないことから、この時点でまだ無位無官であったと考えられる。

九月、嘉州知事に任命されるが、「燕飲頽放」を理由に任命を取り消され、ほどなくして主管台州桐柏山崇道觀の祠禄を与えられる。

九月、范成大の七律六首に次韻して唱和する。

この頃より「放翁」と号する。

① 錢仲聯『劍南詩稿校注』第二冊五七二頁参照。

以上は、淳熙三年の陸游の経歴に関する私見である。日中の陸游研究者たちは、現在でもその多くが錢大昕もしくは于北山の年譜を踏襲しているので、筆者の主張は簡単には受け容れてもらえないであろう。しかし、錢大昕の説を完全には否定できないとしても、陸游が祠禄を与えられたのが六月であるという説は、実はきわめて根拠薄弱であるという見解を提示するだけでも一定の意義はあると思ひ、筆を執った次第である。

なお、以上の考察はあくまでも、淳熙三年の陸游の経歴に関しては欧小牧氏の年譜の記述が正しい、と主張するものであり、その他のすべてにおいても同氏の年譜がすぐれている、と主張するものではない。また、以上の議論は『劔南詩稿』の詩が完全に制作時期の順序に収録されている、という前提の下に立てられている。万一この前提が崩れるならば、以上の議論は意味を失うことになるかも知れない。

最後に。江戸の漢詩人市河寛斎いちかわかんさい（一七四九〜一八二〇）の「陸放翁年譜」は、次のように記す。

淳熙三年丙申 秋、公奉祠桐柏観。

淳熙三年丙申 秋、公（陸游）は桐柏観の祠禄を与えられる。

寛斎の年譜は日本で最初の陸游年譜であり、趙翼や錢大昕の年譜に拠らない独自の成果として注目される<sup>①</sup>。筆者の結論は、図らずも江戸の先達と一致したのである。

① 市河寛斎著・一海知義解説『陸詩考実 本伝・年譜』（朋友書店、一九九六）および『一海知義著作集3 陸游と語る』（藤原書店、二〇〇九）所収の論文「市河寛斎の『陸放翁年譜』」参照。同論文の初出は『日本中國學會創立五十年記念論文集』（汲古書院、一九九八）。ただし一海氏は錢大昕の六月説を支持し、市河寛斎の年譜を誤りとする。また年譜の全文は濱中仁「市川寛斎撰『陸游年譜』釈文」（『未名』二十八号、二〇一〇）参照。

### 第三章 成都を離れた後の陸游と范成大

ここで再び、陸游と范成大の交流に話を戻そう。この章では、二人が成都を離れた後の、それぞれの人生の軌跡について記す。ただし記述の都合で、二人が別れた直後から説き起こすことにしたい。

#### 第一節 別れた後の陸游と范成大

○ 淳熙四年（一一七七）丁酉 陸游五十三歳 范成大五十二歳

秋八月、陸游は成都で七古「八月十四夜三叉市对月（八月十四夜、三叉市にて月に対す）」（劍南八）を書いている。その冒頭を示す。

去年看月籌辺楼	去年 月を看る 籌辺楼
雲罇微光如玉鉤	雲罇の微光 玉鉤の如し
主人不樂客歎息	主人は樂しまず 客は歎息し
清歌空送黄金舟	清歌 空しく送る 黄金の舟

去年、籌辺楼で月を眺めていたところ、

雲のすき間から見えるかすかな光は、玉で作った鉤のようであった。

主人（范成大）は心樂しまず、客（陸游）はため息をつき、

美しい歌を聴きながら、むなしい気持ちで黄金の酒杯をあけた。

陸游は、中秋前夜の月を眺めながら、范成大との交友を回想している<sup>①</sup>。この時点から、陸游にとって范成大はすでに回想の対象となり始めている。「黄金舟」は酒杯のこと。樂しいはずの酒宴の席でも、二人は望郷の思いにとらわれ、心樂しまなかつたのであろうか。あるいは前掲「双頭蓮」詞「二三三頁」がうたわれたのは、この時であったかも知れない。

十月、陸游は叙州（四川省宜賓）の知事に任命される（結局赴任せず）。

十月三日、范成大は平江（江蘇省蘇州）の盤門に到着する<sup>②</sup>。

十一月、范成大は臨安に赴いて孝宗に拝謁し、權礼部尚書（正三品）となる<sup>③</sup>。范成大にとつて久しぶりの朝廷勤務である。

○ 淳熙五年（一一七八）戊戌 陸游五十四歳 范成大五十三歳

① 同じ中秋を、范成大は鄂州（湖北省武漢）で迎えている。拙稿「范成大の『鄂州の南楼』詩について」（愛知大学語学教育研究室『言語と文化』第二十一号、二〇〇九）参照。  
② 范成大『呉船録』：「十月）己巳晚、入盤門。」  
③ 周必大「范公神道碑」：「十一月、入对、除權礼部尚書。」ただし『宋史』「范成大伝」は「召对、除權吏部尚書」と記す。

正月十日付けで、陸游は「天彭牡丹譜」（渭南四二）を書く。その「風俗記第三」には、前年春に、范成大が牡丹数百株を天彭（四川省彭州）から早馬で取り寄せ、酒宴に供したことが記されている。その一節を示す。

天彭号小西京、以其俗好花、有京洛之遺風。：淳熙丁酉歲、成都帥以善價私售於花戸、得数百苞、馳騎取之。至成都、露猶未晞。其大径尺。夜宴西楼下、燭焰与花相映發、影搖酒中、繁麗動人。嗟乎、天彭之花、要不可望洛中、而其盛已如此。使異時復兩京、王公将相、築園第以相夸尚、予幸得与觀焉、其動蕩心目、又宜何如也。明年正月十日、山陰陸游書。

天彭は小西京と呼ばれ、その風俗が花を好むことから、洛陽の遺風が伝えられている。：淳熙丁酉の年（淳熙四年）、成都の長官（范成大）がよい値段で私的に花屋から数百包みを買ひ、早馬を走らせてこれを手に入れた。成都に着いた時、露はまだ乾いていなかった。その花の大きさは、直径が一尺ほどもあった。西楼の下で夜宴を催し、蠟燭の炎が花と互いに照り映えて輝き、花の影は酒の中で揺れて、その華麗さは人々を感動させた。ああ、天彭の花は、どうしても洛陽のそれには及ばない。それでもその盛んなことは、すでにこんな風である。いつの日か兩京（長安と洛陽）を取り戻し、王公将相が邸宅を築き、花壇にそれを植えてお互いに自慢しい、私も幸い一緒にそれを見物することができたならば、その目を樂しませ心を喜ばせること、またどれほどであろうか。明年（淳熙五年）正月十日、山陰の陸游記す。

陸游は、范成大の奢侈を正面から批判してはいないが、庭いっぱい飾られた牡丹の花の美しさを称えた後、婉曲に不満を表現している。

春二月、陸游は孝宗の特別の詔により臨安に召還される。蜀で陸游が失地回復の抱負をうたった詩は民間の書肆から刊行され、臨安に流布していた。ある人がそれを孝宗に献上したところ、それを読んだ孝宗は、陸游が久しく僻遠の地にあることを思い、召還を思い立ったという<sup>①</sup>。

三月、陸游は成都を離れ、長江を下る<sup>②</sup>。帰還の際には、『入蜀記』のような旅行記は書かれていない。

四月、范成大は副宰相にあたる参知政事（正二品）に任命される。これは范成最大の生涯に於ける最高の官位であり、このため「范参政」と称される。しかし当時の朝廷は主和派に牛耳られており、范成大がその力量を発揮するには程遠い環境だったようである<sup>③</sup>。

六月、范成大は政敵に弾劾され、わずか二箇月で参知政事を辞任し、祠禄を受けて平江

① 葉紹翁『四朝聞見録』卷二乙集「陸放翁」：「宦劍南、作為歌詩、皆寄意恢復。書肆流伝、或得之以御孝宗。上乙其処而躓之、旋除刪定官。」

② 帰郷の旅の途中、陸游は八十首に上る詩を書いている。市河寛斎の『陸詩考実』は、入蜀と出蜀の道中に書かれた詩をすべて収録している。市河寛斎著・一海知義解説『陸詩考実 本伝・年譜』参照。

③ 当時の政治的状况については、拙稿「淳熙五年の陸游・范成大・楊万里」（愛知大学文学会『文学論叢』第一一八輯、一九九九）参照。

に帰る<sup>①</sup>。石湖に帰った直後、范成大は七律「初帰石湖〔初めて石湖に帰る〕」（石湖二〇）を書いて<sup>②</sup>いる。この詩からは、塵勞の後、ようやくなつかしい故郷にたどり着いた詩人の深い安堵が伝わって来る。

閏六月、帰還の旅の途中、陸游は建康〔江蘇省南京〕を通過する。陸游は建康で七律「登賞心亭〔賞心亭に登る〕」（劍南一〇）を書き、持論である遷都の悲願をうたっている<sup>③</sup>。秋、陸游は臨安に到着する。陸游は新たに提挙福建路常平茶塩公事に任命され、ひとまず山陰に帰る。

十月、陸游は山陰を出発し、建安〔福建省建甌〕に赴任する。

○ 淳熙六年（一一七九）己亥 陸游五十五歳 范成大五十四歳

正月 陸游は建安に着任する。

秋、陸游は新たに提挙江南西路常平茶塩公事に任命され<sup>④</sup>、建安を離任し、撫州〔江西省臨川〕に向かう。

十二月、陸游は撫州に着任する。

○ 淳熙七年（一一八〇）庚子 陸游五十六歳 范成大五十五歳

二月、范成大は知明州〔浙江省寧波〕兼沿海制置使に任命され、同地に赴任する<sup>⑤</sup>。冬、陸游は任期が満了し、撫州を離任して山陰に帰る。

○ 淳熙八年（一一八一）辛丑 陸游五十七歳 范成大五十六歳

二月、范成大は明州での治績を評価され、端明殿學士（正三品）に任命される。三月、范成大は知建康府兼行宮留守に任命される<sup>⑥</sup>。これは、かつて成都の太守となつたのに勝るとも劣らぬ大任である。

范成大の健康赴任に先立ち、孝宗は范成大のために特別に慰勞の宴を催し、親筆の「石湖」の二字を范成大に賜っている<sup>⑦</sup>。

- ① 『宋史』「范成大伝」：「拝參知政事。兩月、為言者所論、奉祠。」
- ② 范成大「初帰石湖」：「曉霧朝暎紺碧烘、橫塘西岸越城東。行人半出稻花上、宿鷺孤明菱葉中。信脚自能知旧路、驚心時復認隣翁。當時手種斜橋柳、無限鳴蜩翠掃空。」周汝昌『范成大詩選』（人民文学出版社、一九五九）二〇八頁、前野直彬『宋・元・明・清詩集』一一八頁、拙稿「淳熙五年の陸游・范成大・楊万里」参照。
- ③ 陸游「登賞心亭」尾聯：「孤臣老抱憂時意、欲請遷都涕已流。」石川忠久『陸游一〇〇選』（NHK出版、二〇〇四）一三六頁、拙稿「淳熙五年の陸游・范成大・楊万里」参照。
- ④ 『宋史』「陸游伝」：「後累遷江西常平提舉。」
- ⑤ 『宋史』「范成大伝」：「起知明州、奏罷海物之獻。」
- ⑥ 『宋史』「范成大伝」：「除端明殿學士、尋帥金陵。」
- ⑦ 周必大「范公神道碑」：「至是特設几開宴、酒三行、命侍行過西小軒曰、『此朕清坐処也。』再坐、上曰、『勸卿一盃、且有以為侑。』公飲訖、二内侍奉繡素來、上有『石湖』二字、御墨尚湿。」

この年、陸游は新たに提挙淮南東路常平茶塩公事に任命される。しかし三月、前年に撫州で水害による飢饉が発生した際、独断で官庫の貯蔵食料を放出し農民を救済したことを糾弾され、新しい任命を取り消される<sup>①</sup>。

四月、范成大は建康に着任する。この年は江南一帯に大飢饉があり、着任早々、范成大は窮民の救済活動や租税の減免に奔走した<sup>②</sup>。

秋七月、山陰の陸游は建康の范成大を思い、七律「月夕睡起独吟、有懷建康参政〔月夕に睡りより起き、独吟して建康の参政を懐う有り〕」（劍南一三）を書いている。

月上虚堂一榻横	月 虚堂に上り 一榻 横たわる
断香漠漠欲三更	断香 漠漠として 三更ならずと欲す
隔帘清露挾秋气	簾を隔てて 清露 秋気を挟み
繞樹驚鴉啼月明 <sup>③</sup>	樹を繞りて 驚鴉 月明に啼く
只怪夢尋千里道	只だ怪しむ 夢に千里の道を尋ぬるを
不知愁作幾重城 <sup>④</sup>	知らず 愁いの幾重の城を作すかを
苦吟更恨知心少	苦吟して更に恨む 知心の少ななるを
西望金陵闕寄声	西のかた金陵を望み 闕に声を寄す

月ががらんとした部屋の上に上り、寝台が一つ横たわっています。

焚き終わった香の匂いがそこはかたなく漂い、真夜中になろうとしています。

すだれの向こうの清らかな夜露は、秋の気配をたたえ、

驚いて飛び立ったカラスは木をめぐり、月明かりに鳴いています。

ただ自分が夢の中で千里の道を探ねて行ったことを不思議に思うばかり。

あなたの愁いは、一体幾重の城を成していることでしょうか。

私は苦吟しながら詩を作り、気心の知れた友人が減多にいないことを残念に思います。

西にある金陵の方角を眺めやり、その宮門に私の声をお寄せいたします。

闕怨の詩と見まごうばかりのこの詩は、単なる時候の挨拶ではあるまい。それは、再び范成大の下に身を寄せたいという、陸游の切なる願いを託したものと考えられる。この時期の陸游は失職して閑居中の身であり、また祠禄も与えられていない。大飢饉の年でもあり、生活は決して楽ではなかったはずである。しかも建康は、陸游ら主戦論者たちが遷都

① 『宋史』「陸游伝」：「江西水災、奏撥義倉賑濟、檄諸郡發粟以予民、召還。給事中趙如愚駁之、遂与祠。」また『宋会要輯稿』第一〇一冊「職官七二・黜降官九」：「淳熙八年」三月二十七日、提挙淮南東路常平茶塩公事陸游罷新任。以臣僚論游不自檢飭、所為多越于規矩、屢遭物議故也。」

② 周必大「范公神道碑」：「四月、開府金陵。適歲旱、公招徠商賈、損各夏稅、請於上、得軍儲二十萬石賑飢民。」また『宋史』「范成大伝」：「會歲旱、奏移軍儲米二十萬賑飢民、減租米五萬。」

③ この句は、魏・曹操「短歌行」の「月明星稀、烏鵲南飛。繞樹三匝、何枝可依」の一節をふまえ、范成大のもとに身を寄せたい、という陸游の心情を託したものと思われる。

④ 范成大七律「次韻温伯謀婦」（石湖六）に「官路驅馳易折肱、官曹隨處是愁城」とある。

を主張する土地でもある<sup>①</sup>。陸游は、范成大が再び自分を招いてくれることに、大きな期待を寄せていたに違いない。しかし、この詩に対する范成大の応答は確認できない<sup>②</sup>。范成大は、建康で陸游との交流を再開することを望まなかったのであろうか。

冬十月、陸游はみずからの不遇と孤独をかこちつつ、七絶「灌園」(劍南一三)を書き、次のようにうたっている。

少携一劍行天下	少くして一劍を携え	天下を行くも
晚落空村学灌園	晩に空村に落ち	園に灌ぐを学ぶ
交旧凋零身老病	交旧は凋零し	身は老病
輪困肝胆与誰論	輪困たる肝胆	誰と与にか論ぜん

若い頃には一本の剣を手にして天下をめぐり歩いたものだが、

晩年には寂しい村に身を落ち着け、田圃に水を引く方法を学んでいる。

交わりを結んだ旧友たちは姿を消し、我が身は老いと病にさいなまれている。

胸中にわだかまる思いを、一体誰と共に語り合えばよいのだろうか。

これ以後、紹熙三年(一一九二)に陸游の「次韻范参政書懷」が書かれるまで十年以上もの間、陸游と范成大の間に詩歌の応酬は確認できない。

○ 淳熙九年(一一八二) 壬寅 陸游五十八歳 范成大五十七歳

五月、陸游は成都府玉局觀の祠禄を与えられる。

○ 淳熙十年(一一八三) 癸卯 陸游五十九歳 范成大五十八歳

四月、范成大は疲労が蓄積して重病になり、再三離任を請願する。

八月三十日、范成大は建康を離任し、祠禄を領して平江に帰る<sup>③</sup>。これ以後范成大は、基本的に故郷での隠棲と療養の生活に移って行く。

○ 淳熙十一年(一一八四) 甲辰 陸游六十歳 范成大五十九歳

① 陸游「上二府論都邑札子」(渭南三)：「某聞江西自吳以來、未有舍建康他都者。：車駕駐蹕臨安、出于權宜、本非定都。以形勢則不固、以饋餉則不便、海道逼近、凜然常有意外之憂。：某窃謂及今当与之約。建康・臨安、皆係駐蹕之地。北使朝聘、或就建康、或就臨安。如此、則我得以閑暇之際建都立国、而彼既素聞、不自疑沮。」「上二府論都邑札子」は『宋史』「陸游伝」にも収録されているが、『渭南文集』とは文字の異同がある。

② 于北山『范成大年譜』淳熙八年・注(一一)：「此詩未見石湖和作。(石湖自蜀帰、即未再見与陸游倡和之作。)」同書三二二〜三二三頁参照。

③ 周必大「范公神道碑」：「九年、公以積勤、淒苦頭眩、自夏徂秋、五上章求間。上不得已、進資政殿学士、提舉臨安府洞霄宮。」なお九年は十年の誤り。また『宋史』「范成大伝」：「以病請間、進資政殿学士、再領洞霄宮。」



この頃、范成大は七絶「古梅二首」（石湖二三）を書いている<sup>①</sup>。これは、成都を離れた後の范成大の作品の中で、控えめながらも陸游への言及が確認できる唯一の例である。次に其二を示す。

誰似西湖処士才	誰か似たらん	西湖の処士の才に
詩中籬落久塵埃	詩中の籬落	久しく塵埃
陸郎旧有梅花課	陸郎	旧く梅花の課有り
未見今年句子來	未だ見ず	今年の句子の來たるを

西湖の処士（林逋）の才能に匹敵するのは、一体誰だろうか。

詩の世界の花壇は、久しく埃をかぶったままだ。

陸君は、以前は梅の花をうたうことを日課にしていたが、今年はまだ梅の詩を送ってよこさないようだ。

これは必ずしも応酬の詩ではなく、ふと心に浮かんだ思いを綴った、独白のような詩である。それでも、范成大時には陸游をなつかしく思い出すことがあったことを、この詩は物語る。成都を離れた後の二人の友情は、完全に陸游からの一方通行だったわけではないのである。范成大は梅の花が好きで、梅の様々な品種について詳述した『范村梅譜』の著作もある<sup>②</sup>。一方、陸游にも五言七言の「梅花絶句」をはじめ、梅の詩は多い<sup>③</sup>。二人の友情は、梅や海棠など、花への関心を一つの接点としていたことは疑いない。また、西湖の孤山に隠棲した北宋の隠逸詩人林逋（九六七～一〇二八）<sup>④</sup>は、晩年の范成大にとって一つの理想であったようである<sup>⑤</sup>。

なおこの年、范成大の恩人である洪适（↓二頁）が世を去っている。そうしたことも、范成大の隠逸志向を一層助長したかも知れない。

○ 淳熙十二年（一一八五）乙巳 陸游六十一歳 范成大六十歳

陸游も范成大も、それぞれの故郷で閑居生活を送っている。

- ① 正確な年代は不明であるが、同詩の数首前に「甲辰人日病中、吟六言六首以自嘲」（石湖二三）と題する詩があることから、淳熙十一年前後の作と考えられる。ごくおおまかに考えても、健康を離任した後、故郷で静養中の作であるとして問題ないであろう。
- ② 佐藤武敏『中国の花譜』（平凡社、一九九七）参照。
- ③ 拙稿「陸游の梅花絶句について」（愛知大学語学教育研究室『言語と文化』第十八号、二〇〇八）参照。五言の梅花絶句については、『宋詩別裁 五言絶句訳注』（盆詩の会、二〇一四）参照。また陸游の「卜算子 詠梅」詞については、宋詞研究会『風絮』第二号（二〇〇六）参照。
- ④ 林逋については、錢鍾書著、宋代詩文研究会訳注『宋詩選注1』（平凡社、二〇〇四）一二〇頁参照。
- ⑤ 紹熙二年冬、姜夔が石湖を訪問し、梅好きの范成大のために「暗香」「疎影」の二詞を書いている。これらの詞題は、林逋の七律「山園小梅」の領聯「疎影横斜水清浅、暗香浮动月黄昏」にもとづく。

○ 淳熙十三年（一一八六）丙午 陸游六十二歳 范成大六十一歳

正月、范成大は七律「丙午新正書懷」（石湖二六）十首を書く。その内容は、大部分が老境の詩人の自適の生活をうたうものである<sup>①</sup>。

この年、范成大は一年をかけて、故郷の農民たちの生活に取材した七絶の連作「四時田園雜興六十首」（石湖二七）を書く<sup>②</sup>。言うまでもなく、范成大の代表作である。

春、陸游は権知嚴州事、すなわち嚴州（浙江省建徳）の知事代理に任命される。新しい任命の挨拶のため、陸游は数年ぶりに臨安を訪れ、孝宗に拝謁する<sup>③</sup>。

三月、陸游はいったん山陰に帰り、秋七月、嚴州に赴任する。

○ 淳熙十四年（一一八七）丁未 陸游六十三歳 范成大六十二歳

この年、陸游は嚴州で二十巻本の『劍南詩稿』（嚴州刊本）を刊行する<sup>④</sup>。陸游は、当時の主な詩人・文人たちにこれを贈呈しており<sup>⑤</sup>、当然范成大にも贈呈したと考えられる。しかし、范成大的反応は確認できない。

なおこの年十月、太上皇となっていた高宗が崩御する。

○ 淳熙十五年（一一八八）戊申 陸游六十四歳 范成大六十三歳

七月、陸游は嚴州の任期が満了し、山陰に帰る。

十月、陸游は軍器少監（従六品）に任命され<sup>⑥</sup>、臨安に赴く。

十一月、范成大は福州（福建省）の知事に任命される。しかし、赴任の途中で病気になる

① 同年正月、范成大は七絶「丙午人日立春、屈指癸卯孟夏晦得疾、恰千日矣、戲書」（石湖二六）を書き、自分の長患いを自嘲している。

② 范成大「四時田園雜興六十首」（石湖二七）序：「淳熙丙午、沉疴少紓、復至石湖旧隱。野外即事、輒書一絶、終歲得六十篇、号『四時田園雜興』。」錢鍾書『宋詩選注』は、全六十首のうち十六首を収録。

③ 『宋詩選注3』二三五頁以下参照。訳注担当は筆者。また山本和義・河野みどり「范成大『四時田園雜興』抄解」（『アカデミア 文学・語学編』第五十七号、一九九四）参照。

④ 『宋史』「陸游伝」：「起知嚴州、過闕陛辭。上諭曰、『嚴陵山水勝処、職事之暇、可以賦詠自適。』」  
⑤ 二十巻本『劍南詩稿』については、村上哲見「陸游『劍南詩稿』の構成とその成立過程」（『小尾博士古稀記念中国学論集』汲古書院、一九八三）および甲斐雄一「陸游の嚴州赴任と『劍南詩稿』の刊刻」（宋代詩文研究会『橄欖』第十八号、二〇一一）参照。

⑥ 嚴州時代の陸游と当時の詩人たちとの詩歌の応酬は、朱陸卿『陸游嚴州詩文箋注』（浙江大学出版社、二〇一三）附録七「陸游友人嚴州唱和詩」参照。『劍南詩稿』に触れている作品としては、第四章で言及する楊万里「跋陸務観『劍南詩稿』」二首の他、張鑑「覓放翁『劍南詩集』」、姜特立「陸嚴州惠『劍外集』」、劉忠時「誦放翁『劍南集』」、樓鑰「題陸放翁詩卷」、戴復古「誦放翁先生『劍南詩草』」、徐文卿「因放翁以『劍南詩稿』為贈、詠嘆之余、賦短歌以謝」がある。

⑦ 『宋史』「陸游伝」：「再召入見、上曰、『卿筆力回斡甚善、非他人可及。』除軍器少監。」

り、結局福州に赴任せず平江に帰る<sup>①</sup>。

○ 淳熙十六年（一一八九）己酉 陸游六十五歳 范成大六十四歳

春、陸游は礼部郎中<sup>れいぶろうちゆう</sup>に遷る。

二月、孝宗は退位し、皇太子に讓位する。これが光宗<sup>こうそう</sup>（趙惇 在位一一八九〜一一九四）である。光宗は治世の始めにあたり、徳望のある范成大に対し、現今の政治問題に対処する要訣を述べよと諮問した。この時の范成大の上奏内容を、周必大は「皆な当世の要務なり」と称えている<sup>②</sup>。

七月、陸游は実録院檢討官を兼任する<sup>③</sup>。

十一月二十八日、陸游は再び弾劾されて失脚し<sup>④</sup>、山陰に帰る。これ以後陸游は、嘉泰二年（一二〇三）から翌年にかけて一年ほど臨安に出たことを除けば、世を去るまでの二十年間、ほとんど故郷を離れていない。これまで見て来たように、成都を離れた後の陸游と范成大は、ただでさえ疎遠になっていた。陸游が朝廷から弾劾され故郷にこもったことで、なおさら連絡が取りにくくなったであろうことは、想像に難くない。

年末、范成大は平江で七古の連作「臘月村田樂府十首」（石湖三〇）を書いている。これは故郷の農民の歳末の年中行事を題材とする連作で、「四時田園雜興六十首」と並ぶ范成大のもう一つの代表作である<sup>⑤</sup>。

○ 紹熙元年（一一九〇）庚戌 陸游六十六歳 范成大六十五歳

光宗即位の翌年、年号は「紹熙」と改められる。

淳熙の末から紹熙の初め頃、陸游は山陰で『老学庵筆記』十巻を書く。その巻五には、成都時代を回想する記事が見える。

范至能在成都、嘗求亭名于予。予曰、「思鱸」。至能大以為佳。時方作墨、即以銘墨背。然不果築亭也。

范至能（成大）が成都にいた頃、ある時、私に亭の名を求めた。私は、「思鱸」と答えた。至能は大変気に入り、その場でただちに墨をすり、墨の背に書き付けた。しかし、結

① 周必大「范公神道碑」：「十六年十一月、起知福州、引疾固辞。」于北山氏によれば、十六年は十五年の誤り。『范成大年譜』三六三頁参照。

② 周必大「范公神道碑」：「寿康皇帝初政、特詔求言。公疏、『乞述重華以広孝治、執仁術以守家法、堅国本以定規模、節經費以蘇民力、精規謀以忘事機、審選任以求将材、修堡障以固西南、議塩莢以安二広、嚴錢禁以権官会、広屯田以実辺儲。』皆当世要務。」

③ 『宋史』「陸游伝」：「紹熙元年、遷礼部郎中、兼実録院檢討官。」紹熙元年は淳熙十六年の誤り。

④ 『宋会要輯稿』第一〇一冊「職官七十二・黜降官九」：「淳熙十六年十一月二十八日詔、礼部郎中陸游、大理寺丞李端友、秘書省正字呉鑑、并放罷。以諫議大夫何澹論游前後屢遭白簡、所至有汚穢之迹。…故有是命。」

⑤ 『宋詩鈔・石湖詩鈔』は全十首を収録。周汝昌『范成大詩選』は十首のうち七首を収録。また『宋詩別裁集』卷三は其七「照田蚕行」のみを収録。

局亭を建てることはしなかった。

「思鱸」の名は、前述の張翰の故事にもとづく。「↓三三頁」これも、おそらくは淳熙三年秋の出来事ではないかと思われる。

秋、陸游はみずからの書齋を「風月軒」と名付ける<sup>①</sup>。この命名は、自分を不当に追放した権力者へのあてつけである。

○ 紹熙二年（一一九一）辛亥 陸游六十七歳 范成大六十六歳

この頃、范成大は七絶「喜収知旧書、復畏答、書二絶〔知旧の書を収むるを喜ぶも、復た答うるを畏れ、二絶を書す〕」（石湖三二）を書いて<sup>②</sup>いる。

故人寥落似晨星	故人 寥落して晨星に似たり
珍重書來問死生	珍重す 書の来たりて死生を問うを
筆意不如当日健	筆意 当日の健なるに如かず
鬢辺応也雪千莖	鬢辺も応に也た雪千莖なるべし

昔からの友人たちは、明け方の星のようにまばらになってしまった。手紙が届き、私の安否を尋ねてくれることを、大変うれしく思う。筆の勢いは、その昔の元気だった頃には及ばない。鬢のあたりも、きつと雪のように真っ白になっていることだろう。

強裁尺素答相思	強いて尺素を裁ち 相思に答う
両目眇昏腕力疲	両眼 眇昏 腕力は疲る
牽率老夫令至此	老夫を牽率して此に至らしむれば
門前猶說報書遲	門前にて猶お説かん 書を報ずること遅しと

大儀ながらも白い紙を裁ち切り、私への思いに答える。

両目はかすみ、手には力が入らない。

ご老人を引っ張ってここに連れて来たならば、

門の前でやはり「返事が遅いぞよ」と言うことだろう。

もちろん、詩題に言う「知旧」が間違いなく陸游その人であると断言はできない<sup>③</sup>。しかし当時の状況から考えて、その可能性は決して小さくないように思われる。少なくとも、

① 陸游の七絶「予十年間兩坐斥罪、雖擢髮莫數、而詩為首、謂之嘲詠風月。遂以風月名小軒、且作絶句」（劍南二二）参照。

② 詩集の配列から、おおよそ紹熙の初め頃の作と推定される。暫定的に紹熙二年の項に記す。

③ 周汝昌『范成大詩選』は其一を収録するが、この「知旧」が誰であるかは明言していない。なおこれらの詩は嚴長明『千首宋人絶句』巻五に収録されている。

その人物は「鬢辺雪千茎」の「老夫」であり、年少の知人ではない。旧知の老人からの手紙が久しぶりに届き、嬉しいやら、戸惑うやら。さて、何と返事を書いたものか。范成大の心にこうした複雑な感慨を呼び起こす相手は、かつて成都時代を共に過ごし、今では朝廷に目の敵にされ、故郷に身をひそめる陸游以外に考えられないのではなからうか。其二の「眇昏」は、成都時代の范成大の七律「新涼夜坐」に見える言葉であることにも注意したい。「↓三二頁」この当時、陸游は老いてなお主戦の信念を貫き、充実した創作活動を展開していた。一方范成大はすでに石湖に隠棲し、風雅の世界に心を遊ばせながら、病床で晩年を過ごしていた<sup>①</sup>。かつての友人との間には、すっかり距離ができてしまっている。返事が書きにくいのは当然であろう。以上は推論に過ぎないが、もし実証できれば、この詩は晩年の陸游と范成大の微妙な距離を物語る貴重な資料となるであろう。

○ 紹熙三年（一一九二）壬子 陸游六十八歳 范成大六十七歳

暮春、陸游は范成大の七律「丙午新正書懷十首」（石湖二六）に次韻し、七律「次韻范参政書懷〔范参政の書懷に次韻す〕」（劍南二四）十首を書く。范成大の原詩が書かれてから、六年後のことである。これは厳密には「追和」の作であり、同時的な唱和とは性質を異にするが、七律十首という規模は成都時代にも見られないものであり、特筆に値する。陸游の和作は、范成大の原詩と同様、老境の自適の生活をうたう一方で、身辺に集まる誹謗中傷のやり切れないさや、逆境の晩年を嘆く心情が強く表出されており<sup>②</sup>、もっぱら安心立命をうたう范成大の原詩とは趣を異にする。両者の詳細な比較・分析は、今後の課題としたい。この連作を含め、この年の陸游の詩には、范成大との関連を思わせるものが多い<sup>③</sup>。

この年、范成大は資政殿大学士を加えられる<sup>④</sup>。

五月、范成大は太平州〔安徽省当塗〕の知事に任命され、同地に赴任する。しかし、着任後わずか一箇月で、二番目の娘が夭折し、祠禄を願い出て帰郷する。これが、范成大にとって最後の地方赴任となった。

秋、陸游は七律「新涼夜坐有作」（劍南二五）を書いている<sup>⑤</sup>。その詩題や形式は、范成大の成都時代の作品「新涼夜坐」を連想させる。（↓三二頁）

① 范成大と交流のあった姜夔は、范成大の追悼のために書いた五律「悼石湖三首」其一の領聯で「江山平日眼、花鳥暮年心」とうたっている。姜夔が范成大のために書いた詩詞については、保荊佳昭「姜白石における詞―江湖派詩人の交流における詞の意味 特に蕭德藻、雲間洞天、范成大に関する詞を取り上げて―」（江湖派研究会『江湖派研究』第三輯、二〇一三）参照。

② 陸游「次韻范参政書懷」其一：「養氣頽然似木鷄、謗讒寧復問端倪。」其九：「已是平生行逆境、更堪末路踐危機。」其十：「平生愛睡如甘酒、晚歲憂讒劇履氷。」

③ 龔放「陸游与范成大交游考」は、范成大が陸游に自作の詩文集を贈ったためではないかと推定している。必ずしも確証はなく、仮説の域を出ないが、少なくとも、范成大が世を去る前年に、陸游の范成大に対する関心が高まっていることは事実である。

④ 周必大「范公神道碑」：「紹熙三年、加資政殿大学士知太平州。」ただし『宋史』「范成大伝」は「紹熙二年、加大学士」と記す。

⑤ 陸游「新涼夜坐有作」：「老夫任運本騰騰、一念軒裳未會。閑似苔磯垂釣叟、淡如村院罷參僧。硯屏突兀蓬婆雪、書几青燐蓮勺灯。稚子可憐貪夜課、語渠循旧未須增。」

冬、陸游は山陰で七絶「夜読范至能攬轡録、言中原父老見使者多揮涕、感其事作絶句（夜范至能の『攬轡録』を読むに、言う、中原の父老 使者を見て多く涕を揮うと。其の事に感じ絶句を作る）」（劔南二五）を書く。

公卿有党排宗沢<sup>①</sup> 公卿 党有りて 宗沢を排し  
帷幄無人用岳飛 帷幄 人の岳飛を用うる無し  
遺老不応知此恨 遺老 応に此の恨みを知らざらんも  
亦逢漢節解沾衣 亦た漢節に逢えば 衣を沾すを解す

大臣たちには党派があつて宗沢をしりぞけ、  
参謀本部には岳飛を用いようとする人はいない。

北方にとり残された遺老たちは、きつとこうした無念さを知らないだろうが、  
それでも中国からの使者に出会うと、着物を涙で濡らすことを知っているのだ。

范成大の『攬轡録』には次の一節があり、陸游の感慨を裏付ける。

遺黎往往垂涕嗟噴、指使人云、此中華佂国人也。老媪跪拜者尤多。  
敵地に取り残された人々は、往往にして涙を流し嘆息し、使者を指さして、「これは中華の佂様の国から来たお方だ」と言う。老婆のひざまづいて拜む者が最も多かつた。

乾道六年の使金の旅の際、范成大は、道中の見聞や感慨を、七絶七十二首の連作（使金絶句）として書き残している<sup>②</sup>。この連作は、范成大の毅然たる側面を伝える。その中でも、開封で書かれた「州橋」（石湖二二）と題する一首は、最も代表的なものである<sup>③</sup>。

州橋南北是天街 州橋の南北は 是れ天街  
父老年年等駕廻 父老 年年 駕の廻るを等つ  
忍涙失声詢使者 涙を忍び 声を失して 使者に詢ぬ  
幾時真有六軍来 幾時か真に六軍の来たること有りやと

ここ州橋の南北は、かつては天子様の御成り道であつた。  
土地の父老たちは、今でも毎年、天子様の御車が還御するのを待ちわびている。  
そして涙を隠し、声をおし殺して、使者の私に問いかける。  
「いつになったら本当に、天子様の軍隊が来てくださるのでしょうか」と。

① 宗沢（一〇五九〜一二二八）は、岳飛と並び称される宋の將軍。錢鍾書著、宋代詩文研究会訳注『宋詩選注2』（平凡社、二〇〇四）二六一頁参照。  
② 范成大の使金絶句は、現在では『石湖居士詩集』卷十二にすべて収録されているが、明初に『永樂大典』を編修した時点では、まだ『北征小集』（『北征集』）として単独で刊行されていたという。孔凡礼『范成大年譜』一九〇頁参照。  
③ 『宋詩選注3』二二五頁参照。訳注担当は筆者。

陸游は『攬轡録』を読んで感慨を催し、失地回復を顧みない当時の朝廷の状況を慨嘆する。自分自身は生涯敵地を踏むことのなかった陸游は、この記録をさぞ感慨深く読んだことであろう<sup>①</sup>。

## 第二節 范成大の死と陸游の范成大追悼

○ 紹熙四年（一一九三）癸丑 陸游六十九歳 范成大六十八歳

この年、范成大に先立ち、妻の魏氏（ぎし）が世を去る<sup>②</sup>。娘と妻を相継いで失ったことは、范成大にとつていかばかり大きな打撃だったであろうか。

九月五日、范成大は世を去る。享年六十八<sup>③</sup>。諡（おくりな）は文穆（ぶんぼく）である（穆は、慎み深い）。

十二月十三日、范成大の葬儀が行われる。

周必大は、范成大の一生の事跡を記した「資政殿大学士贈銀青光祿大夫范公成大神道碑」<sup>④</sup>を執筆する。年代に若干の問題点があるものの、范成大の生涯を知るための資料として貴重なものである。

この年の冬、陸游は五律「懷紹興間往還諸公（紹興の間に往還せし諸公を懷う）」（劍南二八）を書いている。范成大の死去と何か関係があるのかも知れない<sup>⑤</sup>。

○ 紹熙五年（一一九四）甲寅 陸游七十歳

六月、孝宗が崩御する。范成大と同じく、享年六十八である。必ずしも陸游の期待に届いてはくれなかったが、陸游にとつて大切な理解者の一人であった。その死は、陸游にとつて決して小さくない喪失を意味する。ところが、日頃から孝宗と親子仲の悪かった光宗は葬礼に従わず、物議をかもしす。

七月、光宗は退位し、寧宗（ねいそう）（趙抃（ちえん） 在位一一九四～一二三四）が即位する。これより、寧宗を擁立した韓侂胄（かんたうちゆう）の専権が始まる。

同年秋九月、陸游は七古「夢范参政（范参政を夢む）」<sup>⑥</sup>（劍南三〇）を書き、范成大との別れを夢に見たことをうたっている。入声による一韻到底の、鬼気迫る作品である。

夢中不知何歲月

夢中 知らず 何れの歲月なるかを

長亭慘愴天飛雪

長亭 慘愴（さんたん）として 天 雪を飛ばす

① もつとも、当時の人々が皆陸游や范成大のように失地回復を急務と考えていたわけではない。胡伝志著、高橋幸吉訳「南宋から金へ使いた文人たち―その創作活動と内容について―」（宋代詩文研究会『橄欖』第十二号、二〇〇四）参照。

② 周必大「范公神道碑」：「妻和義郡夫人魏氏、前公幾月薨。」

③ 周必大「范公神道碑」：「紹熙」四年九月、公疾病：以是月五日薨。…享年六十有八。」

④ 錢仲聯『劍南詩稿校注』第四冊一九六二頁参照。

⑤ 前野直彬『陸游』（集英社、一九六四）二〇八頁参照。

酒肉如山鼓吹喧  
車馬結束有行色  
我起持公不得語  
但道不料今遽別  
平生故人端有幾  
長号頓足淚迸血  
生存相別尚如此  
何況一旦泉壤隔  
欲懷鷄黍病为重①  
千里関河阻臨穴  
速死従公尚何憾  
眼中寧復見此傑  
青灯耿耿山雨寒  
援筆詩成心欲裂

酒肉 山の如く 鼓吹 喧し  
車馬 結束して 行色有り  
我 起ちて公を持するも語るを得ず  
但だ道「料らざりき 今 遽かに別るとは」と  
平生の故人 端しく幾たりか有る  
長号し頓足して 涙 血を迸らしむ  
生きて存するも 相い別るること尚お此くの如し  
何ぞ況んや 一旦 泉壤を隔つるをや  
鷄黍を懷わんと欲すれども 病 重きを為し  
千里の関河 穴に臨むを阻む  
速やかに死して公に従うとも 尚お何をか憾まん  
眼中 寧んぞ復た此の傑を見ん  
青灯 耿耿として 山雨 寒く  
筆を援けて 詩 成れば 心 裂けんと欲す

夢の中なので、いつのことかはわからないが、宿場の空は暗く、雪が舞っていた。

酒も肉も山のように積まれ、音楽の響きもにぎやかな宴会が開かれていたが、馬も車も支度を整えて、出発しそうな気配だった。

私は立ち上がり、范公の手をとったが、話すことができない。ただ、「今急にお別れすることになろうとは」と言っただけだった。

日頃から交際していた旧友は、いったい何人残っていることか。大声をあげて叫び、地団駄を踏んで、血の涙をほとぼしらせた。

生きている間ですら、このように長い間別れて暮らしていたというのに、この世とあの世に隔たってしまった今となっては、悲しみはなおさらのこと。

亡友との約束を守った古人にならない、鷄と黍の御馳走でもてなしたいが、病気は重く、千里の道に横たわる山川は、公の墓穴に臨もうとする旅路をさえぎっている。

今すぐ死んで公のもとに赴いても、何の心残りもない。この目であるような英傑を見ることが、もう二度とあるものか。

青く燃える灯火は澄んだ光を放ち、山には冷たい雨が降っている。筆をとって詩を書きあげれば、心は張り裂けそうだ。

○ 慶元元年（一一九五）乙卯 陸游七十一歳

寧宗即位の翌年、年号は「慶元」と改められる。

秋九月、陸游は五律「范参政挽詞」（劍南三三）二首を書き、范成大を追悼している。次に其二を示す。

① 『後漢書』「独行・范式伝」に見える「死友」（死んでも変わらない友情）の故事による。なお「鷄黍」の語は前掲の范成大の送別詩にも見える。（↓四二頁）



孤拙知心少	孤拙 <sup>こせつ</sup>	知心 <sup>ちしん</sup>	少 <sup>すく</sup> なく
平生僅數公	平生 <sup>へいせい</sup>	僅 <sup>わずか</sup> かに	數公 <sup>すうこう</sup> のみ
雕零遂無幾	雕零 <sup>てうじゆ</sup>	遂 <sup>す</sup> に	幾 <sup>いく</sup> ばくも無し
遲暮与誰同	遲暮 <sup>ちぼ</sup>	誰 <sup>たれ</sup> と	同 <sup>どう</sup> にせん
瓊樹世塵外	瓊樹 <sup>けいじゆ</sup>	世塵 <sup>せいじん</sup> の外 <sup>の外</sup>	
神仙雲海中	神仙 <sup>しんせん</sup>	雲海 <sup>うんかい</sup> の中 <sup>の中</sup>	
夢魂寧復接	夢魂 <sup>むこん</sup>	寧 <sup>いずく</sup> んぞ	復 <sup>また</sup> た接せん
慟哭向西風	慟哭 <sup>どうこく</sup>	西風 <sup>せいふう</sup>	に向かう

偏屈でつたない私には気持ちをわかり合える友人は少なく、生涯にわずか数人だけでした。

それが老境に入っていくからも残っておらず、晩年を誰と一緒に暮らせばいいものやら。

瓊樹は俗塵を遠く離れた世界にあり、神仙たちは雲の中に住んでいるとか。

夢の中で、どうしてまたお会いすることができるでしょうか。慟哭して秋風に向かうばかりです。

実に陸游にとって范成大は、「孤」にして「拙」なる自分を理解し得る、かけがえのない知己だったのである。

○ 慶元二年（一一九六）丙辰 陸游七十二歳

夏六月、陸游は七律「六月二十四日夜分、夢范至能・李知幾・尤延之同集江亭、諸公請予賦詩、記江湖之樂、詩成而寃、忘數字而已」〔六月二十四日夜分、夢に范至能・李知幾・尤延之、同に江亭に集う。諸公 予に詩を賦して江湖の樂しみを記さんことを請う。詩成りて覺むるに、數字を忘るるのみ〕（劍南三四）を書く<sup>①</sup>。陸游が夢に見たという范成大、李石<sup>②</sup>、尤延之<sup>③</sup>の三人は、この時点ではいずれも故人となっている<sup>④</sup>。

- ① 陳衍『宋詩精華錄』卷三所収。陳衍は「如有神助」「読之令人神往不置」と評している。
- ② 李石（？～一一八一）、字は知幾、号は方舟子。資州〔四川省〕の人。紹興二十一年（一一五一）の進士。『方舟集』がある。孔凡礼「陸游交游録」（『文史』第二十一輯、一九八三）参照。
- ③ 尤表（一一二七～一一九四）、字は延之。号は遂初。無錫〔江蘇省〕の人。紹興十八年（一一四八）の進士。『遂初小稿』六十巻があったが、すでに散佚し、現在では『梁溪遺稿』二巻のみが存在する。『宋史』卷三八九に伝がある。紹熙五年、尤表が世を去った際、陸游は「尤延之尚書哀辞」（渭南四一）を書いている。
- ④ 陸游の夢の詩については、小川環樹『陸游』「陸游の夢 その一」「陸游の夢 その二」および入谷仙介「陸游の夢の詩についての一考察」（京都大学『中国文学報 小尾博士古希記念』一九八三）参照。入谷論文は『詩人と聴覚 王維と陸游』所収。ただし小川氏も入谷氏も、この詩には触れていない。

露箬霜筠織短篷	露箬 <small>ろじやく</small> 霜筠 <small>そういん</small> 短篷 <small>たんぼう</small> を織り
飄然来往淡煙中	飄然 <small>ひょうぜん</small> として来往 <small>らいおう</small> す 淡煙 <small>たんえん</small> の中 <small>うち</small>
偶經菱市尋溪友	偶 <small>たま</small> たま菱市 <small>りょうし</small> を経て 溪友 <small>けいゆう</small> を尋ぬるに
却揀蘋汀下釣筒	却 <small>かえ</small> つて蘋汀 <small>ひんてい</small> を揀 <small>えら</small> び 釣筒 <small>ちゆうとう</small> を下す
白菡萏香初過雨	白菡萏 <small>はくかんたん</small> 香 <small>か</small> ばしく 初 <small>はつ</small> めて雨 <small>あめ</small> を過 <small>く</small> ぐ
紅蜻蜓弱不禁風	紅蜻蜓 <small>こうせいいてい</small> 弱 <small>じやく</small> くして 風 <small>かぜ</small> に禁 <small>た</small> えず
吳中近事君知否	吳中 <small>いなか</small> の近事 <small>いなか</small> 君 <small>きみ</small> 知 <small>し</small> るや否 <small>いな</small> や
團扇家家画放翁	團扇 <small>だんせん</small> 家家 <small>い家家</small> に 放翁 <small>えが</small> を画 <small>か</small> く

この私は、露に濡れ霜の降りた竹の皮で小舟のとまを編み、うつつらともやのたなびく水面を、飄然と行き来しています。たまたま菱の実を売っている市場を通り過ぎ、川辺の友人を訪ねてみたところ、何と意外にも、浮き草のただよう水際を選び、釣り糸をたれていました。白い蓮の花が香ばしいのは、さっきの雨に洗われたばかりのせい。赤トンボは弱々しく、風にたえられない風情で揺れています。吳中の最近の様子を、あなた方は知っておられますか。どこの家でも、團扇にこの放翁の絵姿を描いて使っていますよ。

このように、陸游は范成大のために、三年続けて追悼または追憶の詩を書いている。なおこの詩は、陸游が詩題で范成大に言及する最後の作品である。

### 第三節 晩年の陸游による范成大回想

范成大の回想は、その後も陸游の詩文の中に現れる。嘉泰二年（一一〇二）正月五日付で、陸游は「施司諫注東坡詩序」〔施司諫の『注東坡詩』の序〕（渭南一五）を書く。時に七十八歳。これは、施元之<sup>①</sup>の蘇軾詩注のための序文である。まず陸游は、有史以来の主な詩歌は『詩経』『文選』から唐代の杜甫の詩に至るまで、おおむね注が施されていることを述べる。次に、宋代の詩については、任淵が宋祁・黃庭堅・陳師道<sup>②</sup>の三家の詩に注釈を施したが、蘇軾の詩のみは、その内容が深遠なため、注を施していないことを述べる<sup>③</sup>。それから陸游は、かつて成都幕府にいた頃、范成大と、蘇軾の詩について議論を戦わせた思い出を記している。次にその一節を示す。

某頃与范公至能会于蜀、因相与論東坡詩、慨然謂予、一足下当作一書、發明東坡之意、以遺學者。」某謝不能。他日、又言之。因举二三事以質之曰、「五畝漸成終老計、

① 施元之、字は徳初、吳興（江蘇省）の人。范成大と同じ紹興二十四年（一一五四）の進士。  
② 陸游「施司諫注東坡詩序」（渭南一五）：「古詩唐虞廢歌、夏述禹戒作歌。商周之詩、皆以列于經、故有訓釈。漢以後詩、見于蕭統『文選』者、及高帝・項羽・韋孟・楊惲・梁鴻・趙壹之流歌詩見于史者、亦皆有注。唐詩人最盛、名家者以百數、惟杜詩注者數家、然概不為識者所取。近世有蜀人任淵、嘗注宋子京・黃魯直・陳無己三家詩、頗稱詳贍。若東坡先生之詩、則援据闕博、指趣深遠、淵獨不敢為之說。」

九重新掃旧巢痕』<sup>①</sup>『遙知叔孫子、已致魯諸生』<sup>②</sup>当若為解。」至能曰、「東坡竄黃州、自度不復收用、故曰『新掃旧巢痕』。建中初、復召元祐諸人、故曰『已致魯諸生』。恐不過如此耳。」某曰、「此某之所以不敢承命也。昔祖宗以三館養士、儲將相材、及官制行、罷三館。而東坡蓋嘗直史館、然自謫為散官、削去史館之職久矣、至是史館亦廢、故云『新掃旧巢痕』。其用字之嚴如此。而『鳳巢西隔九重門』<sup>③</sup>、則又李義山詩也。建中初、韓曾二相得政、尽收用元祐人、其不召者亦補大藩。惟東坡兄弟猶領宮祠。此句蓋寓所謂不能致者二人、意深語緩、尤未易窺測。至如『車中有布乎』<sup>④</sup>、指當時用事者、則猶近而易見。『白首沈下吏、綠衣有公言』<sup>⑤</sup>、乃以侍妾朝雲嘗歎黃師是仕不進、故此句之意、戲言其上僭。則非得于故老、殆不可知。必皆能如此、然後無憾。」至能亦太息曰、「如此、誠難矣。」

私はかつて范公至能（范成大）と蜀で出会い、一緒に東坡（蘇軾）の詩を論じたことがあるが、「范成大は」感慨深げに私にこう言った。「貴君は一冊の書物を著して東坡の詩の意味を解き明かし、後世の学習者に遺すべきです。」私は、できませんと断った。別の日にまた同じことを言うので、二三の事例をあげ、彼にこう問いたました。『五畝漸く成る 終老の計、九重 新たに掃う 旧巢の痕』『遙かに知る 叔孫子、已に魯の諸生を致すを』これを解釈できますか。」范至能は、こう言った。「東坡は黃州に流され、自分ではもう二度と都に返り咲くことはないと思っていた。だから『新たに掃く 旧巢の痕』と言う。ところが建中の初め頃、再び元祐の党人たちを召し出すことになった。だから『已に魯の諸生を致す』と言う。大体そういうことではないですか。」私は言った。「これこそ、私が御命令を承諾しない理由なのです。昔、宋の太祖と太宗は史館・昭文館・集賢院の三館で士大夫を養成し、将相となる人材を蓄えましたが、官制が行われるに及び、三館を廃止しました。しかるに東坡はかつて史館に所属していましたが、流されて散官となり、史館の職から除名されて久しく、ここに至り史館もまた廃止されました。それで『新たに掃く 旧巢の痕』と言うのです。その用字の厳格さは、こんな具合です。しかも『鳳巢 西に隔つ 九重の門』というのは、李義山（李商隱）の詩なのです。建中の初め頃、韓忠彦・曾布の二人の宰相が執政し、元祐の党人たちをことごとく登用し、召し出されなかつた者も、大きな州府の長官となりました。ただ東坡兄弟だけは、なおも祠祿を与えられていました。この句はおそらく、召し出されていない者が二人いることを暗に言っているものであり、意味深長でありながら言葉遣いは緩やかで、とりわけ憶測が容易ではありません。『車中 布有らんか』のようなものに至っては、当時の為政者（曾布）を指しているのであり、卑近でわかりやすい例です。『白首 下吏に沈み、緑衣 公言有り』というのは、「蘇軾の」愛妾の朝雲がある時、黄師是（蘇軾の友人）がなかなか出世できないことを嘆いたことによるもので、それでこの句は、戯れにその僭越であることを言うのです。とすれば、事情に詳しい古老に話を聞くのでなければ、ほとんど知ることが

- ① 蘇軾の七律「六年正月二十日、復出東門、仍用前韻」の頷聯。『蘇軾詩集』卷二十一。
- ② 蘇軾の五古「余昔過嶺而南、題詩龍泉鐘上、今復過而北次前韻」の二句。『蘇軾詩集』卷四十五。
- ③ 李商隱の七律「贈劉司戶蕢」（『全唐詩』卷五三九）尾聯：「万里相逢歎復泣、鳳巢西隔九重門。」
- ④ 蘇軾の七絶「董卓」に「只言天下無健者、豈信車中有布乎」とある。『蘇軾詩集』卷十一。
- ⑤ 蘇軾の五古「送黄師是赴兩浙憲」の二句。『蘇軾詩集』卷三十六。

できません。すべての詩句をこんな風に解釈できてはじめて、不満の残らないものに仕上げることができるでしょう。」范至能も、ため息をついて言った。「だとすれば、何と大変なことだろうか。」

陸游はみずからの学識を傾け、范成大の理解の浅さをたしなめている。まさしく『宋史』に「文字を以て交わり、礼法に拘わらず」と記された通りの姿が、ここに活写されている。こうした文学談義は、成都時代には決して珍しくなかったことであろう。

蘇軾は北宋時代には「元祐の姦党」として弾圧され、その詩文集は禁制品の扱いを受けていたが、南宋になると状況は一変する。皇帝である高宗自身が蘇軾の愛好者であったため、その詩を学ぶことが盛んになり、特に蘇軾の出身地の蜀において、その風潮は顕著であった<sup>①</sup>。もしかすると范成日は、幕府を離れて暇を持て余している陸游に、何か時宜にかなった課題を与えようとして、蘇軾の詩に注をつける話を持ち出したのかも知れない。陸游は最後に、自分は范成大の期待に応えることはできなかったが、こうして施元之のために序文を執筆することができて幸せだと記し、序文を結んでいる<sup>②</sup>。

開禧元年（一二〇五）春、陸游は五古「雜感五首 以不愛入州府為韻」〔雜感五首 「州府に入るを愛せず」を以て韻と為す〕（劍南六一）を書き、自分の人生を振り返っている。時に八十一歳。「府」を韻字とする其五には、成都に於ける自分と范成大の関係を、杜甫と嚴武の関係にたとえる詩句が見える<sup>③</sup>。

我年甫三十	我年甫かに三十
出身事明主	身を出だして 明主に事う
狂愚斥不用	狂愚にして斥けられて用いられず
晚辟征西府	晩に 征西の府に辟さる
蹭蹬過錦城	蹭蹬 錦城を過ぎ

① 蜀における東坡熱について、『老学庵筆記』卷八に次のようにある。：「建炎以来、尚蘇氏文章、学者翕然從之、而蜀士尤盛。亦有語曰、『蘇文熟、喫羊肉。蘇文生、喫菜羹。』」内山精也『蘇軾詩研究 宋代士大夫詩人の構造』（研文出版、二〇一〇）第七章『東坡烏台詩案』流伝考」（四）「北宋末く南宋初の蘇軾文藝愛好熱」参照。

② 陸游「施司諫注東坡詩序」：「後二十五年、某告老居山陰沢中、吳興施宿武子出其先人司諫公所注數十大編、属某作序。司諫公以絶識博学名天下、且用工深、歴歳久、又助之以顧君景蕃之該洽、則于東坡之意、蓋幾可以無憾矣。某雖不能如至能所託、而得序斯文、豈非幸哉。嘉泰二年正月五日、山陰老民陸某序。」もつとも錢鍾書氏は、陸游による蘇軾詩注ができなかったことは、李白と杜甫が再会して文を論じることがなかったことと同様、非常に残念であると述べている。『宋詩選注』蘇軾解説：「最可惜的是陸游没有肯替蘇軾的詩集作註、這跟杜甫和李白的『樽酒細論文』没有記錄一樣、是文学史上的大憾事。」

③ 陸游と杜甫の関係については、一海知義「放翁と杜甫」および前野直彬「陸游の目に映じた杜甫」参照。いずれも京都大学『中国文学報』第十七冊（一九六二）所収。

邂逅客嚴武 <sup>①</sup>	邂逅 <sup>かいこう</sup> 嚴武 <sup>げんぶ</sup> に客たり
十年醉郵筒 <sup>②</sup>	十年 <sup>じゅうねん</sup> 郵筒 <sup>ゆうとう</sup> に酔い
陽狂頗自許	陽狂 <sup>ようきやう</sup> 頗 <sup>すこぶ</sup> る自ら許す
青城訪隱翁	青城 <sup>せいじやう</sup> に隱翁 <sup>いんおう</sup> を訪ね
西市買幽圃	西市 <sup>せいし</sup> に幽圃 <sup>ゆうほ</sup> を買う
如何復不遂	如何 <sup>いかん</sup> ぞ 復 <sup>また</sup> た遂 <sup>ま</sup> げず
帰聴鏡湖雨	歸 <sup>き</sup> りて聴 <sup>き</sup> く 鏡湖 <sup>きやうこ</sup> の雨
結廬三間茅	廬 <sup>いおり</sup> を結 <sup>むす</sup> ぶ 三間 <sup>さんかん</sup> の茅
泛宅一枝鱗	宅 <sup>うち</sup> を泛 <sup>う</sup> かぶ 一枝 <sup>いちし</sup> の鱗 <sup>うろこ</sup>
天真儻可全	天真 <sup>まこと</sup> 儻 <sup>も</sup> し全 <sup>まこと</sup> うす可 <sup>べ</sup> くんば
吾其老煙浦	吾 <sup>われ</sup> は其 <sup>えん</sup> れ煙浦 <sup>えんほ</sup> に老いん

私は年齢わずか三十歳で、

出仕して明主（孝宗）にお仕えする身となった。

しかし分別がなく愚かなため、しりぞけられて用いられず、  
時が経ってから「王炎の」征西幕府に招かれた。

（ところが王炎の幕府は解散し、）困り果てて錦城（成都）にたどり着き、

嚴武殿（范成大）にめぐり会い、その客分となった。

十年の間、竹の筒に仕込んだ酒に酔いしれ、

陽狂の生活態度を、大いにみずからに許したものだ。

青城山（四川にある道教の聖地）に隱者の老翁を訪問したり、

成都の町の西に静かな田地を買ったりもした。

それがどうしたことだ、結局思いを果たせず、

故郷に帰り、鏡湖に降る雨の音を聴いているとは。

三間の茅屋は、わが埴生の宿。

一艘の小舟は、水に浮かべた家。

もし天寿を全うすることができるならば、

私はこの煙たなびく水辺の村で年老いることにしよう。

このように、最晩年になっても陸游は成都に於ける范成大との交流を回想している。「陽

① 『新唐書』「杜甫伝」：「流落劍南、結廬成都西郭。…会嚴武節度劍南東西川、往依焉。武再帥劍南、表為參謀檢校工部員外郎。武以世旧、待甫甚善、親入其家。甫見之、或時不巾。而性褻傲誕、嘗醉登武妝、瞪視曰、『嚴挺之乃有此兒。』武亦暴猛、外若不為忤、中衡之。」とは言うものの、杜甫と嚴武はやはり相当親密な関係にあったことは否定できない。小川環樹編『唐代の詩人―その傳記』二三九頁、注二一参照。：「杜工部集中には、杜甫が嚴武に贈った詩、嚴武を追憶した詩が三十一首もある。二人の交友がはなはだ親密であったことを察するに足りよう。」なお嚴武の詩は『全唐詩』卷二六一に六首が収録されている。

② 「郵筒酒」は、四川省郵県に産する酒。清・袁枚著、青木正児訳注『隨園食單』（岩波書店、一九八〇）二四一頁参照。

狂 頗る自ら許す」<sup>①</sup>の一句は、「燕飲頽放」と指弾されたことと重なるであろう。

なお、慶元三年（一一九七）には妻の王氏が、慶元六年（一二〇〇）には朱熹が<sup>②</sup>、嘉泰四年（一二〇四）には周必大が、開禧二年（一二〇六）には楊万里が、それぞれ世を去っている。晩年を迎え、肉親や親しい友人たちが世を去る中で、范成大の思い出は、より一層鮮明に陸游の心に蘇って来たのであろうか。

## 結 び

以上、成都を離れた後の陸游と范成大の人生の軌跡について記した。

この時期は言わば成都時代の余韻であり、特に新しい展開は見られない。成都を離れた後、陸游と范成大は二度と会うことはなく、作品の応酬も少なくなる。陸游と范成大の蜜月は、成都時代に尽きている、と言えるかも知れない。

二人の交流が再開される可能性があったとすれば、范成大が建康留守に赴任した淳熙八年であるが、この時は、范成大は陸游を招かなかつた。范成大は生来病弱で隱逸志向が強い上に、建康は主戦論者が遷都を主張するような土地であるから、そこに陸游のような過激な主張を振りかざす人物を招くことには、危惧を感じざるを得なかつたのであろう。それに何より、当時の陸游は朝廷から追放され、故郷で謹慎中の身であるから、范成大の対応は致し方ないことと思われる。

建康を離任した後の范成大は、基本的に故郷での静養の生活に入り、徐々に政治の世界から遠ざかって行く。それと共に、老いてなお主戦の信念を曲げない陸游とは、距離ができて行ったと考えられる。特に、淳熙の末に陸游が再び弾劾されて失脚してからは、二人の間に決定的な距離ができてしまったように思われる。朝廷から目の敵にされている陸游は一種の「危険人物」、控えめに言っても「要注意人物」であり、そのような相手とかかわることで穏やかな老後を犠牲にしたくはない、と范成大が考えたとしても、彼を責めることはできないであろう。

それでも、二人の間の連絡が完全に途絶えていたわけではなさそうである。疎遠になりつつも、二人が折りに触れては相手を思っていた形跡が、それぞれの作品から確認できる。特に、范成大の最晩年に至って、二人の友情は再び蘇り、最後の花を咲かせたかに見える。范成大が世を去る前年、陸游は大規模な七律の連作を書き、また范成大の『攬轡録』に託して感慨をうたっている。范成大の没後には、三年続けて追悼もしくは追憶の詩を書き、最晩年になっても、成都での范成大との思い出を記している。本当の友情と信頼がなければ、あり得ないことであろう。

陸游にとって范成大は、終生忘れ難い知己だったのである。

① 陸游の「狂」（ある種の逸脱）については、西岡淳『劔南詩稿』における詩人像―「狂」の詩人陸放翁―（京都大学『中国文学報』第四十冊、一九八九）参照。

② 儒学者の朱熹もまた、陸游の詩の良き理解者であった。佐藤仁「朱熹と陸游」参照。同論文は村上哲見・浅見洋二『蘇軾・陸游』（角川書店、一九八九）所収。

## 第四章 陸游・范成大と楊万里の交流<sup>①</sup>

楊万里<sup>ようばんり</sup>、字は廷秀<sup>ていしゅう</sup>。号は誠齋<sup>せいさい</sup>。吉州吉水<sup>きつしゅうきつすい</sup>〔江西省吉安〕の人。陸游・范成大らと共に南宋の「中興四大詩人」に数えられ、自由闊達な「誠齋体<sup>せいさいたい</sup>」の詩で知られる。范成大より一歳年下の楊万里は、単に軽妙洒脱な作風の詩人であるのみならず、「正心誠意」を座右の銘とする、謹厳な儒者でもあった<sup>②</sup>。

范成大と楊万里は、紹興二十四年の科挙で共に進士合格を果たした「同年」の間柄であり、難関を突破した者同士としての強い連帯感で結ばれていた。個人的な相性もさることながら、そうした前提が、安定した交際に社会的な保証を与えていたと考えられる。

ただし、范成大と楊万里の詩歌の応酬が、その時点からただちに始まるわけではない。進士合格の後、二人はそれぞれに任地を移動する生活を送り、なかなか接触の機会を持つことがなかった<sup>③</sup>。また楊万里は自己批判の結果、紹興三十二年（一一六二）以前（三十六歳以前）の詩を、すべて破棄してしまった。楊万里の第一詩集『江湖集<sup>こうこしゅう</sup>』は、作者三十六歳から五十歳までの詩を収録するが<sup>④</sup>、その中には、范成大との応酬から生まれた詩は確認できない<sup>⑤</sup>。范成大の方は比較的若い時期の作品を残しているが、やはり淳熙五年以前の楊万里との応酬の詩は確認できない。

范成大と楊万里の詩歌の応酬は淳熙五年から始まり、中断はあるものの、范成大が世を去る前年の紹興三年まで続く。一方、陸游と楊万里の詩歌の応酬は、淳熙十三年から始まり、陸游が失脚する淳熙十六年で一段落する。本章では、范成大と楊万里の応酬が始まる淳熙五年から、楊万里が范成大のために詩文全集の序文を書く紹熙五年までの、陸游・范成大と楊万里の交流について記す。三者三様の人生の軌跡をたどることで、第一章から第三章までに記した陸游と范成大的交流も、より立体的に浮かび上がって来るのではないかと思われる。なお、若干の記述は第三章と重複することを、あらかじめ断っておく。また

① 本章は、拙稿「淳熙五年の陸游・范成大・楊万里」（愛知大学文学会『文学論叢』第一一八輯、一九九九）「范成大と楊万里の詩歌の応酬」（同上第一二〇輯、一九九九）および「陸游と楊万里の詩歌の応酬（上）」（同上第一二二輯、二〇〇〇）を基礎とする。

② 『宋史』「楊万里伝」：「楊万里字廷秀、吉州吉水人。中紹興二十四年進士第。為贛州司戸、調永州零陵丞。時張浚謫永、杜門謝客。万里三往不得見、以書力請始見之。浚勉以正心誠意之学、万里服其教終身、乃名讀書之室曰誠齋。」

③ 進士合格の翌年紹興二十五年、楊万里は贛州司戸となる。紹興二十七年、贛州の任期が満了し、吉州に帰る。紹興二十九年、永州零陵の丞となる。隆興元年秋、零陵を離任し、臨安に赴く。隆興二年、父が世を去り、帰郷して服喪する。：乾道六年、国士博士に任命される。乾道七年、太常博士に遷る。：乾道九年、将作少監に任命される。淳熙二年、常州知事に任命され、淳熙四年、同地に赴任する。

④ 吉川幸次郎『宋詩概説』第五章第三節「楊万里 朱熹 その他」参照。また楊万里の各詩集の特色については、西岡淳「楊誠齋の詩」（京都大学『中国文学報』第四十二冊、一九九〇）参照。

⑤ 楊万里は、乾道六年（一一七〇）の国子博士任命と、翌年の太常博士任命の際、当背中書舎人だった范成大にあてて「国子博士告詞」「太常博士告詞」（誠齋一三三）を書いていく。しかしこれらは公的な文書であり、私的な交友の記録と同一視することはできない。于北山『范成大年譜』乾道六年注（一一五）（一四八頁）および乾道七年注（一五）（一五二頁）参照。

ここでは、范成大と楊万里を結ぶ存在として、詞人の姜夔（一一五五～一二〇九）についても簡単に記すことにしたい<sup>①</sup>。

○ 淳熙五年（一一七八） 陸游五十四歳 范成大五十三歳 楊万里五十二歳

前年の淳熙四年（一一七七）夏、楊万里は知事として常州（江蘇省）に赴任する。楊万里の常州時代の詩をまとめたのが、第二詩集『荆溪集』である。

淳熙五年、楊万里は詩歌創作の上である種の「悟り」を開き、「誠齋体」の確立へ一歩を踏み出す<sup>②</sup>。

四月、范成大は参知政事に就任する。この際、楊万里は范成大到「賀范至能参政啓」〔范至能参政を賀する啓〕（誠齋五二）<sup>③</sup>を書き送る。この中で楊万里は、范成大は歴代の参知政事の中でも数少ない方正な人物であるとして、その活躍に期待を寄せている<sup>④</sup>。

六月、范成大は参知政事を辞任し、故郷に帰る。楊万里の落胆は大きかったであろう。

冬至の日<sup>⑤</sup>（十一月）、平江の范成大は、常州の楊万里に七絶「冬至晚起、枕上有懷晋陵楊使君〔冬至の晩に起き、枕上にて晋陵の楊使君を懷う有り〕」二首（石湖二〇）を書き送る。「晋陵」は常州の別名である。

楊万里はこれに次韻し、范成大到七絶「和范至能参政寄二絶句〔范至能参政の二絶句を寄するに和す〕」二首（誠齋一一）を書き送る。楊万里の和作の其二を示す。

夢中相見慰相思	夢中に相い見て	相思を慰さむ
玉立長身漆点髭	玉立せる長身	漆点の髭
不遣紫宸朝補袞	紫宸に	朝 袞を補わしめず
却教雪屋夜哦詩	却つて	雪屋に 夜 詩を哦らしめんとは

夢の中であなたにお会いし、自分の気持ちを慰めています。

すつくとそびえ立つ玉のようなお体、漆のような黒い髭。

あなたほどの方に朝の宮廷で政治の過失を補うことをさせず、

それどころか雪の積もる屋根の下で夜に詩をうならせているとは。

① 姜夔およびその作品については、曉風殘月會『姜白石詩訳注稿（二）』（七）参照。佛敎大学『中国文化研究』第七号（第十三号所収（二〇〇七～二〇一三））。なお姜夔の生卒年は、同訳注稿による。

② 楊万里「誠齋荆溪集自序」（誠齋八〇）：「予之詩、始学江西諸君子、既又学後山五字律、既又学半山老人七字絶句、晚乃学絶句于唐人。学之愈力、作之愈寡。其夏之官荆溪：是日即作詩、忽若有寤。於是辞謝唐人、及王陳江西諸君子、皆不敢学、而後欣如也。自此每過午、吏散庭空、即携一便面、步後園、登古城、採擷杞菊、攀翻花竹、万象畢来、献予詩材。」拙稿「淳熙五年の陸游・范成大・楊万里」参照。

③ 以下、楊万里の詩文の引用は、すべて辛更儒『楊万里集箋校』（中華書局、二〇〇七）による。ただし表記は原則として新字体とした。

④ 楊万里「賀范至能参政啓」：「自初元以至於今日、知政幾二十人、求天下之所謂正臣、如公纔一二輩。」

⑤ 宋人にとって、冬至は元旦にも増して重要な節日であった。孟元老著、入谷義高・梅原郁訳注『東京夢華録 宋代の都市と生活』（平凡社、一九九六）卷十参照（三一七頁）。



楊万里は、范成大ほどの人物が皇帝を輔佐する立場におらず、故郷で詩を作っていることを嘆いている。これが、范成大と楊万里の詩歌応酬の始まりである<sup>①</sup>。

○ 淳熙六年（一一七九） 陸游五十五歳 范成大五十四歳 楊万里五十三歳

正月、楊万里は常州の任期が満了し、新たに提举広東常平茶塩に任命される。

三月、楊万里は常州を離任する。しかしすぐには広州〔広東省〕に赴任せず、ひとまず吉州に帰り、待機する。帰郷の道中および待機中の詩をまとめたのが、第三詩集『西帰集』である。

帰郷の途中、楊万里は平江に立ち寄る<sup>②</sup>。范成大はこれを迎え、共に石湖に遊ぶ。その際、楊万里は五律「従范至能参政遊石湖精舍坐間走筆〔范至能参政の石湖精舍に遊ぶに從い、坐間にて筆を走らす〕」二首（誠齋二三）を書く。

范成大はこれに次韻し、五律「次韻同年楊使君回自毘陵同泛石湖、舟中見贈〔同年楊使君の毘陵より回りに石湖に泛かび、舟中にて贈らるるに次韻す〕」（石湖二〇）三首を書く。「毘陵」は常州の別名である。

○ 淳熙七年（一一八〇） 陸游五十六歳 范成大五十五歳 楊万里五十四歳

正月、楊万里は吉州を出発して南下し、春の終わり頃、広州に着任する。楊万里の広東時代の詩をまとめたのが、第四詩集『南海集』である。

二月、范成大は知明州知事兼沿海制置使に任命される。

この年、楊万里は、明州の范成大に范成大との唱和で巻頭を飾った「西征近詩」（范成大的表現による）を贈呈する。これは、おそらく現在の『西帰集』に相当するものである<sup>③</sup>。范成大はこれに對し、七絶「楊少監寄西征近詩來、因賦二絶為謝。詩卷第一首乃石湖作別時倡和也〔楊少監西征の近詩を寄せ來たり、因りて二絶を賦して謝と為す。詩卷の第一首

① この他、淳熙五年冬から翌淳熙六年春にかけて、楊万里は范成大にあてて七律「寄題石湖先生范至能参政石湖精舍〔石湖先生范至能参政の石湖精舍に寄せ題す〕」（誠齋一一）二首を書き、范成大はこれに次韻して「次韻同年楊廷秀使君寄題石湖〔同年楊廷秀使君の石湖に寄せ題すに次韻す〕」二首（石湖二〇）を書いている。

② 楊万里「誠齋西帰詩集序」（誠齋八〇）：「予假守毗陵、更未及三月、移官広東常平使者。既上二千石印綬、西帰過姑蘇、謁石湖先生范公。公首索予詩、予謝曰、『詩在山林而人在城市、是二者常巧於相違、而喜於不相値。某雖有所謂荆溪集者、竊自薄陋、不敢為公出也。』既還舍、計在道及待次凡一年、得詩僅二百首、録以寄公。……淳熙丁未六月十五日、誠齋野客楊万里序。」なお、楊万里が平江に立ち寄った時期を、于北山『范成大年譜』は淳熙七年とし、于北山著・于蘊生整理『楊万里年譜』（上海古籍出版社、二〇〇六）は淳熙六年とする。ここでは後者に従う。

③ 范成大の言う「石湖作別時倡和」が、具体的にどの詩をさすかは不明である。現在の『西帰集』の冒頭に置かれているのは、楊万里が常州を離れる時の感慨をうたった七絶「初離常州、夜宿小井、清曉放船」（誠齋二三）三首であり、石湖での送別の作ではない。范成大の言う「西征近詩」は、現在の『西帰集』とは異なる内容・体裁のものであった可能性が考えられる。

は乃ち石湖にて別れを作せし時の倡しょうわ和なり」(石湖二二)二首を書き、謝意を表している。「少監」は將作少監(従六品)のことで、楊万里の臨安時代の官名である。

この詩を受け取った広州の楊万里は、范成大に次韻し、七絶「遣騎問訊范明州参政、報章寄二絶句、和韻謝之」(騎をして范明州参政に問訊せしむるに、報章として二絶句を寄す。韻に和し之に謝す)」(誠齋一六)を書き送る。「報章」は返札の書簡のこと。

○ 淳熙八年(一一八二) 陸游五十七歳 范成大五十六歳 楊万里五十五歳

二月、広州の楊万里は、広東提点刑獄(ていけんけいご)に任命される。

三月、范成大は知建康府兼行宮留守に任命され、建康に赴任する。赴任に先立ち、孝宗は范成大のために特別に慰勞の宴を催し、親筆の「石湖」の二字を范成大に賜る。楊万里はこのことを記念し、二十八句から成る七古「聖筆石湖大字歌」(聖筆石湖大字の歌) (誠齋一八) を書く<sup>①</sup>。

四月、范成大は建康に着任する。

広州の楊万里は、建康の范成大に七律「寄賀建康留守范参政端明」(建康留守范参政端明に寄せ賀す) (誠齋一六) 二首を書き送る。この詩の中で楊万里は、范成大がいずれ臨安の朝廷に復帰して活躍することを期待している<sup>②</sup>。

○ 淳熙九年(一一八三) 陸游五十八歳 范成大五十七歳 楊万里五十六歳

この年、建康の范成大は、前年楊万里から送られた詩に次韻し、七律「次韻楊同年秘監見寄二首」(楊同年秘監の寄せらるるに次韻す) 二首(石湖二二) を書き送る。范成大は楊万里に答え、再び朝廷に立つ意志のないことを示唆している<sup>③</sup>。

五月、楊万里の継母が世を去る<sup>④</sup>。楊万里は直秘閣(ちくひかく)に任命されるが、継母の喪に服するため着任せず、広東を離任する。

七月、楊万里は吉州に帰る。この時点で、淳熙五年以来の范成大と楊万里の交際は一段落する。楊万里は、服喪中は詩を書いていない。

○ 淳熙十年(一一八三) 陸游五十九歳 范成大五十八歳 楊万里五十七歳

① 楊万里「石湖大字歌」序：「淳熙聖人錫宴臨遣端明殿学士参政臣范成大居守金陵、觴次肆筆作『石湖』二大字賜之、以寵其行。臣成大刻石、以碑本分賜小臣楊万里、敢拜手稽首、敬賦長句。」

② 楊万里「寄賀建康留守范参政端明」其一：「臥護北門期月爾、却專堂印鳳凰池。」

③ 范成大「次韻楊同年秘監見寄二首」其一：「自古朱絃清廟具、莫貪鵬海看天池。」詩の解釈は、周汝昌『范成大詩選』および顧志興『范成大詩歌賞析集』(巴蜀書社、一九九一)参照。また于北山『范成大年譜』淳熙八年注(一〇)：「彼時交通不便、詩筒自粵抵寧、往返之間、蓋非半年以上不可、故石湖詩、已次明年『元日』詩之後矣。」(三一―二頁)。このように于北山氏は、当時の交通では、広州から建康までは書簡の往復に半年はかかるとし、次韻の詩は翌年の正月以降に書かれているだろうと推測している。

④ 楊万里「祭十三叔母文」(誠齋一〇二)：「某幼而无母、壮而喪父、老而哭繼母。營營余生、未即死者、有叔父而猶父、叔母而猶母也。」継母とは言うものの、楊万里は幼い頃に実母を亡くしているので、実母のように大切な存在であった。

八月三十日、范成大は建康を離任し、祠禄を領して平江に帰る。

○ 淳熙十一年（一一八四） 陸游六十歳 范成大五十九歳 楊万里五十八歳

十月、楊万里は継母の喪が明け、吏部員外郎に任命され、臨安に赴任する。楊万里の臨安時代の詩をまとめたのが、第五詩集『朝天集』である。

○ 淳熙十二年（一一八五） 陸游六十一歳 范成大六十歳 楊万里五十九歳

五月、楊万里は吏部郎中に任命される。

○ 淳熙十三年（一一八六） 陸游六十二歳 范成大六十一歳 楊万里六十歳

春、陸游は権知嚴州事任命の挨拶のため、数年ぶりに臨安を訪れ、孝宗に拝謁する。この時、陸游と楊万里は臨安で対面する。陸游は、楊万里に五律「簡楊廷秀（楊廷秀に簡す）」（劍南一七）を書き送る。楊万里はこれに次韻し、五律「和陸務観惠五言（陸務観の五言を恵まるるに和す）」（誠齋一九）を書く。この他、同じ時に楊万里から陸游へ贈られた詩として、次のものがある①。

詩題	卷数	形式
雲龍歌調陸務観	誠齋一九	雜古
再和雲竜歌 留陸務観西湖小集且督戰云	誠齋一九	雜古
上巳日、予与沈虞卿尤延之莫仲謙招陸務観沈子寿小集張氏北園賞海棠。務観持酒酌花。予走筆賦長句	誠齋一九	七古
再和	誠齋一九	七古
醉臥海棠園歌 贈陸務観	誠齋一九	雜古
寒食雨中同舍人約遊天竺得十六絶句、呈陸務観（十六首）	誠齋二〇	七絶

これらの中から最も代表的なものとして、次に雑古「雲龍歌調陸務観（雲龍の歌 陸務観を調る）」（誠齋一九）の冒頭を示す②。

墨池揚子雲  
 雲間陸士龍  
 天憎二子巧言語  
 只遣相別無相逢

墨池の揚子雲  
 雲間の陸士龍  
 天 二子の言語に巧みなるを憎み  
 只だ相い別れしめて相い逢わしむること無し

① 拙稿『陸游と楊万里の詩歌の応酬（上）』参照。

② 周汝昌『楊万里選集』（中華書局、一九六二）一三五頁、章楚藩『楊万里詩歌賞析集』（巴蜀書社、一九九四）一三九頁参照。

長安市上忽再值	長安市上 忽ち再び値う <small>たちま あ</small>
向來一別三千載	向來 一別 三千載 <small>きょうらい</small>
王母桃花落幾番	王母の桃花 落つること幾番
北斗柄爛銀河乾	北斗の柄は爛れ 銀河は乾く
双鬢成糸糸似雪	双鬢 糸と成り 糸は雪に似たり <small>さうびん</small>
兩翁對面面如丹	兩翁 對面すれば 一面は丹の如し <small>りょうおう</small>

この私（楊万里）は、墨池の揚子雲（揚雄）。

あなた（陸游）は、雲間の陸士龍（陸雲）。

天は、私たち二人が言葉を巧みに操ることを憎み、

ただお互いに別れさせておくばかりで、互いに会わせることがありませんでした。

それがどうしたことか、長安の町中で突然再びお会いしましたね。

ひとたびお別れしてから、もう三千年が過ぎました。

西王母の桃の花は、何度散り落ちたことでしょうか。

北斗の柄はただれ、銀河は乾いてしまいましたね。

兩方の鬢の毛は糸のようになり、糸は雪のように真っ白。

それでも二人の老翁が對面すれば、顔は朱のように真っ赤（血色が良い）なのです。

楊万里は、仙人の對面になぞらえて、陸游との出会いを喜んでいる<sup>①</sup>。

この年、楊万里は、陸游に七律「跋陸務觀劍南詩稿〔陸務觀の『劍南詩稿』に跋す〕二首」〔誠齋二〇〕および七絶「簡陸務觀使君編修二首〔陸務觀使君編修に簡す二首〕」〔誠齋二二〕を書き送っている<sup>②</sup>。

○淳熙十四年（一一八七） 陸游六十三歳 范成大六十二歳 楊万里六十一歳

十月、楊万里は秘書少監（従五品）に転任する。

冬、臨安の楊万里は、陸游に『南海集』を贈呈する<sup>③</sup>。陸游はこれに対し、七絶「楊廷秀寄南海集〔楊廷秀『南海集』を寄す〕」（劍南一九）二首を楊万里に書き送っている。

① 劉斯翰『楊万里詩選』（香港三聯書店、一九九一）は、「淳熙十三年春、詩人（楊万里 筆者注）与陸游重逢於京城臨安、其時距兩人初次見面的隆興元年近二十三載」と記し、陸游と楊万里が隆興の頃にすでに出会っているとす。しかし、隆興元年夏に陸游は臨安を離れ、同年秋に楊万里は入れ違いで臨安に入っているから、会うことはできなかったはずである。まさしく楊万里の言う「只遣相別無相逢」である。おそらく劉氏は、詩の中で二人の邂逅を仙人の再会にたとえていることを、二人の再会と誤解したのではないかと思われる。拙稿「陸游と楊万里の詩歌の応酬（上）」では筆者自身よく吟味せずに劉氏説を踏襲したので、ここに訂正する。

② 「跋陸務觀劍南詩稿二首」其二は、周汝昌『楊万里選集』一三九頁参照。なお陸游が嚴州で『劍南詩稿』を刊行するのは翌年淳熙十四年のことだから、その前年に「跋『劍南詩稿』」と題する詩が書かれるのは不自然に思われる。しかし、于北山『楊万里年譜』、周汝昌『楊万里選集』、薛瑞生『誠齋詩集箋証』（三秦出版社、二〇一一）のいずれも、この詩を淳熙十三年の作とする。ひとまずこれらに従う。

③ 楊万里は、おそらく范成大にも同じ詩集を贈呈したであろうが、范成大的応答は確認できない。

なおこの年、姜夔が楊万里の紹介で石湖の范成大を訪ねている。楊万里は、姜夔のために七古「送姜夔堯章謁石湖先生」〔姜夔堯章の石湖先生に謁するを送る〕（誠齋二四）を書き、これを壮行した<sup>①</sup>。「堯章」は姜夔の字である。

○ 淳熙十五年（一一八八） 陸游六十四歳 范成大六十三歳 楊万里六十二歳

三月、楊万里は「駁配饗不當書」〔配饗の不当なるを駁する書〕（誠齋六二）を建白して孝宗の逆鱗に触れ、筠州〔江西省高安〕の知事に左遷される<sup>②</sup>。

四月、楊万里は臨安を離れ、ひとまず吉州に帰る。帰郷の途中、楊万里は陸游の任地の嚴州に立ち寄り、陸游は嚴光ゆかりの釣台で楊万里を迎えている<sup>③</sup>。

七月、陸游は嚴州の任期が満了し、山陰に帰る。

秋、楊万里は筠州に赴任する。楊万里の筠州時代の詩をまとめたのが、第六詩集『江西道院集』である。

○ 淳熙十六年（一一八九） 陸游六十五歳 范成大六十四歳 楊万里六十三歳

二月、孝宗は退位し、光宗が即位する。

秋、筠州の楊万里は、七律「答陸務観道院仏祖之戲」〔陸務観の道院仏祖の戯れに答う〕（誠齋二八）を書いている。陸游の諧謔に答えたものようであるが、陸游の原詩は現存せず、意味のわかりにくい詩である。解説は今後の課題としたい。

八月、楊万里は筠州から臨安に召還される。

九月、楊万里は臨安に復帰する。楊万里の再度の臨安時代の詩をまとめたのが、第七詩集『朝天統集』である。

十月、楊万里は秘書監（正四品）に任命される。当時臨安にいた陸游は、楊万里の復帰を喜び、五古「喜楊廷秀秘監再入館」〔楊廷秀秘監の再び館に入るを喜ぶ〕（劍南二一）を書く。楊万里はこれに次韻し、「和陸務観見賀帰館之韻」〔陸務観の館に帰るを賀さるるの韻に和す〕（誠齋二七）を書いている。

十一月、陸游は再び弾劾されて失脚し、山陰に帰る。この時点で、淳熙十三年以来の陸游と楊万里の詩歌の応酬は一段落する。

淳熙十六年十二月から翌紹熙元年にかけて、楊万里は煥章閣学士の肩書を借り、接伴

① 姜夔はこれに次韻し、七古「次韻誠齋送僕往見石湖長句」を書いている。曉風殘月會『姜白石詩訳注稿（三）』（佛敎大学『中国文化研究』第九号、二〇〇九）参照。

② 『宋史』「楊万里伝」：「高宗未葬、翰林学士洪邁不俟集議配饗、独以呂頤浩等姓名上、万里上疏詆之、力言張浚当預、且謂邁無異指鹿為馬。孝宗覽疏不悅曰、『万里以朕為何如主。』由是以直秘閣出知筠州。」また同上：「万里為人剛而褊。孝宗始愛其才、以問周必大。必大無善語、由此不見用。」

③ 楊万里『誠齋江西道院集』序（誠齋八一）：「舟經釣台、地主故人陸務観載酒相勞于江亭之上。索誦近詩、因拳『兩度立朝今結局』之句。務観大笑曰、『立朝結局、此事未可料。朝天集真結局矣。』因并書之自笑云。淳熙己酉十月三日、誠齋野客廬陵楊万里序。」なお楊万里の七律「明發南屏」〔誠齋二四〕の頷聯に「兩度立朝今結局、一生行客老還鄉」とある。周汝昌『楊万里選集』一五〇頁参照。

金国賀正旦使（金から正月祝賀の挨拶のために訪れる使者を出迎える役目）として淮河を渡る。北へ向かう道中、楊万里は無錫（江蘇省）を通過する。この時、楊万里は范成大と尤表<sup>②</sup>を思い、七古「五更過無錫県、寄懷范参政尤侍郎（五更に無錫県を過ぎ、范参政・尤侍郎に懐いを寄す）」（誠齋二七）を書く。詩は、二人のどちらにも会えず、慌ただしく任務に急がなければならぬ残念さをうたっている。

范成大はこれに次韻し、七古「同年楊廷秀秘監接伴北道、道中走寄見懷之什、次韻答之」（同年楊廷秀秘監 北道に接伴し、道中にて見懷の什を走り寄せ、次韻して之に答う）」（石湖二九）を書いている。楊万里の広州離任以来途絶えていた范成大と楊万里の詩歌の応酬は、この時点から再開される。

○ 紹熙元年（一一九〇） 陸游六十六歳 范成大六十五歳 楊万里六十四歳

淳熙の末から紹熙の初め頃、陸游は山陰で『老学庵筆記』十巻を書く。巻一には、楊万里の筠州時代の逸話が見える<sup>③</sup>。

冬、楊万里は、陸游に五律「和陸務観用張季長吏部韻寄季長、兼簡老夫補外之行（陸務観の張季長吏部の韻を用いて季長に寄せ、兼ねて老夫の補外の行に簡するに和す）」（誠齋三一）二首を書き送る。これは次韻の詩であるが、これに対応する陸游の原作は現存しない。

十一月、楊万里は直龍図閣、江東軫運副使に任命され、建康に赴任する。楊万里の建康時代の詩をまとめたのが、第八詩集『江東集』である。

十二月、臨安から建康に赴任する途中、楊万里は平江に立ち寄り、范成大を訪問する。淳熙六年の訪問以来、十年ぶりのことである。この時楊万里は、諧謔に富んだ七律「謁范参政、并赴袁起巖郡会。座中熾炭、周圍遂中火毒、得疾垂死。乃悟貴人多病、皆養之太過耳（范参政に謁し、並びに袁起巖の郡会に赴く。座中炭を熾んにし、周圍遂に火毒に中たり、疾を得て死ぬに垂とす。乃ち悟る、貴人の病多きは、皆な之を養うことただ過ぎたるのみと）」（誠齋三二）を書いてる。范成大に会い、一緒に袁説友<sup>④</sup>の会合に出向いたところ、暖を取るために焚かれていた炭のせいで全員が中毒になり、危うく死にかけて。貴人に病気が多いのは、身体を大切に過ぎるせいであることがわかった、というのである。

① この時書かれた七絶「初入淮河四絶句」（誠齋二九）は、楊万里の代表作である。『宋詩選注3』八〇頁および周汝昌『楊万里選集』一七五頁参照。また胡伝志著、高橋幸吉訳「金の使者を送迎した楊万里の詩について」（宋代詩文研究会『橄欖』第十七号、二〇一〇）および内山精也「長淮の意境 南宋篇」（江湖派研究会『江湖派研究』第二輯、二〇一二）参照。

② 臨安時代の楊万里と尤表は大変親しかった。『鶴林玉露』丙編卷六「尤楊雅謔」：「尤梁溪延之、博洽工文、与楊誠齋為金石交。淳熙中、誠齋為秘書監、延之為太常卿、又同為青宮寮寮、無日不相從。」

③ 『老学庵筆記』卷一：「楊廷秀在高安、有小詩云、『近紅暮看失燕支、遠白雷明雪色奇。花不見桃惟見李、一生不曉退之詩。』予語之曰、『此意古人已道、但不如公之詳耳。』廷秀愕然、問古人誰曾道。予曰、『荆公所謂『積李兮縞夜、崇桃兮炫昼』是也。』廷秀大喜曰、『便当増入小序中。』」

④ 袁説友（一一四〇～一二〇四）、字は起巖、号は東塘居士。建安（福建省建甌）の人。孝宗の隆興元年（一一六三）の進士。『東塘集』がある。范成大と楊万里の共通の友人であった。また袁説友は慶元五年（一一九九）に范成大と同じ四川制置使兼知成都府という肩書きで成都に赴任し、『成都文類』五十巻を編集している。甲斐雄一「陸游と四川人士の交流」参照。

○ 紹熙二年（一一九二） 陸游六十七歳 范成大六十六歳 楊万里六十五歳

この年冬、姜夔が再び石湖を訪ねる。姜夔は、梅好きの范成大のために「暗香」「疎影」の詞その他を作る<sup>①</sup>。除夜、石湖を立ち去る際、姜夔は七絶「除夜自石湖帰苕溪（除夜石湖より苕溪に帰る）」十首を書いている<sup>②</sup>。

○ 紹熙三年（一一九三） 陸游六十八歳 范成大六十七歳 楊万里六十六歳

この年、建康の楊万里は、平江の范成大に『江東集』を送り、近作の詩を求める。『江東集』の巻頭の詩は、前述の「和陸務観用張季長吏部韻寄季長、兼簡老夫補外之行」（誠齋三一）二首である。范成大は七律「謝江東漕楊廷秀秘監送江東集并索近詩二首（江東の漕楊廷秀秘監の『江東集』を送り、並びに近詩を索むるに謝す二首）」（石湖三二）を書き、これに謝した。

楊万里は范成大に次韻し、七律「和謝石湖先生寄二詩韻（石湖先生の寄せらるる二詩の韻に和し謝す）」（誠齋三三）二首を書いている。

五月、范成大は太平州の知事に任命され、同地に赴任する。しかし、着任後わずか一箇月で、二番目の娘が十七歳で夭折し、祠禄を願ひ出て帰郷する。楊万里は、范成大の娘のために「范女哀辞」（誠齋四五）を執筆する。

太平州から帰郷した後、范成大は楊万里の作風を模倣し、七絶「枕上二絶效楊廷秀（枕上二絶 楊廷秀に效う）」二首（石湖三三）を書いている。これが、范成大が詩題で楊万里に言及する最後の作である。かつて陸游と別れる際、陸游の作風の模倣を試みていたことが想起される。（↓四一頁）

八月、建康の楊万里は、新しく贛州（江西省）の知事に任命されるが、これを辞退し、吉州に帰る。これ以後、開禧二年（一二〇六）に八十歳で世を去るまで、一貫して故郷で過ごす。退官後の詩をまとめたのが、第九詩集『退休集』である。

○ 紹熙四年（一一九三） 陸游六十九歳 范成大六十八歳 楊万里六十七歳

九月五日、范成大は世を去る。

十二月十三日、范成大の葬儀が行われる。姜夔は范成大を弔問し、范成大追悼の五律「悼

① 姜夔「暗香」「疎影」序：「辛亥之冬、予載雪詣石湖。止既月、授簡索句、且徵新声。作此兩曲、石湖把玩不已、使工妓隸習之、音節諧婉、乃名之曰、『暗香』『疎影』」。保苕佳昭「姜白石における詞」（『江湖派研究』第三輯、二〇一三）参照。

② 曉風殘月會『姜白石詩詠注稿（五）』（佛敎大学『中国言語文化研究』第十一号、二〇一一）および拙稿「姜夔『除夜自石湖帰苕溪』十首浅釈」（愛知大学文学会『文学論叢』第一二四輯、二〇〇一）参照。姜夔自注：「此詩録寄誠齋、得報云、所寄十詩、有裁雲縫霧之妙思、敲金戛玉之奇声。」

石湖〔石湖を悼む〕三首」を書いている<sup>①</sup>。

○ 紹熙五年（一一九四） 陸游七十歳 楊万里六十八歳

春、吉州の楊万里は、山陰の陸游に七律「寄陸務観（陸務観に寄す）」（誠齋三六）を書き送る。この詩の中で楊万里は、陸游に対し「お互い作詩に精進し、朝廷での栄達など求めないようにならう」と呼びかけている<sup>②</sup>。

君居東浙我江西	君は東浙に居り	我は江西
鏡裏新添幾縷糸	鏡裏 新たに添う	幾縷の糸
花落六回疎信息	花 落つること六回	信息 疎らに
月明千里兩相思	月 明るきこと千里	兩つながら相い思ふ
不応李杜翻鯨海	応に李杜のごとく	鯨海を翻すべく
更羨夔龍集鳳池	更に夔龍の鳳池に集うを羨まざるべし	
道是樊川輕薄殺	道うならく是れ	樊川は輕薄なること殺だしと
猶將万戸比千詩 <sup>③</sup>	猶お万戸を將て	千詩に比す

あなたは浙東に住んでおられ、私は江西に住んでおります。

鏡に写るお顔には、幾筋新しく白い糸を添えられたことでしょうか。

お別れしてから花はもう六回も散り落ちましたが、便りが届くのは稀で、

月の光が千里を照らす夜には、二人とも互いを思い合うのです。

私たちは李白や杜甫のように雄大な詩を作るよう努力すべきであって、

夔や龍といった人々が朝廷に集まったことを羨むべきではありません。

杜牧も、ひどく輕薄な男のように言われていますが、

万戸侯（大名）の地位を千首の詩に比べているではありませんか。

陸游は、この詩に特に応答していない。

紹熙五年六月十一日付けで、楊万里は、范成大的詩文全集『石湖大全集』<sup>④</sup>の序文「石湖先生大資参政范公文集序」（誠齋八二）を執筆する。その中で楊万里は、范成大は朝廷の高官であり、自分は一介の貧士であるが、范成大が自分を友人として遇してくれたことに

① 曉風殘月會『姜白石詩詠注稿（四）』（佛敎大學『中國言語文化研究』第十号、二〇一〇）および保苜佳昭「姜白石における詞」参照。

② 『鶴林玉露』甲編卷四「陸放翁」：「晩年為韓平原作南園記、除從官。楊誠齋寄詩云……蓋切磋之也。然南園記唯勉以忠獻之事業、無諛辭。」このように、楊万里のこの詩を、陸游の韓侂胄への接近を戒めるものとする見方があるが、周汝昌氏は、この詩は陸游が韓侂胄のために「南園記」を書く以前に書かれており、一般的な勉勵の詩に過ぎないとして、そうした見方を否定している。周汝昌『楊万里選集』二一八頁参照。：「此詩只是彼此間一般的勉勵、恐与南園事無涉。」

③ 杜牧「登池州九峰樓寄張祜」（『全唐詩』卷五二二）：「誰人得似張公子、千首詩輕万戸侯。」

④ 『全宋文』卷四九七五范成大解說：『石湖集』一百三十六卷、今僅存詩集三十四卷。孔凡礼有『范成大佚著輯存』（中華書局、一九八三年出版）、網羅佚文較多。」



応えたいと記し、また范成大は当代で三四人の中に入るすぐれた詩人であり、自分は詩において決して他人にひけをとる者ではないが、范成大の前でだけは襟を正してかしこまると記している<sup>①</sup>。

## 結び

以上、陸游・范成大と楊万里の交流のあらましを記した。

范成大と楊万里は、淳熙五年の冬から詩歌の応酬が始まる。淳熙九年、楊万里の服喪と広州離任をきっかけに、いったんは途絶えるものの、淳熙十六年冬に再開し、紹熙三年に至る。楊万里は夭逝した范成大の娘のために哀悼の辞を書き、最後は、范成大の委嘱に応じてその詩文全集の序文を執筆している。

陸游と楊万里は、淳熙十三年の出会いから詩歌の応酬が始まる。陸游が嚴州で『劔南詩稿』を刊行した際には、楊万里はそれに寄せて七律二首を書き、また陸游に『南海集』を贈呈している。しかし淳熙十六年に陸游が失脚して帰郷すると、交流は一段落し、紹熙五年にようやく楊万里から久闊を叙する詩が送られている。これ以後も二人の関係は続くが<sup>②</sup>、最終的には韓侂胄の北伐に対する姿勢の違いにより、袂を分かつことになる。

客観的に見るならば、成都を離れた後の范成大にとっては、どうやら陸游よりも楊万里の方が親しい存在であったかのようである。だからと言って筆者は、郭光氏かくこうのように「范成大は内心では陸游を重視していなかった」という見方はしたくない<sup>③</sup>。確かに、成都を離れた後では疎遠になったとは言うものの、陸游と范成大の間には最後まで一定の友誼が保たれていたと考えたい。

それでは、なぜ陸游と范成大は疎遠になったのか。それには、いろいろな理由が複合していると考えられる。次に、陸游と楊万里の違いを箇条書きにしてみよう。

一、范成大と楊万里は、同じ紹興二十四年の科挙で進士に合格した「同年」の間柄である。これに対し、陸游は同じ科挙で秦檜に斥けられ、落第している。個人的な相性もさることながら、共に難関を突破した者のみが持ちうる一種の同志愛が、二人を固く

① 楊万里「石湖先生大資参政范公文集序」：「万里与公、同年進士也。公先進至為朝廷大臣、与天子論道發政、坐廟堂、進退百官。而万里環堵荒寒之士也、何敢与公友。公不我薄陋而辱友之、万里不敢拒公、亦不敢以執政侯公也。…今海内詩人不過三四、而公皆過之無不及者。予於詩、豈敢以千里畏人者、而於公独斂衽焉。」

② 一例として、嘉泰二年（一二〇二）陸游の次男陸子龍が吉州に赴任する際、陸游は五古「送子龍赴吉州掾」（劔南五〇）を書き、その中で周必大と楊万里に言及している。楊万里に対する言及は次の通り。：「又若楊誠齋、清介世莫比。一聞俗人言、三日掃洗耳。汝但問起居、余事勿挂齒。」

③ 郭光『陸游伝』（中州書画社、一九八二）第十一章「浣花歲月」：「当然、范成大沒有殺陸游的意思、但在内心中不重視陸游。如他在逝世前對兒子范莘說、『今四海文字之友、惟江西楊誠齋与吾好。』他自編詩文集百三十卷、認為只有楊誠齋可以給他作序。」（一二一頁）また小川環樹氏も、陸游は政治的に孤立していたのみならず、詩人としても孤立しており、范成大・楊万里・周必大など南宋を代表する詩人・文人との交際は、表面的なものに過ぎなかったという見方をしている。小川環樹「朱東潤『陸游伝』評」参照。同文は『小川環樹著作集』第三卷（筑摩書房、一九九七）所収。

結びつけていたと考えられる<sup>①</sup>。

一、楊万里は、その自由闊達、軽妙洒脱な作風にもかかわらず、礼節を重んじる儒者であり、『宋史』では「儒林伝」に分類されている<sup>②</sup>。当然、同年とは言え自分より地位の高い范成大に対し、礼節をわきまえて接していたと考えられる<sup>③</sup>。これに対し陸游は、『宋史』に「以文字交、不拘礼法」と特筆されているように、身分の差をわきまえず、前掲「題直舍壁」(↓二七頁)に象徴されるように、しばしば上司である范成大に不遜な態度をとることがあったと考えられる。

一、陸游みずから詩にうたうように、成都を離れた後、陸游は淳熙八年と淳熙十六年の二度、朝廷から弾劾を受けている。特に二度目の弾劾と失脚は決定的なもので、これ以後陸游は晩年の二十年を基本的に故郷で過ごす。一方楊万里は紹熙三年に新しい任命を辞退して帰郷し、隠退する。しかしそれは陸游の場合より遥かに円満な移行であり、陸游のように周囲と敵対し、絶縁する生活に入ったわけではない<sup>④</sup>。事実、楊万里は、ほぼ同時に隠退した同郷の周必大と「二老」と称し、周必大の訪問を受けたり、詩を応酬したりしている<sup>⑤</sup>。

一、詩人としての実力も、范成大と楊万里の方が伯仲しており、均衡がとれている<sup>⑥</sup>。これに対し陸游と范成大ではどうしても陸游が勝つてしまい、范成大をしのぎがちであった。陸游自身、自分たちの関係を杜甫と嚴武にたとえている。嚴武は『全唐詩』に詩六首を残しているが、どう考えても杜甫と対等の詩人ではない。すなわち陸游は、范成大を自分と対等の詩人とは見ていなかったことになる。

一、陸游はいわゆる「愛国詩人」であり、その失地回復の主張を折りに触れては詩にうたう。范成大との別れに際して書かれた前掲「送范舍人還朝」(↓四三頁)は、その典型例である。これに対し楊万里は范成大との唱和に於いてそうした主題を持ち出すことはなく、時に諧謔を交えつつも(↓八三頁)おおむね儀礼的・社交的な応酬に終始し、無難な応対にとどめている。

一、ついでながら、年齢的には陸游は范成大の一つ上、楊万里は范成大の一つ下である。

- ① 中国の科挙については、宮崎市定『科挙 中国の試験地獄』(中公新書、一九六三)、『科挙史』(平凡社、一九八七)および村上哲見『科挙の話 試験制度と文人官僚』(講談社、二〇〇〇)その他参照。
- ② 『宋史』卷四三三「儒林三」。参考までに、楊万里の諡は「文節」。
- ③ たとえば楊万里は、七絶「誦元白長慶二集詩」(誠齋一〇)で次のようにうたう。「誦遍元詩与白詩、一生少傳重微之。再三不曉渠何意、半是交情半是私。」このように楊万里は、中唐の元稹と白居易の過度に濃密な交情には否定的であった。この詩は奇しくも淳熙五年、范成大との詩歌の応酬が始まる直前の作品である。
- ④ 陸游「予十年間兩坐斥罪：且作絕句」(劍南二二)其二：「連坐頻年到風月、固応無客叩吾門。」
- ⑤ 『鶴林玉露』「二老退休」乙編卷五：「慶元間、周益公以宰相退休、楊誠齋以秘書監退休、実為吾邦二大老。益公嘗訪誠齋于南溪之上、留詩云：誠齋和云：好事者絵以為図。」なお、退休後の楊万里と周必大の詩歌の応酬は相当な数に上る。それらの検討は今後の課題としたい。
- ⑥ 范成大は「謝江東漕楊廷秀秘監送江東集并索近詩二首」(石湖三二)其一で「遠道悠悠日暮雲、愁眉今日為君軒」とうたい、杜甫の「春日懷李白」(『全唐詩』卷二二四)の詩句「渭北春天樹、江東日暮雲。何時一尊酒、重与細論文」をふまえて、暗に自分たちを李白と杜甫になぞらえている。

以上は必ずしも重要度の高い順ではないが、このように考えてみれば、石湖に隠棲して余生を過ごしている晩年の范成大にとって、どちらがより交際しやすい相手であったか、言うまでもないであろう。それに何より、成都に於ける陸游と范成大の気の置けない交際は、范成大が絶大な権限を握る地方長官の立場にあればこそ実現可能だったのであり、ひとたびそうした場と関係性が失われてしまえば、もはや再現不可能な、例外的時空だったのである<sup>①</sup>。

しかし見方を変えるならば、陸游が周囲からほぼ孤立して晩年の二十年間を過ごしたことは、陸游がその志と才能の高さゆえに支払うことになった代償であるとも言える。この二十年間の創作活動こそが陸游を時代を代表する大家にしたのであり<sup>②</sup>、その代償がなければ、陸游は時代を超えて多くの人々の心に訴えかける作品を残すことはできなかったかも知れない<sup>③</sup>。逆に言えば、范成大と楊万里の応酬は、親しい友人同士の手紙のやりとりにも似て、如才なく書かれているが、当人同士にとってのみ意味を持つ作品が大部分で、陸游と范成大の唱和から生まれた「和范待制秋興」や「送范舍人還朝」のような広く知られる傑作は見当たらないようである。やはり陸游と范成大の組み合わせの方が、関係性が不安定な分だけテンションが高いのである。仮に陸游と范成大の間には対等の友人としての交際が成立しにくい様々な要因があったにせよ、成都時代の交流が陸游を詩人として大きく成長させ、その後の更なる発展へと導いたことは否定できない。陸游と范成大の交流には、やはり重要な意義があったと考えるべきであろう。それなしに詩人「陸放翁」は誕生しなかったのであるから。

- ① 宋代の四川が独自の閉鎖性を有していたことは、甲斐雄一「陸游と四川人士の交流」参照。
- ② 村上哲見『円熟詩人陸游』第八章「鑑湖のほとり」第一節「円熟の詩人」参照（一五五頁以下）。
- ③ 一例として、清末民国初・梁啓超の七絶「詠陸放翁集」其一：「詩界千年靡靡風、兵魂銷尽国魂空。集中什九從軍樂、亘古男儿一放翁。」『宋詩選注3』『陸游解説参照（九四頁）。

## 第一部 今後の課題と目標

最後に、今後の課題と目標について箇条書きの形で記しておくことにしたい。

一、陸游と范成大の応酬から生まれた詩文を整理し、訳注を作成する。この論文では一部の代表的な詩文しか紹介できなかったが、できればすべての作品を網羅的に整理してみたい。特に、今回の論文には盛り込めなかった范成大「丙午新正書懷」と陸游「次韻范参政書懷」は、是非とも全体を丁寧に見直し、訳注を作ってみたい。

二、この論文では陸游と范成大の交流を主題としたため、楊万里には簡単にしか触れることができなかった。陸游と楊万里、范成大と楊万里の詩歌の応酬についても、陸游と范成大の場合同様、作品を整理し、訳注を作ってみたい。また范成大と楊万里の友情についても、より掘り下げて考えてみたい。

三、周必大は陸游・范成大・楊万里に共通の友人であり、それぞれと深くかわっている。陸游と范成大の交流も、周必大の存在を度外視しては考えにくい。次の段階として、是非とも周必大と南宋三大家の交流について考えてみたい。

四、交流の研究からはややはずれるが、派生的な課題として、范成大と楊万里の代表的な作品を選び、小さな詩集をまとめてみたい。日本国内に限って言えば、陸游についてはすでに多くの選集が刊行されているが、管見の限り、范成大や楊万里については、宋詩選集の一部として限られた作品が紹介されることはあっても、まとまった作品選集は、まだ存在していない<sup>①</sup>。仮に百首程度の簡便なものでも、一定の意義はあると思われる。

以上のすべてを實現できるかどうかかわからないが、今後の課題としたい。南宋の詩人・文人たちの交流関係は、筆者のライフワークである。これからも、時間の許す限り研究を続けて行きたい。

① 参考までに、『宋詩選注3』は范成大二十八首、楊万里十五首を収録している。

第二部  
雨の詩人  
陸游

## 序章 陸游以前の主な雨の詩

以下の第二部では、陸游の雨の詩について考察する。

まず、「雨の詩」の範囲を明確にしておきたい。ここで「雨の詩」というのは、一義的には、詩題に明記するか否かにかかわらず、雨を主題とする詩をさす。しかし、それだけでは範囲が狭くなり過ぎるので、たとえ部分的にでも雨がうたわれる詩をも、「雨の詩」に含めることにしたい。また、雨が上がることをうたう詩、雨が降らないことをうたう詩なども、広義の「雨の詩」と言うことができる。この論文では、原則としてここまですべての詩」と考えることにする。したがって、雨を涙などの比喻として用いる詩や、「雨」の字を「降る」という動詞として用いる詩などは、基本的に考察の対象としないが、それらについても、必要に応じ言及する場合がある。

さて、雨は古人人類にとって普遍的な自然現象である。中国の詩歌では、『詩経』以来、雨は数知れない詩人たちによって、様々な形でうたわれ続けて来た。もちろん南宋の陸游も、その系譜に連なる一人と考えることができる。そこで、陸游自身の雨の詩の検討に入る前に、まず陸游以前の雨の詩を概観しておきたいと思う<sup>①</sup>。

### 第一節 先秦から漢代までの主な雨の詩

#### (一) 『詩経』<sup>②</sup>

中国では、最古の詩集である『詩経』に、すでに雨がうたわれている。それらはすでにある程度まとまった分量をなしており、またすでにある程度多様である。一例として、「衛風・伯兮」の一節を示す。

其雨其雨<sup>③</sup> 其れ雨ふれ 其れ雨ふれ  
杲杲出日<sup>④</sup> 杲杲として出づる日あり

雨が降ってほしいのに、降ってくれない嘆きをうたう。また「邶風・東山」には、「零雨」すなわち「零つる雨」という表現が見える。

我来自東 我 東より来たれば

① この序章では、とりあげるべき作者と作品が多いので、詩の和訳は一律に割愛し、訓読も必要最小限にとどめる。作者の生卒年も割愛する。また、時代が後になればなるほど作者と作品が増加するので、なるべく各時代の代表的な作者の作品を中心とする。また、詞にはごく簡単に触れるにとどめる。

② 『詩経』については、吉川幸次郎『詩経国風』上下（岩波書店、一九五八）、高田眞治『詩経』上下（集英社、上巻一九六六、下巻一九六八）、白川静『詩経国風』（平凡社、一九九〇）、同『詩経雅頌1・2』（平凡社、一九九八）その他を参照した。

③ 「其雨」という表現は、「邶風・蟋蟀」にも見える。：「朝濟于西、崇朝其雨。」その他、清・沈徳潜『古詩源』巻一所収「答夫歌」に「其雨淫淫、河大水深」とある。

零雨其濛 其れ濛たり

この他、『詩経』には「風雨」「甘雨」①「陰雨」②などの表現が見える。ただし、『詩経』には雨を主題とする詩は見当たらない。「鄭風・風雨」は、詩題および各節の冒頭に風雨をうたうが、詩の主題は必ずしも風雨ではない③。また「小雅・雨無正」も詩題と内容の関係は不明であり、雨を主題とする詩とは言い難い。ついでながら、「邶風・燕燕」には涙を雨にたとえる表現が見える。

瞻望弗及 瞻望すれども及ばず  
泣涕如雨 泣涕 雨の如し

また、「小雅・采芣」には「今我来思、雨雪霏霏」とあり、「雨」を雪が「降る」という動詞として用いる例が確認できる④。「雨雪」という表現は、その後も踏襲され続ける⑤。このように、『詩経』の段階で、雨の表現にはすでにある程度の多様性が認められる。しかし、それらはまだおおむね原初的な段階にとどまっているようである。

## (二) 『楚辞』⑥

『楚辞』に雨を主題とする作品は確認できないが、部分的には三首の作品に雨がうたわれている。まず「九歌・大司命」には「凍雨」という表現が見える。

令飄風兮先驅 飄風をして先驅せしめ  
使凍雨兮灑塵 凍雨をして塵に灑がしむ

また「九歌・山鬼」にも、雨の表現が見える。

杳冥冥兮羌昼晦 杳かに冥冥として 羌 昼も晦く  
東風飄兮神靈雨 東風 飄り 神靈 雨ふらす

……

- ① 『詩経』「小雅・甫田」：「以御田祖，以祈甘雨。」
- ② 『詩経』「曹風・下泉」：「芄芄黍苗，陰雨膏之。」また「爾風・鷓鴣」：「迨天之未陰雨，徹彼桑土，綢繆牖戶。」
- ③ 『詩経』「鄭風・風雨」：「風雨淒淒，鷄鳴喈喈。既見君子，云胡不夷。／風雨瀟瀟，鷄鳴膠膠。既見君子，云胡不瘳。／風雨如晦，鷄鳴不已。既見君子，云胡不喜。」吉川幸次郎『詩経国風』下：「朱子によればあいびきをたのしむ歌。古注では環境にまけない道徳者をたたえる歌。」（七六頁）この他、「小雅・斯干」に「風雨攸除，鳥鼠攸去」とある。
- ④ この他、「小雅・大田」に「雨我公田，遂及我私」とあるのも動詞の例である。
- ⑤ 一例として、北宋・王令の「餓者行」に「雨雪不止泥路迂，馬倒伏地人下扶」とある。『宋詩選注』三三二頁参照。訳注担当は筆者。
- ⑥ 『楚辞』については、橋本循『楚辞』（岩波書店、一九三五）、藤野岩友『楚辞』（集英社、一九六七）

その他を参照した。

雷填填兮雨冥冥 雷填填として 雨冥冥たり  
猿啾啾兮狢夜鳴 啾啾として 狢夜鳴く

このうち「神靈雨」は動詞の「雨」の例であるが、ここでは「雨を降らせる」の意で用いられている。また「九章・涉江」に次の句がある。

山峻高以蔽日兮 山峻しく高く 以て日を蔽い  
下幽晦以多雨 下幽かに晦く 以て雨多し

このような例はあるものの、『楚辞』全体としては、雨の表現は少ないように思われる。最も代表的な「離騷」には雨の描写はなく、また「天問」にも「天はなぜ雨を降らせるのか」という問いかけはない。宋玉「高唐の賦」に見える楚王と巫山の神女の「雲雨」の故事は有名だが、これはやや特殊な例であろう<sup>①</sup>。

### (三) 漢代<sup>②</sup>

総じて、漢代の楽府および古詩に雨をうたう例は少ない<sup>③</sup>。長篇の「孔雀東南飛」をはじめとして、漢代の代表的な詩歌にはほとんど雨の表現が見当たらず、当然ほとんど新しい発展の形跡が見られない。「短箫铙歌十八曲」のうち「上邪」に「夏雨雪」という表現が見えるが、これは『詩経』以来の動詞としての「雨」である。また「孤兒行」には「孤兒淚下如雨」とあるが、これも『詩経』以来の涙の比喩である。

この他、五古「古詩十九首」<sup>④</sup>では、牽牛織女をうたう其十（迢迢牽牛星）に、涙の比喩としての雨が見える。

終日不成章 終日 章を成さず  
泣涕零如雨 泣涕 零つること雨の如し

「零雨」と「泣涕如雨」を組み合わせて「泣涕零如雨」とした点が新しいと言えるかも知れないが、それ以上のもではない。なお「古詩十九首」に於ける雨は、これが唯一の例である。この他、漢代の『楚辞』系統の作品として「風雨」<sup>⑤</sup>があるが、これも『詩経』と同題である上、必ずしも代表的な作品ではない。

① 宋玉「高唐賦」(『文選』卷十九)：「昔者先王曾遊高唐、怠而昼寢、夢見一婦人曰、『妾巫山之女也、為高唐之客。聞君遊高唐、願薦枕席。』王因幸之。去而辭曰、『妾在巫山之陽、高丘之阻、旦為朝雲、暮為行雨。朝朝暮暮、陽台之下。』」

② 以下、漢代および魏晉南北朝の詩については、遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』(中華書局、一九八三)をはじめ、『文選』『玉台新詠』『樂府詩集』『古詩類苑』『古詩源』その他を参照した。

③ 漢代の樂府詩については、余冠英『樂府詩選』(人民文學出版社、一九五三)を参照した。

④ 『先秦漢魏晉南北朝詩』漢詩卷十二、『文選』卷二十九。

⑤ 『先秦漢魏晉南北朝詩』漢詩卷十一。



## 第二節 魏晋南北朝時代の主な雨の詩

### (一) 魏晋

魏晋南北朝になると、ようやく具体的な名前と個性のある作者が登場し、自覚的に雨の詩が創作されるようになる。<sup>①</sup>明確に雨を主題とする詩も、この時期によく登場する。それに伴い、詩語としての「○雨」という表現も、『詩経』の枠を超え、徐々に多様になって行く。たとえば、「喜雨」「時雨」「苦雨」「霖雨」「微雨」「细雨」「軽雨」「春雨」「秋雨」「朝雨」「夕雨」「夜雨」「行雨」「庭雨」「觀雨」「対雨」などである。<sup>②</sup>魏の三曹のうち<sup>③</sup>、曹操には雨を主題とする詩は確認できない<sup>④</sup>。曹丕の四古「黎陽作三首」<sup>⑤</sup>其二の冒頭には「殷殷其雷、濛濛其雨」とあり、末尾に「蒙塗冒雨、沾衣濡裳」とある。これは、雨中の行軍をうたう詩であろうか。「其雨」という表現は『詩経』を踏襲しているが、題材の上で一定の新しさが認められる<sup>⑥</sup>。曹植には、文学史上特筆すべき雨の詩がある。すなわち「喜雨」<sup>⑦</sup>である。これは、中国の詩に於ける「雨を喜ぶ」という主題の初出である<sup>⑧</sup>。その一節を示す。

慶雲従北来	慶雲	北より来たり
鬱述西南征	鬱述	として西南に征く
時雨中夜降	時雨	中夜 降り
長雷周我庭	長雷	我が庭を周る

この詩には「夜雨」という表現はないが、夜の雨をうたう早い例としても貴重である。

- ① 以下、魏晋南北朝の詩の形式は、特に断りのない場合はすべて五古。
- ② 矢嶋美都子『庾信研究』（明治書院、二〇〇〇）第四章第二節表一「雨と題された詩」参照（一八六～一八七頁）。
- ③ 三曹の詩については、余冠英『三曹詩選』（人民文学出版社、一九五六）、黄節『曹子建詩注』（藝文印書館、一九七五）および伊藤正文『曹植』（岩波書店、一九五八）を参照した。
- ④ 曹操「步出夏門行」序に「雲行雨歩」とあるが、これは『易経』「乾」に見える「雲行雨施」という表現によるものであり、この詩が全体として雨の詩であるわけではない。また「対酒」に「雨沢如此、百穀用成」とあるが、これも全体として雨を主題とする詩ではない。
- ⑤ 『先秦漢魏晋南北朝詩』魏詩卷四。
- ⑥ また同じ連作の其一には、「霖雨」「沐雨」という表現が見える。この他、曹丕の七古「燕歌行」其二に「涕零雨面毀容顔」とあるが、これは涙の形容であり、しかも「雨」は動詞である。
- ⑦ 『先秦漢魏晋南北朝詩』魏詩卷七。黄節『曹子建詩注』卷一。
- ⑧ 矢嶋美都子「豊作を言祝ぐ詩―『喜雨』詩から『喜雪』詩へ―」（『日本中國學會報』第四十九集、一九九七）参照。この曹植の詩を嚆矢として、魏晋南北朝時代には「喜雨」の詩が多く書かれている。南朝では、宋・謝惠連、謝莊、鮑照らの「喜雨」、齊・謝朓の「饗敬亭山廟喜雨」、梁・庾肩吾の「從駕喜雨」があり、北朝では、北齊・魏収の「喜雨」、北周・庾信の「奉和趙王喜雨」「和李司録喜雨」がある。曹植「喜雨」詩について書かれた論考としては、この他矢田博士「曹植『喜雨詩』考―寓意詩としての可能性を中心に―」（愛知大学外国語研究室『外語研紀要』第二十四号、一九九七）がある。

なお曹植の作品の中でも、明確に雨を主題とする詩は、この一例のみである<sup>①</sup>。

建安七子の中では、阮瑀に「苦雨」がある<sup>②</sup>。「苦雨」は「久雨」「愁霖」などとも言い、災害をもたらす長雨のこと<sup>③</sup>。曹植の「喜雨」が同主題の系譜の発端となるように、この詩も「苦雨」の系譜の発端となる<sup>④</sup>。この他、七子の応場には「愁霖の賦」がある。

七子の代表格の王粲には雨を主題とする詩は確認できないが、四古「贈蔡子篤」<sup>⑤</sup>に「風流雲散、一別如雨」とあり、別れの比喻としての雨の詩句が見える。

魏末晋初の竹林七賢の代表である阮籍の「詠懷詩八十二首」には、雨を主題とする詩は確認できない。ただし「雨」の字は二箇所を確認できる。次に其二<sup>⑥</sup>の一節を示す。

膏沐為誰施 膏沐 誰が為にか施さん  
其雨怨朝陽 其れ雨ふれとて朝陽を怨む

「其雨」は、『詩経』以来の表現である。また「詠懷詩」其三十七の冒頭は、「嘉時在今辰、零雨灑塵埃」とうたう。「零雨」も、『詩経』以来の表現である。この他、四言「詠懷詩十三首」にも雨の詩句が見える<sup>⑦</sup>。

竹林七賢のもう一人の代表である嵇康には、雨を主題とする詩は確認できない。

西晋・傅玄の「雨（苦雨）」<sup>⑧</sup>は、阮瑀の系譜に連なる「苦雨」の詩である。その一節を示す。

霖雨如倒井 霖雨 井を倒すが如く  
黄潦起洪波 黄潦 洪波を起こす

また傅玄の「豫章行苦相篇」<sup>⑨</sup>には「垂淚適他郷、忽如雨絶雲」とあり、別れの比喻としての雨が見える。

孫楚の「征西官属送於陟陽候作」<sup>⑩</sup>の冒頭は「晨風飄岐路、零雨被秋草」とうたう。こ

- ① この他、曹植の「泰山梁甫行」の冒頭は「八方各異氣、千里殊風雨」とうたう。また「贈丁儀」に「朝雲不帰山、霖雨成川沢」とあり、「贈白馬王彪」に「霖雨泥我塗、流潦浩縱横」とある。また曹植には四古「時雨謳」がある（『先秦漢魏晋南北朝詩』魏詩卷六）。
- ② 詩題は兪紹初『建安七子集』（中華書局、一九八九）巻五による。『先秦漢魏晋南北朝詩』魏詩卷三には詩題を「詩」とし、「詩紀作苦雨詩」と注記する。
- ③ 『左伝』昭公四年：「春無淒風、秋無苦雨。」杜預注：「霖雨為人所患苦。」
- ④ 他には西晋・傅玄「雨（苦雨）」、傅咸「愁霖」、張協「雜誌」其十など。
- ⑤ 『先秦漢魏晋南北朝詩』魏詩卷二。『文選』卷二十三。
- ⑥ 『先秦漢魏晋南北朝詩』魏詩卷十。『文選』卷二十三。また『玉台新詠』卷二。松本幸男『阮籍の生涯と詠懷詩』（木耳社、一九七七）参照。
- ⑦ 四言「詠懷詩」其四：「零雨降集、飄溢北林。」其十三：「晨風掃塵、朝雨灑路。」陳伯君『阮籍集校注』（上海古籍出版社、一九八七）巻下参照。
- ⑧ 『先秦漢魏晋南北朝詩』晋詩卷一。
- ⑨ 『玉台新詠』卷二。『先秦漢魏晋南北朝詩』卷一は詩題を「苦相篇豫章行」とする。
- ⑩ 『文選』卷二十。鄧仕樑『尚晋詩論』（香港中文大学、一九七二）第七章第五節（二一九頁）。



また、陶淵明の「擬古九首」其三は、内容的には曹植以来の「喜雨」の伝統に連なる詩であると同時に、「春雨」という表現はないものの、春の雨をうたう早い例でもある<sup>①</sup>。

(二) 南北朝

南朝宋・謝靈運の「遊南亭」<sup>②</sup>は、夕方の雨上がりの情景をうたう。その冒頭を示す。

時竟夕澄霽 時 竟わりて 夕べ 澄み霽れ  
雲帰日西馳 雲 帰りて 日 西に馳す

雨が上がることを意味する「霽」の字は<sup>③</sup>、早くは東晋・湛方生の詩に見え<sup>④</sup>、また謝靈運と同時代のその他の詩人たちにも用例があるが<sup>⑤</sup>、表現として際立つのは、やはりこの詩である。この他、南朝宋では謝惠連と謝莊に「喜雨」<sup>⑥</sup>があり、また鮑照には「喜雨奉敕作」および「苦雨」<sup>⑦</sup>がある。

南朝齊の頃から、繊細な詩語が増加する。雨の表現も例外ではない。王儉の「春詩二首」<sup>⑧</sup>其一には、「輕風搖雜蘼、細雨乱叢枝」という表現が見える。これは、詩語としての「細雨」の早い例と考えられる<sup>⑨</sup>。

また謝朓には、雨を「見る」詩がある。次に「觀朝雨」<sup>⑩</sup>の冒頭を示す。

朔風吹飛雨 朔風 吹きて雨を飛ばし  
蕭条江上来 蕭条として 江上より来たる

- ① 『先秦漢魏晉南北朝詩』晋詩卷十七。『陶淵明集校箋(修訂本)』卷四。：「仲春暄時雨、始雷發東隅。衆蟄各潛駭、草木從橫舒。」
- ② 『先秦漢魏晉南北朝詩』宋詩卷二。『文選』卷二十二。小尾郊一『謝靈運―孤独の山水詩人』(汲古書院、一九八三) 一二六頁参照。
- ③ 『文選』卷二十二「遊南亭」注：「『說文』曰、霽、雨止也。」
- ④ 湛方生「遊園詠」：「乘初霽之新景、登北館以悠曠。」「先秦漢魏晉南北朝詩』晋詩卷十五。長谷川滋成『東晋詩訳注』四六九頁参照。
- ⑤ 南朝宋・謝瞻「答康樂秋霽」、顔延之「始安郡還都與張湘州登巴陵城樓作」、謝莊「北宅秘園」、鮑照「秋夜詩二首」其二など。順に『先秦漢魏晉南北朝詩』宋詩卷一、卷五、卷六、卷九。
- ⑥ それぞれ『先秦漢魏晉南北朝詩』宋詩卷四、卷六。
- ⑦ いずれも『先秦漢魏晉南北朝詩』宋詩卷九。また錢仲聯『鮑參軍集注』(上海古籍出版社、二〇〇五) 卷六。
- ⑧ 『先秦漢魏晉南北朝詩』齊詩卷一。
- ⑨ これより早く、『先秦漢魏晉南北朝詩』魏詩卷十一「雜歌謠辭」所収の七古「行者歌」に「清風細雨雜香來、土上出金火照台」とある。出典は『太平広記』卷二七二「婦人三・薛靈芸」。出典は前秦・王嘉『拾遺記』卷七他。遼欽立氏は、この詩について「拾遺記小説家言。未可尽信」と記している。これを詩歌における「細雨」の最も早い例とするには、慎重でなければならぬと思われる。
- ⑩ 『先秦漢魏晉南北朝詩』齊詩卷三。『文選』卷三十。曹融南『謝宣城集校注』(上海古籍出版社、一九九一) 卷三。

視覚に訴える雨の詩の例であるが、後の「風吹雨」という表現の先駆として、画期的なものと思われる。謝朓にはこの他、「賽敬亭山廟喜雨」、聯句「祀敬亭山春雨」<sup>①</sup>がある。齊に続く梁の時代は、『文選』『文心雕龍』『詩品』などが誕生したことに象徴される、南朝貴族文化の黄金時代である。それだけに、雨の語彙・表現も豊富多彩である。

まず、江淹は模倣の名手であり、「古詩十九首」以来の歴代の代表的な詩人の作風を模倣し、「雜体詩三十首」の連作を書いている。その中の一首として、西晋・張協（↓九六頁）の作風を模した「張黃門苦雨 協」がある<sup>②</sup>。

中国の詩人ではじめて「夜雨」を詩語として用いたのは、梁・何遜である。その「臨行与故遊夜別」<sup>③</sup>の一節を示す。

夜雨滴空階  
夜雨 空階に滴り  
暁灯暗離室  
暁灯 離室に暗し

現在確認できる唐代以前の詩歌に於ける「夜雨」の用例は、この詩のみである<sup>④</sup>。この詩については、続く第一章・第二章で更に詳しく論じることにした。何遜にはこの他、「従主移西州寓直齋内、霖雨不晴、懷郡中遊聚」「春暮喜晴、酬袁戸曹苦雨」などの雨の詩がある。また何遜の「相送」には、「江暗雨欲来、浪白風初起」とある<sup>⑤</sup>。何遜は、全体的に作品数の少ない魏晋南北朝の詩人たちの中では、相対的に雨をうたうことが多い詩人と言えるかも知れない。

劉孝綽の「秋雨臥疾」<sup>⑥</sup>は、「秋雨」を詩題に明示する早い例である。

梁・簡文帝（蕭綱）の「京洛篇」<sup>⑦</sup>は、詩句に於ける「春雨」の例である。その一節を示す。

秋霜暁驅雁  
秋霜 暁に雁を駆り  
春雨暮成虹  
春雨 暮れに虹を成す

また簡文帝の詩には、「細雨」の用例が二つ確認できる。「和湘東王首夏」<sup>⑧</sup>の冒頭に

- ① 順に『先秦漢魏晋南北朝詩』齊詩卷三、卷四。
- ② 『文選』卷三十一。『先秦漢魏晋南北朝詩』梁詩卷四は詩題を「張黃門協苦雨」とする。
- ③ 詩題は李伯齊『何遜集校注（修訂本）』（中華書局、二〇一〇）による。『先秦漢魏晋南北朝詩』梁詩卷九は詩題を「從鎮江州与遊故別詩」とし、「詩紀作臨行与故遊夜別」と注記する。
- ④ 管見の限り、『詩經』『楚辭』に「夜雨」はなく、また曹植・陶淵明・謝靈運・謝朓などにもない。もっとも類似的の表現として、「晚雨」「夕雨」の用例はある。梁・劉苞に「望夕雨」があり、同じく劉孝威に「和皇太子春林晚雨」がある。順に『先秦漢魏晋南北朝詩』梁詩卷八、卷十八。
- ⑤ いずれも『先秦漢魏晋南北朝詩』梁詩卷九。
- ⑥ 『先秦漢魏晋南北朝詩』梁詩卷十六。
- ⑦ 『先秦漢魏晋南北朝詩』梁詩卷二十。
- ⑧ 『先秦漢魏晋南北朝詩』梁詩卷二十一。

「冷風雜細雨、垂雲助麦涼」とあり、「賦得入階雨」<sup>①</sup>の冒頭に「細雨入階前、灑砌復沾帷」とある。この他、簡文帝には「雨後」「行雨」<sup>②</sup>などの雨の詩がある。

庾肩吾の「從駕喜雨」<sup>③</sup>は、曹植以来の「喜雨」の伝統に連なる作品である。

梁・元帝（蕭繹）の「夜遊柏齋」<sup>④</sup>は、詩語としての「雨声」の初出として特筆される。その一節を示す。

風細雨声遲　風　細やかにして　雨声　遅く  
夜短更籌急　夜　短くして　更籌　急なり

また元帝の「詠細雨」<sup>⑤</sup>は五言四句の短い作品であるが、繊細な描写が印象的である。

以上の他、梁代の雨の詩として、虞騫の「擬雨」、沈約の「庭雨応詔」、劉孝威の「和皇太子春林晚雨」「行還值雨、又為清道所駐」「望雨」、朱超の「対雨」などがある<sup>⑥</sup>。

陳・陰鏗には「閒居対雨」二首があり、張正見には「賦得梅林輕雨應教」がある<sup>⑦</sup>。なお陳の時代には「雨雪曲」と題する詩が多く書かれているが<sup>⑧</sup>、これらはすべて雪の詩であり、雨の詩ではない。

北朝では、北斉・魏収に「喜雨」があり、劉逖に「対雨」がある<sup>⑨</sup>。

北周・庾信には「奉和趙王喜雨」「和李司録喜雨」および「対雨」がある<sup>⑩</sup>。

隋・煬帝（楊広）の「四時白紵歌二首」のうち「江都夏」の冒頭に「黄梅雨細麦秋輕、楓葉蕭蕭江水平」とある。これは、南北朝時代に於ける七言の例である。また「宴東堂」の冒頭に「雨罷春光潤、日落暝霞暉」とある。これは雨上がりをうたう例である<sup>⑪</sup>。

隋ではこの他、王胄に「雨晴」があり、諸葛穎に「賦得微雨東來應教」がある<sup>⑫</sup>。後者は、陶淵明の詩句「微雨從東來」〔↓九六頁〕にもとづく題詠である。

- ① 『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩卷二十二。
- ② いずれも『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩卷二十一。また後者は『玉台新詠』卷十所収。楚王の故事をうたった五言四句の短い作品。
- ③ 『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩卷二十三。
- ④ 『玉台新詠』卷七。『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩卷二十五は詩題を「夜宿柏齋詩」とする。なお「雨声」の語は、この詩の他、陳詩に一例、隋詩に一例見える。
- ⑤ 『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩卷二十五。：「風輕不動葉、雨細未霑衣。入樓如霧上、扞馬似塵飛。」
- ⑥ 順に『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩卷五、卷七、卷十八（三首）、卷二十七。
- ⑦ 順に『先秦漢魏晉南北朝詩』陳詩卷一、卷三。
- ⑧ 張正見、陳・後主（陳叔宝）、陳暄、謝燮、江綰、江暉。順に『先秦漢魏晉南北朝詩』陳詩卷二、卷四、卷六（二首）、卷七、卷九。
- ⑨ いずれも『先秦漢魏晉南北朝詩』北齊詩卷一。
- ⑩ いずれも許逸民『庾子山集注』（中華書局、一九八〇）卷四所収。また「奉和趙王喜雨」「和李司録喜雨」は『先秦漢魏晉南北朝詩』北周詩卷三、「対雨」は同卷四。なお庾信「対雨」の特異性については、矢嶋美都子『庾信研究』第四章第一節「庾信の『対雨』詩の唐詩への影響」参照（一八二頁）。
- ⑪ 煬帝の詩はいずれも『先秦漢魏晉南北朝詩』隋詩卷三。
- ⑫ いずれも『先秦漢魏晉南北朝詩』隋詩卷五。

### 第三節 唐代および五代の主な雨の詩<sup>①</sup>

唐代になると、魏晋南北朝までの蓄積をふまえ、雨の詩は更に充実する。表現はより多彩になり、数量も増加する。それは、隋代に新しく導入された科挙において作詩が課され、作詩人口が格段に増加したこととも関係があるであろう。詩は狭い宮廷から開放され、詩人たちはより自由に雨をうたうようになる。詩歌の形式の上では、絶句・律詩の近体詩が整備され、従来の古詩と共存するようになる。また魏晋南北朝時代は五言が主流であったが、唐代になると七言も盛んに創作されるようになる。こうして唐代には、人口に膾炙した五言・七言の絶句・律詩が数多く生まれる。当然、その中には雨の名作も少なくない。

#### (一) 初唐

唐・太宗(李世民)には、「詠雨」<sup>②</sup>と題する五言詩が二首ある。また虞世南には五律「登望雨应詔」があり、魏知古には五律「奉和春日途中喜雨」がある<sup>③</sup>。いずれも应詔または奉和の作である。

初唐四傑の一人、王勃の七古「滕王閣」<sup>④</sup>は、次のようにうたう。

画棟朝飛南浦雲 画棟 朝に飛ぶ 南浦の雲  
珠簾暮捲西山雨 珠簾 暮れに捲く 西山の雨

張説には、五古「聞雨」<sup>⑤</sup>がある。その冒頭を示す。

多雨絶塵事 多雨 塵事を絶ち  
寥寥入太玄 寥寥として太玄に入る  
城陰疏復合 城陰 疏らとなりて復た合し  
簷滴断還連 簷滴 断えて還た連なる

魏晋南北朝の詩には、「聴雨」「聞雨」という表現は、まだ確認できない<sup>⑥</sup>。張説のこの詩は、「雨を聞く」という主題を明確に打ち出した最初の例である。また張説の五律「幽州

① 唐代および五代の詩については、『全唐詩』、高文『全唐詩簡編』(上海古籍出版社、一九九三)をはじめ、『唐詩三百首』『唐詩選』『唐詩類苑』『瀛奎律髓』その他を参照した。

② 『全唐詩』巻一。庾信の「対雨」詩の太宗の詩への影響については、矢嶋美都子『庾信研究』第四章第一節参照(一九七頁)。

③ 順に『全唐詩』巻三十六、巻九十一。いずれも『瀛奎律髓』巻十七「晴雨類」所収。

④ 『全唐詩』巻五十五。また『唐詩選』巻二。

⑤ 『全唐詩』巻八十六。

⑥ 加納留美子「夜雨對牀—蘇軾兄弟を繋いだもの—」(『日本中國學會報』第六十一集、二〇〇九)注(12)：「管見の限り、六朝以前『聞雨』『聴雨』という詩語はない。但し雨の滴る様子を通して、雨を聞くことを間接的に表す詩は六朝にもあった。例えば梁・何遜『從鎮江州与遊故別詩』『夜雨滴空堦、曉灯暗離室。』(原文は旧字体)

夜飲」<sup>①</sup>の首聯は「涼風吹夜雨、蕭瑟動寒林」とうたう。これは「風吹雨」、風が雨を吹きつける、という表現の先駆的なものである。

張説にはこの他、五律「奉和聖製同劉冕喜雨应制」<sup>②</sup>がある。これもやはり应制の作である。初唐の詩は、まだ何ほどか魏晉南北朝時代の延長上にあり、雨の詩も宮廷を離れきつてはいないようである。

## (二) 盛唐

盛唐になると、人口に膾炙した雨の名作が数多く登場する。王維、孟浩然、杜甫は、いずれも雨の詩の名手であり、すでに相当程度多様な雨の表現を彼らの詩に見いだすことができる。

まず王維である。七絶「渭城曲 一作送元二使安西」<sup>③</sup>は、春の雨上がりの情景をうたう。その前半を示す。

渭城朝雨浥輕塵	渭城の朝雨	輕塵を浥し
客舍青青楊柳春	客舍青青	楊柳 春なり

王維の詩では、どの形式の作品にも雨の佳句を見いだすことができる。五律では「秋夜独坐」<sup>④</sup>の領聯「雨中山果落、灯下草虫鳴」、「山居秋暝」<sup>⑤</sup>の首聯「空山新雨後、天氣晚來秋」、「送梓州李使君」<sup>⑥</sup>の領聯「山中一夜雨、樹杪百重泉」などがある。「一夜の雨」という表現は魏晉南北朝の詩には確認できず、『全唐詩』でも十例に満たない。しかも、その最初はこの王維の詩である。

五古では「謁璿上人」<sup>⑦</sup>の一節「高柳早鶯啼、長廊春雨響」、五絶では「輞川二十首」のうち「欒家瀨」<sup>⑧</sup>の「颯颯秋雨中、淺淺石溜瀉」、六絶では「田園樂七首」<sup>⑨</sup>其六の「桃紅復含宿雨、柳綠更帶朝煙」など、いずれも印象鮮明である。この他、七律の名作「積雨輞川莊作」<sup>⑩</sup>も忘れ難い。このように、「朝雨」「新雨」「春雨」「秋雨」「宿雨」「積雨」等々、王維の詩に於ける雨の表現は相當に豊富多彩である。

- ① 『全唐詩』卷八十七。また『唐詩選』卷三。
- ② 『全唐詩』卷八十七。
- ③ 『全唐詩』卷一二八。また『唐詩三百首』卷八。『唐詩三百首』は「楊柳春」を「柳色新」に作る。
- ④ 『全唐詩』卷一二六。この詩については、入谷仙介「王維の詩における音声表現」参照。同論文は『詩人の視線と聴覚 王維と陸游』所収。
- ⑤ 『全唐詩』卷一二六。また『唐詩三百首』卷五。
- ⑥ 『全唐詩』卷一二六。
- ⑦ 『全唐詩』卷一二五。
- ⑧ 『全唐詩』卷一二八。
- ⑨ 『全唐詩』卷一二八。宋代における六絶の創作については、周裕鍇著、三野豊浩訳「宋代六言絶句考―難によつて巧を示す―」参照。同論文は宋代詩文研究会『橄欖』第十二号所収。
- ⑩ 『全唐詩』卷一二八。また『唐詩三百首』卷六。
- ⑪ 『先秦漢魏晉南北朝詩』では、「春雨」は詩題も含めて四例、「秋雨」は詩題も含めて三例に過ぎないが、『全唐詩』では、いずれも優に百首を超える用例が確認できる。



山水詩人として王維と並び称される孟浩然には、春夜の風雨をうたう名作がある。五絶「春暁」<sup>①</sup>である。この詩は、唐詩に於ける「風雨」の代表例と言えよう。

春眠不覚曉 春眠 曉を覚えず  
処処聞啼鳥 処処 啼鳥を聞く  
夜来風雨声 夜来 風雨の声  
花落知多少 花 落つること 知んぬ多少ぞ

孟浩然には、もう一つの名作がある。次に「句」<sup>②</sup>を示す。

微雲淡河漢 微雲 河漢に淡く  
疏雨滴梧桐 疏雨 梧桐に滴る

これはわずか二句の断片であるが、名句として伝わるものである。王士源の「孟浩然集序」によれば、孟浩然が長安にいた頃、聯句の席でこの二句を即興的にうたつたところ、同席の人々が感服し、句を作るのをやめてしまった、という<sup>③</sup>。

また、孟浩然の五律「初出闕旅亭夜坐懷王大校書」<sup>④</sup>の頸聯は「燭至螢光滅，荷枯雨滴聞」とうたう。市川桃子氏によれば、枯れた蓮の葉にしたたる雨の音を最初にうたつたのは、孟浩然であるという<sup>⑤</sup>。この他、『瀛奎律髓』卷十七「晴雨類」は、孟浩然の五律「途中遇晴」を収録している。

王昌齡の七絶「芙蓉楼送辛漸二首」<sup>⑥</sup> 其一も、雨をうたう名作である。

寒雨連天夜入湖 寒雨 天に連なり 夜 湖に入る  
平明送客楚山孤 平明 客を送れば 楚山 孤なり

「寒雨」の語は、魏晉南北朝の詩には用例が確認できない。王昌齡のこの詩は、その早

- ① 『全唐詩』卷一六〇。また『唐詩選』卷六、『唐詩三百首』卷七。
- ② 『全唐詩』卷一六〇。
- ③ 王士源「孟浩然集序」：「閑遊秘省、秋月新霽、諸英華賦詩作會。浩然句曰、『微雲淡河漢、疎雨滴梧桐。』拳坐嗟其清絕、咸閣筆不復為繼。」小川環樹『唐代の詩人―その傳記』一七二頁参照。陸游は五古「夜雨」（劍南四八）の中でこの句を稱賛している。〔↓一三九頁〕
- ④ 『全唐詩』卷一六〇。
- ⑤ 市川桃子「古典詩の中のはす―荷衰へ芙蓉死す―」（『日本中國學會報』第四十二集、一九九〇）参照。：「枯れて乾燥した秋のハスの葉は、乾いて大きな音を響かせる。雨の音の変化に気付いたのは孟浩然の発見である。以来、秋雨に打たれたハスの音を聞く佳句は多い。」（原文は旧字体）同論文は市川桃子『中國古典詩における植物描寫の研究』（汲古書院、二〇〇七）所収。
- ⑥ 『全唐詩』卷一四三。また『唐詩三百首』卷八。『唐詩三百首』は第一句を「寒雨連江夜入吳」とするが、ここでは『全唐詩』の表記に従う。

い例と考えられる<sup>①</sup>。

李白にも雨の詩はあるが、人口に膾炙した作品は意外に少ない<sup>②</sup>。これと対照的に、杜甫には雨の詩が多い。杜甫こそは、盛唐を代表する「雨の詩人」であると言ってよい。代表的な例として、五律「春夜喜雨」<sup>③</sup>の前半を示す。

好雨知時節	好雨	時節を知り
当春乃發生	春に当たりて	乃ち發生す
隨風潛入夜	風に随い	潜かに夜に入り
潤物細無聲	物を潤し	細かにして 声無し

待望の春雨が、時節到来とばかりに夜の町に静かに降り注ぐ。これは杜甫が成都にいた頃の作品であるが、曹植以来の「喜雨」の主題は、この頃にはすでに朝廷という場を離れ、在野の一士大夫によつてもうたわれるものとなつていたことを物語る。

また杜甫の五古「贈衛八処士」<sup>④</sup>は、戦乱の中、二十年ぶりに再会した旧友が、客人（杜甫）をもてなすために畑のニラを採りに行く姿を、落ち着いた雰囲気の中にうたう。その一節を示す。

夜雨剪春韭	夜雨に春 韭を剪り
新炊間黄粱	新炊に黄粱を間う

また、杜甫は七古「茅屋為秋風所破歌」<sup>⑤</sup>では、雨漏りをうたう。その一節を示す。

床頭屋漏無乾処	床頭の屋漏 乾く処無く
雨脚如麻未断絶	雨脚 麻の如く 未だ断絶せず

宋詩を思わせる日常的な題材が、すでにうたわれている<sup>⑥</sup>。王維の場合は雨を表現する

① 唐詩では、杜甫、劉長卿、韋応物などにも用例が確認できる。杜甫「寒雨朝行視園樹」(『全唐詩』卷二二九)、劉長卿「送李使君貶連州」(『全唐詩』卷一四七)の「寒雨泊孤舟」、韋応物「秋夜二首」(『全唐詩』卷一九一) 其一の「夜聞寒雨滴」など。

② たとえば「苦雨」の例として五古「玉真公主別館苦雨贈衛尉張卿二首」(『全唐詩』卷一六八)があり、「雲雨」の例として七絶「清平調詞三首」(『全唐詩』卷一六四) 其二に「雲雨巫山枉斷腸」とある。また五律「訪戴天山道士不遇」(『全唐詩』卷一八二)には「桃花帶雨濃」とある。

③ 『全唐詩』卷二二六。また『瀛奎律髓』卷十七「晴雨類」。「瀛奎律髓」は、杜甫の雨の律詩を多数収録している。五律は、順に「雨四首」「晨雨」「喜雨」「對雨」「村雨」「梅雨」「朝雨」「夜雨」「更題」「春夜喜雨」「對雨書懷走邀許主簿」「乘雨入行軍六弟宅」「雨晴」「晴二首」「晚晴」「晚晴」の二十首。七律は、「江雨有懷鄭典設」「雨不絶」「崔評事弟許相迎不到、応慮老夫見泥雨怯出必愆佳期、走筆戲簡」「即事」の四首。

④ 『全唐詩』卷二二六。また『唐詩三百首』卷一。

⑤ 『全唐詩』卷二一九。

⑥ 吉川幸次郎『宋詩概説』序章第四節「生活への密着」参照。

語彙の豊かさが際だっていたが、杜甫は語彙の豊かさもさることながら<sup>①</sup>、むしろ題材の新しさと着想の奇抜さにおいて突出している<sup>②</sup>。杜甫の時点で、雨の表現は相当に多様化し、充実したものになっていると言えよう。

以上の他、杜甫には五古「苦雨奉寄隴西公兼呈王徵士」、七古「秋雨歎三首」<sup>③</sup>などの雨の詩がある。また杜甫には五律「梅雨」<sup>④</sup>があり、陸游が『老学庵筆記』で言及している<sup>⑤</sup>。盛唐では、辺塞詩人として知られる高適や岑参にも雨の詩があるが、紹介を控える<sup>⑥</sup>。

### (三) 中唐

安史の乱を経て中唐の時代になると、社会の大きな変動に伴い、詩人たちの美意識にも見逃せない変化が生じる。具体的には、中唐以降、「夜雨を（静かに）聴く」という主題が、詩に多くうたわれるようになる。『全唐詩』を調べてみると、唐詩に於ける「聞雨」「聴雨」の用例は、初唐・張説のような例外もあるにせよ、ほとんどが中唐以降に集中している<sup>⑦</sup>。盛唐・杜甫にも「夜雨」という表現は見えるが、「聞雨」「聴雨」の例はない。次の第一章で検討する「夜雨を聴く」詩の創作は、中唐になって本格化するのである。前掲何遜の「夜雨滴空階」の句が詩人たちの注目を集めるようになるのも、中唐以降である。中唐の代表詩人として、まずあげるべきは韋応物である。その五律「送顔司議使蜀訪圖書」<sup>⑧</sup>の頸聯を示す。

山館夜聽雨 山館に 夜 雨を聴かば  
秋猿独叫群 秋猿 独り群れに叫ぶ

もの寂しい秋雨の夜の情景がうたわれている<sup>⑨</sup>。なおこの詩は、『全唐詩』に於ける「夜聴雨」という表現の唯一の例である。

- ① 『瀛奎律髓』に収録された杜甫の作品だけでも、詩題と詩句から、「微雨」「江雨」「寒雨」「楚雨」「晨雨」「小雨」「喜雨」「無雨」「对雨」「村雨」「雨声」「梅雨」「細雨」「朝雨」「夜雨」「巫山雨」「好雨」「驟雨」「乘雨」「雨晴」「久雨」「鳴雨」などの表現を見いだすことができる。
- ② この他、杜甫の雑古「兵車行」(『全唐詩』卷二一六)は、戦没者の亡霊が雨の降る日に泣き叫ぶことをうたう。：「君不見、青海頭、古來白骨無人收。新鬼煩冤旧鬼哭、天陰雨湿声啾啾。」
- ③ いずれも『全唐詩』卷二一六。
- ④ 『全唐詩』卷二二六。また『瀛奎律髓』卷十七。『唐宋詩醇』卷十五。
- ⑤ 陸游『老学庵筆記』卷六：「杜子美梅雨詩云、『南京西浦道、四月熟黄梅。湛湛長江去、冥冥細雨來。茅茨疏易濕、雲霧密難開。竟日蛟龍喜、盤渦与岸迴。』蓋成都所賦也。今成都乃未嘗有梅雨、惟秋半積陰氣令蒸溽、与吳中梅雨時相類耳。豈古今地氣有不同耶。」
- ⑥ 一例として、高適には五古「苦雨寄房四昆季」(『全唐詩』卷二一一)がある。また岑参の五律「尋陽七郎中宅即事」(『全唐詩』卷二〇〇)には「雨滴芭蕉赤」の句がある。
- ⑦ 加納留美子「夜雨對牀」によれば、『全唐詩』における「聞雨」と「聴雨」の用例はあわせて十八例あり、そのうち十一例が雨夜を描く作品である。同論文二二三頁参照。
- ⑧ 『全唐詩』卷一八九。
- ⑨ この他、韋応物の五絶「聞雁」(『全唐詩』卷一九三)も秋雨の夜をうたう。：「淮南秋雨夜、高齋聞雁來。」

春雨をうたう例としては、韋応物に七絶「滁州西澗」<sup>①</sup>がある。その後半を示す。

春潮帶雨晚來急 春潮 雨を帯び 晚來 急なり  
野渡無人舟自橫 野渡 人無く 舟 自ら横たわる

この詩は、春の日暮れ時の幾分憂鬱な情景を、印象的にうたう。

また、韋応物の五律「示全真元常」<sup>②</sup>の頷聯「寧知風雪夜、復此对床眠」は、後に「寧知風雨夜、復此对床眠」の形で伝播し、「夜雨对床」の主題の発端となった<sup>③</sup>。また韋応物には「雨夜感懷」<sup>④</sup>と題する五律があり、同題の陸游の詩を先取りしている。「一六八頁」韋応物にはこの他、五古「郡齋雨中与諸文士燕集」、五律「飯中对雨呈巢中僚友」、五古「同德寺雨後寄元侍御李博士」などの雨の詩がある<sup>⑤</sup>。

中唐の代表詩人白居易にも雨の詩は多い。「夜雨」<sup>⑥</sup>または「雨夜」<sup>⑦</sup>を主題とする作品だけでも、相当数に上る。その中から夜雨を聴く例として、五絶「夜雨」<sup>⑧</sup>を示す。

早蛩啼復歇 早蛩 啼きて復た歇み  
残灯滅又明 残灯 滅して又た明るし  
隔窓知夜雨 窓を隔てて夜雨を知る  
芭蕉先有声 芭蕉 先ず声有り

この詩は、芭蕉の葉を打ち鳴らす夜の雨をうたっており、陸游の同様の作品の先例をなすものである<sup>⑨</sup>。白居易の作品では、この他、五律「秋雨夜眠」<sup>⑩</sup>なども陸游を連想させる。夜雨以外の例にも目を向けるならば、代表作の「長恨歌」<sup>⑪</sup>には、「梨花一枝春帶雨」「秋雨梧桐葉落時」などの表現が見える。また五律「雨中招張司業宿」<sup>⑫</sup>の尾聯「能來同宿否、

- ① 『全唐詩』卷一九三。また『唐詩三百首』卷八。
- ② 『全唐詩』卷一八八。
- ③ 北宋・蘇轍「逍遙堂會宿」引。『欒城集』卷七。加納留美子「夜雨對牀」注（8）参照（一三二頁）。
- ④ 『全唐詩』卷一九一。
- ⑤ 順に『全唐詩』卷一八六、卷一八七（二首）。このうち「郡齋雨中……」は『唐詩三百首』卷一所收。この他、『瀛奎律髓』卷十七は韋応物の五律「賦得暮雨送李胄」を収録している。
- ⑥ 「夜雨」の例。五古「夜雨」「夜雨有念」、七律「廬山草堂夜雨獨宿、寄牛二李七庾三十二員外」、五律「新秋夜雨」など。順に『全唐詩』卷四三三（二首）、卷四四〇、卷四六〇。また「長恨歌」（『全唐詩』卷四三五）に「行宮見月傷心色、夜雨聞鈴腸斷聲」とある。
- ⑦ 「雨夜」の例。五古「舟中雨夜」、七絶「雨夜憶元九」、五律「雨夜贈元十八」など。順に『全唐詩』卷四三三、卷四三八、卷四三九。また白居易の五絶「秋虫」（『全唐詩』卷四三七）に「秋天思婦心、雨夜愁人耳」とある。
- ⑧ 『全唐詩』卷四三二。
- ⑨ 陸游と白居易の作風の類似については、南宋の当時から議論があったらしく、陸游みずから七律「懷旧」（劍南六四）の尾聯で次のようにうたっている。……「不須強覓前人比、道似香山衷不同。」
- ⑩ 『全唐詩』卷四五六。……「涼冷三秋夜、安閑一老翁。臥遲灯滅後、睡美雨声中。」
- ⑪ 『全唐詩』卷四四九。

聴雨対床眠」は、唐詩に於ける「夜雨対床」の例である。

この他、『瀛奎律髓』卷十七は、白居易の七律「苦雨悶悶对酒偶吟」を収録している。

白居易の親友である元稹げんしんには、「雨声」<sup>①</sup>と題する七絶がある。「雨声」という詩語はすでに杜甫の詩に見え、また張繼・孟郊もうちゆうなど中唐の詩人たちの詩にも見えるが、<sup>②</sup>『全唐詩』を見る限り、この言葉を詩題に用いたのは元稹が最初であると思われる。

また元稹の七絶「聞樂天授江州司馬」<sup>③</sup>は、白居易の左遷の知らせを聞いた時の衝撃をうたう。その後半を示す。

垂死病中驚坐起 垂死すいしの病中 驚おどきて坐ざ起きすれば  
暗風吹雨入寒窓 暗風あんふう 雨を吹き 寒窓かんそうに入る

「暗風吹雨」という激しい表現は、陸游の七絶「十一月四日風雨大作」(劍南二六)其二の「夜闌臥聴風吹雨」(↓一三六頁)を連想させる<sup>④</sup>。

中唐のその他の詩人にも、簡単に触れておこう。韓愈かんゆの七絶「早春呈水部張十八員外二首」<sup>⑤</sup>其一は、初春の小雨をうたう叙景的な詩である。その前半を示す。

天街小雨潤如酥 天街てんがいの小雨しょうう 潤うるいて酥その如し  
草色遙看近却無 草色そうしよく 遙さうかに看みるも 近みければ却かえつて無し

しつとりと降る雨がまるで「酥」(乳製品)のようだという表現に、感覚的な新しさが認められる。

また、韓愈の七古「山石」<sup>⑥</sup>は、「升堂坐階新雨足，芭蕉葉大支子肥」とうたう。この他『瀛奎律髓』卷十七は韓愈の五律「郴州祈雨」「雨中寄張博士籍侯主簿喜」を収録する。

散文の大家として韓愈と並び称される柳宗元りゆうそうげんには、五律「夏初雨後尋愚溪」<sup>⑦</sup>、五古「雨後晚行獨至愚溪北池」などの雨の詩がある<sup>⑧</sup>。また『瀛奎律髓』卷十七は、柳宗元の五律「梅雨」を収録する。

劉禹錫りゆういつしやくの七絶「竹枝詞二首」<sup>⑨</sup>は、民謡風の軽快な雨の詩の例である。

- ① 『全唐詩』卷四一五。
- ② 杜甫「秋雨歎三首」(『全唐詩』卷二一六) 其三：「雨声颼颼催早寒，胡雁翅湿高飛難。」張繼「宿白馬寺」(『全唐詩』卷二四二)：「蕭蕭茅屋秋風起，一夜雨声羈思濃。」孟郊「酬李侍御書記秋夕雨中病飯見寄」(『全唐詩』卷三七八)：「秋風遶衰柳，遠客聞雨声。」
- ③ 『全唐詩』卷四一五。
- ④ 「風吹雨」または「風吹雨」という表現は、唐詩にしばしば見える。以下、数例を示す。盧綸「長安春望」(『全唐詩』卷一七九)：「東風吹雨過青山。」李賀「蘇小小歌」(『全唐詩』卷三九〇)：「西陵下、風吹雨。」朱慶余「酬蕭員外見寄」(『全唐詩』卷五一五)：「麥風吹雨正徘徊。」
- ⑤ 『全唐詩』卷三四四。なお『千家詩』は詩題を「初春小雨」とする。
- ⑥ 『全唐詩』卷三三八。また『唐詩三百首』卷三。
- ⑦ いずれも『全唐詩』卷三五二。
- ⑧ 『全唐詩』卷三六五。其一：「東辺日出西辺雨，道是无晴却有晴。」其二：「楚水巴山江雨多，巴人能唱本郷歌。」

詞では、張志和の「漁歌子」が知られる<sup>①</sup>。その「斜風細雨」の句は後に多くの詩人に愛好され、陸游も模倣作を残している<sup>②</sup>。

#### (四) 晩唐および五代

晩唐になると、詩の表現はいよいよ繊細華麗になるが、その反面、雄渾さは失われ、陰翳に富んだ作品が多く書かれるようになる。雨の詩も例外ではない。

晩唐の代表詩人としてまずあげべきは李商隱である。その七絶「夜雨寄北」<sup>③</sup>を示す。

君問帰期未有期	君 帰期を問うも 未だ期有らず
巴山夜雨漲秋池	巴山の夜雨 秋池に漲る
何当共剪西窓燭	何れか共に西窓の燭を剪り
却話巴山夜雨時	却しも話すべき 巴山の夜雨の時を

これ以外にも、李商隱には雨の名作が少なくない。『唐詩三百首』には、五律「風雨」および七律「春雨」が収録されている<sup>④</sup>。また李商隱には五律「雨」、五絶および五律の「細雨」、五絶「微雨」などがある<sup>⑤</sup>。この他、李商隱の詩句では、七絶「宿駱氏亭寄懷崔雍崔衮」の「留得枯荷聽雨聲」、七絶「寄令狐郎中」の「茂陵秋雨病相如」などが印象的である<sup>⑥</sup>。

李商隱と並び称される杜牧には、七絶「江南春絶句」<sup>⑦</sup>がある。その後半を示す。

南朝四百八十寺	南朝 四百八十寺
多少樓台煙雨中	多少の樓台 煙雨のうち

江南の春景色をうたう名作として、広く知られる詩である。ただし「煙雨」という詩語

- ① 張志和の「漁歌子」五首は、『全唐詩』では卷二十九、卷三〇八および卷八九〇の三箇所に収録されている。そのうち卷二十九と卷三〇八は詩題を「漁父歌」とし、卷八九〇は「漁父」とする。また卷二十九は「斜風」を「春江」とする。最も代表的な其の一は、龍榆生『唐宋名家詞選』（上海古籍出版社、一九八〇）所収。：「西塞山前白鷺飛、桃花流水鱖魚肥。青箬笠、綠蓑衣。斜風細雨不須歸。」宋詞研究会『風絮』第七号（二〇一一）一四一頁以下を参照。
- ② 乾道六年、入蜀の旅の途中、陸游は道土磯（西塞山）で張志和に言及している（『入蜀記』卷四、八月十六日）。また淳熙十四年冬、嚴州で「灯下讀玄真子漁歌、因懷山陰故隱追擬」（劍南一九）五首を書き、張志和の模倣を試みている。
- ③ 『全唐詩』卷五三九。また『唐詩三百首』卷八。
- ④ 「風雨」は『全唐詩』卷五三九、『唐詩三百首』卷五。「春雨」は『全唐詩』卷五四〇、『唐詩三百首』卷六。
- ⑤ 「雨」は『全唐詩』卷五三九。二首の「細雨」はいずれも『全唐詩』卷五四〇。「微雨」は『全唐詩』卷五四一。
- ⑥ いずれも『全唐詩』卷五三九。
- ⑦ 『全唐詩』卷五二二。また『唐詩三百首』卷八。

は南朝宋・鮑照の詩にすでに見えるものであり<sup>①</sup>、杜牧の用例が最初ではない。

前掲の白居易と同様、杜牧にも芭蕉の葉を打ち鳴らす夜雨をうたう詩がある。七絶「雨」<sup>②</sup>の後半を示す。

一夜不眠孤客耳 一夜 眠らず 孤客の耳  
主人窓外有芭蕉 主人の窓外に 芭蕉有り

この他、杜牧の五律「夜雨」<sup>③</sup>の首聯は「九月三十日、雨声如別秋」とうたう。このように中唐以来の秋夜の雨をうたう詩が書かれる一方、晩唐には、春夜の雨をうたう詩、更には春夜の雨を聴くことをうたう詩も書かれるようになる<sup>④</sup>。

なお、「清明時節雨紛紛」とうたう七絶「清明」は、一般に杜牧の作として知られるが、南宋の末に世に出た『分門纂類唐宋時賢千家詩選』、通称『後村千家詩』に初めて見える作品であり、真作であるかは疑わしい<sup>⑤</sup>。

晩唐の雨の詩としては、この他、許渾の七律「咸陽城東樓」<sup>⑥</sup>が知られる。その領聯を示す。

溪雲初起日沈閣 溪雲 初めて起こり 日 閣に沈み  
山雨欲來風滿樓 山雨 来たらんと欲し 風 樓に満つ

また于武陵の五絶「勸酒」<sup>⑦</sup>は別れの詩として有名であるが、これは逆境の比喩としての「風雨」の例であり、必ずしも実景をうたうものではない。

唐末五代・韋莊の七絶「台城」<sup>⑧</sup>は、印象的な歴史懐古の詩である。その前半を示す。

江雨霏霏江草齊 江雨 霏霏として 江草 齊し  
六朝如夢鳥空啼 六朝 夢の如く 鳥 空しく啼く

- ① 鮑照「贈故人馬子喬六首」其六：「煙雨交將夕、從此遂分形。」『先秦漢魏晉南北朝詩』宋詩卷八。
- ② 『全唐詩』卷五二四。
- ③ 『全唐詩』卷五二四。
- ④ 趙嘏「寒食新豐別友人」(『全唐詩』卷五四九)：「滿樓春色傍人醉、半夜雨声前計非。」韓偓「惜春」(『全唐詩』卷六八二)：「一夜雨声三月尽、万般人事五更頭。」
- ⑤ 伝杜牧「清明」：「清明時節雨紛紛、路上行人欲斷魂。借問酒家何處有、牧童遙指杏花村。」この詩は杜牧の詩集には収録されておらず、南宋末の選集が初出であることに加え、押韻に唐代の詩には見られない特徴があることが、主な問題点とされる。松浦智久『校注唐詩解釈辞典』(大修館書店、一九八七)四四二頁参照。
- ⑥ 『全唐詩』卷五三三。
- ⑦ 『全唐詩』卷五九五。また『唐詩選』卷六。：「花發多風雨、人生足別離。」
- ⑧ 『全唐詩』卷六九七。また『唐詩三百首』卷八。

また韋莊の「菩薩蛮」詞には、「画船聽雨眠」という表現が見える<sup>①</sup>。

この他、皮日休と陸龜蒙には、「吳中苦雨」を主題とするそれぞれ一百韻の五古の唱和がある<sup>②</sup>。「苦雨」という主題は特に新しいものではないが、これらはその長大さに於いて特筆に値する。

五代の作品では、南唐・後主（李煜）の「浪淘沙」詞が印象的である<sup>③</sup>。

#### 第四節 宋代の主な雨の詩（南宋中期まで）<sup>④</sup>

宋代の雨の詩は、なおさら枚挙にいとまがない<sup>⑤</sup>。作詩人口が更に増加する上に、宋の詩人たちは陸游を筆頭におおむね多作のため、宋詩の総量は唐詩のそれを遙かに上回る。全七十二冊の『全宋詩』（北京大学出版社、一九九八年）は概観するだけでも容易ではないが、清代に成立した『宋詩鈔』と『宋詩紀事』の二大選集をひもとくだけでも、相当な数の雨の詩を確認することができる<sup>⑥</sup>。

詩の形式の上では、宋代以降、特に新しい発展はないが、そのうたいぶりには一定の変化が認められる<sup>⑦</sup>。また、宋代には詩とは別に詞（長短句、詩余）が栄え、唐詩の発想を詞に移し替えた作品も現れる。宋词にも、雨をうたうものは多い。

宋代には出版が栄え、書物が普及し、文化的水準が格段に向上する。『詩経』『楚辞』『文選』を始め、古今の膨大な文献が手に入る環境が整備されたことは、詩人たちに豊富な参考資料を提供すると同時に、彼らを精神的に圧迫し、その創作を困難に直面させもした。そうした中から、黄庭堅の「換骨奪胎」に代表されるような、意表を突いた新機軸も生ま

① 韋莊「菩薩蛮」：「人人尽説江南好，遊人只合江南老。春水碧於天，画船聽雨眠。」『唐宋名家詞選』所収（一六頁）。また黄進徳『唐五代詞選集』（上海古籍出版社、一九九三）一七五頁参照。

② 皮日休「吳中苦雨因書一百韻寄魯望」、『全唐詩』卷六〇九。陸龜蒙「奉酬襲美先輩吳中苦雨一百韻」、『全唐詩』卷六一七。「魯望」は陸龜蒙の字。「襲美」は皮日休の字。

③ 李煜「浪淘沙」、『全唐詩』卷八八九：「簾外雨潺潺，春意闌珊。」『唐五代詞選集』四四八頁参照。なお『唐宋名家詞選』（四八頁）は「闌珊」を「將闌」とし、村上哲見『李煜』（岩波書店、一九五九）は詞題を「浪淘沙令」とする（二五頁）。

④ 宋代の詩については、『全宋詩』をはじめ、『宋詩鈔』『宋詩紀事』『宋詩別裁集』『千首宋人絶句』、『宋詩精華録』、錢鍾書『宋詩選注』（人民文学出版社、一九五八）、金性堯『宋詩三百首』（上海古籍出版社、一九八六）その他を参照した。

⑤ 吉川幸次郎『宋詩概説』序章第十二節「宋詩における自然」参照。：「興味ある事柄として、唐人の詩にはその激情をおおむね多作の主題とするのではなく、これらはその長大さに於いて特筆に値する。…しかし宋詩では、そのいづれも現れ方が少ないように思われる。…それに対し、宋人の詩にしばしば現れるのは、雨である。…陸游にも雨の詩は甚だ多い。」

⑥ これらの選集の価値と問題点については、『宋詩選注1』序参照（五三頁以下）。

⑦ 吉川幸次郎『宋詩概説』序章「宋詩の性質」参照。吉川氏は、唐詩とは異なる宋詩の特質として、「宋詩の叙述性」「生活への密着」「平静の獲得」などをあげて論じている。



れて来る。すなわち、張高評氏のいわゆる「新変自得」である<sup>①</sup>。

前述のように、宋詩は作品の総量が多く、各種の選集も相当な数に上る。ここでは、錢鍾書『宋詩選注』<sup>②</sup>でも紹介されている最も代表的な作者に限定し、『宋詩鈔』または『瀛奎律髓』巻十七「晴雨類」所収の雨の詩を中心に、作品を紹介することにした。また龍榆生『唐宋名家詞選』所収の雨の詞にも、ごく簡単に触れることにしたい。

## (一) 北宋

北宋初期の詩人・詞人として、まず晏殊をあげよう。『瀛奎律髓』巻十七は、晏殊の七律「賦得秋雨」を収録している。また晏殊の「浣溪沙」詞には、「滿目山河空念遠、落花風雨更傷春」の句が見える<sup>③</sup>。

北宋初期の代表詩人である梅堯臣には、五古「汝墳貧女」<sup>④</sup>がある。その一節を示す。

果然寒雨中 果然 寒雨の中  
僵死壤河上 僵れ死す 壤河の上  
弱質無以託 弱質は以て託する無く  
横尸無以葬 横尸は以て葬る無し

この詩は、勞役に駆り出された父親が雨の中で事切れていたことを、その娘の立場で痛切にうたう。同じ「寒雨」という詩語を用いても、詩の内容は前掲の王昌齡の詩「一〇二頁」とは全く異なる。こうした必ずしも詩的でない題材を意欲的に採り上げることが、梅堯臣を始めとする宋詩の一大特色である<sup>⑤</sup>。

この他、梅堯臣には七絶「淮雨」、五古「梅雨」、七古「秋雨篇」などの雨の詩がある<sup>⑥</sup>。また『瀛奎律髓』巻十七は梅堯臣の五律を十三首収録しており、その中には、「春夜聞雨」「夏雨」などの詩が含まれている<sup>⑦</sup>。春の夜に雨を聞く、という主題は晩唐以来のものであるが、その表現には梅堯臣ならではの枯れた味わいがあり、唐詩とは一線を画する<sup>⑧</sup>。

- ① 宋代の詩人たちが直面した創作上の困難については、張高評著、三野豊浩訳『「新変自得」と宋詩の創造精神』(宋代詩文研究会『橄欖』第十四号、二〇〇七) 参照。「新変自得」は張氏の造語で、過去の手本を学び、それを新しく変化させて、独自のものを創造すること。
- ② 同書は宋代の詩人八十家の作品三七五首を収録。ただし、必ずしも大家でない作者も含まれる。
- ③ 『唐宋名家詞選』所収(六一頁)。
- ④ 『宋詩鈔・宛陵詩鈔』。「汝墳貧女」序:「時再点弓手、老幼俱集。大雨甚寒、道死者百余人。」『宋詩選注1』一五三頁および早稲田大学中国文学研究会宋詩研究班『橄欖』第二号(一九八九) 参照。
- ⑤ 『宋詩選注1』梅堯臣解説参照(一三四頁)。
- ⑥ いずれも『宋詩鈔・宛陵詩鈔』。
- ⑦ 『先秦漢魏晉南北朝詩』には「夏雨」という詩語は見えず、『全唐詩』でも詩題、詩句をあわせて十数例に過ぎない(詩句としては韋応物、張謂、劉禹錫など。詩題としては薛能など)。「夏雨」を詩の主題とすることは、宋代になってより一般化するように思われる。
- ⑧ 梅堯臣「春夜聞雨」領聯:「簷斜滴野籬、窓缺揺春灯。」朱東潤『梅堯臣詩選』(人民文学出版社、一九八〇) 一八一頁参照。方回は、「三四工、余皆有味」と評する。

梅堯臣の盟友である歐陽修の七律「戲答元珍」は「花時久雨之什」とも題するが①、詩の中には特に雨への言及はない。むしろ歐陽修の作品では、詞にうたわれる雨が印象的である②。

梅堯臣と「蘇梅」と並び称される蘇舜欽の七絶「淮中晚泊犢頭」は「晚泊孤舟古祠下、滿川風雨看潮生」とうたい、「初晴遊滄浪亭」は「夜雨連明春水生、嬌雲濃暖弄微晴」とうたう③。この他、蘇舜欽には七絶「雨中聞鶯」、五律「秋雨」などの雨の詩がある④。

大改革の断行で知られる王安石には、七絶「送和甫至龍安微雨、因寄吳氏女子」⑤がある。この他、七絶「江上」には「暁雲含雨却低回」の句がある⑥。

北宋最大の詩人である蘇軾は、北宋を代表する「雨の詩人」でもある⑦。数ある名作の中から、まず七絶「六月二十七日望湖樓醉書」⑧其一を示す。

黒雲翻墨未遮山	黒雲	墨を	翻し	未だ山を遮らざるに
白雨跳珠乱入船	白雨	珠を跳ね	乱れて船に入る	
卷地風來忽吹散		地を卷くの風	来たり	忽ち吹き散ずれば
望湖樓下水如天	望湖樓下水	天の如し		

この詩は、晩夏の西湖のわか雨を活写する傑作である。この他、七絶「飲湖上初晴後雨二首」其二⑨も、西湖の雨を諧謔を交えてうたう。また七絶「望海樓晚景」五首の其二は「横風吹雨入樓斜」とうたう⑩。これは蘇軾に於ける「○風吹雨」の例である。

蘇軾の七律「新城道中」は軽快な旅の詩であり、擬人化の手法によって雨への親近感を表現している⑪。

- ① 『宋詩鈔・歐陽文忠詩鈔』、『宋詩選注1』一八七頁および『橄欖』第二号参照。
- ② 一例として、歐陽修の「臨江仙」詞は「柳外輕雷池上雨、雨声滴碎荷声」とうたう。同詞は『唐宋名家詞選』所収（七一頁）。
- ③ いずれも『宋詩鈔・滄浪集鈔』、『宋詩選注1』一七六頁、一七八頁および『橄欖』第二号参照。
- ④ いずれも『宋詩鈔・滄浪集鈔』所収。
- ⑤ 『宋詩鈔・臨川詩鈔』清水茂『王安石』（岩波書店、一九六二）一五一頁参照。
- ⑥ 『宋詩選注1』三〇一頁および宋代詩文研究会『橄欖』第五号（一九九三）参照。
- ⑦ 佐藤保『漢詩のイメージ』（大修館書店、一九九二）第一部第一章「天文・雨」参照。佐藤氏は「蘇軾は雨をたくみにうたった第一人者といつてよい」とした上で、七絶「東坡」の前半二句を紹介している。：「雨洗東坡月色清、市人行尽野人行。」
- ⑧ 『宋詩鈔・東坡詩鈔』、『宋詩選注2』二五頁および宋代詩文研究会『橄欖』第七号（一九九八）参照。
- ⑨ 蘇軾「飲湖上初晴後雨二首」其二：「水光瀲灩晴方好、山色空濛雨亦奇。欲把西湖比西子、淡粧濃抹總相宜。」同詩は『宋詩鈔・東坡詩鈔』所収。『宋詩選注2』四〇頁および『橄欖』第七号参照。
- ⑩ 『宋詩選注2』二八頁および『橄欖』第七号参照。なおこの詩は『宋詩鈔』には収録されていない。
- ⑪ 『宋詩鈔・東坡詩鈔』。この詩の表現上の問題については、小川環樹「自然は人間に好意をもつか―宋詩の擬人法―」詩における比喩―工拙と雅俗―参照。以上二篇の論文は、いずれも小川環樹『風と雲 中国文学論集』（朝日新聞社、一九七二）所収。

東風知我欲山行  
吹斷簷間積雨聲

東風 我が山行せんと欲するを知り  
吹斷す 簷間 積雨の聲

楽しいげなこの詩とは対照的に、七古「吳中田婦歎」は、長雨のため農作物が台なしになつてしまつた農婦の痛切な嘆きをうたう<sup>①</sup>。また、蘇軾の七律「正月二十日往岐亭、郡人潘古郭三人、送余於女王城東禪莊院」<sup>②</sup>の尾聯は「去年今日関山路、細雨梅花正断魂」とうたい、黄州に流される途中の山道で見た小雨の中の梅花を回想する<sup>③</sup>。

蘇軾が弟の蘇轍と別れる際に書いた七古「辛丑十一月十九日、既与子由別於鄭州西門之外、馬上賦詩一篇寄之」<sup>④</sup>は、惜別の情を夜雨に託してうたう。その一節を示す。

寒灯相對記疇昔  
夜雨何時聽蕭瑟

寒灯に相い対せし疇昔を記す  
夜雨 何れの時にか蕭瑟を聴かん

また『瀛奎律髓』卷十七は、蘇軾の七律「有美堂暴雨」を収録している。このように、蘇軾の雨の名作は枚挙にいとまがない。蘇軾の雨の詞にも名作は多いが、紹介を控える<sup>⑤</sup>。蘇軾の高弟で蘇門四学士に数えられる黄庭堅には、七絶「雨中登岳陽樓望君山二首」<sup>⑦</sup>がある。黄庭堅は「点鉄成金」「換骨奪胎」を提唱し、江西詩派の開祖となる<sup>⑥</sup>。また黄庭堅の七律「寄黄幾復」<sup>⑧</sup>の前半は、次のようにうたう。

- ① 蘇軾「吳中田婦歎」：「霜風來時雨如瀉、杷頭出菌鎌生衣、眼枯淚尽雨不尽、忍見黃穗臥青泥。」同詩は『宋詩鈔・東坡詩鈔』所収。『宋詩選注2』三〇頁および『橄欖』第七号参照。
- ② 『宋詩鈔・東坡詩鈔』、『蘇軾詩集』卷二十一。
- ③ 蘇軾と梅花の関係については、岩城秀夫「梅花と返魂―蘇軾における再起の悲願―」（『日本中國學會報』第三十集、一九七八）参照。
- ④ 『宋詩鈔・東坡詩鈔』。佐藤保『中国の名詩鑑賞8 宋詩附金』（明治書院、一九七八）七八頁、加納留美子「夜雨對牀」参照。
- ⑤ 蘇軾の弟の蘇轍は、七絶「逍遙堂會宿」引にこの一節を引用している。：「轍幼從子子瞻讀書、未嘗一日相舍。既壯、將遊宦四方、讀韋蘇州詩、至『安知風雨夜、復此對床眠』、惻然感之、乃相約早退為閑居之樂。故子瞻始為鳳翔幕府、留詩為別、曰、『夜雨何時聽蕭瑟。』」
- ⑥ 保荊佳昭「蘇東坡の詞に見られる『雨』について―特に雨上がりの風景描写を中心にして―」（日本大学中国文学会『漢学研究』第二十八号、一九九〇）および「蘇軾と柳永の詞について―特に雨上がりの風景描写と蘇軾の詞の小序をめぐって―」（『橄欖』第七号、一九九八）参照。
- ⑦ 『宋詩鈔・山谷詩鈔』。『宋詩選注2』一八六頁および宋代詩文研究会『橄欖』第十号（二〇〇一）参照。
- ⑧ 『宋詩選注2』黄庭堅解説参照（一六九頁）。この他、黄庭堅の創作については、莫礪鋒著、三野豊浩訳『黄庭堅の詩歌創作における三つの段階』（『橄欖』第十号）参照。
- ⑨ 『宋詩鈔・山谷詩鈔』。この詩は平仄が通常の律詩の規則と合致せず、七古とする選集もあるが、姚鼐『七言今体詩鈔』卷八に収録されているので、拗体の律詩と判断する。この詩は佐藤保『中国の名詩鑑賞8 宋詩附金』にも収録されているが、同書は七古とする（一〇四頁）。なお第一部第四章で紹介した楊万里の七律「寄陸務観」は、この詩を意識して書かれていると考えられる。（『八五頁』）

我居北海君南海 我は北海に居り 君は南海  
 寄雁伝書謝不能 雁に寄せて書を伝えんとするも 能わずと謝す  
 桃李春風一杯酒 桃李 春風 一杯の酒  
 江湖夜雨十年灯 江湖 夜雨 十年の灯

「桃李春風一杯酒」は、かつての交歓の思い出であり、「江湖夜雨十年灯」は、離れ住んで久しい二人の現在の姿であろうか。宋人らしい、理知的で抑制的な友情の詩である。この他、『瀛奎律髓』は黄庭堅の七律二首を収録している。

同じく蘇門四学士に数えられる秦觀には、七絶「春日五首」其二<sup>①</sup>がある。

一夕輕雷落万糸 一夕 輕雷 万糸を落とす  
 霽光浮瓦碧參差 霽光 瓦に浮かび 碧 參差たり  
 有情芍藥含春淚 有情の芍藥 春淚を含み  
 無力薔薇臥曉枝 無力の薔薇 曉枝に臥す

この詩は、春の朝の雨上がりの情景を繊細な筆致でうたう佳作である。「雨」の字を用いず、見事に春雨の美を表現している。「霽光」は、雨上がりの日光。「万糸」は、細く降る雨の比喩。「春淚」は、春雨のしずくの比喩である。秦觀は詞人でもあり、詩にも詞的な感覚が活かされている<sup>②</sup>。秦觀の「浣溪沙」詞<sup>③</sup>は、やはり繊細な表現が美しい。

蘇門の詩人では、張耒にも雨の詩が多い。『瀛奎律髓』はその五律三首を収録している。また「舟行六絶句」其五は「半夜西風驚客夢、臥聽寒雨到天明」とうたい、陸游を連想させる深夜の風雨の表現が見える。この他、張耒には七絶「夜聞風雨有感」がある<sup>④</sup>。

蘇門六君子の一人で、江西詩派の重要詩人でもある陳師道には、七律「春懷示隣里」<sup>⑤</sup>がある。その首聯を示す。

斷牆着雨蝸成字 斷牆 雨を着し 蝸 字を成し  
 老屋無僧燕作家 老屋 僧無く 燕 家を作る

同じく春雨をうたいつつも、秦觀とは対照的に生活感あふれる作品となっている。また『瀛奎律髓』卷十七は、陳師道の五律を七首（うち五排一首）、七律一首を収録している<sup>⑥</sup>。唐庚は蘇軾と同郷の出身で、やはり惠州「広東省恵陽」に流されたため「小東坡」と

① 『宋詩鈔・淮海集鈔』。『宋詩選注2』八五頁、宋代詩文研究会『橄欖』第八号（一九九九）参照。  
 ② 『宋詩選注2』秦觀解説参照（七九頁以下）。執筆担当は筆者。  
 ③ 秦觀「浣溪沙」：「自在飛花輕似夢、無辺糸雨細如愁、宝簾閑掛小銀鉤。」『唐宋名家詞選』一四〇頁参照。  
 ④ 張耒「舟行六絶句」「夜聞風雨有感」は、いずれも『宋詩鈔・宛丘詩鈔』所収。  
 ⑤ 『宋詩鈔・後山詩鈔』。『宋詩選注2』二〇七頁、『橄欖』第十号参照。  
 ⑥ このうち五律には「夜雨」「次韻夜雨」が含まれている。なお七律「春懷示隣里」は『瀛奎律髓』では卷十七ではなく卷十「春日類」に収録されており、詩題は「隣里」を「隣曲」とする。

呼ばれる<sup>①</sup>。『瀛奎律髓』卷十七は、唐庚の五律を二首、七律を一首収録している。

以上の他、北宋の小詩人たちの作品にも雨の佳作は多い<sup>②</sup>。

北宋の雨の詞にも名作が多いが、ここでは賀鏐の「賀梅子」の渾名の由来となった「横塘路（青玉案）」に触れるにとどめる<sup>③</sup>。

## (二) 南宋

靖康の変を経て南宋になると、黄庭堅に代表される北宋期の極端なまでに主知的な創作のあり方が見直され、詩歌にある程度叙情性が回帰する。ただし、その叙情は多分に民族的な感情と結びついたものであり、その典型例が「愛国詩人」として知られる陸游である。北宋末に一世を風靡した江西詩派の影響力は徐々に弱まり、陸游・范成大・楊万里らの大家は、いずれもその影響を克服した所に、みずからの新境地を切り開いて行く。

北宋から南宋の過渡期を生きた女性詞人李清照には、「如夢令」「念奴嬌」などの雨の詞がある<sup>④</sup>。このうち「念奴嬌」には中唐・張志和（↓一〇七頁）以来の「斜風細雨」という表現が見える。

北宋末から南宋初への過渡期の詩人としては、陳与義が知られる。陳与義は、黄庭堅、陳師道と共に江西詩派に数えられる場合もあるが<sup>⑤</sup>、理知的かつ繊細な感覚の叙情詩人であり、その風格は「黄陳」（黄庭堅、陳師道）とは一線を画する。

陳与義には、印象的な雨の詩が多い。『瀛奎律髓』卷十七は、陳与義の雨の律詩を合計二十五首も収録している<sup>⑥</sup>。その中から、七律「懷天經智老因訪之」<sup>⑦</sup>の頷聯を示す。

客子光陰詩卷裏  
客子の光陰 詩卷の裏  
杏花消息雨中  
杏花の消息 雨声中

これは、しばしば陸游の七律「臨安春雨初霽」（劍南一七）の頷聯「小樓一夜聽春雨、

① 『宋詩選注2』唐庚解説参照（一四二頁）。

② 『宋詩選注』所収の作品では、曾鞏「西樓」、劉攽「雨後池上」、徐俯「春遊湖」など。また『宋詩別裁集』卷八所収の劉敞の五絶「雨後回文」は、逆から読んでも意味の通じるユニークな作品である。盆詩の会「宋詩別裁 五言絶句訳注」（二〇一四）参照。この他、『宋詩紀事』にも雨の詩は少なくない。

③ 賀鏐「横塘路（青玉案）」：「一川煙草、滿城風絮、梅子黃時雨。」『唐宋名家詞選』所収（一四八頁）。周少隱「竹坡老人詩話」：「賀方回嘗作青玉案詞、有『梅子黃時雨』之句、人皆服其工、士大夫謂之『賀梅子』。」

④ 李清照「如夢令」：「昨夜雨疏風驟、濃睡不消殘酒。」「念奴嬌」：「蕭條庭院、又斜風細雨、重門須閉。」いずれも『唐宋名家詞選』所収（二〇三頁、二〇六頁）。後者は宋詞研究会『風絮』第二号（二〇〇六）一八六頁参照。

⑤ 『宋詩選注2』陳与義解説参照（三〇四頁以下）。

⑥ 五律は、順に「雨」「連雨書事（四首）」「試院書懷」「雨」「春雨」「雨」「岸幘」「雨」「雨」「細雨」「晚晴野望」「道中」「晚步」「雨」「雨思」「雨中」の十九首。七律は、順に「夜雨」「雨晴」「雨中對酒庭下海棠經雨不謝」「立春雨」「觀雨」「觀江漲」の六首。方回注：「簡齋五律為雨而作者、選十九首。詩律精妙、上追老杜、仰高鑽堅。…後山之後、有此一人耳。」

⑦ 『宋詩鈔・簡齋詩鈔』、『瀛奎律髓』卷十七。

深巷明朝売杏花」(「一三二頁」と比較される名句である<sup>①</sup>。陳与義の七律の名句としては、この他「夜雨」の「暮局可觀浮世理、灯火応為好詩開」などがある。また七律「雨晴」「雨中对酒庭下海棠經雨不謝」は、いずれも『宋詩選注』に収録されている<sup>②</sup>。

陳与義の絶句にも、雨の佳作が多い。一例として、七絶「春寒」<sup>③</sup>を示す。

二月巴陵日日風	二月	巴陵	日日の風
春寒未了怯園公	春寒	未だ了わらず	園公を怯えしむ
海棠不惜臙脂色	海棠	惜しまず	臙脂の色
独立濛濛細雨中 <sup>④</sup>	ひとり立つ	濛濛たる	細雨の中

また陳与義の七絶「中牟道中二首」其<sup>⑤</sup>の前半は「雨意欲成還未成、帰雲却作伴人行」とうたい、今にも雨が降りそうで降らない、微妙な空模様を巧みに表現している。この他、陳与義には七絶「微雨中賞月桂独酌」<sup>⑥</sup>などの雨の詩がある。

陳与義と同世代の詩人として、呂本中と曾幾がいる。いずれも、江西詩派の流れに連なる詩人たちである。ただしこの二人の作品は、『宋詩鈔』には収録されていない。

呂本中は、「江西詩社宗派図」の作者として知られる<sup>⑦</sup>。『瀛奎律髓』卷十七は、呂本中の五律を一首、七律三首収録している。このうち七律「柳州開元寺夏雨」は夏の雨をうたう詩であり、首聯は『詩経』の「風雨瀟瀟」という表現をそのまま用いている<sup>⑧</sup>。

曾幾は、若き日の陸游の師として知られる<sup>⑨</sup>。『瀛奎律髓』卷十七は、曾幾の五律を三首、七律を二首収録している<sup>⑩</sup>。その中から、七律「蘇秀道中、自七月二十五日夜大雨三日、

① 一例として、明・瞿祐『掃田詩話』：「陳簡齋詩云、『客子光陰詩卷裏 杏花消息雨声中。』陸放翁詩云、『小樓一夜聽春雨、深巷明朝売杏花。』皆佳句也。惜全篇不稱。」

② 『宋詩選注2』三一六頁、三二五頁参照。

③ 『宋詩鈔・簡齋詩鈔』、『宋詩選注2』三二二頁参照。

④ 「細雨濛濛」という表現は、唐詩では儲光羲、温庭筠などの詩に見える。儲光羲「題茅山華陽洞」(『全唐詩』卷一三九)：「細雨濛濛欲湿衣。」温庭筠「春日雨」(『全唐詩』卷五八三)：「細雨濛濛入絳紗。」

⑤ 『宋詩鈔・簡齋詩鈔』、『宋詩選注2』三二二頁参照。

⑥ 『宋詩鈔・簡齋詩鈔』。

⑦ 吉川幸次郎『宋詩概説』第四章第一節「江西詩派」参照。また合山究「呂本中の『江西詩社宗派図』について」(『九州中國學會報』第十六卷、一九七〇)参照。

⑧ 呂本中「柳州開元寺夏雨」：「風雨瀟瀟似晚秋、鴉帰門掩伴僧幽。」『宋詩選注2』二五五頁および宋代詩文研究会『橄欖』第十一号(二〇〇二)参照。

⑨ 陸游は、その詩の淵源は呂本中ではないか、と曾幾に指摘された思い出を記している。陸游「呂居仁集序」(渭南一四)：「某自童子時、誦公詩文、願學焉。稍長、未能遠遊、而公捐館舍。晚見曾文清公、文清謂某、『君之詩淵源殆自呂紫微、恨不一識面。』某於是尤以為恨。」

⑩ 『瀛奎律髓』の原本は、「曾茶山」の名の下に五律十首(うち排律一首)を収録するが、筆者の調査によれば、「苦雨」以下の七首は、実際には陸游の作である。

秋苗以蘇、喜而有作」<sup>①</sup>の頸聯を示す。

千里稻花応秀色 千里の稻花 応に秀色なるべし  
五更桐葉最佳音 五更の桐葉 最も佳音なり

農民たちの心情を代弁し、農作業に欠かせないめぐみの雨の喜びをうたっている。

また曾幾の七絶「三衢道中」<sup>②</sup>は、「梅子黄時日日晴」と、梅雨時にもかかわらず晴れの日が続くことをうたい、宋詩らしいひねりのきいた表現となっている<sup>③</sup>。

最後に、陸游と同世代の范成大、楊万里、尤袤の雨の詩を簡単に紹介する。

范成大は有能な行政官であり、南宋の「田園詩人」として知られる<sup>④</sup>。実際、農業との関連でうたわれる雨の詩が多い。代表作の七絶「四時田園雜興六十首」<sup>⑤</sup>（石湖二七）にも、当然雨の詩は多い<sup>⑥</sup>。ここでは、七絶「晚潮」<sup>⑦</sup>（石湖三）を示す。

東風吹雨晚潮生	東風	雨を吹き	晩潮	生ず
疊鼓催船鏡裏行	疊鼓	船を催し	鏡裏	行かむ
底事今年春漲小	底事	今年	春	漲の小さき
去年曾与画橋平	去年	曾与画橋	と平ら	かなりしに

詩人は橋の下を船で通り過ぎ、去年よりかなり水位が低いことに気がつく。言外に、農作業への影響を心配しているのである。為政者としての細やかな心遣いがうかがえる。またこの詩は、范成大に於ける「○風吹雨」の例でもある<sup>⑧</sup>。

この他、范成最大の七絶「横塘」<sup>⑨</sup>（石湖三）には「細雨垂楊繫画船」とある。

- ① 『瀛奎律髓』卷十七。『宋詩選注2』二八八頁参照。ただし『瀛奎律髓』は詩題に「蘇秀道中」の四字がなく、また「喜而」を「喜雨」とする。
- ② 『宋詩選注2』二九二頁、拙稿『宋詩精華録』に収録された曾幾の作品（愛知大学文学会『文学論叢』第一三七輯、二〇〇八）参照。
- ③ 錢鍾書氏は、曾幾の作風はすでに楊万里の先駆けをなしていると論評している。『宋詩選注2』曾幾解説参照（二八七頁）。
- ④ 『宋詩選注3』范成大解説参照（一九五頁以下）。
- ⑤ 『宋詩鈔・石湖詩鈔』は全六十首を収録。『宋詩選注3』はうち十六首を収録。訳注担当は筆者。
- ⑥ 「春日田園雜興」其二…「土膏欲動雨頻催」。同其九…「雨余蹄道水如杯」。同其十一…「南山雷動雨連宵」。『晚春田園雜興』其一…「短篷風雨宿橫塘」。同其九…「穀雨如糸復似塵」。同其十…「雨後山家起較遲」。同其十一…「海雨江風浪作堆」。『秋日田園雜興』其五…「忌雨嫌風更怯寒」。同其六…「秋來只怕雨垂垂」。なお「夏日田園雜興」其四に「繰車嘈噴雨鳴蓑」とあるのは、糸車の音の比喩である。
- ⑦ 『宋詩鈔・石湖詩鈔』『宋詩選注3』二〇七頁参照。訳注担当は筆者。
- ⑧ 陸游の詩では、七律「喜晴」（劍南四）に「西風吹雨冷淒淒」とあるのが、現存する作品における「○風吹雨」の初出である。この他、七古「秋風曲」（劍南一五）の冒頭「秋風吹雨鳴窓紙」、七律「秋雨北樹作」（劍南一八）の冒頭「秋風吹雨到江濱」など。（↓一三二頁）
- ⑨ 『宋詩鈔・石湖詩鈔』『宋詩選注3』二二〇頁参照。訳注担当は筆者。

また范成大の七古「後催租行」<sup>①</sup>（石湖五）は、長雨のため収穫が台なしになり、租税が払えず、やむなく娘を売りに出すことになった農民の悲惨な境遇をうたう。この他、范成大には七律「曉起聞雨」、七絶「梅雨五絶」などの雨の詩がある<sup>②</sup>。

自由闊達な「誠齋体」の詩人楊万里にも、雨の詩は多い。一例として、七絶「三月三日雨作遣悶十絶句」<sup>③</sup>（誠齋三）其八を示す。

村落尋花特地無<sup>④</sup>      村落に花を尋ねれば特地に無し  
有花亦自只愁予      花有るも亦た自ら只だ予を愁えしむ  
不如臥聽春山雨      如かず 臥して春山の雨を聴かんには  
一陣繁声一陣疏      一陣は繁声にして 一陣は疏らなり

詩人は、花を見ても愁いがわき起こるばかり。むしろ、変化に富んだ雨の音を聴くことが気晴らしになるとうたう。楊万里らしい、軽快で洒脱な雨の詩である<sup>⑤</sup>。「特地無」は、特に何事もない、の意。こうした口語的表現は、楊万里の詩にしばしば見える。

また楊万里の七絶「憫農」<sup>⑥</sup>（誠齋二）は雨が降らず日照りにあえぐ農民の心情を思いやる作品であり、冒頭で紹介した『詩経』「衛風・伯兮」にも通じる精神が感じられる。

尤表は「尤楊范陸」の筆頭であるが、わずかの作品しか現存せず、四人の中では最も影が薄い。『瀛奎律髓』卷十七は、尤表の七律「次韻德翁苦雨」一首を収録している<sup>⑦</sup>。永嘉の四靈、江湖派に代表される南宋後半期にも雨の詩は多いが、紹介を控える<sup>⑧</sup>。

## 結 び

以上、先秦から南宋中期までの雨の詩を概観した。

中国の雨の詩は、最古の『詩経』の段階で、すでにある程度の数量と多様性を確認することができる。しかしその後、漢代の終わりまでは、これといった発展の形跡を認めることができない。

魏晋南北朝になって、ようやく具体的な作者が登場し、自覚的な雨の詩の創作が始まる。曹植の「喜雨」、阮瑀の「苦雨」、陶淵明の「微雨」、何遜の「夜雨」など、画期的な詩語

① 『宋詩鈔・石湖詩鈔』。『宋詩選注3』二二〇頁参照。訳注担当は筆者。…「老父田荒秋雨裏、旧時高岸今江水。備耕猶自抱長飢、的知無力輸租米。」

② いずれも『宋詩鈔・石湖詩鈔』。

③ 『宋詩鈔・江湖詩鈔』は其七、其八、其十の三首を収録し、詩題に「十」の字がない。

④ 『宋詩鈔』および『宋詩精華録』卷三は「特」を「掙」とする。

⑤ この他、七絶「過百家渡四絶句」其四：「一晴一雨路乾湿、半淡半濃山疊重」など。同詩は『宋詩鈔・江湖詩鈔』所収。『宋詩選注3』六五頁以下を参照。

⑥ 楊万里「憫農」：「稲雲不雨不多黃、蕎麥空花早著霜。已分忍飢度殘歲、更堪歲裏閏添長。」『宋詩鈔・江湖詩鈔』。『宋詩選注3』六八頁参照。

⑦ 姜夔「平甫見招不欲往」、翁卷「鄉村四月」、趙師秀「約客」など。いずれも『宋詩選注3』所収。訳注担当は筆者。なお永嘉の四靈の創作については、拙稿「永嘉の四靈の七言絶句について」（宋代詩文研究会『橄欖』第十四号、二〇〇七）参照。



を伴い、後世に影響を及ぼす作品も生まれて来る。しかし魏晋南北朝の段階では、作品の総数はまだ少なく、一人で多種多様な雨の詩を書き残した詩人も、まだ存在しない。

唐代になると、ようやく「雨の詩人」と呼ぶにふさわしい詩人たちが登場する。盛唐では王維、杜甫。中唐では韋応物、白居易。晩唐では李商隱、杜牧などである。唐代に至り、雨の詩はその内容・形式ともに充実し、人口に膾炙した雨の名作も数多く生まれて来る。

宋代になると、詩歌の創作は一段と裾野が広がり、唐代以上に大量の作品が書かれるようになる。当然、雨の詩も膨大な量に上る。しかし、文化的水準が向上する反面、真に独創的な作者・作品は、かえって出にくくなる。そうした状況の下、北宋では蘇軾、北宋末から南宋初の過渡期では陳与義を、代表的な「雨の詩人」としてあげることができる。

陸游の雨の詩も、以上のような過去の蓄積を前提として書かれていることは言うまでもない。自宅を「書巢」すなわち本の巢にし、書物に囲まれて暮らしていた陸游は、当然ながら並外れた読書家である<sup>①</sup>。陸游は、過去の膨大な作品を謙虚に学び、その滋養を存分に吸収した上で、自分自身の新しい世界を創造して行ったと考えられる。

それでは、陸游以前の雨の詩と比較して、陸游自身の雨の詩の際立った特色とは何であろうか。おそらくそれは、次の二つに集約されるであろう。

まず一つは、他の追隨を許さないその数量の圧倒的な多さ。そして、それに伴う内容・表現の多種多様さである。中国の詩人の中で、陸游ほど膨大な量の雨の詩を、しかもその生涯にわたって書き続けた詩人は、おそらく他にいない。そのことは、附録「陸游詠雨詩年表」〔下二七一頁〕を一覧するだけでも、首肯できるのではなからうか。

しかし、ある程度まとまった数量の雨の詩を書き、それらがある程度多様であるというだけならば、程度の差こそあれ、陸游以前にも全く例がないわけではない。そこで、もう一つのより重要な特色として、雨と憂国の主題との緊密な結びつきをあげなければならぬ。治乱興亡の歴史を誇る中国のこと、屈原、杜甫をはじめ、憂国の詩人は古くから存在する。また、雨（特に風雨）を人生の逆境や不遇と結びつけてうたう詩人も数多い。しかし、雨という自然現象を憂国の主題と積極的に結びつけ、その生涯を通して繰り返しうたい続けた詩人は、少ないのではなからうか。唐代のみならず、蘇軾や黄庭堅などの北宋詩人、范成大や楊万里などの南宋詩人たちにも、そうした例を見いだすことは難しい<sup>②</sup>。

この点こそは、陸游の雨の詩の最大の特徴ではないかと考えられる。以上をふまえ、次の第一章では、いよいよ陸游自身の雨の詩の探求に入っていくことにしたい。

① 陸游には「書巢記」（渭南一八）がある。小川環樹『陸游』「書齋・菜園・菓草」一四一頁参照。

② 陳与義（一〇九〇〜一一三八）にはある程度まとまった数の雨の詩があるが、それでもその生涯は五十年に満たず、雨の詩の総数と表現の幅では陸游に及ばない。白敦仁『陳与義集校箋』（上海古籍出版社、一九九〇）によれば、陳与義の詩題で「雨」の字を用いるものは約三十題に過ぎない。

## 第一章 「夜雨を聴く」詩でたどる陸游の生涯<sup>①</sup>

陸游に雨の詩が多いことは、吉川幸次郎、小川環樹の両氏が早くに指摘している<sup>②</sup>。両氏の指摘に拠らずとも、ひとたび陸游の詩集をひもとくならば、誰しも雨の詩の多さに気がつくであろう。全八十五巻から成る『劍南詩稿』に、「雨」という文字が全く出て来ない巻は一つとして存在しない<sup>③</sup>。それらは、単に数量が多いのみならず、内容・表現においても多種多様であり、中には陸游の最も代表的な作品も含まれている<sup>④</sup>。

しかし、陸游の雨の詩はあまりに膨大であり、その全貌を、限られた紙数で論じ尽くすことは困難である。そこで、陸游自身が次のようにうたっていることに注目したい。

吾詩滿篋笥 吾が詩 篋笥に満ち  
最多夜雨篇 最も多し 夜雨の篇

嘉泰元年（一二〇一）秋、陸游七十七歳の時に書かれた五古「夜雨」（劍南四八）の冒頭の二句である。自分の詩は「篋笥」すなわち文書を入れる手箱に満ちているが、その中で最も多いのが、夜の雨をうたった詩篇である、というのである。もちろん、陸游の雨の詩は決して夜雨をうたうものだけではないが、ここでは、陸游自身が創作の中心と認める夜雨の詩を対象を限定し、陸游の雨の詩の世界を探求することにした。

暗い夜に降る雨を詩にうたう場合には、当然ながら、視角的な要素よりも聴覚的な要素が重視されることになる<sup>⑤</sup>。陸游は、その数多い夜雨の詩の中で、雨の音に耳を傾ける自分自身を繰り返したっている。本章では、数多い陸游の夜雨の詩の中でも、特に「夜雨を聴く」という主題を明示する詩を中心に、雨の音に伴奏された詩人の人生の歩みを綴ってみたい。具体的には、陸游の代表的な「夜雨を聴く」詩を年代順に紹介し、そこうたわれる詩人の感慨および夜雨の描写について検討すると同時に、陸游にとつての「夜雨を聴く」ことの意義、また、陸游と夜雨の関係が、時間の経過と共にどのように推移して行ったのか、などについて考察することにした。

- ① 本章は、拙稿「雨の詩人 陸放翁」（愛知大学文学会『文学論叢』第一一六輯、一九九八）および「關於陸游的夜雨詩——以『夜裏聽雨』的主題為中心」（浙江大学『中文學術前沿』第五輯、二〇一二。中国陸游研究会・漢中市陸游学会『陸游与漢中』上海古籍出版社、二〇一三）を基礎とする。
- ② 吉川幸次郎『宋詩概説』序章第十二節「宋詩における自然」、小川環樹『陸游』「静寂・黙想・雨」参照。
- ③ ただし、詩題に「雨」の字の見えない巻は存在する。順に、卷四十一、卷七十四、卷八十四、卷八十五。附録「陸游詠雨詩年表」参照。
- ④ 七絶「劍門道中遇微雨」（劍南三）、七律「臨安春雨初霽」（劍南一七）、七絶「十一月四日風雨大作」（劍南二六）二首の其二など。いずれも『宋詩選注3』所収。訳注担当は筆者。
- ⑤ 李致洙氏は、陸游の作品世界における音響の比重の大きさを指摘している。…「我們打開陸游詩集、可以發現集中充斥著音響。無論人間世界或自然天籟、多彩多樣的音響都以不同的姿態出現在裡面。陸游的日常生活像是開始於聽音響、結束於聽音響。」李致洙『陸游詩研究』（文史哲出版社、一九九一）第四章「陸游詩的主要內容」第七節參照（二一〇頁）。

ところで朱東潤氏は、陸游の作品を、次の三つの時期に分けて説明している<sup>①</sup>。

- (一) 第一段階 年少の時期から、乾道六年(一一七〇)、陸游四十六歳の時、夔州に到着する直前まで。『詩稿』巻一から巻二『瞿唐行』まで。
- (二) 第二段階 夔州に到着してから、淳熙十六年(一一八九)、陸游六十五歳の時、弾劾されて失脚するまで。『詩稿』巻二「入瞿唐白帝廟」から巻二十一「去国待潮江亭太常徐簿宋卿載酒來別」まで。
- (三) 第三段階 六十五歳の時に官を辞して山陰に帰ってから、嘉定二年(一二〇九)、陸游八十五歳の時に世を去るまで。『詩稿』巻二十一「醉中作行草數紙」から巻八十五まで。

陸游の作品全体を考える場合には、十分妥当な時期区分であると思われる。ただし、「夜雨を聴く」詩の発展を考える場合、このように分けると、最初の段階の作品が少なくなり過ぎてしまう。そこで本章では、陸游の夜雨の詩を、次の三つの時期に分けて考えることにしたい。

- (一) 第一期 創作の開始から、淳熙五年(一一七八)、陸游五十四歳の時、蜀を離れ故郷に帰る直前まで。『詩稿』巻一から巻十「荆溪館夜坐」まで。
- (二) 第二期 淳熙五年、山陰に帰ってから、淳熙十六年、弾劾されて失脚するまで。『詩稿』巻十「沂溪」から巻二十一「去国待潮江亭太常徐簿宋卿載酒來別」まで。
- (三) 第三期 朱東潤氏の第三段階に同じ。

なお、陸游の生涯の概略はすでに第一部で記したので、本章では必要最小限の記述に留める。第一部および附録「陸游詠雨詩年表」をあわせて参照されたい。

### 第一期の「夜雨を聴く」詩(創作の開始から淳熙五年まで)

現在の『劍南詩稿』巻一は、紹興十二年(一一四二)から乾道三年(一一六七)まで、すなわち陸游十八歳<sup>②</sup>から四十三歳までの作品、合計一五一首を収録する。そのうち、陸游の三十歳以前の作品の詩題または詩句の中に、「雨」の字は確認できない<sup>③</sup>。

紹興二十五年(一一五五)春、陸游は山陰で五古「春晚簡陳魯山(春晚 陳魯山に簡す)」「劍南一」を書く。時に三十一歳。その中に「向來苦摧傷、零雨雜飛霰(向來 苦<sup>はなは</sup>だ摧

① 朱東潤『陸游研究』(中華書局、一九六二)「陸游作品的分期」参照(一一三頁)。

② 『劍南詩稿』巻一の巻頭に置かれているのは、五古「別曾學士」である。錢仲聯『劍南詩稿校注』題解によれば、紹興十二年、十八歳の時の作。ただし小川環樹氏は、同詩の制作時期を「紹興二十三年(一一五三)またはそれ以前」とする。小川環樹『陸游』「陸游の詩学とその変化」三一頁参照。

③ 淳熙十四年、陸游は嚴州で二十卷本『劍南詩稿』を編集し、その際、大量の作品を破棄している。そのため、現存しない雨の詩が存在した可能性は否定できない。「跋詩稿」(渭南二七)参照。…「此予丙戌以前詩二十之一也。及在嚴州再編、又去十之九。然此殘原稿、終亦惜之、乃以付子聿。」

傷し、零雨れいう 飛霰ひせんを雜まじう」という句が見える。制作時期不明の作品を除けば、これが現存する陸游の詩句に於ける「雨」の字の初出である。「雨」の字にこだわって見る限り、陸游の雨の詩の創作は、三十代から始まることになる。

紹興二十九年（一一五九）、陸游は羅源らげん〔福建省〕で七律「雨晴遊洞宮山天慶觀、坐間復雨〔雨晴れて洞宮山の天慶觀に遊び、坐する間に復た雨あり〕」（劍南一）を書く。時に三十五歳。やはり制作時期不明の作品を除けば、これが現存する陸游の詩題に於ける「雨」の字の初出である。

しかし『劍南詩稿』卷一所収の作品には、詩題詩句共に、「夜雨」「晚雨」「夕雨」「雨夜」「雨夕」など、夜の雨または夜の夜に関する表現は確認できない。また、「雨声」「聞雨」「聽雨」など、雨の音に関する表現も確認できない。すなわち、「夜雨を聴く」という主題を明示する作品は、まだ確認できない<sup>①</sup>。それでも『劍南詩稿』卷一所収の作品の中に、すでに「零雨」「風雨」「看雨」「復雨」「急雨」「雷雨」「春雨」「冒雨」「小雨」「秋雨」「帶雨」「細雨」「大雨」「苦雨」「花雨」「煙雨」「無雨」「雨晴」「雨点」「雨中」「雨露」「雨来」「雨窓」「雨余」「雨潤」「雨霽」「雨止」などの多様な表現を見いだすことができる<sup>②</sup>。この段階で、陸游の「雨の詩人」としての基礎は、すでに十分に形成されていると言つてよい<sup>③</sup>。

乾道二年（一一六六）、陸游は北伐の責任者である張浚ちやうしゆんを弁護する言動を非難されて免職となり、故郷の山陰に帰る。なお、同じ年には師の曾幾が世を去っている<sup>④</sup>。

乾道三年（一一六七）、陸游は山陰で七律「遊山西村〔山西の村に遊ぶ〕」<sup>⑤</sup>（劍南一）を書く。この詩は陸游の初期の代表作の一つであるが、雨の詩ではないので、ここでは詳述しない。その「柳暗花明又一村」の句は、後に、苦境を脱して新しい境地にたどり着く、という意味の慣用表現となるが、当時の陸游は、先の見えない中で暗中模索の日々を過すごしていたのではないかと想像される。

① もっとも、隆興元年秋（三十九歳）の七絶「買魚」（劍南一）其二には「雨窓喚起醉中眠」の句がある。雨の音のために眠りから呼び覚まされるという意味であるから、これが雨音をうたう最初の例と考かんえることができるかも知れない。また同年秋の五律「幽居」（劍南一）には「雨挾清砧急」の句がある。しかしいずれにせよ、雨を聴くという主題は、まだ萌芽の段階にとどまっていることに変わりはなく、また、これらを夜雨の詩と確定することもできない。

② 詩題か詩句のいずれかに見える表現。ここでは一字のものに限る。また品詞を問わない。

③ 参考までに、乾道元年七月に書かれた七古「夜宿陽山磯、將曉大雨北風甚勁、俄頃行三百余里、遂抵雁翅浦」（劍南一）の冒頭は「五更顛風吹急雨、倒海翻江洗殘暑」と明け方の風雨をうたい、すでに後の「十一月四日風雨大作」（劍南二六）を思わせる表現が見える。

④ 陸游は曾幾のために「曾文清公墓誌銘」（渭南三二）、「跋曾文清公奏議稿」「跋曾文清公詩稿」（以上渭南三〇）などを書いている。

⑤ 陸游「遊山西村」：「莫笑農家臘酒渾、豐年留客足鷄豚。山重水複疑無路、柳暗花明又一村。簫鼓追隨春社近、衣冠簡朴古風存。從今若許閑乘月、拄杖無時夜叩門。」『宋詩選注3』一一二頁、松浦友久編『統校注唐詩解釈辞典〔付〕歷代詩』（大修館書店、二〇〇一）一〇一二頁参照。

乾道四年（一一六八）もしくはその翌年<sup>①</sup>、陸游は山陰で五律「聞雨〔雨を聞く〕」<sup>②</sup>（劍南二）を書く。時に四十四歳（四十五歳）。この詩は、現存する陸游の詩の中で、「夜雨を聴く」という主題を明示する最初の作品である<sup>③</sup>。第一期の夜雨の詩は、事実上ここから始まると言ってよい。

慷慨心猶壯	慷慨 <sup>こうがい</sup>	心は猶なお壯 <sup>さか</sup> なるも
蹉跎鬢已秋	蹉跎 <sup>さた</sup>	鬢は已に秋なり
百年殊鼎鼎 <sup>④</sup>	百年 <sup>ひゃくねん</sup>	殊 <sup>ことごと</sup> に鼎鼎 <sup>ていてい</sup>
万事祇悠悠	万事 <sup>ばんじ</sup>	祇 <sup>ただ</sup> だ悠悠 <sup>ゆうゆう</sup>
不悟魚千里		魚の千里なるを悟らずして
終歸貉一丘 <sup>⑤</sup>	終 <sup>つい</sup> に貉 <sup>むじな</sup>	の一丘に歸す
夜闌聞急雨	夜 <sup>よ</sup>	闌 <sup>たけなわ</sup> にして 急雨 <sup>きゅうう</sup> を聞き
起坐涕交流	起坐 <sup>きざ</sup> すれば	涕 <sup>なみだ</sup> 交 <sup>こも</sup> ごも流る

世を嘆き憤る心は今でもなお盛んだが、  
思うように行かぬうちに、鬢の毛はずでにごま塩になってしまった。

百年の時もあつと言う間に過ぎ去り、  
万事はただただ果てしてもない。

魚が池の中を千里も回遊するようなものだとも知らず、  
〔駆け回った揚げ句〕結局むじなのように、またもとの古巢へ戻って来た。

夜が更けた頃、にわか雨の音を聞き、  
寢床の上に取り直ると、涙がとめどなく流れ落ちる。

深夜、寝つかれず物思いにふけっていた詩人は、突然戸外の雨の音を耳にする。それは、詩人の心に激しい感情を呼びさまし、抑え切れない悲憤は熱い涙となって流れ落ちる。陸游は、失地回復の主張を生涯うたい続けた、情熱的な詩人として知られる。しかしこの詩では、その悲願の実現もかなわず、無為に故郷に帰り晩年を迎えたことへの絶望感が、夜雨の音に伴奏され、鮮明に表出されている。

この詩が書かれた時点で、陸游はまだ四十代の半ばである。結果的に陸游はさらに四十年も生きるものであり、またこの直後に始まる蜀での生活は、彼の人生に新しい展望と活力

① 錢仲聯『劍南詩稿校注』「僧房飯榻（劍南二）題解：「此詩以下凡十首均是乾道四、五年中作、難於確定其究屬四年抑五年。」『劍南詩稿』卷二では、「聞雨」は「僧房飯榻」の直後に置かれている。

② 前野直彬『陸游』六〇頁、石川忠久『陸游一〇〇選』五六頁および拙稿「雨の詩人 陸放翁」参照。

③ これ以前、乾道三年冬には、七古「夜聞松声有感」（劍南二）が書かれている。これは、陸游が詩題で外界の物音を「聞く」ことを主題として明示する最初の作品である。もつとも、七律「聞武均州報已復西京」（劍南一）のように、何らかの情報を「聞いた」という詩は、すでに巻一にも見える。

④ 陶淵明「飲酒」其三：「鼎鼎百年内、持此欲何成。」龔斌『陶淵明集校箋（修訂本）』（上海古籍出版社、二〇一一）卷三。一海知義『陶淵明』（岩波書店、一九五八）四一頁参照。

⑤ 『関尹子』字篇：「以盆為沼、以石為島、魚環遊之、不知其幾千万里而不窮也。」また『漢書』「楊惲伝」：「古与今、如一丘之貉。」

をもたらす。万事休すどころか、詩人陸游の人生は、正にこれから始まるうとしているのである。しかし、この時の陸游は、自分にそうした未来のあることを知る由もなかったであろう。三十四歳で福州の主簿となつてから、かれこれ十年。その間の東奔西走の努力も、すべては無意味であった。自分の人生は、徒勞のうちに終わろうとしている。そうした実感が、こうした無念の述懐を生んだと思われる。この詩は、陸游の前半生の終焉を記念する詩として位置づけることができるであろう①。

しかし「夜雨を聴く」詩として見た場合、この詩は、あくまでも出発点である。なぜなら、夜雨の表現はごく簡潔であり、まださほどの深さは感じられない。また「聞雨」と題するものの、詩の主題は必ずしも夜雨それ自体ではなく、詩人の悲憤の吐露である。加えて、詩題も「聴雨（自覚的に雨の音を聴く）」ではなく、「聞雨（雨の音が自然に聞こえて来る）」である。突き放した見方をするならば、この詩に於ける夜雨は、作者の激情を誘発するある種の効果音に過ぎない。深夜の急雨が詩人の悲憤の涙を誘発した、というに過ぎず、夜雨に静かに耳を傾け、瞑想する、といった境地には、まだ遠い。

乾道六年（一一七〇）夏、陸游は山陰を離れ夔州に向かう。『入蜀記』の旅の始まりである。旅の途中、陸游は七律「雨中泊趙屯有感（雨中 趙屯に泊して感有り）」（劍南二）などの雨の詩を書いている②。また『入蜀記』では、三箇所に「夜雨」に関する記述が見える③。冬十月、陸游は夔州に到着。蜀での生活が始まる。

乾道八年（一一七二）、夔州の任期が満了した陸游に、四川宣撫使の王炎から勧誘があった。王炎は主戦派の重鎮で、当時、国境線に近い南鄭で金と対峙していた。陸游は喜んで南鄭に赴き、王炎の幕僚となる。陸游の南鄭での生活は半年余りのことに過ぎないが、それは陸游の生涯のうち最も昂揚した時期となった。代表作の一つである七古「山南行」（劍南三）は、この時期に書かれている④。

しかし喜びもつかの間、同年十月、王炎は臨安に召還される。南鄭の幕府は解散し、陸游は新しく成都府安撫司參議官に任命される。

同年十一月、南鄭を離れ成都に赴く途中、劍門関けんもんかんを通りかかった陸游は、七絶「劍門道中遇微雨（劍門の道中にて微雨に遇う）」⑤（劍南三）を書く。時に四十八歳。この詩は、大きな人生の転機を迎えた陸游の、詩人としての自覚をうたう重要な作品であるが、すでに多くの論考がある上、「夜雨を聴く」という主題とは関連性が乏しいので、ここでは詳述しない。「此の身 詩人たるべきや」という思いを胸に、陸游は蜀への関門を通り抜け、

① 多作で知られる陸游であるが、乾道四年から五年にかけての詩は、この作品も含め、わずか十首しか残されていない。このことは、陸游のこの時期における創作力の沈滞を思わせる。仮に詩が全く書けなかったのではなく、詩は書かれたものの、後で『劍南詩稿』をまとめる際に削除されたのだとしても、残すに値する良い詩が書けなかったことに変わりはないであろう。

② 前野直彬『陸游』六七頁、小川環樹『陸游』「旅行記と詩 その一」五八頁参照。

③ 卷二、七月十一日。卷三、七月二十七日。卷五、九月九日。

④ 『宋詩選注3』一一五頁参照。訳注担当は筆者。

⑤ 陸游「劍門道中遇微雨」：「衣上征塵雜酒痕、遠遊無處不消魂。此身合是詩人未、細雨騎驢入劍門。』『宋詩選注3』一一〇頁、小川環樹『陸游』「詩の風景・ロバの背の詩人」九頁、拙稿「雨の詩人陸放翁」および趙齊平原著、三野豊浩訳「細雨 驢に騎りて 劍門に入る 陸游の『劍門の道中 微雨に遇う』詩について」（愛知大学語学教育研究室『言語と文化』第十一号、二〇〇四）その他を参照。

人生の新たな段階へと足を踏み入れて行く<sup>①</sup>。

乾道九年（一一七三）春、陸游は成都で七古「三月十七日夜醉中作」（三月十七日夜醉中の作）<sup>②</sup>（劍南三）を書く。時に四十九歳。この詩は、蜀に於ける夜雨の詩の典型例である。

前年 白浪如山寄豪壯 去年射虎南山秋 <sup>③</sup> 夜歸急雪滿貂裘 今年摧頽最堪笑 華髮蒼顏羞自照	前年 白浪 去年 夜歸れば 今年 華髮 誰か知る	鯨を鱸 <small>なます</small> にす 山の如く 虎を射る 急雪 摧頽 蒼顏 酒を得れば	東海の上 豪壯を寄す 南山の秋 貂裘に満つ 最も笑うに堪えたり 自ら照らすを羞ず 尚お能く狂し
脱帽向人時大叫 逆胡未滅心未平 孤劍床頭鏗有声 破駅夢回灯欲死 打窓風雨正三更	逆胡 孤劍 破駅 窓を打つ	未だ滅せざれば 床頭に 鏗として 灯 死せんと欲す	未だ平らかならず 鏗として声有り 死せんと欲す 正に三更

一 去年は、東海のほとりで鯨をなますにした。

白波は山のように押し寄せ、何とも豪快な気分。

去年は、秋の終南山で虎を射止めた。

夜、帰って来る途中、折からの雪が皮衣にいっぱいになった。

それがどうしたことだ、今年の衰えぶりは、何ともお笑い草だ。

真つ白な頭と青白い顔は、自分で鏡に映すのも気恥ずかしい。

しかし誰が知ろうか、酒を飲めばそれでも狂おしい気持ちになり、

帽子を脱ぎ捨て、人に向かって大声で叫ぶことを。

朝廷に背くえびすが滅びないうちは、心は穏やかにはなれない。

一振りの劍が、枕元で鋭くうなっている。

粗末な宿場駅で夢から覚めると、ともし火は消えかかっている。

窓に打ち付ける激しい嵐、時刻はちょうど真夜中。

① 参考までに、入谷仙介氏は、この詩は陸游が江西詩派のくびきから解放されたことの喜びを戸惑いがちにうたったものである、という見方をしている。入谷仙介「此身合是詩人未——陸游の劍門体験の意義——」参照。同論文は『詩人の視線と聴覚 王維と陸游』所収。

② 前野直彬『陸游』八五頁、石川忠久『陸游一〇〇選』八九頁参照。

③ この詩をはじめ、陸游は南鄭で虎を退治した思い出を繰り返している。しかし、それらの詩の内容には矛盾が多く、事実かどうか疑わしい。『宋詩選注3』所収「醉歌」注参照（二八八頁以下）。

また蔣凡「打虎膾炙説浪漫、忠心報国現実魂——陸游詩歌『打虎』意象小議」参照。同論文は中国陸游研究会・漢中市陸游学会編『陸游与漢中』（上海古籍出版社、二〇一三）所収。

詩の冒頭四句は、勇壮な活躍をした昔を、誇張を交えつつ回想する<sup>①</sup>。次いで、そうした昔と比べての現在の衰えぶりを、自嘲気味にうたう。それから詩人は、酒の力を借り、ひとしきり慷慨の気を吐く。「酔中の作」ということもあり、全体に熱気に満ちあふれた感じのする作品であるが、特に詩の後半には激しい言葉が所狭しと並べられ、荒れ狂わんばかりである。真夜中の「打窓風雨」という表現は、前掲「聞雨」の「急雨」を更に激烈な方向へと発展させたものであり、これに比べれば「聞雨」の方がよほど穏やかに感じられる。言うまでもなく、この詩に於ける詩人は「静かに夜雨を聴く」という心境には程遠い。

乾道九年秋、陸游は嘉州で七律「夜雨感懷」（劍南四）を書く。この詩は、陸游の詩題および詩句に於ける「夜雨」という詩語の初出であるが、「夜雨を聴く」詩ではないので、ここでは紹介しない<sup>②</sup>。

五十代に入ると、激情はある程度後退し、夜雨の表現もある程度落ち着きを見せるようになる。しかし時には、相変わらず激しい感情のほとばしりも見られる。

淳熙元年（一一七四）夏、陸游は蜀州で雜古「雨声」（劍南五）を書く。時に五十歳。

暑氣滿天地	暑氣 <small>しよき</small> 天地に満ち
薄暮加煩促	薄暮 <small>はくぼ</small> 煩促 <small>はんそく</small> を加う
清風吹急雨	清風 急雨 <small>きゅうう</small> を吹き
集我北窓竹	我が北窓の竹に集う
竹声蕭蕭固自奇	竹声 <small>ちくせい</small> 蕭蕭 <small>しやうしやう</small> として固 <small>もと</small> より自 <small>おのずか</small> ら奇なるに
況得雨声相發揮	況 <small>い</small> んや雨声 <small>うせい</small> を得て相 <small>あ</small> い發揮するをや
令人忽憶雲門寺	人をして忽 <small>たちま</small> ち憶 <small>おも</small> わしむ 雲門寺 <small>うんもんじ</small>
半夜長松墮雪時	半夜 長松 <small>ちやうしやう</small> 墮雪 <small>だせつ</small> の時を

暑さが天地に満ちあふれ、

日暮れ時になつて蒸し暑さがいや増す。

そこへ涼しい風がにわか雨を吹きつけ、

わが家の北の窓辺にある竹やぶに集まつて来た。

竹の葉はサーサーと鳴り、おのずと珍しい感じがするというのに、

ましてやそれに雨の音が加わり、お互いに響き合うのだから、なおさらのこと。

その音は、急に私に思い出させてくれた。その昔、故郷の雲門寺で、

真夜中に長い松の枝から雪が落ちた時のことを。

① 淳熙十三年に書かれた七律「書憤」（劍南一七）では、より現実に次のようにうたう。：「樓船夜雪瓜洲渡、鉄馬秋風大散関。」『宋詩選注3』一六〇頁参照。訳注担当は筆者。

② 「夜雨感懷」：「簾疎夜雨侵灯暈、枕冷秋風通角声。」ついでながら、この詩の二首前に、小川環樹氏がその『陸游』「静寂・黙想・雨」一一二八頁で紹介している五律「晚雨」（劍南四）がある。なお、乾道八年に書かれた五古「春雨」（劍南三）に「江頭一夜雨」という表現が見える。しかしこれは「一夜の雨」の例であり（↓一〇一頁）、厳密には「夜雨」の例とは言い難い。



この詩は、陸游が詩題に「雨声」すなわち雨の音という主題を明示する最初の作品である<sup>①</sup>。前半五言、後半七言という構成は珍しいが、蘇軾などにも例があり、必ずしも陸游の独創ではない<sup>②</sup>。夏の夕暮れ、突然のにわか雨が暑さをはらってくれる。雨滴はパラパラと竹の葉の上に落ち、心地よい音をたてる。この詩の主題は「雨声」それ自体であり、詩人は自覚的に雨を聴きながら、その音を楽しんでいる。ただし、その楽しみ方はまだしも外面的、感覚的な次元にとどまっており、さほど内面的な深さは感じられない。また時刻も夕方であり、深夜の雨を聴いているわけではない。

序章で見たように、各種の植物の葉の上に落ちる雨の音をうたうことは唐詩以来の蓄積があり、陸游の詩もその影響の下に書かれていると考えられる。しかし少なくともこの詩は、陸游がそうした主題に挑戦した早い例の一つとして特筆されるであろう。それにして、夏の雨を聴いて冬の情景を思い浮かべる、というのが面白い。

淳熙三年（一一七六）二月、陸游は成都で七古「中夜聞大雷雨（中夜 大雷雨を聞く）」（劍南七）<sup>③</sup>を書く。詩題から想像されるように、前掲「三月十七日夜醉中作」と同系統の激しい雷雨の詩であり、やはり慷慨の夜雨の典型例である。

淳熙四年（一一七七）三月、陸游は成都で七律「夜聞雨声（夜 雨声を聞く）」（劍南八）を書く。

淳熙四年秋九月、陸游は成都で五律「暮秋」（劍南九）二首を書く。其二に「聽雨瀟湘夜、飛鷹鄠杜秋（雨を聴く 瀟湘の夜、鷹を飛ばす 鄠杜の秋）」とあり、これが陸游の詩に於ける「聽雨」という表現の初出である。

また同年十月、陸游は七律「夜雨有感」（劍南九）を書く。その冒頭は「北風吹雨暗江郊（北風 雨を吹きて江郊を暗くす）」とうたうが、夜雨を「聴く」という表現はない。

同年冬十二月、陸游は成都で五律「枕上」<sup>④</sup>（劍南九）を書く。時に五十三歳。これは、陸游の蜀での生活が終わりに近づいた頃の作品である。

枕上三更雨	枕上 三更の雨
天涯万里遊	天涯 万里の遊
虫声憎好夢	虫声 好夢を憎み
灯影伴孤愁	灯影 孤愁に伴う
報国計安出	報国の計 安くにか出でん
滅胡心未休	滅胡の心 未だ休まず

① これ以前、乾道九年に書かれた五律「道院」（劍南四）に「雨声清夢境、灯影伴吟魂」とある。これが、陸游の詩句における「雨声」の初出である。（↓九九頁、一〇六頁）

② 蘇軾「法惠寺橫翠閣」など。『宋詩選注2』三六頁参照。

③ 「中夜聞大雷雨」：「雷車駕雨龍尽起、電行半空如狂矢。中原腥羶五十年、上帝震怒初一洗。」朱東潤『陸游選集』（上海古籍出版社、一九六二）四二頁参照。もともと同じ淳熙三年二月には七律「雨」（劍南七）のような端正な作品も書かれているから、この時期の陸游の心が激情のみに支配されていたわけではないことがわかる。同詩は『宋詩別裁集』卷六所収。

④ 朱東潤『陸游選集』六三頁参照。

明年起飛將<sup>①</sup> 明年 飛將を起たしめ  
更試北平秋 更に北平の秋を試みん

寢床の中で聞く真夜中の雨、  
はるか地の果てまでの万里の旅。  
虫の鳴き声は、私がい夢を見るのを邪魔し、  
ともし火の影は、孤独な愁いに寄り添う。  
国に報いるための計略は出しようもないが、  
えびすを滅ぼそうという心は今なお衰えない。  
来年には是非とも李広のような大将を起用し、  
再度の北伐を試みてほしいものだ。

この詩は、厳密には「夜雨を聴く」詩ではないかも知れないが、この時期の陸游の精神状態を端的に物語る作品と考えられるので、紹介することにした。この詩の表現は比較的穏やかで、同じ五律でも前掲「聞雨」(「↓一二三頁」)ほどの悲愴感はなく、また前掲「三月十七日夜醉中作」(「↓二四頁」)ほどの激烈さもない。それでも、詩人の心は相変わらず暗く沈んでいる。床に就いたものの、「孤愁」につかれた詩人は、なかなか眠ることができない。そんな時、またしても憂国の情がわき起こる。寂しく降る冬の雨の中、詩人は依然として「報国」と「滅胡」という悲願の成就に思いをめぐらしている。詩人の耳に、真夜中の雨の音はおのずと聞こえていたであろう。しかしそれは、この詩においては作品の主題ではなく、伴奏に過ぎない。詩人の想念は失地回復でいっぱいになっており、夜雨の音に心静かに耳を傾ける余裕などないかのようなのである。  
総じて第一期の夜雨の詩に於いては、自覚的に夜雨の音に耳を傾け、そこから精神的な喜びを見いだす、という姿勢は、まだ明確に打ち出されていない。若い頃、特に蜀にいた頃の陸游は、失地回復の悲願の実現に心を奪われていたため、夜雨はまださほど親しい存在ではなかったであろう。

### 第二期の「夜雨を聴く」詩(淳熙五年から淳熙十六年まで)

淳熙五年(一一七八)春、陸游は蜀を離れ、東に帰る。  
秋、陸游は臨安に到着。ほどなく、故郷の山陰に帰る。

同年冬、陸游は山陰で七絶「冬夜聴雨戲作(冬夜 雨を聴き戯れに作る)」<sup>②</sup>(劍南一〇)二首を書く。時に五十四歳。陸游の夜雨の詩は、ここに来て大きな転機を迎える。

少年交友尽豪英 少年の交友 尽く豪英  
妙理時時得細評 妙理 時時 細かに評するを得たり

① 『漢書』「李広伝」：「於是上乃召拜広為右北平太守。…広在郡、匈奴号曰漢飛將軍、避之、数歳不入界。」なお李広の伝記としては、この他『史記』「李將軍列伝」がある。  
② 其二は石川忠久『陸游一〇〇選』一四一頁参照。

老去同參惟夜雨　　老い去りて同に参ずるは　　惟だ夜雨のみ  
焚香臥聽画簷声　　香を焚き　　臥して聴く　　画簷の声

若い頃、交友関係を持った仲間たちは、豪放磊落な英傑ばかり。  
折にふれては、玄妙な道理を事細かに語りあうことができた。  
今ではすっかり年をとり、友達づきあいをできるのは、夜の雨ばかり。  
香を焚き、横になつて、軒先にしたたる雨の音に耳を傾けている。

遠簷点滴如琴筑　　簷を遠る点滴　　琴と筑との如し  
支枕幽齋聽始奇　　枕を幽齋に支え　　聴きて始めて奇とす  
憶在錦城歌吹海　　憶う　　錦城の歌吹の海に在り  
七年夜雨不曾知　　七年　　夜雨　　曾て知らざりしを

軒先からしたる雨だれの音は、まるで琴や筑の音色のようだ。

ひっそりした書齋で枕に身を横たえ、その音を聴いて、始めて素晴らしいと感じた。

思い起こせば、自分はこれまで成都で歌舞音曲にひたり切つて暮らしており、

七年の間、夜雨のこうした趣を知らずにいたのだ。

其一。詩人は初冬の夜雨に耳を傾けながら、若き日の遠く過ぎ去つたことを思い、かつての充実した日々をなつかしむ。ここで陸游が具体的に誰のことを回想しているのかはわからない。いずれにせよこの詩からは、当時の陸游の孤独と寂寥が伝わって来る。この頃から陸游は、夜雨の音をこれまでより自覚的に聴くようになり、それを、自分の孤独を癒やしてくれ、自分の心を理解してくれる、大自然の伴侶と見なすようになる。なお、陸游の雨の詩に於いて「焚香聽雨」すなわち香を焚き雨を聴く、という主題が最初に明確に打ち出されるのは、おそらくこの詩においてであり<sup>①</sup>、その意味でも特筆すべき作品であると思われる。

其二の後半は、成都時代の回想である。当時は、失地回復という理想を追求することに余念のない日々であった。世俗的関心が強く、また華やかな都会の生活に明け暮れていたため、夜雨の音の面白さは陸游の関心から遠かつたのである。この連作以前に、陸游はすでに数多くの雨の詩を書いているだけに、故郷に帰ってはじめて夜雨の音の妙味を理解できた、という述懐は貴重である。この連作は、陸游の夜雨の詩の転換点であり、これ以後の夜雨の詩の新たな出発点と考えることができる。これ以後、同じ主題は繰り返したわれ、時と共に厚みを増して行く。

① これ以前、淳熙三年春、陸游は成都で七律「雨」（劍南七）を書き、その領聯に「紙帳光遲饒曉夢、銅炉香潤覆春衣」とある。この詩は、雨の日の焚香をうたう早い例であるが、詩の中に「雨」の字は見えず、「雨を聴く」こともうたわれていない。淳熙四年春、陸游は成都で七律「夜聞雨声」（劍南八）を書き、その首聯に「高簷夜雨瀉淋浪、起擁寒衾旋炷香」とある。あるいはこの詩は、「香を焚き雨を聴く」ことをうたった最初の作品かも知れない。しかしこの詩は、ざあざあ降る晩春の夜雨の中の焚香をうたつていて、落ち着いた雰囲気の中でしみじみと雨の音を聴く、という表現とは一線を画する。

その後、陸游は建安<sup>①</sup>、次いで撫州に赴任する。

淳熙七年（一一八〇）秋八月、陸游は撫州で七絶「雨夜」<sup>②</sup>（劍南一二）を書く。季節は異なるが、前掲「冬夜聽雨戲作」と同趣向の作である。

庭院蕭条秋意深	庭院 <small>ていゐん</small> 蕭条 <small>しやうじょう</small> として 秋意 <small>しゅうい</small> 深し
銅炉一炷海南沈	銅炉 <small>どうろ</small> 一炷 <small>いつしゆ</small> 海南 <small>かいなん</small> の沈 <small>ちん</small>
幽人聽尽芭蕉雨	幽人 <small>ゆうじん</small> 聽 <small>き</small> き尽 <small>じん</small> くす 芭蕉 <small>ばしやう</small> の雨
独与青灯話此心	独 <small>ひと</small> り青灯 <small>せいとう</small> と此 <small>こゝ</small> の心 <small>こゝろ</small> を話 <small>はな</small> す

庭はひっそりとしてももの寂しく、秋の気配は深まりを見せている。

銅製の香炉に、舶来の沈香を一本置いて火をともす。

ひっそりと世を避けて暮らす私は、芭蕉の葉にしたたる雨の音を聴き尽くし、

ただ一人、青白く輝くともし火と、自分の心境を語りあっている。

小官といえども官は官であり、真正正銘の隠者ではない。しかしここで陸游は自分を「幽人」と呼び、世捨て人を気取っている<sup>③</sup>。詩人の疎外感の表れであろうか。

同年冬、陸游は撫州の任期が満了して帰郷する。

淳熙八年（一一八一）三月、陸游は弾劾され、新しい任命を取り消される<sup>④</sup>。これ以後、陸游は淳熙十三年春まで山陰で閑居生活を送る<sup>⑤</sup>。

淳熙八年四月、陸游は山陰で七絶「小園」（劍南一三）四首を書く。時に五十七歳。其一には、陶淵明の詩集を読むのを途中でやめ、「微雨」に乗じて畑仕事に出かける詩人の

① 淳熙六年（一一七九）七月、陸游は建安で七絶「秋懷」（劍南一一）二首を書く。其一：「暮年身世転悠悠、又向天涯見早秋。昨夜月明今夜雨、閑人何事総成愁。」これは夜雨の詩であるが、雨の音には触れていない。

② 淳熙七年（一一八〇）四月、陸游は撫州でもう一首、「雨夜」（劍南一二）と題する七絶を書いていく。：「両鬢新霜換旧青、客遊身世等浮萍。少年樂事消除尽、雨夜焚香誦道經。」二首の「雨夜」は連作ではないが、ほぼ同工異曲の作である。

③ 「幽人」の語感については、佐藤保『漢詩のイメージ』（大修館書店、一九九二）第三部第一章「隱棲・隱遁と幽人」の項参照（三〇三頁）。：「幽人といわれる人びとも、ほとんど隠者と同種の人と考えてかまわない。：：しいて隠者と幽人の語感の相異を考えてみれば、隠者の方がある種の社会的な評価―尊敬―を帯びるのに対して、幽人はもつと漠然とした存在といえる。：：隠者ほどには、必ずしもその隠遁の生活様式が徹底して、人びとの評価もあまいである。」

④ 七律「春晚風雨中作」（劍南一三）は、弾劾を受けた直後の感慨をうたう。ただしこの詩は内心の葛藤を表出することが中心で、「風雨」は背景に過ぎない。小川環樹『陸游』「四季の詩 その二」一九七頁および村上哲見『円熟詩人陸游』第七章「出仕、失脚、出仕、失脚」一三〇頁参照。

⑤ 参考までに、小川環樹氏は陸游の淳熙七年と淳熙八年の作品に注目し、詳細な紹介を試みている。小川環樹『陸游』「四季の詩 その一」「四季の詩 その二」参照。

姿がうたわれているが<sup>①</sup>、夜雨の詩ではないので、ここでは詳述しない。

淳熙十年（一一八三）、陸游は山陰で五絶「移花遇小雨、喜甚、為賦二十字」〔花を移して小雨に遇い、喜ぶこと甚しく、為に二十字を賦す〕<sup>②</sup>（劔南一五）を書く。これは必ずしも夜雨を「聴く」詩ではないが、閑居生活の中で春夜の雨への親しみをうたっており、印象深い。

六十代に入ると、陸游の夜雨の詩はより円熟した風格を持つようになり、安定感が増して来る。それに伴い、詩人と雨との間に、より一層親しい関係が形成される。

淳熙十二年（一一八五）夏、陸游は山陰で五古「夜聴竹間雨声」〔夜 竹間の雨声を聴く〕<sup>③</sup>（劔南一七）を書く。時に六十一歳。

解醒不要酒	醒を解くに	酒を要せず
聴雨神自清	雨を聴けば	神 自ら清し
治疾不要藥	疾を治すに	藥を要せず
聴雨体自輕	雨を聴けば	体 自ら輕し
我居万竹間	我 万竹の間に居り	
蕭瑟送此声	蕭瑟として	此の声を送る
焚香倚蒲团	香を焚き	蒲团に倚り
袖手坐三更	手を袖にして	三更に坐す
人苦不自覺	人 苦なるを自ら覺えず	
忿欲投隙生 <sup>④</sup>	忿欲 隙生に投ず	
起歔簷間雨	起ちて簷間の雨を敲り	
更与此君盟	更に此の君と盟せん	

二日酔いをさますのに、迎え酒はいらない。

雨の音を聴けば、心は自然にすつきりする。

病気を治すのに、葉はいらない。

雨の音を聴けば、体は自然に軽くなる。

- ① 陸游「小園」其一：「小園煙草接隣家、桑柘陰陰一徑斜。臥詭陶詩未終卷、又乘微雨去鋤瓜。」小川環樹『陸游』「書齋・菜園・菓草」一四九頁、一海知義『陸游詩選』（岩波書店、二〇〇七）一二〇頁、『宋詩選注3』一四八頁および拙稿「雨の詩人 陸放翁」その他を参照。この詩をはじめ、陶淵明に対する愛着は、陸游の詩文にしばしば表現されている。陸游の陶淵明受容については、一海知義「陸放翁 読陶詩小考」参照。同論文は『一海知義著作集2 陶淵明を語る』（藤原書店、二〇〇八）所収。
- ② 陸游「移花遇小雨、喜甚、為賦二十字」：「独坐閑無事、燒香賦小詩。可憐清夜雨、及此種花時。」一海知義『陸游詩選』一四六頁参照。
- ③ 小川環樹『陸游』「静寂・黙想・雨」一二七頁。：「六十一歳の作に『夜 竹間の雨声を聴く』の一首がある（『詩稿』卷十七）。：作者は竹林の中に住んでいる。「此の声」とは竹の葉にふる雨の音であろう。「蒲团」は仏教僧のすわる円座で、彼は僧ではないが、その上で静座したのでらしい。手を袖の中に入れたまま、精神を集中し夜ふけまで動かない。：これを読むと、陸游に在っては、雨の音は心のわずらいをすべて忘れさせ、精神を高めるはたらきをするものであつて、特別の意義が与えられていると知る。」
- ④ 「人苦」以下の二句は難解であるが、人生を苦の連鎖とみる仏教の思想によるものであろうか。

私はたくさんの竹が生えている林の中に住み、  
もの静かな気持ちでこの音を聴いている。

香を焚き、敷き物にすわり、手を袖にして、

真夜中の書齋に身を置いている。

人は人生が苦の連鎖とも知らず、

つかの間の人生を、怒りと欲の中に身を投じて過ごしている。

立ち上がって軒先の雨をすすり、

「この君」とより一層深い契りをかわずにしよう。

夜更け、人の寝静まった頃、詩人は香を焚き、竹の葉に降り注ぐ夜の雨に耳を傾けてい  
る。当時の陸游は、長い閑居生活の只中であつた。夜の雨に耳を傾ける時間は、十分にあ  
つたであろう。この時点で、陸游と雨の関係がいかに近しいものになつていたか、うかが  
い知ることができる。

淳熙十三年（一一八六）春、陸游は権知嚴州事に任命される。新しい任官の挨拶のため、  
陸游は数年ぶりに臨安を訪れる<sup>①</sup>。この時陸游は、七律「臨安春雨初霽」〔臨安に春雨 初  
めて霽る〕<sup>②</sup>（劍南一七）を書く。時に六十二歳。

世味年来薄似紗  
誰令騎馬客京華  
小樓一夜聽春雨  
深巷明朝売杏花  
矮紙斜行閑作草  
晴窗細乳戲分茶  
素衣莫起風塵嘆<sup>③</sup>  
猶及清明可到家

世味 年来 薄きこと紗に似たり  
誰か馬に騎りて 京華に客たらしむる  
小樓に一夜 春雨を聴き  
深巷に明朝 杏花を売る  
矮紙 斜行 閑に草を作し  
晴窓 細乳 戯れに茶を分かつ  
素衣 起こす莫かれ 風塵の嘆き  
猶お清明に及びて家に到るべけん

世の中に対する興味は、ここ数年で薄絹のように薄くなっている。  
それなのに、一体誰が私を馬に乗せ、花の都へ旅立たせたのか。

小さな高殿で一晩中、春雨の音に耳を傾けていたところ、

奥まった路地には、翌朝になると、杏の花売りの呼び声が聞こえて来た。

短い紙に、ひまにまかせて斜めに草書を書きつけ、

明るい光のさす窓辺で、細かな泡を立てながら、たわむれに茶を立てる。

白い衣よ、都の塵ほこりで黒く汚れてしまふ、と嘆くことはないぞ。

清明節の頃までには、故郷の家にとどり着けるだろうから。

① 『宋史』「陸游伝」：「起知嚴州、過闕陸辞。上諭曰、『嚴陵山水勝処、職事之暇、可以賦詠自適。』」  
② 『瀛奎律髓』卷十七「晴雨類」。『宋詩紀事』卷五十三。小川環樹『陸游』「静寂・黙想・雨」一三四  
頁、『宋詩選注3』一五一頁、拙稿「雨の詩人 陸放翁」その他を参照。  
③ 晋・陸機「為顧彦先贈婦二首」〔文選〕卷二十四 其一：「京洛多風塵、素衣化為緇。」

若い頃の科挙の落第に始まり、すでに何度も挫折を経験し、また、今ではすっかり農村での生活に慣れ親しんでいる陸游のこと。もはや役人としての前途にさほどの期待はなく、繁華な都の様子に興味を引かれることもない。首聯には、そうした恬淡とした心境が表現されている。

頷聯。都に着いた詩人は、奥まった路地にある旅館に宿泊したのであろうか<sup>①</sup>。夜になり、折から降る春の雨に、一晚中耳を傾けている<sup>②</sup>。翌朝、聞こえて来るのは、杏の花売りの呼び声。当時の都の風物詩である<sup>③</sup>。

頸聯。皇帝の謁見までの時間をもてあます詩人は、退屈しのぎに草書を書いたり、茶を立てたりしている。いずれも集中と熟練を要する知的な遊戯であるが<sup>④</sup>、陸游は「閑に」「戯れに」とうたい、それがおざなりのものであることを強調するかのようである。

尾聯は首聯と照応し、都の「風塵」への嫌悪感と、帰郷の時を待ちこがれる心情をうたう。「清明節の頃までには」という言葉の通り、陸游は三月には山陰に帰り、七月に嚴州に赴任する。

同年秋、陸游は嚴州で七律「秋雨北樹作」「秋雨 北樹の作」<sup>⑤</sup>（劍南一八）を書く<sup>⑥</sup>。

秋風吹雨到江濱	秋風	雨を吹き	江濱に到る
小閣疎簾晚色分	小閣の疎簾	晩色を分かつ	
津吏報增三尺水	津吏	増を報ず	三尺の水
山僧歸入万重雲	山僧	歸りて入る	万重の雲
飄零露井無桐葉	露井に飄零して	桐葉無く	
断続煙汀有雁群	煙汀に断続して	雁群有り	
了却文書早尋睡 <sup>⑦</sup>	文書を了却し	早くに睡りを尋ぬ	
檐声偏愛枕間聞	檐声 偏えに愛す	枕間に聞くを	

秋風が雨を吹きつけ、川のほとりにある嚴州の町にやって来る。  
小さな高殿のまばらなすだれ、その一枚向こうに夕方の景色が見える。  
渡し場を管理する小役人は、水かさが三尺に増えたことを告げ知らせ、  
山寺で暮らしている坊さんは、幾重にも重なる雲の中へと帰って行く。  
覆いのない井戸端にひるがえり落ちて、桐の葉はもう残ってはおらず、  
もやのたなびく水際に途切れたり続いたりしながら、雁の群れが飛んで行く。

- ① 陸游が宿泊した場所は、現在の浙江省杭州市中山北路の孩兒巷であるという。馬時雍『杭州的街巷里弄』（杭州出版社、二〇〇六）七五頁参照。
- ② 春夜の雨を聴く詩は、序章で見たように晩唐の頃から出現するが、「聽春雨」という表現は、『全唐詩』には確認できない。陸游には、「臨安春雨初霽」を含めて四例。『宋詩紀事』では、陸游の「臨安春雨初霽」以外に、卷七十二所収の何応龍の七絶「春寒」に「莫近闌干聽春雨」とある。
- ③ 小川環樹「物売りの声」参照。同文は『小川環樹著作集』（筑摩書房、一九九七）第三卷所収。
- ④ 「草書」および「分茶」については、『宋詩選注3』一五二頁以下を参照。
- ⑤ 『瀛奎律髓』卷十七「晴雨類」所収。朱東潤『陸游選集』一〇一頁参照。
- ⑥ 「了却」の句は『晋書』「傅咸伝」にもとづく。「↓二八頁注①」

文書相手の事務を終わらせ、さっさと寝てしまおう。  
私が何より好きなのは、軒先をしたたる雨の音を、枕辺で聞くことなのだ。

この詩は春に書かれた「臨安春雨初霽」と好一对であり、末尾の句からは、作者の秋雨の音に対する親愛の情が感じられる<sup>①</sup>。

また同年秋から冬にかけて、陸游は嚴州で七絶「即事」<sup>②</sup>（劍南一八）を書く。これは必ずしも「夜雨を聴く」詩ではないが、「焚香聴雨」こそ作詩の秘訣、という主張は注目に値する。陸游がこうした述懐に至るまでには、これまでに見て来たような雨との関係の蓄積があり、決してその場限りの思いつきをうたったわけではないことが理解される。

以上のように、嚴州赴任の前後には、注目すべき夜雨の詩が少なからず書かれている。ここまでの段階で、淳熙五年以来の「夜雨を聴く」という主題は確立し、詩人と夜雨の間に安定した関係が成立していることが見て取れる。

淳熙十四年、陸游は嚴州で二十巻本『劍南詩稿』を刊行する。詩人としての人生に於ける大きな節目である<sup>③</sup>。

淳熙十五年、陸游は嚴州の任期が満了し、山陰に帰る。その後、臨安に赴任し、軍器少監となる。親友周必大の後援もあり、これ以後しばらく順調な時期を過ごす。

淳熙十六年、孝宗が退位し、光宗が即位する。周必大が失脚してほどなく、陸游も失脚して山陰に帰る。これ以後陸游は、嘉泰二年夏まで一貫して故郷で過ごす。

### 第三期の「夜雨を聴く」詩（淳熙十六年から嘉定二年まで）

長く続く故郷での閑居生活の中で、陸游はこれまで以上に自分の孤独と向き合うようになり、詩人として更なる深化を遂げる。現存する作品の数量も多く、第三期の詩は、これまでに見てきた第一期と第二期の合計に数倍する。「夜雨を聴く」詩も、その例外ではない。表現の幅は更に拡がり、夜雨に寄せる思いも更に深まる。なお、本章でこれ以後紹介する陸游の夜雨の詩は、すべて山陰で書かれたものである。

紹熙二年（一一九二）、陸游は七絶「春雨絶句」<sup>④</sup>（劍南二二）六首を書く。時に六十七歳。次に其六を示す。

蕭条冬令侵春晚

蕭条たる冬令 春晚を侵し

① もっとも陸游は、しばしば雨だれの憂鬱をもうたう。一例として、同じく淳熙十三年秋に嚴州で書かれた五古「夜雨枕上」（劍南一八）：「秋雨不肯晴，秋夜不肯明。寸心集百憂，厭此点滴声。」

② 陸游「即事」：「組繡紛紛術女工，詩家於此欲途窮。語君白日飛昇法，正在焚香聴雨中。」『宋詩選注3』陸游解説（九九頁）、吉川幸次郎『宋詩概説』序章第十二節「宋詩における自然」参照。

③ 嚴州時代は、陸游にとって良いことばかりだったわけではない。淳熙十四年、陸游は前年に生まれた女兒（閨娘、後に定娘）を亡くしている。陸游「山陰陸氏女女墓銘」（渭南三三）参照。また、同じ年友人の韓元吉が世を去っている。陸游「祭韓无咎尚書文」（渭南四一）参照。

④ 『宋詩鈔・劍南詩鈔』。河上肇著、一海知義校訂『陸放翁鑑賞』（岩波書店、二〇〇四）「放翁鑑賞その二」一二五頁参照。



浙瀝寒声滴夜長  
更事老翁頑到底  
每言宜睡好燒香

浙瀝たる寒声かんせい 夜の長きに滴るしたた  
更事の老翁ろうおう 頑かたくなること到底  
毎つねに言う 睡ねむるに宜よろし 好よし 香たを焼かんと

もの寂しい冬の気配が春の夜にしるびこみ、  
ぼたぼたという冷たい雨の音が、長い夜の間中したり落ちる。  
様々な経験を積み重ねて来た年寄りには、頑固なことこの上もない。  
そんな時はいつもこう言うのだ。「眠るのにちょうどいい、さあ、香を焚こうか」と。

「春雨絶句」と題するものの、まだ寒さが残る時節なのである。「冬令」「寒声」などの表現は、前掲「冬夜聴雨戲作」を思わせる。これに類する雨の七絶は、第三期の間中、折りにふれては書かれ続ける。

同年初、陸游は七古「雨声」<sup>①</sup>（劍南二四）を書く。「雨声」を詩題とする第二の例で、淳熙元年の最初の「雨声」〔↓二五頁〕から、すでに十七年が経過している。

雨声点滴朝復暮	雨声 点滴す朝 復た暮
中有詩人絶塵句	中に詩人の絶塵 <small>ぜつじん</small> の句有り
雲門咸池渺千古	雲門 <small>うんもん</small> 咸池 <small>かんち</small> 千古に渺 <small>ひよう</small> たり
断譜遺音此其緒	断譜 <small>だんぷ</small> 遺音 <small>いいん</small> 此れ其の緒 <small>いとぢ</small> ならんか
雨声点滴夜不休	雨声 点滴し 夜も休 <small>や</small> まず
中有羈臣去国愁	中に羈臣 <small>きしん</small> の国を去る愁 <small>し</small> 有り
九疑聯翩湘水秋	九疑 <small>きゆうぎ</small> 聯翩 <small>れんぺん</small> たり 湘水 <small>しやうすい</small> の秋
忠誠内激涕自流	忠誠 <small>ちゅうせい</small> 内 <small>な</small> に激 <small>なみだ</small> しく 涕 <small>おのずか</small> 自ら流る
我今衰病百無念	我 今 衰病 <small>すいびやう</small> にして 百も念 <small>おも</small> うこと無し
臥对青灯吐残焰	臥 <small>せ</small> して青灯 <small>せいとう</small> の残焰 <small>ざんえん</small> を吐 <small>は</small> くに対す
支床納息効寒龜	床 <small>とこ</small> に支 <small>た</small> えられ 息 <small>いき</small> を納 <small>な</small> めて 寒龜 <small>かんき</small> に効 <small>なら</small> い
傍枕長吟笑孤劍	枕 <small>まくら</small> に傍 <small>そば</small> い 長く吟 <small>うた</small> じて 孤劍 <small>こけん</small> に笑 <small>わら</small> う
雨声不断睡愈美	雨声 断 <small>つ</small> えず 睡 <small>ねむ</small> り 愈 <small>いよ</small> よ美 <small>うま</small> し
窓白鴉啼攬衣起	窓 白 <small>しろ</small> み 鴉 <small>からす</small> 啼 <small>な</small> き 衣 <small>い</small> を攬 <small>か</small> りて起 <small>た</small> つ
呼兒燒兔傾濁醪	兒 <small>こ</small> を呼 <small>よ</small> び 兔 <small>うさぎ</small> を燒 <small>や</small> き 濁醪 <small>だくろう</small> を傾 <small>か</small> け
又倚胡床雨声裏	又 <small>また</small> 胡床 <small>こしょう</small> に倚 <small>よ</small> る 雨声 <small>うせい</small> の裏 <small>うち</small>

雨だれの音はぼつりぼつりと、朝から日暮れまで続いている。  
その中で、詩人の俗塵と縁を絶った句が生まれる。

黄帝の「雲門」の曲、堯の「咸池」の曲は、遙か彼方にかすんでいるが、  
あるいはこの音の中に、失われた楽譜を知るための手がかりがあるのであるのではなからうか。

① 前野直彬『陸游』一八九頁参照。

② 『周礼』「春官・大司楽」…「舞雲門、大卷、大咸。」鄭玄注…「此周所存六代之樂。黄帝曰雲門、大卷。…大咸、咸池、堯樂也。」

雨だれの音はぼつりぼつりと 夜になっても鳴りやまない。

その中に、流謫りゅうたくの臣が国都を離れる時の愁いが込められている。

どこまでも連なる九疑の山々、湘水の秋。

忠義の思いは胸中にこみあげ、涙はおのずと流れ落ちる。

私は今、病み衰えて、何も心に思うことはない。

身を横たえて、小さなともし火が消えかけた炎を吐くのに向き合っている。

寢床に身体を支えられ、息をひそめて冬眠中の亀の真似をし、

枕の横で声を長く引いて詩を吟じ、一ふりの剣に向かつて笑いかける。

雨だれの音は途絶えることなく、眠りはいよいよ甘美なものとなるが、

窓の外が明るくなり、からすが鳴き、着物を身につけて寢床から起き上がる。

息子を呼び、うさぎを焼き、濁り酒を傾けながら、

またしても腰かけに寄りかかる、雨だれの音の中。

うたわれている状況は憂鬱きわまりないが、その反面、「雨声」の表現は自由自在である。「雨声」の語が詩題を含めて五回も出現し、詩人の雨夜の感慨が縦横無尽にうたわれている。「夜雨を聴く」という主題の更に発展した形態を、ここに見ることができ。

詩は全十六句から成り、四句ごとに換韻している。

最初の四句は「詩人」をうたう。彼は雨だれの音を聴きながら、素晴らしい詩句を書き上げる。前掲「冬夜聴雨戯作」(↓一二七頁)では雨の音を具体的な楽器の音色にたとえていたが、ここでは、黄帝や堯の時代の伝説の音楽にたとえている。詩人の想像は、時空を超え、より一層自由に羽ばたいていっていると見えよう。

第二の四句は「羈臣」をうたう。彼は雨だれの音を聴きながら、愁いと憤りのために涙を流す。「九疑」「湘水」はいずれも『楚辞』にゆかりのある地名である<sup>①</sup>。ここで陸游は、忠義の心を抱きながら、讒言を信じた王に放逐された屈原に、同じく都を追われた自身身を重ねているのかも知れない<sup>②</sup>。以上の「詩人」「羈臣」が、陸游の分身もしくはその理想化された姿であることは、言うまでもない。

第三の四句は、詩の前半にうたわれた理想的な人物形象から一転して、老いと病にさいなまれ、寒さに縮こまる現実の自分の姿を、写実的・戯画的にうたう。

最後の四句は以上を承け、雨だれの音の中で夜明けを迎え、濁り酒を傾ける自分の姿をうたい、全体を締めくくる。人口に膾炙した作品ではないかも知れないが、陸游の「夜雨を聴く」詩の中で、この詩は一定の存在感と意義を有していると思われる。

紹熙三年(一一九二)冬、陸游は七絶「十一月四日風雨大作」(十一月四日 風雨 大いに作

① 『楚辞』「離騷」…「百神翳其備降兮、九疑續其並迎。」また『楚辞』「九歌」には「湘君」「湘夫人」がある。

② 乾道六年、入蜀の旅の際、陸游は七律「哀郢」(劍南二)二首を書き、淳熙五年、帰郷の旅の際、七絶「楚城」(劍南一〇)を書いている。いずれも、屈原の憂国の心情に共感している。「楚城」については、拙稿『宋詩別裁集』に収録された陸游の七言絶句「参照」。

る」①（劍南二六）二首を書く。時に六十八歳。

風卷江湖雨暗村 風 江湖を巻き 雨 村を暗くす  
四山声作海濤翻 四山 声 海濤の 翻るを作す  
溪柴火軟蛮氈暖 溪柴 火 軟らかく 蛮氈 暖かし  
我与狸奴不出門 我 狸奴と門を出でず

暴風があたり一面に巻き起こって、雨は村を暗く覆い隠し、四方の山々は、海の波が寄せては砕けるような音を立てている。川で採った柴の火はやさしく燃え、えびすの絨毯は暖かく、私は飼い猫と一緒にじっとして、家の門から外に出ない。

僵臥孤村不自哀 孤村に僵臥するとも 自ら哀しまず  
尚思为国戍輪台 尚お思う 国の為 輪台を戍らんことを  
夜闌臥聽風吹雨 夜 闌にして 臥して風の雨を吹くを聴けば  
鉄馬氷河入夢来 鉄馬 氷河 夢に入り来たる

ぼつんと離れた村里に倒れ伏していても、そんな自分をかなしんだりしない。

今でもなお、国のため、輪台の守りにつきたいと願っている。

夜ふけ、横になり、風が雨を吹きつける音を聴いていると、

鉄の装甲を施した軍馬が氷結した黄河を渡る姿が、夢の中に入って来る。

この詩（特に其二）は、陸游の「悲憤激昂」の代表作の一つである。これまで見て来た、静かに「夜雨を聴く」詩とはかなり趣を異にするが、これもまた陸游の「夜雨を聴く」詩であることに変わりはない。晩年になっても、こうした激しい感情のわき起こる時が、詩人にはあったのである。其二が単独で紹介される場合が多いが、前奏をなす其一とあわせて読むことで、状況はより立体的に把握でき、其二の表現の厳しさも、より印象を強めるように思われる。

其一の前半は荒れ狂う嵐の夜の情景をうたい、後半はこれと対照的に、暖かい室内にこ

① 拙稿「雨の詩人 陸放翁」参照。また其二は『宋詩選注3』一七二頁その他を参照。なお河上肇『陸放翁鑑賞』『放翁鑑賞 その二』は二首とも収録（二〇四頁）。

② 「輪台」は漢代の西域の地名で、現在の新疆ウイグル自治区に属する。『漢書』『西域伝序』には同地における屯田の事実が記されており、また前漢・武帝の末年、輪台が匈奴に奪われた時、武帝は「輪台詔」を発している。なお『全唐詩』における「輪台」の用例は岑参のものが圧倒的に多く、十六題十八句を数える。一例として、岑参の七古「輪台歌 奉送封大夫出師西征」(『全唐詩』卷一九九)の冒頭六句を示す。：「輪台城頭夜吹角、輪台城北旄頭落。羽書昨夜過渠黎、单于已在金山西。戍樓西望煙塵黑、漢軍屯在輪台北。」同詩は『唐詩三百首』卷二所収。

③ 同様の情景を、陸游は「夜遊宮 記夢、寄師伯渾」詞にもうたっている。：「雪曉清笳亂起、夢遊處、不知何地。鉄騎無聲望似水。想闕河、雁門西、青海際。」宋詞研究会『風絮』第三号（二〇〇七）一八七頁参照。訳注担当は筆者。

もっている詩人と猫の姿をうたう。この詩では、屋外の風雨と室内の安らぎの世界の対比によって、「嵐の夜の楽しみ」とでも言うべき感情が表現されている<sup>①</sup>。「滅胡」の志をうたう詩人が「蛮氈」にすわっていてよいのか、という気がしなくもないが…。

これに続く其二では、雰囲気は一変する。深夜、床に就いた詩人は、屋外の暴風雨に耳を傾けている。「僵臥」という言葉が端的に物語るように、老齢による肉体の衰弱とこわばりは、七十歳に近い詩人にとって直視せざるを得ない冷厳な事実となっている。しかし、その壮志はなおも健在であり、逆境をもものともせず、詩人は酷寒の戦場を夢想する。

この詩は、夜雨の中での慷慨という点では、前掲「聞雨」や「三月十七日夜醉中作」と同系統の作品と考えることができる。しかし、これら第一期の作品とは違い、失地回復の理想は、この時点では夢想の世界に後退している。その分、激しい感情をうたいながらも、表現には一定の落ち着きがあり、より味読に堪える作品になっているように思われる<sup>②</sup>。

紹熙四年（一一九三）、范成大が世を去る。（「↓六八頁」）

同年冬、陸游は五古「十二月二十六夜聴雨」十二月二十六夜 雨を聴く」（劍南二九）を書いていく。これは穏やかな「夜雨を聴く」詩である<sup>③</sup>。

紹熙五年（一一九四）夏、陸游は七律「五月十一日夜坐達旦」五月十一日 夜坐して旦に達す」（劍南三〇）を書く。夏の夜、一晚中寝ないで起きていたというのであり、その尾聯に「三更聴雨蓬窓底、又作鰥魚夜不眠」三更 雨を聴く 蓬窓の底、又た鰥魚と作り 夜 眠らず」とある。こうした不眠をうたう例は、陸游の晩年の詩に多い。

七十代に入る前後から、陸游の詩には懐古的な調子が目立つようになる。夜雨の詩も例外ではない<sup>④</sup>。詩人が年齢を増すにつれ、夜雨詩の中には、過去を回想する要素が多くなり、また自分の老いと病を嘆く要素も多くなる。

慶元元年（一一九五）、陸游は次のような詩題の七絶二首を書く。これは、詩人の七十一歳の誕生日に於ける述懐である（劍南三三）。

十月十七日、予生日也。孤村風雨蕭然、偶得二絶句。予生於淮上、是日平旦大風雨駭人。及予墜地、雨乃止

十月十七日は、私の誕生日である。ぼつんと離れた村里はもの寂しい風雨に見舞われ、偶然、絶句二首をものした。私は淮河を航行する船の上で生まれたが、その日は明け方から激しい風雨があり、皆肝をつぶさんばかりであった。私が生まれ落ちるや、雨は降り止んだのである

① 今村与志雄『猫談義 今と昔』（東方書店、一九八六）一〇頁参照。

② 参考までに、『宋詩鈔・劍南詩鈔』は「十一月四日風雨大作」其二を収録しているが、「聞雨」「三月十七日夜醉中作」は収録していない。

③ 陸游「十二月二十六日夜聴雨」：「新春尚七日、小雨暗江城。茆簷夜点滴、已作春雨声。」

④ 紹熙四年（一一九三）秋、六十九歳の時、陸游は七絶「枕上聞急雨」（劍南二七）を書き、蜀にいた頃を回想している。二首の其一：「枕上雨声如許奇、殘荷叢竹共催詩。喚回二十三年夢、灯火雲安駅裏時。」「雲安」は現在の四川省雲陽。「二十三年前」は乾道七年。当時陸游は夔州通判であった。同詩は清・嚴長明『千首宋人絶句』卷五所収。河上肇『陸放翁鑑賞』「放翁鑑賞 その二」二二三頁参照。

もちろん、陸游の記述の内容が事実か否かは確かめようもない。しかし、こうした述懐があることは、少なくとも彼自身が、自分と雨との間にある深い絆の存在を意識していたことを物語る。次に其二を示す。

我生急雨暗淮天	我	生まれしとき	急雨	淮の天を暗くし
出沒蛟鼉浪入船	出沒せる蛟鼉	浪	船に入る	
白首功名無尺寸	白首	功名	尺寸も無く	
茅簷還聽雨声眠	茅簷に還た	雨声を聴きて眠る		

私が生まれた時、にわか雨が淮河の空を暗くし、みずちやわにが波間に出没して、波は船の中にまで入って来た。今では白髪頭となったが、何の功名もなく、ちがやの軒先にしたたる雨の音を聴きながら眠っている。

慶元三年（一一九七）、妻の王氏が世を去る<sup>①</sup>。享年七十一であった。その追悼の七古「自傷」（劍南三六）にも雨の表現が見えるが、雨を「聴く」ことはうたわれていない<sup>②</sup>。

慶元四年（一一九八）、陸游は七律「雨夜」<sup>③</sup>（劍南三八）を書き、慶元六年（一一〇〇）、七絶「枕上」<sup>④</sup>（劍南四四）を書く。これらはいずれも、夜眠れずに雨の音を聴くことをうたう詩である。

嘉泰元年（一二〇一）春、陸游は七律「春雨」<sup>⑤</sup>（劍南四五）三首を書く。時に七十七歳。其一首の首聯は、「狼藉残花满地紅、擁衾孤夢雨声中」（狼藉たる残花 地に満ちて紅なり、衾を擁す 孤夢 雨声の中）とうたう。もつともこの詩は「落花狼藉」の情景をうたっているから、「夜雨を聴く」詩ではなく、昼寝の詩かも知れない。「春雨」という詩題、七律という形式は、前掲「臨安春雨初霽」（↓一三二頁）を連想させるが、それからすでに十五年が過ぎており、より一層枯れた味わいの作品となっている。

同年夏、陸游は七絶「夏日雜題」（劍南四六）八首を書く。其七には、「蕭蕭」と降る「暮雨」<sup>⑥</sup>がうたわれている。

同年秋、陸游は五古「夜雨」（劍南四八）を書く。本章の冒頭でその一部を紹介したが、あらためてその全体を示す。

- ① 陸游「令人王氏墳記」（渭南三九）：「嗚呼、令人王氏之墓。中大夫山陰陸某妻蜀郡王氏、享年七十有一、封令人、以宋慶元丁巳歲五月甲戌卒。」小川環樹『陸游』「陸游の夢 その二」一一二頁参照。
- ② 陸游「自傷」冒頭：「朝雨暮雨梅子黃、東家西家鬻蘭香。」
- ③ 陸游「雨夜」領聯：「低簷雨滴睡眠少、敗壁灯殘感慨深。」前野直彬『陸游』一三一頁参照。
- ④ 陸游「枕上」：「殘灯熠燿露螢明、落葉蕭蕭寒雨聲。堪笑衰翁睡眠少、小詩常向此時成。」
- ⑤ 陸游「春雨」其一：「狼藉殘花满地紅、擁衾孤夢雨声中。人生十事九堪歎、春色三分二已空。但有老盆傾濁酒、不辭衰鬢對青銅。長貧博得身強健、久矣無心咎化工。」『宋詩鈔・劍南詩鈔』。前野直彬『陸游』二四三頁、村上哲見・淺見洋二『蘇軾・陸游』（角川書店、一九八九）二二六頁参照。
- ⑥ 陸游「夏日雜題」其七：「憔悴衡門一秃翁、回頭無事不成空。可憐万里平戎志、尽付蕭蕭暮雨中。」前野直彬『陸游』二四五頁参照。

吾詩滿篋筥	吾が詩 篋筥 <small>きょうし</small> に満ち
最多夜雨篇	最も多し 夜雨 <small>やう</small> の篇
四時雨皆佳	四時 <small>しじ</small> 雨 皆 <small>みな</small> 佳なるも
莫若初寒天	初寒 <small>しよかん</small> の天に若くは莫し
紙帳白于氈	紙帳 <small>しちやう</small> 氈 <small>せん</small> よりも白く
紙被軟于綿	紙被 <small>しひ</small> 綿 <small>ちんぽう</small> よりも軟 <small>やわ</small> らかなり
枕傍小銅匣	枕傍 <small>ちんぼう</small> の小銅匣 <small>しょうどうがい</small>
海沈起微煙	海沈 <small>かいちん</small> 微煙 <small>びえん</small> を起 <small>おこ</small> す
是時間夜雨	是の時 <small>このとき</small> 夜雨を聞くに
如糸竹管弦	糸竹管弦 <small>しちくかんげん</small> の如し
恨我未免俗	恨むらくは我 未だ俗を免れず
吟諷勤雕鐫	吟諷 <small>ぎんぶう</small> 雕鐫 <small>ちようせん</small> に勤むるを
南朝空階語 <sup>①</sup>	南朝 <small>なんちよう</small> 空階 <small>くうかい</small> の語
妙出建安前	妙なること 建安 <small>けんあん</small> の前に出 <small>い</small> ず
意謂奪造化	意に謂 <small>おも</small> え 造化 <small>ぞうか</small> を奪 <small>ぬ</small> い
百世莫比肩	百世 <small>ひやくせい</small> 肩 <small>な</small> を比 <small>ひ</small> ぶるもの莫 <small>な</small> しと
安知梧桐句 <sup>②</sup>	安んぞ知らん 梧桐 <small>ごとう</small> の句
乃復与並伝	乃ち復 <small>すなわ</small> た与 <small>ま</small> に並 <small>とも</small> び伝 <small>と</small> うるを
夜雨何時無	夜雨 何 <small>い</small> れの時 <small>す</small> か無 <small>な</small> からん
奇語付後賢	奇語 <small>きご</small> 後賢 <small>こうけん</small> に付 <small>つ</small> せん

私の詩は手箱に満ちあふれているが、最も多いのは、夜の雨をうたう詩である。春夏秋冬、どの季節の雨も素晴しいが、寒くならはじめて頃にまさるものはない。紙のとばりは毛布よりも白く、紙のふとんは綿よりも軟らかい。枕の傍らにある小さな銅製の水差しからは、舶来の沈香のかすかな煙が立ちのぼる。こういう時、夜の雨の音を聞くと、まるで美しい管弦の調べようだ。残念ながら私はまだ俗気を免れず、詩を吟じる際には文字の彫琢に努めている。南朝の何遜の「夜雨 空階に滴る」の句は、その絶妙なこと、建安の詩以上だ。

① 梁・何遜「臨行与故遊夜別」：「夜雨滴空階、曉灯暗離室。」和訳「夜の雨が人のいない階段にしたり落ち、明け方のともし火は、別れの部屋にほの暗くともっている。」  
 ② 唐・孟浩然「句」：「微雲淡河漢、疏雨滴梧桐。」和訳「かすかな雲が天の河にうつつすらとかかり、まばらな雨があおぎりにしたたり落ちる。」

造物主の巧みさを奪って作られたもので、

永遠に肩を並べる者はないと思っていた。

ところが孟浩然の「疏雨 梧桐に滴る」の句は、

これと共に伝えることができるほど素晴らしいとは。

夜の雨は、どんな時代にも必ずある。

素晴らしい詩句を、後世の諸賢に伝えたいものだ。

全二十句から成るこの古詩は、一韻到底ながら、大きく前半十句と後半十句に分けて考えることができる。前半は、詩人がくつろいで夜雨の音を楽しむ姿をうたい、後半は、夜雨の詩をめぐる文学論を展開する。前半に関しては、小川環樹氏の解説に特に付け加えることはない<sup>①</sup>。ここでは、同氏が省略している後半にこだわってみたいと思う。

まず陸游は、自分はいまだ俗気が抜けず、詩を作る際に「雕鐫」すなわち字句の雕琢に努め、天然自然の趣を得られていない、と自嘲する。その上で、梁・何遜の「夜雨滴空階」の句（↓九八頁）を、「建安」以上と絶賛する<sup>②</sup>。「建安」は、後漢・献帝（劉協）の年号（一九六～二一〇）であり、文学史の上では「三曹七子」の活躍した時代である。

この時代の最も代表的な詩人は、言うまでもなく曹植である。ここで陸游は、「建安」という表現によって漠然と「建安時代の詩人たち」を指しているとも考えられるが、何遜の詩が夜雨の詩であることから考えて、曹植の名作「喜雨」<sup>③</sup>（↓九四頁）を指していると考えの方が、より妥当ではなからうか。序章で見たように、漢魏の頃にはまだそれほど雨の詩の作例が豊富ではなく、何遜の詩と比較できるような名作は他に見当たらないからである。仮にそうだとすれば、曹植は杜甫が出現する以前の時代に於ける「詩の神」であったというから<sup>④</sup>、何遜の詩句に対する最大級の賛辞と言ってよい。なお何遜の「夜

① 小川環樹『陸游』「静寂・黙想・雨」一二七頁。：「紙帳はベッドのカーテンの紙製のもので、襪は毛氈つまり毛布であり、紙被は紙製の夜具である。小銅匱の匱は水さしで、熨斗の形をした容器だと字書にあるが、：陸游はそれを香炉に使っていたものと見える。海沈は沈香で、外国産の輸入品だったから海の字がつく。：二句は、沈もとに置いてある小さな銅器から、かぼそい香の煙が立ちのぼっているのいう。こういう時にひびく夜の雨の音は、管絃楽の演奏のように、聞くひと（作者）の心にしみわたる。」

② 何遜の詩句が「雕鐫」を免れているという指摘は、北宋末～南宋初・張戒の『歳寒堂詩話』に見える。しかし張戒は、何遜の句が曹植に勝るとは言っておらず、この点は陸游独自の主張と考えられる。

『歳寒堂詩話』卷上：「建安陶阮以前、詩專以言志。潘陸以後、詩專以詠物。：言志乃詩人之本意、詠物特詩人之余事。：潘陸以後、專意詠物、雕鐫刻鏤之工日以増、而詩人之本旨掃地尽矣。謝康樂『池塘生春草』、顔延之『明月照積雪』、謝玄暉『澄江静如練』、江文通『日暮碧雲合』、王籍『鳥鳴山更幽』、謝貞『風定花猶落』、柳惲『亭皋木葉下』、何遜『夜雨滴空階』、就其一篇之中、稍免雕鐫、麤足意味、便称佳句。然比之陶阮以前蘇李古詩曹劉之作、九牛一毛也。」陳宥鸞『歳寒堂詩話校箋』（巴蜀書社、二〇〇〇）一頁参照。

③ 曹植「喜雨」：「時雨中夜降、長雷周我庭。」序章第二節参照。表記は黄節『曹子建詩注』および『先秦漢魏晉南北朝詩』による。余冠英『三曹詩選』は「中」を「終」とし、「庭」を「廷」とする。

④ 吉川幸次郎「曹植について」：「彼は、ある長い時期にわたって、中国の詩の神であった。八世紀の中ごろ、万能の詩人である唐の杜甫が出てから、詩の神の坐は、杜甫へとうつつたけれども、それまでの数百年間、六朝から唐の初期へかけ、その時代の詩の神は、曹植であった。」同論文は吉川幸次郎・高橋和巳『中国詩史』上（筑摩書房、一九六七）所収。

雨滴空階」の句については、次の第二章で更に掘り下げて検討することにした。また、孟浩然の「梧桐」の句〔↓一〇二頁〕については、すでに序章で紹介したので、ここでは詳述しない。

詩の末句「奇語 後賢に付せん」は、おそらく二重の意味を有している。それは一義的には、「何遜と孟浩然の名句を後世に伝えたい」という意味であろう。しかしそれに重ねて、「自分自身の夜雨の詩を後世に伝えたい」という陸游の願いも込められているのではなからうか。この時点に於ける陸游は、過去の夜雨の詩に対する深い造詣を有すると同時に、自分自身の夜雨の詩にも並々ならぬ愛着と自負を抱いていたと考えられる。

嘉泰二年（一二〇二）夏、陸游は臨安に赴き、史書編纂の仕事に携わる<sup>①</sup>。

嘉泰三年（一二〇三）、陸游は史書編纂の仕事を終え、山陰に帰る<sup>②</sup>。以後、陸游は世を去るまで故郷を離れることはなかった。

嘉泰四年（一二〇四）、終生の友であった周必大が世を去る<sup>③</sup>。享年七十九であった。親しい友人たちも次々に世を去り、陸游の寂寞は深まる。

八十代に入ると、陸游の夜雨の詩は更に深化し、ある種の宗教性をすら帯びるようになる。それと同時に、いよいよ人生の総括の色彩を帯びるようになる。

開禧元年（一二〇五）春、陸游は第一部第三章で紹介した五古「雜感五首」（劍南六一）其一を書く。時に八十一歳。その中に、「帰聴鏡湖雨（帰りに聴く 鏡湖の雨）」の句が見える。〔↓七四頁〕同年閏八月、陸游は七律「懷旧」<sup>④</sup>（劍南六四）を書く。これも詩人がその生涯を回顧し総括する詩であり、その頸聯は「夢破江亭山駅外、詩成灯影雨声中〔夢は破る 江亭 山駅の外、詩は成る 灯影 雨声の中〕」とうたう。

開禧二年（一二〇六）春、陸游は五絶「春雨」<sup>⑤</sup>（劍南六五）四首を書く。時に八十二歳。次に其三と其四を示す。

胸懷阮步兵 胸懷は阮歩兵

詩句謝宣城 詩句は謝宣城

今夕俱參透 今夕 俱に參透し

焚香聽雨声 香を焚きて雨声を聴く

心境は、阮籍のよう。

詩句は、謝朓のよう。

この夕べ、私はどちらにも完全に体得し、

① 『宋史』「陸游伝」…「嘉泰二年、以孝宗光宗兩朝実録及三朝史未就、詔游權同修國史、実録院同修撰、免奉朝請、尋兼秘書監。」

② 『宋史』「陸游伝」…「三年、書成、遂升宝章閣待制、致仕。」

③ 『宋史』「周必大伝」…「（嘉泰）四年、薨。年七十有九。贈太師、諡文忠。」陸游は周必大のために「祭周益公文」（渭南四一）、「跋周益公詩卷」（渭南三〇）などを書いている。

④ 陸游「懷旧」…「身是人間一斷蓬、半生南北任秋風。琴書昔作天涯客、蓑笠今成沢畔翁。夢破江亭山駅外、詩成灯影雨声中。不須強覓前人比、道似香山実不同。」石川忠久『陸游一〇〇選』二八七頁参照。

⑤ 「春雨」其二は前野直彬『宋・元・明・清詩集』一〇五頁参照。



香を焚き、雨の音に耳を傾けている。

疎点空階雨　疎らに点ず　空階の雨  
長明古殿灯　長しえに明らかなり　古殿の灯  
廬山岑寂夜　廬山　岑　寂しき夜  
我是定中僧　我は是れ定　中の僧なり

人のいない階段に、まばらに落ちる雨の音。

いつまでも明るい、古い僧院のともし火。

廬山の峰が、ひっそりと静まりかえる夜。

この私は、坐禅中の修行僧。

其三は、第二期以来繰り返し書かれて来た「焚香聴雨」の一例である。陸游が、雨を聴くことを精神修養と結びつけて考えていたらしいことは、これまでに見て来た諸作からもうかがい知ることができるが、ここに来て、それが一つの究極に到達した観がある。

「阮步兵」は、歩兵校尉になった阮籍<sup>①</sup>。「↓九五頁」魏晋の際の名士で、竹林七賢の領袖的存在。「詠懐詩」八十二首の連作で知られると同時に、「白眼視」など数々の奇行によつても知られる<sup>②</sup>。正史に「不拘礼教」と特筆される阮籍は、同じく「不拘礼法」と特筆される陸游と、共通点があるかも知れない<sup>③</sup>。

「謝宣城」は、宣城の太守となった謝朓<sup>④</sup>。「↓九七頁」南朝齊を代表する詩人で、唐の李白がその詩の清澄さを愛し、敬慕したことで知られる<sup>⑤</sup>。

「参透」は、透徹して認識、領悟する意。ここで陸游は、阮籍の超俗と謝朓の清澄の両方の境地を、完全に体得できたと自負している。さすがに真に受けることはできないが、陸游にとつての「焚香聴雨」の重要性を、この詩は端的に物語っているかのようである。

其四は、やはりある種の宗教的な精神状態をうたう。おそらく東晋の慧遠<sup>⑥</sup>（三三四～四一六）などの高僧に思いを馳せ、その境地にあやかろうとしているのであろう。もちろん陸游は本当の僧侶ではないし、実際に廬山で修行しているわけでもない。それどころか、最後まで失地回復という俗念（煩惱）を断ち切ることができない凡夫である。それでもこの詩は、最晩年の陸游が、俗人なりにある種の悟りの境地への到達を目指していたこと

① 『晋書』「阮籍伝」：「籍聞步兵厨嘗人善釀、有貯酒三百斛、乃求為步兵校尉、遺落世事。」

② 『晋書』「阮籍伝」：「籍又能為青白眼、見礼俗之士、以白眼对之。」

③ 『晋書』「阮籍伝」：「籍雖不拘礼教、然发言玄遠、口不臧否人物。」「籍嫂嘗歸寧、籍相見与別、或譏之、籍曰、『礼豈為我設邪。』」もつとも、陸游は七絶「詠阮籍伝」（劍南六一）では阮籍の礼法無視に対し否定的な見解を述べている。：「籍輩可誅無復議、礼非為我為何人。」

④ 『南齊書』「謝朓伝」：「出為宣城太守、以選復為中書郎。」阮籍および謝朓の伝記は、興膳宏編『六朝詩人傳』（大修館書店、二〇〇〇）参照。

⑤ 一例として、李白の雜古「宣城謝朓樓餞別校書叔雲」（『全唐詩』卷一七七）に「蓬萊文章建安骨、中間小謝又清發」とある。

⑥ 『高僧伝』（中華書局、一九九二）卷六「晋廬山釈慧遠」。『岩波世界人名大辞典』（岩波書店、二〇一三）三八五頁参照。

を物語る。なおこの詩は、次の第二章で検討する「空階」の一例でもある。

同年四月、韓侂胄による「開禧の北伐」が挙行され、金との間に戦端が開かれる。

この年、楊万里が世を去る<sup>①</sup>。北伐のことを知った楊万里は驚き、韓侂胄を非難する激しい言葉を書き連ね、筆を落とすと息絶えたという<sup>②</sup>。享年八十三であった。

北伐の実現により、陸游の積年の悲願は、ついに実現されるかに見えた。しかし結局北伐は失敗に終わり、首謀者の韓侂胄は殺され、その首級が講和のために金に送られる。

嘉定二年（一一〇九）春、陸游は弾劾されて朝廷の官位を失い、失意の最晩年を過ごす。

同年秋、陸游は七絶「雨中」（劍南八三）を書く。

孤村風雨連三日　　孤村の風雨　連なること三日  
秋暑如焚一洗空　　秋暑　焚くが如きも　一洗して空し  
睡覺房櫳灯漸暗<sup>③</sup>　　睡りより覚むれば　房櫳　灯　漸く暗く  
却尋殘夢雨声中　　却た殘夢を尋ぬ　雨声の中

ぼつんとある寂しい村は、もう三日の間、風雨が続いている。

おかげで、火を焚くような秋の暑さも、きれいに洗い流されてしまった。

眠りから覚めてみると、部屋の間かりは次第に暗くなり、

また夢の続きを見ようとして、雨の音を聴きながらうとうとする。

この詩は陸游の没年の作であるが、詩人の精神は、廬山の高僧の世界から、再び世俗の次元に舞い降りて来たかのようなのである。前掲「十一月四日風雨大作」（↓一三六頁）同様「孤村」の「風雨」をうたいながらも、もはや慷慨の調子は感じられず、静穏な調子の作品となっている。しかしうがった見方をするならば、末句の「殘夢」は、明け方の夢の名残という意味に、打ち砕かれた失地回復の夢の名残、という意味も重なっているのかも知れない。没年に至っても、詩人の夢に「鉄馬氷河」は現れたであろうか。「十一月四日風雨大作」のような強烈さはないが、余韻のある作品である。

年末、陸游はこの世を去る<sup>④</sup>。享年八十五であった。

① 『宋史』「楊万里伝」：「寧宗嗣位、召赴行在、辞。…開禧元年召、復辞。明年、升宝謨閣学士、卒。年八十三、贈光祿大夫。」

② 『宋史』「楊万里伝」：「臥家十五年、皆其（韓侂胄 筆者注）柄国之日也。侂胄專僭日益甚、万里憂憤、怏怏成疾。家人知其憂国也、凡邸吏之報时政者、皆不以告。忽族子自外至、遽言侂胄用兵事、万里慟哭失声、亟呼紙書曰、『韓侂胄姦臣、專權無上。動兵殘民、謀危社稷。吾頭顱如許、報國無路、惟有孤憤。』又書十四言別妻子、筆落而逝。」

③ 参考までに、「房櫳」という詩語は、成都時代の范成大との唱和にも見える。陸游「和范待制秋興」（劍南七）其一首聯：「策策桐飄已半空、啼螿漸覺近房櫳。」（↓三二頁）

④ 嘉定二年十二月二十九日。ただし現在の曆に換算すると一一一〇年一月二十六日となる。陸游の卒年に「一一〇九」と「一一一〇」の二通りの表記があるのは、このためである。

## 結 び

以上、陸游の「夜雨を聴く」詩を年代順に概観した。ここであらためて、それらの各段階に於ける特色を簡単に整理しておこう。

(一) 第一期。創作の開始から、淳熙五年、蜀を離れ故郷に帰る直前まで。

「雨」の字にこだわって見る限り、陸游の雨の詩の創作は三十代から始まる。しかし、『劔南詩稿』卷一所収の四十三歳までの作品には、「夜雨を聴く」という主題を明示する作品は確認できない。乾道四年もしくはその翌年、陸游は山陰で五律「聞雨」を書く。これが、現存する陸游の詩の中で「夜雨を聴く」という主題を明示する最初の作品である。乾道六年、陸游は山陰を離れ蜀に入る。蜀にいた頃の陸游は、失地回復という悲願に心を奪われており、まだ自覚的に夜雨を聴く、という習慣は確立していなかったと考えられる。夜雨を詩にうたう場合も、主に自分の苦悩や葛藤、悲憤をうたい、夜雨を楽しむこと自体を主題とする作品は少ない。

(二) 第二期。淳熙五年、山陰に帰ってから、淳熙十六年、弾劾されて失脚するまで。

淳熙五年冬、山陰に帰った陸游は「冬夜聴雨戯作」を書く。この詩に於いて陸游は、夜雨の音の妙味を初めて理解できたとうたい、自覚的に「夜雨を聴く」という主題を明確に打ち出している。この連作は、陸游の夜雨の詩の転換点であり、これ以後の夜雨の詩の出発点となるものである。これ以後、同じ主題は繰り返し返しうたわれ、時と共に厚みを増して行く。同様に「香を焚き雨を聴く」ことを主題とする作品が、これ以後繰り返し書かれるようになる。六十代に入ると、詩人と夜雨の関係はより親密なものとなり、「臨安春雨初霽」のような名作も書かれる。また、「香を焚き雨を聴く」ことこそ作詩の秘訣、という述懐も出現する。

(三) 第三期。淳熙十六年、失脚して山陰に帰ってから、嘉定二年に世を去るまで。

長く続く故郷での閑居生活の中で、陸游はこれまで以上に自分の孤独と向き合うようになり、詩人として更なる深化を遂げる。「夜雨を聴く」詩もその例外ではなく、表現の幅は更に拡がり、夜雨に寄せる思いも更に深まる。七十代に入る前後から、夜雨の詩には過去を回想する要素が多くなり、また自分の老いと病を嘆く要素も多くなる。自分の夜雨の詩の創作をふり返り、文学論を展開する「夜雨」のような詩も、この時期に書かれる。八十代に入ると、陸游の夜雨の詩は更に深化し、宗教的な色彩を帯びた詩、夜雨と共に歩んだ人生を総括する詩も書かれる。

もつとも、陸游の夜雨の詩が、年齢と共に慷慨から閑適へと直線的に移行するわけではない。年齢に関係なく、その精神が慷慨と閑適の両極の間を行き来することは、陸游の大きな特色である<sup>①</sup>。一例として、淳熙十三年春には、慷慨の典型例である七律「書憤」<sup>②</sup>(劔

① 『宋詩選注3』陸游解説参照(九二頁)。

② 陸游「書憤」：「早歲那知世事艱、中原北望氣如山。樓船夜雪瓜洲渡、鐵馬秋風大散關。塞上長城空自許、鏡中衰鬢已先斑。出師一表真名世、千載誰堪伯仲間。」『宋詩選注3』一五九頁参照。

南一七」と、閑適の典型例である。「臨安春雨初霽」（劍南一七）（↓一三一頁）が、ほぼ時を同じくして書かれている。同様の例は、他にいくらかでも見いだすことができよう。夜雨の詩についても、第一期に雜古「雨声」（劍南五）（↓一二五頁）があるかと思えば、第三期に七絶「十一月四日風雨大作」（劍南二六）（↓一三六頁）がある、といった具合である。しかしそれでも全体的な傾向としては、慷慨と閑適の間を行き来しながらも、年齢と共に徐々に閑適の方向へ移行して行く、という基本的特徴が見て取れるように思われる。

序章で見たように、夜雨をうたう詩は、魏晉南北朝時代の曹植や何遜に始まり、陸游以前にすでに豊富な蓄積がある。「夜雨を聴く」ことをうたう詩も同様である。しかし陸游の場合、「夜雨を聴く」という行為は、単にうたわれる回数が多いのみならず、彼の創作活動ひいては人生そのものすら貫く重要なテーマとなっており、そこにこそ大きな特色があると考えられる。

陸游は、比較的若い頃から没年に至るまで、折りにふれては雨をうたい続けた。多種多様な雨の詩の不断の堆積は、あたかも雨を主題とする壮大な変奏曲のように、確かな手ごたえをもつて読む者に迫って来る。当時の皇帝にさえその才能を評価された陸游<sup>①</sup>、決して不遇と言うことはできないが、その生涯に順風満帆な時期は少ない。むしろそれは、蹉跌を重ねる多難な道程であった。最晩年に至りようやく実現した北伐も無残な結果に終わり、一層の屈辱と失意を味わわねばならなかった。そうした逆境の多い人生を生きた陸游にとつて、折々に様々な表情で降る雨は、いかなる状況においても自分の心情を投影させることのできる、大自然の伴侶であり、心の友だったのである。

陸游は、雨の音に耳を傾ける時間の中で、自分の心のあり方を確認しながら歩み続けた偉大なる「雨の詩人」であったと言えよう。

① 『宋史』「陸游伝」：「再召入見、上曰、『卿筆力回斡甚善、非他人可及。』」

## 第二章 「夜雨滴空階」考<sup>①</sup>

陸游が五古「夜雨」（劍南四八）の中で言及している梁・何遜（四六七？～五一八？）<sup>②</sup>の「夜雨滴空階」の句は、陸游以前に唐宋の多くの詩人・詞人に愛好され、その創作に影響を及ぼしている。ここでは、前章で検討した「夜雨」の問題から更に一步を進め、「夜雨滴空階」の影響の下に書かれた作品の系譜をたどり、最後に陸游自身の作例を検討することにした<sup>③</sup>。

まず、何遜の五古「臨行与故遊夜別（行に臨み故遊と夜別る）」<sup>④</sup>の全体を示す。

歴稔共追隨	歴稔 <small>れきねん</small> 共に追隨 <small>ついで</small> するも
一旦辞群匹	一旦 <small>いつたん</small> 群匹 <small>ぐんひつ</small> を辞す
復如東注水	復 <small>また</small> た東に注ぐ水の如く
未有西歸日	未 <small>いま</small> だ西に歸るの日有らず
夜雨滴空階	夜雨 <small>やう</small> 空階 <small>くうかい</small> に滴 <small>したた</small> り
暁灯暗離室	暁灯 <small>ぎやうとう</small> 離室 <small>りしつ</small> に暗し
相悲各罷酒	相 <small>あひ</small> い悲しみ 各 <small>おの</small> おの酒を罷 <small>や</small> む
何時同促膝	何 <small>いず</small> れの時か同 <small>とも</small> に膝 <small>ひざ</small> を促 <small>うなが</small> さん

何年もの間、行動を共にしていたというのに、ある日突然、君は仲間から離れて行くことになった。

東に向かつて流れ去る水のように、

まだ西に帰って来る日は決まっていない。

夜の雨が人のいない階段にしたり落ち、

明け方のともし火は、別れの部屋にほの暗くともっている。

お互いに嘆き悲しんで、酒を飲むことをやめる。

また一緒に膝を交えて語り合えるのは、いつの日のことだろうか。

この詩は、これから旅立つ親しい友人との別れをうたう。名残を惜しんで、送別の宴会

- ① 「階」は「塔」とも書くが、本章では「階」で統一する。
- ② 何遜の生卒年は、興膳宏『六朝詩人傳』（大修館書店、二〇〇〇）による。
- ③ 本章では、詩詞における「空階」のみを考察の対象とし、文における「空階」は除外する。また、原則として「空階」が「夜雨」と結びつけてうたわれる例のみを考察の対象とする。ただし、それ以外の例についても、必要に応じて言及する場合がある。
- ④ 『何水部集』所収。詩題は李伯齊『何遜集校注（修訂本）』（中華書局、二〇一〇）による。同書によれば、梁の天監十六年（五一七）の作。『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩卷九は詩題を「從鎮江州与遊故別詩」とする。なお戸倉英美「別れの詩の時間と空間」（『日本中國學會報』第三十九集、一九八七）は、漢代から唐代に至るまでの別れの詩を大きく三つの段階に分けて論じ、何遜の「与蘇九德別」（『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩卷八）を例示しているが、「臨行与故遊夜別」には触れていない。

は夜通し続けられる。その間中、夜の雨は人のいない階段にしたり落ち、やがて明け方を迎える。夜雨は、あるいは別れの涙を象徴するのも知れない。陸游が「南朝空階語」〔↓一三九頁〕と呼び、「建安」以上と絶賛するのは、この詩の第五句である。

この詩は、現在では何遜の代表作の一つとして知られる<sup>①</sup>。しかし、当時の代表的な詞華集である『文選』『玉台新詠』のいずれにも収録されていない<sup>②</sup>。何遜のこの詩を収録する選集は、すべて唐代以降のものである<sup>③</sup>。また、模倣の名手として知られる梁・江淹（四四四～五〇五）の「雜体詩三十首」〔↓九八頁〕に西晋・張協の「苦雨」の模倣はあるが、何遜の「夜雨滴空階」の模倣はない<sup>④</sup>。江淹の方が何遜より上の世代であるから仕方がないとしても、何遜の詩句は、南北朝時代にはほとんど類例を見ない<sup>⑤</sup>。そもそも唐代以前の詩で「空階」という詩語を用いるものは何遜を含めわずか三例に過ぎず、しかもその中で「空階」を「夜雨」と結びつけるものは、何遜の一例のみである<sup>⑦</sup>。

おそらく何遜の「夜雨滴空階」は、魏晉南北朝時代の中では相対的に出現が遅かったため、梁の当時は、まだ一つの美の典型としての価値が確立していなかったであろう。美の典型としての価値が確立しないうちに梁は滅び、南北朝も終焉を迎える。魏・曹植の「喜雨」〔↓九四頁〕の主題がその後の歴代の詩人たちに受け継がれて行ったのとは対照的に、何遜の「夜雨滴空階」は、残念ながら陳にも隋にも受け継がれないまま、いったん忘れ去られることになってしまったのではなからうか<sup>⑧</sup>。

以下、時代ごとに、何遜の詩句の受容の状況を確認して行くことにしたい。

- ① 李伯齊『何遜集校注（修訂本）』一七〇頁参照。：「此詩為何遜代表作品之一。『夜雨滴空階、曉灯暗離室』二句对仗工穩、含蓄凝煉、歷為人所稱道。」
- ② 『文選』は何遜の詩を一首も収録していない。『玉台新詠』は巻五に十一首、巻十に五首、何遜の詩を収録しているが、「臨行与故遊夜別」は含まれていない。また何遜の名は『詩品』にも見えない。
- ③ 『藝文類聚』巻二十九、『文苑英華』巻二八六、『詩紀』巻八十四。順に、初唐、北宋、明代の成立。
- ④ 『文選』巻三十一。ちなみに江淹の模倣の対象となったのは、漢代の「古詩十九首」から南朝宋の恵休（休上人）まで。
- ⑤ 江淹には階段に降る雪をうたう例がある。「歩桐台」：「山中忽緩駕、暮雪將盈階。」『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩卷三。
- ⑥ 梁・簡文帝には「賦得入階雨」（『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩卷二十二）と題する詩があるが、その内容は雨を主題とする繊細な題詠であり、何遜の詩との関連性は必ずしも明確ではない。少なくとも、友人との別れを主題とする詩ではない。：「細雨階前入、灑砌復沾帷。漬花枝竟重、濕鳥羽飛遲。」
- ⑦ 『先秦漢魏晉南北朝詩』によれば、何遜以前の「空階」の用例は、漢代の樂府古辭「古人變歌」（漢詩卷十）に「枯桑鳴中林、緯絡響空階」とある一例のみ。「空階」に鳴く秋の虫は、「空階」にしたたる夜雨と同様、後世に影響を及ぼしているが、本章の主題からはずれるので、ここでは詳述しない。「空階」のもう一例は、陳・江総の「奉和東宮經故妃宮殿」詩。：「故殿看看冷、空階步步悲。」
- ⑧ ただし梁の詩で「雨」と「階」を結びつける例は、他に数例確認できる。劉苞「望夕雨」（『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩卷八）：「緣階起素沫、竟水散圓文。」劉孝威「望雨」（同上卷十八）：「清陰蕩暄濁、飛雨入階廊。」蕭子雲「寒夜直坊憶袁三公」（同上卷十九）：「滴滴雨鳴階、悵悵茲夜靜。」このうち蕭子雲の詩は、ある程度何遜との類似が認められるが、何遜の影響の下に書かれた作品であるか否かは不明である。思うに、階段に降る雨をうたうことは、梁の時代に好まれた題材だったのであろう。何遜の詩句も、当時はそうした中の一つに過ぎなかったのではないかと思われる。

## 第一節 唐代および五代の「夜雨滴空階」の詩

唐代になっても、初唐・盛唐の間、何遜の「夜雨滴空階」は特に注目を集めることはなかったと考えられる。「空階」という詩語は初唐・盛唐の詩にも見えるが、用例が少ない上、夜雨に限らず、雨と結びつく例は確認できない。初唐の「空階」の一例として、次に劉希夷の五排「夜集張諲所居」<sup>①</sup>の末尾を示す。

隱室寒灯淨  
空階落葉飄

隱室 寒灯 淨く  
空階 落葉 飄る

「空階」に落ち葉がひるがえることをうたう例であるが、雨をうたう詩ではない<sup>②</sup>。この他、初唐の四傑および陳子昂、盛唐の李白、杜甫、王維、孟浩然、王昌齡、高適などの代表的詩人の作品には、いずれも「空階」の用例は確認できない。盛唐では、岑参に一例のみ「空階」の用例が確認できるが、やはり雨と結びつく内容ではない<sup>③</sup>。

中唐になると、状況は一変する。何遜の詩句は、にわかに詩人たちの注目を集めるようになり、その影響の下に多くの詩が書かれるようになる。この劇的な変化は、おそらく、何遜の詩の陰翳に富んだ表現が、当時の美意識と一致したためであろう。序章で見たように、「夜雨を聴く」詩が多く書かれるようになるのも、中唐以降である。「↓一〇四頁」

まず、比較的何遜の原詩に忠実な作例として、皎然の五律「賦得夜雨滴空階、送陸羽帰龍山」<sup>④</sup>を示す。

閑階夜雨滴 <sup>⑤</sup>	閑階 夜雨 滴り
偏入別情中	偏入 別情の中に入る
断続清猿心	断続して 清猿 心
淋漓候館空	淋漓として 候館 空し
气令煩慮散	気は煩慮をして散ぜしめ
時与早秋同	時は早秋に同じ
帰客龍山道	帰客 龍山の道
東来雜好風	東来 好風を雜えん

皎然が陸羽<sup>⑥</sup>を見送る送別の詩であり、主題は何遜の原詩と同じである。また何遜の原

- ① 『全唐詩』卷八十二。
- ② この詩をはじめ、「空階」に枯れ葉が舞う（積もる）ことをうたう例も多いが、ここでは詳述しない。
- ③ 岑参の五絶「題三会寺蒼頡造字台」（『全唐詩』卷二〇一）：「野寺荒台晚、寒天古木悲。空階有鳥跡、猶似造書時。」これは、石段に残る鳥の足跡をうたう例である。
- ④ 『全唐詩』卷八二〇。
- ⑤ 「閑階（閑階）」という表現は、早くは南朝齊・謝朓の詩に見える。「奉和随王殿下」其二：「閑階塗広露、涼宇澄月陰。」曹融南『謝宣城集校注』（上海古籍出版社、一九九一）卷五（二六六頁）。
- ⑥ 『岩波世界人名大辞典』三一〇〇頁参照。唐代の人で、「茶聖」として知られる。

作は古詩ではあるが、五言八句から成り、しかも中間の四句は対句で構成されている。すなわち、平仄と押韻<sup>①</sup>さえ度外視すれば、五律にきわめて近い。皎然のこの詩は、内容・形式共に何遜の原詩を尊重するものと言えよう。

類似の例としては、この他、楊衡の五古「賦得夜雨滴空階、送魏秀才」<sup>②</sup>がある。この詩は五言八句の送別詩で、何遜の原詩と同じく入声で押韻し、中間四句は対句で構成されている。やはり内容・形式共に何遜の原詩のあり方を遵守している。

また顧況の五律「歷陽苦雨 一作夜雨」<sup>③</sup>の尾聯は、「夜夜空階響、唯余蚯蚓吟」とうたう。この詩は友人の送別の詩ではないが、第二句に「楚客不帰心」とあり、少なくとも旅と愁いという要素は、原詩を継承している。

次に、戴叔倫の作品を紹介しよう。戴叔倫には、五絶「赴撫州對酬崔法曹夜雨滴空階五首」および五絶「又酬曉灯離暗室五首」<sup>④</sup>の二組の連作がある。このうち前者は「曉」「灯」「暗」「離」「室」の五字を順に韻字とし、後者は「夜」「雨」「滴」「空」「階」の五字を順に韻字とする<sup>⑤</sup>。

まず「赴撫州對酬崔法曹夜雨滴空階五首」の中から、「曉」を韻字とする其一を示す。

雨落湿孤客	雨	落ちて	孤客を湿らせ
心驚比棲鳥	心	驚きて	棲鳥に比ぶ
空階夜滴繁	空階	夜	滴ること繁し
相乱応到曉		相い乱れて	応に曉に到るべし

次に「又酬曉灯離暗室五首」の中から、「階」を韻字とする其五を示す。

雨声乱灯影	雨声	灯影に乱れ
明滅在空階	明滅	して空階に在り
併枉五言贈	併せて	枉げて五言を贈る
知同万里懷	知る	同に万里を懷うを

他の詩も、おおむね同様の雰囲気の商品であり、何遜の原作をふまえ、その内容を更に押し広げたものとなっている。戴叔倫の連作は、皎然の五律に比べれば自由度が高く、

① 何遜の原詩は古詩で、仄字（入声）で押韻。近体の律詩は必ず平声で押韻する。

② 『全唐詩』卷四六五。：「委簷方滴滴、霑紅復洒緑。醉聽乍朦朧、愁聞多斷続。始兼泉響細、稍雜更声促。百慮自繁心、況有人如玉。」

③ 『全唐詩』卷二六六。

④ いずれも『全唐詩』卷二七四。蒋寅『戴叔倫詩集校注』（上海古籍出版社、一九九三年）一四五頁および戴文進『叔倫戴詩文集箋注』（南京師範大学出版社、二〇一三）二三八頁参照。なお、崔法曹すなわち崔載華の原詩は、現存しない。

⑤ 陸游にも同様の例がある。最も早い例として、紹興二十四年に山陰で書かれた五古の連作「和陳魯山十詩以『孟夏草木長、遶屋樹扶疎』為韻」（劍南一）がある。これは陶淵明「讀山海經」其一（↓九六頁）の冒頭二句を韻字としたものである。また五古「秋夜感遇十首、以『孤村一犬吠、殘月幾人行』為韻」（劍南五八）は、蘇軾の五律「倦夜」（『蘇軾詩集』卷四十二）の領聯を韻字とした連作である。



遊戯的と言えるかも知れないが、五言である上に、親しい友人との別れという主題を尊重していることに変わりはない<sup>①</sup>。

この他、中唐には聯句の例が二例ある。一例は、耿漳、王早および辛晃の「寄司空曙李端聯句」<sup>②</sup>。もう一例は、白居易、王起および劉禹錫の「秋霖即事聯句三十韻」<sup>③</sup>である。前者は五言二十句。後者は五言六十句から成る大作である。

何遜の詩の影響は、七言にも及んでいる。次に、武元衡の七絶「春齋夜雨憶郭通微」<sup>④</sup>の後半を示す。

雨滴閒階清夜久　　雨　閒階に滴りて　清夜　久し  
焚香偏憶白雲人　　香を焚き　偏に憶う　白雲の人

これは、遠方の友人をなつかしく思う詩である。「閒階」という表現は前掲の皎然の詩にも見えるが、内容・形式共に、何遜の原詩からやや距離を置いた例と言えよう。

晩唐五代にも、「夜雨滴空階」をふまえた詩は書かれ続ける。それらは基本的に中唐の延長上にあると言えるが、最盛期はやはり中唐であり、晩唐以降はその余韻であるという印象も受ける。

喻鳧の「監試夜雨滴空階」<sup>⑤</sup>は、十二句から成る五排である。「監試」は試験を監督する意。唐代の科挙では、五言十二句の排律が出題された<sup>⑥</sup>。この詩は、作者が試験監督の立場で書いてみせた模範解答なのであろうか。この頃には、「夜雨滴空階」は、科挙の試験に出題されるほど広く一般に知られていたのであろう。

陸龜蒙の五律「奉酬襲美苦雨四声重寄三十二句　平入声」<sup>⑦</sup>は、皮日休との唱和から生まれた作品である。

また、鄭谷の七絶「文昌寓直」<sup>⑧</sup>の前半は次のようにうたう。

何遜空階夜雨平　　何遜の空階　夜雨　平らかなり  
朝来交直雨新晴　　朝来　交ごも直し　雨　新たに晴る

「何遜の空階」という表現は、この時点で、何遜の詩句が一つの美の典型として認知され、十分に価値が確立していたことを物語るであろう。

- ① 参考までに、戴叔倫の詩には「聽雨」の用例が三例確認できる。「寄禪師寺華上人次韻三首」其三：「近聞離講席，聽雨半山眠。」「舟中見雨」：「今夜初聽雨，江南杜若青。」「暮春感懷」其二：「短策看雲松寺晚，疏簾聽雨草堂春。」以上すべて『全唐詩』卷二七三。
- ② 『全唐詩』卷七八九。耿漳の句に「高柳寒蟬對，空階夜雨和」とある。
- ③ 『全唐詩』卷七九〇。劉禹錫の句に「高雷愁晨坐，空階警夜眠」とある。
- ④ 『全唐詩』卷三一七。
- ⑤ 『全唐詩』卷五四三。同書の作者解説によれば、喻鳧は毘陵の人で、開成五年（八四〇）の進士。烏程の尉として終わった。詩一卷がある。
- ⑥ 村上哲見『科挙の話　試験制度と文人官僚』第三章参照（一六三頁）。
- ⑦ 『全唐詩』卷六三〇。：「危簷仍空階，十日滴不歇。」
- ⑧ 『全唐詩』卷六七五。

この他、晩唐五代および宋初の詩人では、呉融<sup>①</sup>、李建勳<sup>②</sup>、徐鉉<sup>③</sup>などに「空階」を雨と結びつけてうたう例がある。また無名氏の五絶「河中石刻」にも、「雨滴空階曉」という表現が見える<sup>④</sup>。

ここで詞にも簡単に触れておこう。晩唐になると、「夜雨滴空階」の影響は詩の世界にとどまらず、詞の領域にまで拡大する。その発端となるのが温庭筠の「更漏子」詞<sup>⑤</sup>である。その末尾を示す。

梧桐樹	梧桐の樹
三更雨	三更の雨
不道離情正苦	道らざりき 離情の正も苦しからんとは
一葉葉	一葉葉
一声声	一声声
空階滴到明	空階に滴りて明けに到る

この詞の後、宋代には「空階」の夜雨をうたう詞が数多く作られ、中には柳永や李之儀のように、何遜の詩句をそのまま用いる例もある<sup>⑥</sup>。この他、黄大臨<sup>⑦</sup>、周邦彦<sup>⑧</sup>、毛滂<sup>⑨</sup>、

① 呉融の七律「春雨」(『全唐詩』卷六八七) 尾聯：「別有空階寂寥事、緑苔狼藉落花頻。」詩句に「雨」の字は見えないが、作品全体として春雨をうたう例。

② 李建勳の七律「細雨遥懷故人」(『全唐詩』卷七三九) 尾聯：「昨夜南窓不得眠、閒階点滴回灯坐。」とある。春の夜、遠方の友人を思い、眠らずに雨を聴くことをうたう例。

③ 徐鉉の五律「九月三十夜雨寄故人」(『全唐詩』卷七五二) 首聯：「独聽空階雨、方知愁事悲。」

④ 無名氏「河中石刻」(『全唐詩』卷七八六)：「雨滴空階曉、無心換夕香。井桐花落尽、一半在銀床。」同じ詩が厲鶚『宋詩紀事』卷九十六にも見える。ただし詩題は「石刻詩」。出典は『許彦周詩話』：「嘉祐中、河浜漁者網得小石、石上刻一小詩、不知誰作。」これによれば、北宋の嘉祐年間(一〇五六～一〇六三)に川の中から出て来た石碑に刻まれていた年代不明、作者不明の詩。

⑤ 『全唐詩』卷八九一。また『花間集』卷一。『唐宋名家詞選』一一頁、村上哲見『李煜』一一九頁および青山宏『花間集』(平凡社、二〇一一)六五頁参照。なお『花間集』における「空階」の用例は、この一例のみ。また『全唐詩』卷八九八は、同じ詞を馮延巳の作品として収録している。

⑥ 一例として、柳永「浪淘沙 夢覺」：「那堪酒醒、又聞空階、夜雨頻滴。」なお「夜雨滴」という表現は、この他、方千里および陳允平の詞に見える。方千里「蘭陵王」：「那堪庭院、更聽得、夜雨滴。」陳允平「蘭陵王」：「閒情似絮、更那聽、夜雨滴。」

⑦ 柳永「尾犯」：「夜雨滴空階、孤館夢回、情緒蕭索。」李之儀「南鄉子」：「夜雨滴空階、想見尊前賦詠才。」

⑧ 黄大臨「青玉案 和賀方回韻、送山谷弟貶宜州」：「水村山館、夜闌無寐、聽尽空階雨。」黄大臨は、黄庭堅の兄。『宋詩選注』一九一頁参照。この詞は、黄庭堅が宜州に左遷されるのを見送る際の詞。

⑨ 周邦彦「鎖窓寒 越調」：「桐花半畝、靜鎖一庭愁雨。灑空階、夜闌未休、故人剪燭西窓語。」

⑩ 毛滂「相見歡 秋思」：「中庭樹、空階雨、思悠悠。」

万俟詠<sup>①</sup>、鄧肅<sup>②</sup>、石孝友<sup>③</sup>、陳亮<sup>④</sup>、吳潛<sup>⑤</sup>、蔣捷<sup>⑥</sup>らの作品に、「空階」と雨を結びつけてうたう例が確認できる。本質的に叙情的な声楽曲である詞の場合、宋代になっても別離の主題およびそれに伴う感傷性がよく保たれ、受け継がれているように思われる。ただし陸游の『放翁詞』には、雨をうたう例はあっても<sup>⑦</sup>、「夜雨」および「空階」の用例は確認できない。

## 第二節 宋代の「夜雨滴空階」の詩

宋代の詩にも、「夜雨滴空階」への言及は少なくない。しかし、そのうたいぶりには一定の変化が認められる。何遜の原詩は親しい友人との別れの詩であり、これまでに見て来た中唐から晩唐五代までの作品は、おおむね原詩の趣を尊重して書かれていた。ところが宋代になると、依然として原詩に忠実なものもなくはないが、その一方で唐代より表現の自由度が高くなり、詩人たちはより大胆に原詩から距離をとるようになる。しまいは、原詩を尊重するどころか、その内容を皮肉るもの、茶化すものまで現れる。張高評氏のいわゆる「新變自得」は、「夜雨滴空階」にも及ぶのである。

まず北宋初期の例として、張詠の七絶「雨夜」<sup>⑧</sup>二首の其二を示す。

簾幕蕭蕭竹院深	簾幕	蕭蕭	として	竹院	深し
客懷孤寂伴灯吟	客懷	孤寂	灯に	伴いて	吟ず
無端一夜空階雨	端無くも	一夜	空階の	雨	
滴破思郷万里心	滴破す	思郷	万里の	心	

これは、憂愁に満ちた望郷の詩である。「空階」の夜雨が作者の心にしたたり落ちる、

- ① 万俟詠「長相思 雨」：「一声声、一更更、窗外芭蕉窓裏灯。此時無限情。／夢難成、恨難平、不道愁人不喜聽、空階滴到明。」『唐宋名家詞選』所收（一九五頁）。宋詞研究会『風絮』第三号（二〇〇七）一八三頁参照。
- ② 鄧肅「浣溪沙」：「雨入空階滴夜長、月行雲外借孤光。」
- ③ 石孝友「減字木蘭花」：「空階雨過。細草搖搖光入座。斜日多情。 恋恋幽窓故故明。」これは雨上がりの情景をうたう例である。
- ④ 陳亮「洞仙歌 雨」：「又簷花落處、滴碎空階、芙蓉院、無限秋容老尽。」
- ⑤ 吳潛「蝶恋花」：「客枕夢回聞二鼓、冷落青灯、点滴空階雨。」
- ⑥ 蔣捷「虞美人 聽雨」：「悲歡離合總無情、一任階前、点滴到天明。」『唐宋名家詞選』所收（三〇〇頁）。ただしこの詞には「空階」の語は用いられていない。蔣捷は宋末元初の人。楊景龍『蔣捷詞校注』（中華書局、二〇一〇）によれば、この詞は蔣捷の晩年の作品。
- ⑦ 『唐宋名家詞選』所収の作品に限っても、次の三例がある。「卜算子 詠梅」：「已是黄昏獨自愁、更著風和雨。」「鵲橋仙」：「一竿風月、一蓑煙雨、家在釣台西住。」「鵲橋仙 夜聞杜鵑」：「茅簷人靜、蓬窓灯暗、春晚連江風雨。」（二三三～二三四頁）このうち「卜算子 詠梅」は宋詞研究会『風絮』第二号（二〇〇六）一九八頁参照。また「鵲橋仙」二首は同『風絮』第四号（二〇〇八）一七七頁以下参照。いずれも訳注担当は筆者。
- ⑧ 『宋詩鈔・乖崖詩鈔』。

という表現は、印象的である。この詩の主題は友人との別れではなく、作者自身の望郷の思いであるが、これはまだしも晩唐五代の延長上にある作例と言えるかも知れない。梅堯臣には、より大胆な翻案の例がある。次に五律「新秋雨夜西齋文会」<sup>①</sup>を示す。

夜色際陰霾	夜色 <small>やしよく</small> 陰霾 <small>いんばい</small> に際し
灯青謝客齋	灯は青し 謝客 <small>しゃかく</small> の齋
梧桐生静思	梧桐 <small>ごとう</small> 静思 <small>せいし</small> を生じ
絡緯動秋懷	絡緯 <small>らくい</small> 秋懷 <small>しゅうかい</small> を動かす
小酌寧辞醉	小酌 <small>しょうしやく</small> 寧 <small>いずく</small> んぞ酔うを辞せん
清言不厭諧	清言 <small>せいげん</small> 諧 <small>かい</small> するを厭 <small>いと</small> わず
誰憐何水部	誰か憐れまん 何水部 <small>かすいぶ</small> の
吟苦怨空階	吟苦 <small>ぎんく</small> して空階 <small>くうかい</small> を怨 <small>うら</small> めるを

この詩は、秋雨の夜に作者の友人の家で催された、文人たちの気の置けない会合の情景をうたう。酒を飲んで酔い、冗談をかわして楽しむ。何と楽しく、にぎやかな集いであることか。それは、何遜がうたうようなしんみりした別れの宴会とは対照的である。だから、苦吟して空階を怨んだ何遜のことなど、誰も気の毒に思わないよ、という内容である。いかにも宋人らしい逆転の発想の詩であり、原詩の感傷性を、理知によって突き放している。五律という形式は前掲の皎然の詩「一四八頁」と同じであるが、その内容は大きく異なるものとなっている。

また蘇舜欽には、七律「夜聞窄酒有声、因而成詠」<sup>③</sup>がある。その頸聯を示す。

空階夜雨徒伝句	空階 <small>いたすら</small> の夜雨 <small>りゆう</small> 徒 <small>いたすら</small> に句を伝う
三峡流泉無此声	三峡 <small>さんさつ</small> の流泉 <small>りゅうせん</small> も此 <small>こゝ</small> の声無し

夜、しぼった酒のしたたる音を聞いて、戯れに作った詩である。酒のぼたぼたとしたたる音の素晴らしさ。この音に比べれば、「空階」の夜雨も三峡の流水の音も取るに足りない、というのである。蘇舜欽も宋人らしく、何遜の詩句をひとひねりして用いている。

梅堯臣、蘇舜欽と親交のある歐陽修には「空階」の用例が一例のみ確認できるが、雨をうたう例ではない<sup>④</sup>。また王安石の詩には、「空階」の用例は確認できない。

蘇軾には「空階」の用例が多い。次に五古「秋懷二首」其二<sup>⑤</sup>の冒頭を示す。

海風東南来 海風かいふう 東南より来たり

- ① 『瀛奎律髓』卷十七「晴雨類」。
- ② 『梁書』「何遜伝」：「還為安西安成王參軍事、兼尚書水部郎。」興膳宏『六朝詩人傳』五九五頁。
- ③ 『宋詩鈔・滄浪集鈔』沈文俚『蘇舜欽集』（上海古籍出版社、一九八二）卷八（九三頁）。
- ④ 歐陽修の五排「題張応之景齋」：「綠苔長秋雨、黃葉堆空階。」『文忠集』卷五十六（外集六）。
- ⑤ 王文誥『蘇軾詩集』（中華書局、一九八二）卷八。『唐宋詩醇』卷三十三。佐藤保『中国の名詩鑑賞 宋詩附金』八四頁参照。

吹尽三日雨　　吹き尽くす　三日の雨  
空階有余滴　　空階に余滴有り  
似与幽人語　　幽人と語るに似たり

「空階」にしたたる雨だれの音を聴くと、まるで隠者と話をしているようだ、と蘇軾はうたう。梅堯臣や蘇舜欽ほどのひねりはないかも知れないが、雨の音を人の話し声に見立てるのは、やはり新趣向であろう。

また蘇軾の七律「連雨漲江二首」其二の尾聯は、次のようにうたう。

先生不出晴無用　　先生　出でざれば　晴るるとも用無し  
留向空階滴夜長　　空階に向いて留め　夜の長きに滴らしめん

この私が出かけないのだから、晴れても仕方がない。雨は一晩中空階に滴らせておけばよい、という機知の詩である。自分が出かけるのにあわせて雨が上がった、とうたう前掲「新城道中」(↓一二二頁)と読み比べてみるのも面白い。蘇軾には、この他にも「空階」の雨をうたう例が複数ある<sup>②</sup>。

北宋ではこの他、孔武仲、孔平仲の兄弟に「空階」の用例がある<sup>③</sup>。しかし、以上の例に比べるならば、比較的常識的なもの感じられる。

黄庭堅および陳師道の詩には、「空階」の用例は確認できない。また秦觀の「滿庭芳」詞には「空階」の落葉をうたう例が見えるが<sup>④</sup>、雨をうたう例は確認できない。

北宋から南宋への過渡期の詩人たち、陳与義、曾幾、呂本中らの詩には、「空階」の用例は確認できない。なお、同じ頃に書かれた張戒の『歲寒堂詩話』は、何遜の「夜雨滴空階」を「雕鐫」を免れている詩句の例としてあげている。(↓一四〇頁注②)

南宋の詩人では、范成大と楊万里に「空階」の用例が一例ずつ確認できる。まず范成大の七絶「夜雨」<sup>⑤</sup>(石湖二八)を示す。

① 『蘇軾詩集』卷三十九。『唐宋詩醇』卷四十。

② 七絶「八月十七日、復登望海樓、自和前篇、是日榜出、余与試官兩人復留五首」(『蘇軾詩集』卷八)其四：「天台桂子為誰香、倦聽空階夜点涼。」七律「蘇州閭丘江君二家、雨中飲酒二首」(『蘇軾詩集』卷十一)其一：「今宵記取醒時節、点滴空階獨自聞。」七古「次韻僧潛見贈」(『蘇軾詩集』卷十七、『唐宋詩醇』卷三十六)：「空階夜雨自清絕、誰使掩抑啼孤惻。」なお「蘇州閭丘江君二家」：「其一の王文誥注は「何遜詩」として「夜雨滴空階、滴滴空階裏。空階滴不入、滴入愁人耳」という古詩を引用するが、この詩は『先秦漢魏晉南北朝詩』『全唐詩』のいずれにも見えず、『四庫全書』では宋・不著撰人『錦繡万花谷』前集卷一に「何遜詩」として収録されている。

③ 孔武仲の七律「和竹元珍夜雨」(『宋詩鈔・武仲清江集鈔』)領聯：「旅枕夢雲繁宋玉、空階詩思感何郎。」孔平仲の七律「西齋冬夕」(『宋詩鈔・平仲清江集鈔』)領聯：「雨滴空階如自語、風吹長木更相呼。」なお孔文仲、武仲、平仲の三兄弟は、当時蘇軾兄弟と「二蘇二孔」と並び称されていた。『宋詩選注2』孔平仲解説参照(一一七頁)。

④ 秦觀「滿庭芳」：「碧水驚秋、黃雲凝暮、敗葉零亂空階。洞房人靜、斜月照徘徊。」『唐宋名家詞選』所収(一三七頁)。

⑤ 周汝昌『范成大詩選』(人民文学出版社、一九五九)二六一頁参照。

燭花垂穗伴空齋  
心事如灰入壯懷  
老倦更闌惟熟睡  
任他疎雨滴空階

燭花 穗を垂れ 空齋に伴う  
心事 灰の如く 壯懷に入る  
老い倦み 更闌にして 惟だ熟睡せんとす  
任せん 他の疎雨の空階に滴るに

病床の作とは限らないが、いかにも病気がちな范成大らしい詩である①。「空階」にしたたる雨は、勝手に降らせておけばよい。自分はただぐすり眠りたいだけだ、と詩人はうたう。この詩の風格には、第一章の第三期の陸游に近いものが感じられる。

次に、楊万里的七絶「雪晴」（誠齋二）二首の其二を示す。

晴光雪色忽相逢  
雨滴空階日影中  
珍重北檐殊韻勝  
苛留残玉不教融

晴光 雪色 忽ち相い逢う  
雨 空階に滴る 日影の中  
珍重す 北檐 殊に韻の勝れたるを  
苛くも残玉を留めて融けしめず

「雨滴空階」という表現を用いつつも、雨の詩ではなく雪の詩になっている所が面白い。「日影」は、日の光。「残玉」は、軒先から垂れ下がるつららである。雪がやみ、太陽が出て、ぽたぽたと水滴がしたたる。それでも北の軒先には融け残りのつららがあり、風情があるというのである。楊万里らしい機知に富む詩である。

この他、陸游より後の世代の南宋詩人では、江湖派を代表する劉克莊に「空階」の例が見える。七絶「和仲弟十首」其五②を示す。

一春簷溜不曾停  
滴破空階鮮暈青  
便是兒時對床雨  
絕憐老大不同聽

一春 簷溜 曾て停まらず  
滴破す 空階 鮮暈の青きを  
便是れ 兒時 對床の雨  
絶だ憐れむ 老大 同に聴かざるを

詩題から、劉克莊が自分の弟と唱和した詩と考えられる。何遜ゆかりの「夜雨滴空階」と蘇軾兄弟ゆかりの「夜雨對床」を一首の中で組み合わせている所が面白いが、技巧が勝ちすぎ印象がなくもない③。

元代以降については、ここでは記す余地がない。一つだけ、「夜雨滴空階」の句は清・高宗（乾隆帝）の『御製詩集』にも見えることを、付け加えておこう④。

- ① 『宋詩選注3』范成大解説参照（二〇一頁）。
- ② 辛更儒『劉克莊集箋校』（中華書局、二〇一一）卷十一所収（六三二頁）。『宋詩鈔・後村詩鈔』は其五と其九のみ収録し、詩題を「和仲弟二絶」とする。
- ③ 劉克莊の創作のあり方については、錢鍾書著、宋代詩文研究会訳注『宋詩選注4』（平凡社、二〇〇五）劉克莊解説参照（二〇八頁以下）。
- ④ 五律「夜雨」二首其一首の首聯：「夜雨滴空階、無眠意亦佳。」『御製詩集』初集卷九所収。

### 第三節 陸游自身の「夜雨滴空階」の詩

最後に、陸游自身の「空階」の用例を見てみよう。

陸游の詩に於ける「空階」の用例は、『劍南詩稿』に全部で二十六例確認できる<sup>①</sup>。ただし、「空階」の語を詩題に用いる例はなく、すべて詩句に於ける用例である。陸游の雨の詩全体を把握することは容易ではないが、「空階」の用例はごく限られており、十分に把握可能である。制作時期は、乾道九年（一一七三）から嘉定元年（一二〇八）まで。陸游の年齢で言えば、四十九歳から八十四歳まで。年代別に見ると、四十代の詩は一首、五十代の詩は三首、六十代の詩は三首、七十代の詩は十四首、八十代の詩は五首となっており、七十代の詩が過半数を占めている。また、第一章で紹介した五古「夜雨」（↓一三九頁）以前に書かれた詩は十七首、「夜雨」以後に書かれた詩は八首で、「夜雨」以前に書かれた詩の方が多い。

最初の詩は、蜀の嘉州にいた頃に書かれている。その次の詩は、淳熙三年夏、成都で書かれている。范成大の参議管を免職となり、暗中模索の時期の作品である。三番目の詩は、淳熙五年、山陰に帰った直後に書かれている。すなわち、第一章で紹介した七絶「冬夜聽雨戲作」（↓一二七頁）と同じ頃である。これ以後の作品は大部分が山陰で書かれているが、嚴州や臨安で書かれた詩も一首ずつある。

形式的には、五言のものは少なく、七言のものが多く、五言は、古詩三首、律詩三首、絶句一首、合計七首。七言は、古詩二首、律詩十五首、絶句二首、合計十九首。このように七言が大半を占め、特に七律はそれだけで全体の過半数を占めている。なお、そのうち「新晴」（劍南六五）と「雨」（劍南六六）の二首は、『宋詩鈔』に収録されている。

次に、内容の分析である。調査の結果、陸游の詩に於ける「空階」は、夜雨とは限らないが、例外なく雨と結びついていることが確認できた。しかし、その「空階」のうたいぶりは、前節で紹介した宋代詩人たちにも増して、自由自在なものとなっている。以下、陸游の詩に於ける「空階」の実例を見て行くことにしよう。

陸游の「空階」の詩のうち、その内容が友人との別れに関係あるものが、少なくとも三例確認できる。順に、乾道九年の「雨夜懷唐安」<sup>②</sup>（劍南四）、慶元六年の「枕上作」<sup>③</sup>（劍南四四）二首の其一、そして嘉泰元年夏の「夜雨有感」（劍南四六）である（以上すべて七律）。ただしこれらは、これから友人と別れることをうたう詩ではなく、別れて間もない友人を思う詩、もしくは別れて久しい友人を思う詩である。のみならず、肝心の「空階」という詩語の扱い方も、何遜の原詩とはかなり趣の異なるものとなっている。一例として、「夜雨有感」の後半を示す。

空階点滴何由止 空階の点滴 何に由りてか止めん

① 「参考資料」（各種の一覧表）参照。（↓一七〇頁）

② 陸游「雨夜懷唐安」頸聯……「螢依濕草同為旅、雨滴空階別是愁。」

③ 陸游「枕上作」其一頷聯……「夢回倦枕灯殘後、詩在空階雨滴中。」陸游の自注に「張季長今年尚未通書」とある。張績（季長）は、南鄭で知り合った陸游の友人。（↓三五頁注④）

倦枕凄凉只自知 倦枕 凄凉 只ただ自みずから知る  
平日故人零落尽 平日の故人 零落れいらくし尽つくくす  
寄書誰与叙睽離 書を寄せんとするも 誰か与ともに睽離けいりを叙のべん

人のいない階段にぼたぼたと落ちる雨だれの音は、どうしたら止められるだろうか。ぐったり横になっている私のわびしい気持ちは、誰にもわかりはしない。日頃からの親しい友人たちは、すっかりいなくなってしまう。手紙を届けたくとも、一体誰と離ればなれのつらさを語り合えばいいのだろう。

「空階」に「点滴」する「夜雨」をうたい、遠方の友人を思いながらも、その表現は、内容・形式共に陸游独自のものに「換骨奪胎」されている①。この詩をはじめ、陸游の詩に於ける「空階」の基調は、友人との別れを悲しむ、という何遜の原詩から大きく離れ、作者自身の憂愁をうたうことにあるように思われる。

次に、友人を思うという主題を完全に離れ、作者の個人的な感慨を吐露する「空階」の例を示す。嘉泰四年（一二〇四）夏の七絶「夜雨」（劍南五七）である。

暮雨蕭蕭集瓦溝 暮雨 蕭蕭として瓦溝がこうに集まり  
空階点滴送清愁 空階の点滴 清愁せいしゅうを送る  
何由乞得須臾睡 何に由りてか乞こうを得ん 須臾しゆゆも睡ねむらんことを  
直到窓明滴未休 直ただちに窓明そうめいに到るも 滴したたりて未だ休やまず

暮れ方の雨が物寂しくしとしと屋根瓦の溝に集まり、人のいない階段にぼたぼたと落ちる雨だれの音が、清らかな愁いをもたらす。どうすれば、しばらくの間でも眠らせてもらえるのだろうか。窓の外が明るくなるまで、雨のしずくはしたりやまない。

この詩は、陸游式「夜雨滴空階」の代表例である。次に、類似の表現を数例示す。

点滴空階雨送涼 空階に点滴して 雨 涼を送り  
青灯对影独凄傷 青灯 影せいとうに対し 独ひとり凄傷せいしやうす  
(七律「雨夜感懷」 劍南一五)

誰知病客悲秋意 誰か知らん 病客 悲秋の意  
尽在空階点滴中 尽ことごとく在り 空階 点滴の中  
(七律「秋雨」三首其二 劍南二三)

江湖春暮多風雨 江湖 春暮 風雨多し

① 陸游は七絶「示兒」（劍南二五）の中で江西詩派の理論である「換骨奪胎」を肯定している。…「文能換骨余無法、学但窮源自不疑。齒豁頭童方悟此、乃翁見事可憐遲。」



点滴空階美厭聴 空階に点滴して 実に聴くを厭う  
(七絶「喜晴」 劍南四三)

一秋最恨空階雨 一秋 最も恨む 空階の雨  
滴破羈懷是此声 羈懷を滴破するは是れ此の声なり  
(七律「秋曉」 劍南五五)

不嫌平野蒼茫色 嫌わず 平野 蒼茫の色  
美厭空階点滴声 実に厭う 空階 点滴の声  
(七律「雨」 劍南六六)

このように、「空階」の「点滴」を憂愁に満ちたもの、厭わしいものとしてうたう例が実に多い。何遜の句が素晴らしいということは、必ずしも雨だれの音が素晴らしいということに結びつかないのかも知れない。もつとも、「空階」の「点滴」を好ましいものとしてうたう例もなくはない。次に七律「雨中作」(劍南二二)の首聯を示す。

空濛初喜灑欄楹<sup>①</sup> 空濛として初めて喜ぶ 欄楹に灑ぐを  
忽聴空階点滴声 たちま 忽ち聴く 空階 点滴の声

しかし、このような例はあまり多くはない。なお「点滴空階」という表現は蘇軾の詩にすでに見えるが<sup>②</sup>、陸游は蘇軾以上に同じ表現を好んで用いている。

ここまで、七言を中心に陸游の「空階」の用例を見て来た。前述のように陸游の「空階」は七言が大半を占めているからであるが、ここで五言の例も簡単に見ておくことにしよう。次に、長雨の憂鬱をうたう五古「雨悶示兒子」(劍南三九)の冒頭を示す。

東吳春雨多 東吳 春雨多く  
略無三日晴 略ぼ三日の晴れ無し  
濛濛平野暗 濛濛として 平野 暗く  
浙浙空階声 浙浙として 空階 声あり  
百花雨中尽 百花 雨中に尽き  
三月未聞鶯 三月 未だ鶯を聞かず

ここ東吳の地には春の雨が多く、ほとんど三日と続けて晴れることがない。濛々と空いっばいになって、平野を暗く覆い隠し、しとしとと降り続けて、人のいない階段で音をたてる。花々は雨の中でしおれてしまい、

① 「空濛」の語は、蘇軾の七絶「飲湖上初晴後雨二首」其二に見える。(↓一頁注⑨)  
② 蘇軾「蘇州閭丘江君二家雨中飲酒二首」其一：「点滴空階独自聞。」(↓一五四頁注②)

春の終わりの三月だというのに、まだうぐいすの鳴き声が聞こえない。

陸游の五言の「空階」の成功例であると思われる。この他、五律「雨夜作」(劍南五二)の頸聯は「閑館蕭条意、空階点滴声」とうたう。また第一章で紹介した「春雨」其四(「一四二頁」)も、五言の「空階」の例であった。このような例はあるものの、全体的にはやはり七言の作品の方に、陸游らしさが出ているように感じられる<sup>①</sup>。

ここで話を七言に戻そう。陸游の「空階」の中には、「愛国詩人」らしい慷慨の例すら見える。典型例として、次に七律「憶昔」<sup>②</sup>(劍南三三)の後半を示す。

壮志可憐成昨夢   壮志  憐れむべし  昨夢と成り  
残年惟有事春耕  残年  惟だ春耕を事とするのみ有り  
西窓忽聽空階雨  西窓に忽ち聴く  空階の雨  
独对青灯意未平  ひとり青灯に対し  意  未だ平らかならず

若き日の失地回復の志は、悲しいことに昨日の夢となり果て、残された人生の時間は、ただ春の耕作につき込むばかり。

西の窓辺で突然、人のいない階段に降り注ぐ雨の音を耳にする。ただ一人、青白く輝くともし火に向き合い、心はまだ穏やかにならない。

これは陸游七十一歳の作である。末尾の「意未平」という表現は、第一章で見た七古「三月十七日夜醉中作」(「一四二頁」)の「逆胡未滅心未平」を連想させる。

今度は、「空階」に降る激しい雨をうたう例を紹介しよう。慶元五年春に書かれた七古「夜雨」(劍南三九)の冒頭である。

空階雨声夜転急  空階の雨声  夜  転た急なり  
壁疎窓破凄風入  壁は疎らに  窓は破れ  凄風  入る

この詩には「空階」の語は見えるが、「滴」の字は用いられていない。破れた窓から激しい風が吹き込んで来るというのであり、ほとんど前掲「十一月四日風雨大作」(「一三六頁」)の変奏である。これらの例に於ける「空階」の夜雨は、もはや何遜の原詩とは完全に別の物である。自分の用いた詩語がこのような表現にも「換骨奪胎」され得ることを知つたら、何遜はさぞ驚くであろう。

そうかと思えば、次のような面白い例もある。七律「書意」(劍南四二)の頸聯を示す。

床頭酒滴空階雨  床頭  酒  滴るは  空階の雨

① 参考までに、錢鍾書『宋詩選注』は陸游の七言の作品ばかり三十二首を選び、五言の作品を一首も選んでいない。拙稿『宋詩選注』に収録された陸游の作品について(宋代詩文研究会『橄欖』第十三号、二〇〇五)参照。

② 石川忠久『陸游一〇〇選』二二八頁参照。

炉面香横出岫雲 炉面 香 横たわるは 岫を出ずる雲

酒のしたたる音を空階の雨に、香炉の煙を山の雲にたとえるこの詩は、前掲の蘇舜欽の詩を連想させる。「↓一五三頁」ただし蘇舜欽は酒のしたたる音が「空階」の夜雨より素晴らしいとうたっているのに対し、陸游は酒のしたたる音が「空階」の夜雨のようだとうたっており、比喻の用い方に一定の違いが認められる。

最後に、晩年の平静な境地をうたう作品を紹介し、本章を締めくくりにしたい。開禧二年（一二〇六）春、陸游は七律「新晴」<sup>①</sup>（劍南六五）を書く。時に八十二歳。

夜雨空階滴到明	夜雨 空階 滴りて明けに到る
山雲忽斂作新晴	山雲 忽ち斂まり 新晴を作す
門前月淡有檐影	門前 月 淡きも 檐影有り
牆外泥乾無屐声	牆外 泥 乾くも 屐声無し
与世日疎愁易遣	世と日に疎く 愁い 遣り易く
入春得暖疾差平	春に入りて暖を得 疾 差や平らぐ
便当刺作滄洲趣 <sup>②</sup>	便ち当に刺に滄洲の趣を作すべし
寄語沙鷗勿敗盟 <sup>③</sup>	語を寄せん 沙鷗よ 盟を敗ること勿かれ

夜の雨は人のいない階段にしたり落ち、明け方を迎える。山にかかる雲はたちまち消え去り、新しい晴れ空が広がる。

門前にはまだ月がうつすらとかかっているが、ひさしは影を作っており、垣根の外の道はもう泥がかわいているが、下駄の音は聞こえない。

この私は、日増しに世の中と疎遠になり、憂さを晴らすのはたやすいこと。春に入って暖かくなり、病気の身体は、いくらか調子が良くなった。

かくなる上は、是非とも隠者の住む水辺へと出かけてみようではないか。砂浜のかもめよ、聞いておくれ。私との約束を破ってはいけないぞ。

冒頭の句「夜雨空階滴到明」には何遜の「夜雨滴空階」の五字がすべて含まれているが、作品全体としては完全に陸游独自の境地の表現となっており、借り物であることを感じさせない。陸游の「空階」の諸作の中では、この詩が最も味わいがあるように思われる。「換骨奪胎」の成功例と言えよう。

① 『宋詩鈔・劍南詩鈔』所収。

② 南朝齊・謝朓「之宣城郡出新林浦向板橋」〔先秦漢魏晉南北朝詩〕齊詩卷三〕…「既歛懷祿情、復協滄洲趣。」

③ 唐・杜甫「旅夜書懷」〔全唐詩〕卷二二九〕…「飄飄何所似、天地一沙鷗。」

## 結 び

以上、何遜の「夜雨滴空階」の句が歴代の詩人・詞人たちにいかに影響を与えて来たかを概観した。

何遜の句は、梁の時代にある程度類似の作品が書かれたものの、南北朝の終わりから初唐・盛唐までの間は、ほとんど顧みられることがなかった。しかし中唐になると、その陰翳に富んだ表現が注目を集め、多くの詩人の創作に影響を及ぼした。晩唐になると詩のみならず詞にも影響が拡大し、更にその後の宋词へと受け継がれて行く。宋代になると、何遜の詩句は詩人たちによつてより自由に扱われるようになり、様々な翻案が生み出される。

このように何遜の詩句は、陸游以前に唐宋の少なからぬ詩人・詞人たちに愛好され、広汎な影響を及ぼしている。巨視的に見るならば、陸游も、そうした系譜に連なる一人と言ふことができよう。しかし陸游は、過去の様々な「夜雨滴空階」の作品をふまえた上で、他の誰よりも何遜の詩句を自家薬籠中のものとし、自由自在に駆使しつつ、独自の世界を表現している。まさしく「雨の詩人」の真骨頂である。五古「夜雨」に於ける何遜への称賛は、決しておさなりのものではないことが理解できるのである。

参考資料（各種の一覧表）

以下、序章から第二章までの各章の理解を助けられると思われる各種の一覧表を、まとめて掲載する。本文中（注は除く）で言及した作品および詩句は太字で表示し、その頁数を付記する。ただし言及が複数箇所の場合、最も主要な頁のみとする。

○ 『唐詩三百首』所収の詩に見える雨の表現

『唐詩三百首』は、清・蘅塘退士こうとうたいしこと孫洙そんしゆの撰。唐代の代表的な古詩、律詩、絶句の作品を三百首余り収録する。ここでは金性堯『唐詩三百首新注』（上海古籍出版社、一九八〇年）を底本とした。

- 一、雨を主題とする詩のみならず、一部でも雨に対する言及のある場合も採録する。「涙如雨」など、雨を比喻として用いる場合も含む。
- 一、「雨霜」「雨雪」等の場合、「雨」は「降る」という動詞なので、採録しない。杜甫「寄韓諫議注」の「青楓葉赤天雨霜」、李頎「古從軍行」の「雨雪紛紛連大漠」など。
- 一、表の途中の二重線は、形式による区分を表す。

作者	詩題	雨の表現	形式	備考
杜甫	贈衛八処士〔↓一〇三頁〕	夜雨剪春韭	五古	夜雨の例
丘為	尋西山隱者不遇	草色新雨中	五古	新雨の例
韋應物	郡齋雨中與諸文士燕集〔↓一〇五頁〕	海上風雨至	五古	風雨の例
	寄全椒山中道士	遠慰風雨夕	五古	風雨の例
	長安遇馮著	衣上灞陵雨	五古	
	東郊	微雨靄芳原	五古	微雨の例
李頎	古意	使我三軍淚如雨	雜古	淚の比喻
	聽董大彈胡笳寄語弄房給事	長風吹林雨墮瓦	雜古	
李白	夢遊天姥吟留別	雲青青兮欲雨	雜古	
杜甫	古柏行	霜皮溜雨四十圍	七古	
韓愈	山石〔↓一〇六頁〕	升堂坐階新雨足	七古	新雨の例
	八月十五夜贈張功曹	不能聽終淚如雨	七古	淚の比喻
	謁衡岳廟遂宿岳寺題門樓	我來正逢秋雨節	七古	秋雨の例
	石鼓歌	雨淋日炙野火燎	七古	
白居易	長恨歌〔↓一〇五頁〕	夜雨聞鈴腸斷聲	七古	夜雨の例
		秋雨梧桐葉落時		秋雨の例
		梨花一枝春帶雨		
	琵琶行	大弦嘈嘈如急雨	七古	琵琶の音の比喻
高適	燕歌行	胡騎憑陵雜風雨	七古	風雨の例

杜甫	兵車行	天陰雨湿声啾啾	雜古	
王維	山居秋暝 (↓一〇一頁)	空山新雨後	五律	新雨の例
	送梓州李使君 (↓一〇一頁)	山中一夜雨	五律	夜雨の例
劉長卿	尋南溪常道士	過雨看松色	五律	
錢起	谷口書齋寄楊補闕	竹憐新雨後	五律	新雨の例
韋忠物	賦得暮雨送李曹	楚江微雨裏	五律	微雨の例
司空曙	雲陽館與韓紳宿別	孤灯寒照雨	五律	
	喜外弟盧綸見宿	雨中黃葉樹	五律	雨中の例
許渾	秋日赴闕題潼關驛樓	疏雨過中條	五律	疏雨の例
李商隱	風雨 (↓一〇七頁)	黃葉仍風雨	五律	風雨の例
馬戴	灞上秋居	灞原風雨定	五律	風雨の例
崔塗	孤雁	暮雨相呼失	五律	暮雨の例
韋莊	章台夜思	繞弦風雨哀	五律	風雨の例
崔顥	行經華陰	仙人掌上雨初晴	七律	
高適	九日登望仙台呈劉明府	二陵風雨自東來	七律	風雨の例
王維	送李少府貶峽中王少府貶長沙	聖代即今多雨露	七律	恩沢の比喻
	奉和聖製從蓬萊向興慶閣道中留春雨中春望之作應制	雨中春樹萬人家	七律	雨の中の例
	積雨輞川莊作 (↓一〇一頁)	積雨空林煙火遲	七律	積雨の例
杜甫	詠懷古蹟五首 其二	雲雨荒台豈夢思	七律	雲雨の例
錢起	贈闕下裴舍人	龍池柳色雨中深	七律	雨の中の例
韓翃	同題仙游觀	風物淒淒宿雨收	七律	宿雨の例
柳宗元	登柳州城樓寄漳汀封連四州刺史	密雨斜侵薜荔牆	七律	密雨の例
李商隱	無題二首 其二	颯颯東風細雨來	七律	細雨の例
孟浩然	春雨 (↓一〇七頁)	紅樓隔雨相望冷	七律	
	春曉 (↓一〇二頁)	夜來風雨聲	五絕	風雨と夜雨の例
王昌齡	芙蓉樓送辛漸 (↓一〇二頁)	寒雨連江夜入吳	七絕	寒雨の例
韋忠物	滁州西澗 (↓一〇五頁)	春潮帶雨晚來急	七絕	
李商隱	夜雨寄北 (↓一〇七頁)	巴山夜雨漲秋池	七絕	夜雨の例
	寄令狐郎中 (↓一〇七頁)	却話巴山夜雨時	七絕	夜雨の例
鄭畋	馬嵬坡	茂陵秋雨病相如	七絕	秋雨の例
韋莊	台城 (↓一〇八頁)	雲雨難忘日月新	七絕	雲雨の例
無名氏	雜詩	江雨霏霏江草齊	七絕	江雨の例
王維	渭城曲 (↓一〇一頁)	近寒食雨草萋萋	七絕	寒食雨の例
李白	清平調 三首其二	渭城朝雨浥輕塵	七絕	朝雨の例
		雲雨巫山枉斷腸	七絕	雲雨の例

○ 『宋詩選注』所収の詩に見える雨の表現

錢鍾書の『宋詩選注』は、一九五八年に人民文学出版社より初版が発行された。二十世紀中国の代表的な宋詩選集である。様々な版本があるが、平凡社東洋文庫『宋詩選注』の訳注作業の場合と同様、二〇〇二年七月発行の大学生必読叢書版を底本とした。同書は八十家の宋代詩人の作品三七五首を収録している。ここでは同書所収の雨の詩を、収録順に一覧表として示す。

- 一、『唐詩三百首』の場合と同様、詩題または詩句に「雨」の字を含むものに限定する。(部分的にせよ、雨に対する言及のあるものも含む)。比喩的な表現も含む。
- 一、序章で紹介した秦觀「春日」(↓一三頁)のように「雨」の字を用いずに雨を表現する場合もあるが、ここでは「雨」の字のない詩は採録しない。劉攽「新晴」、文同「早晴至報恩山寺」なども同様である。
- 一、また、劉攽「城南行」など、増水、大水、洪水をうたう詩がある。大水は大量の降雨の結果であり、こうした詩は間接的に雨を表現していると考えられることもできる。しかし、「雨」の字が用いられていない場合、採録しない。
- 一、王令「餓者行」の冒頭は「雨雪不止泥路迂」とうたうが、この「雨」は動詞であり、雪が「降る」という意味なので、採録しない。姜夔「昔遊詩」(二五首其七)「日日風雨雪」、また戴復古「庚子薦饑」(六首其三)「有天不雨粟」も同様である。
- 一、詩に副題がある場合、一律に省略する。
- 一、表の途中の二重線は、平凡社東洋文庫(全四冊)に於ける境界を表す。

作者	詩題	雨の表現	形式	備考
鄭文宝	柳枝詞	不管煙波与風雨	七絶	風雨の例
王禹偁	寒食	郊原曉緑初経雨	七律	
寇準	夏日	輕寒微雨麦秋時	七絶	微雨の例
梅堯臣	田家	碎莢落風雨	五絶	風雨の例
	田家語	愁氣變久雨	五古	寒雨の例
	汝墳貧女(↓一一〇頁)	果然寒雨中	五古	風雨の例
蘇舜欽	淮中晚泊犢頭(↓一一一頁)	滿川風雨看潮生	七絶	風雨の例
	初晴遊滄浪亭(↓一一一頁)	夜雨連明春水生	七絶	夜雨の例
歐陽修	啼鳥	雨声蕭蕭泥滑滑	七古	雨声の例
李觀	苦雨初霽	「雨」の字なし	七律	
文同	新晴山月	病雨山果墜	五古	
曾鞏	西楼	臥看千山急雨来	七絶	急雨の例
	城南	雨過横塘水滿堤	七絶	
王安石	江上(↓一一一頁)	曉雲含雨却低回	七絶	
鄭獬	滯客	五月不雨至六月 截断雨脚不到地	七古	雨脚の例

陳與義	李彌遜	曾幾	王庭珪	汪藻	呂本中	徐俯	陳師道	黃庭堅	唐庚	賀鑄	張舜民	孔平仲	張耒	蘇軾	晁端友	劉攽																			
中牟道中二首其一〔↓一一五頁〕	春日即事	蘇秀道中、自七月二十五日夜大雨三日、秋苗以蘇、喜而有作〔↓一一五頁〕	二月二日出郊	和周秀実田家行	即事 二首其一 即事 二首其二	柳州開元寺夏雨〔↓一一五頁〕	春遊湖	春懷示隣里〔↓一一三頁〕	田家	雨中登岳陽樓望君山二首其二〔↓一一二頁〕	栖禪暮歸書所見 二首其一 栖禪暮歸書所見 二首其二	宿芥塘仏祠	野歩	打麦	霽夜	初見嵩山	海州道中 二首其二	勞歌	感春 十三首其一 感春 十三首其八	荔枝歎	雨晴後步至四望亭下	端午徧遊諸寺	飲湖上初晴後雨 二首其二〔↓一一一頁〕	吳中田婦歎〔↓一二二頁〕	望海樓晚景 五首其二〔↓一一一頁〕	〔↓一一一頁〕	六月二十七日望湖樓醉書 五首其一	宿濟州西門外旅館	雨後池上	江南田家	春尽				
雨意欲成還未成	小雨糸糸欲網春	一夕驕陽轉作霖	霧失江城雨脚微	連宵作雨知豐年	臥看青雲載雨過	西窓一雨無人見	処処浮雲將雨行	風雨瀟瀟似晚秋	春雨斷橋人不度	斷牆着雨蝸成字	昨夜三尺雨	滿川風雨獨憑欄	草青仍過雨	雨在時時黑	開門未掃楊花雨	黃草庵中疏雨濕	竹鷄叫雨雲如墨	狂風送雨已何処	日暮北風吹雨去	一秋雨多水滿轍	欲動身先汗如雨	暑天三月元無雨	冉冉朝復雨	雨余塵埃少	雨順風調百穀登	微雨止還作	雨過浮萍合	霜風來時雨如瀉	眼枯淚尽雨不尽	山色空濛雨亦奇	橫風吹雨入樓斜	雨過潮平江海碧	白雨跳珠乱入船	再為霖雨傷	夜來過嶺忽聞雨
七絶	七絶	七律	七律	七古	七絶	七絶	七古	七律	七絶	七律	五古	七絶	五絶	五絶	七律	七絶	七律	七絶	七古	七古	七古	五古	五古	五古	七古	五律	五古	七絶	七古	七絶	七絶	七絶	七絶	五古	七律
雨意の例	小雨の例	霖は雨	雨脚の例	夜雨の例			風雨の例	春雨の例		風雨の例	柳絮の比喩	疏雨の例	風雨の例	風雨の例	汗の比喩						微雨の例			風雨の例	風雨の例		風雨の例	白雨の例	小雨の例	霖雨の例	聞雨の例				



趙汝鏞	戴復古	劉宰	華岳	裘万頃	趙師秀	翁卷	姜夔	章甫	陳造	王質	范成大	陸游	楊万里	周紫芝	曹勛	朱弁	雨晴 (↓一五頁)
耕織歎 二首の其一	夜宿田家	開禧紀事 二首の其一	驟雨	雨後	約客	鄉村四月	平甫見招不欲往	田家苦	田家謠	山行即事	十一月四日風雨大作二首其二 (↓一三六頁)	劍門道中遇微雨 (↓一二三頁)	過百家渡 四首其四	禽言 思婦樂	出塞	送春	雨中對酒庭下海棠經雨不謝 (↓一一五頁)
久晴渴雨車聲發	雨行山崦黃泥坂	喚晴喚雨無事無	雨勢驟晴山又綠	慌忙冒雨急渡溪	牛頭風雨翻車軸	秋事雨已畢	黃梅時節家家雨	子規聲裏雨如煙	人生難得秋前雨	憂雨憂風愁煞儂	雨師懶病藏不出	半月天晴一夜雨	荷雨洒衣濕	雨後山家起較遲	忌雨嫌風更怯寒	雨後山家起較遲	南山雷動雨連宵
七古	七律	雜古	七古	五古	七絕	七絕	七絕	七古	七古	五律	七絕	七絕	七絕	七絕	七絕	七絕	七絕
		雨勢の例		風雨の例			雨師は雨神	夜雨の例	荷雨の例		雨後の例		風雨の例	秋雨の例	細雨の例		細雨の例

詩題	卷	形式	制作時期	西曆	年齢	場所
晩雨	四	五律	乾道九年秋	一一七三	四九	嘉州
夜雨感懷 (↓一二五頁)	四	七律	乾道九年秋	一一七三	四九	嘉州
池上晩雨	五	七律	淳熙元年夏秋	一一七四	五〇	蜀州
夜雨有感 (↓一二六頁)	九	七律	淳熙四年冬	一一七七	五三	成都
夕雨 (二首)	一一	五律	淳熙六年夏	一一七九	五五	建安
黃亭夜雨	一一	七絶	淳熙六年秋	一一七九	五五	崇安
夜雨枕上	一八	五古	淳熙十三年秋	一一八六	六二	嚴州
夜雨暴至	二一	七古	紹熙元年秋	一一九〇	六六	山陰
夜雨 (三首)	二六	五律	紹熙四年春	一一九三	六九	山陰
夜雨	三二	七律	慶元元年夏	一一九五	七一	山陰
夜雨思括蒼遊	三四	七絶	慶元二年春	一一九六	七二	山陰
夜雨	三九	七古	慶元五年春	一一九九	七五	山陰
夜雨	四〇	五古	慶元五年秋	一一九九	七五	山陰
夜雨有感	四六	七律	嘉泰元年夏	一二〇一	七七	山陰
偶作夜雨詩、明日詭而自笑、別賦一首	四六	七律	嘉泰元年夏	一二〇一	七七	山陰
夜雨 (↓一三八頁)	四八	五古	嘉泰元年秋	一二〇一	七七	山陰
夜雨	五一	五律	嘉泰二年夏	一二〇二	七八	山陰
夜雨	五七	七絶	嘉泰四年夏	一二〇四	八〇	山陰

陸游の詩の制作時期は、錢仲聯『劍南詩稿校注』の題解による。また長い詩題には適宜句読点を挿入した。

○ 陸游の詩題に於ける「夜雨」「晩雨」および「夕雨」の例

蕭立之	偶成	雨妬遊人故作難	七絶			
蕭立之	春寒歎	雨爛秧青無日曬	七古			
汪元量	醉歌 十首の其八	涌金門外雨晴初	七絶			
汪元量	湖州歌 九十八首の其十五	風雨凄凄能自遣	七絶			風雨の例
汪元量	湖州歌 九十八首の其十六	莫雨蕭蕭酒力微	七絶			莫雨は暮雨
文天祥	除夜	末路驚風雨	五律			風雨の例
文天祥	南安軍	風雨濕征衣	五律			風雨の例
周密	西廔秋日即事	酸風吹雨水辺樓	七絶			風雨の例
樂雷發	常寧道中懷許介之	雨過池塘路未乾	七律			
利登	田家即事	小雨初晴歲事新	七絶			小雨の例
方岳	三虎行	黃茅慘慘天欲雨	七古			
方岳	農謡 五首の其四	雨過一村桑柘煙	七絶			
方岳	春思	纔吹小雨又須晴	七絶			小雨の例
劉克莊	築城行	白棒訶責如風雨	七古			呵責の比喻
途中		雨中奔走十來程	七律			

詩題	卷	形式	制作時期	西曆	年齢	場所
雨夜懷唐安	四	七律	乾道九年秋	一一七三	四九	嘉州
雨夜	一一	五律	淳熙六年夏	一一七九	五五	建安
雨夜不寐、觀壁間所張魏鄭公砥柱銘	一一	七古	淳熙六年夏	一一七九	五五	建安
雨夜偶書	一一	七律	淳熙六年夏	一一七九	五五	建安
雨夜	一一	五律	淳熙六年秋	一一七九	五五	建安
雨夜	一一	七律	淳熙七年春	一一八〇	五六	撫州
雨夜	一一	七絶	淳熙七年夏	一一八〇	五六	撫州
雨夜 (二首)	一二	五古	淳熙七年夏	一一八〇	五六	撫州
雨夜 (↓一二九頁)	一二	七絶	淳熙七年秋	一一八〇	五六	撫州
雨夜	一四	七律	淳熙十年夏	一一八三	五九	山陰
雨夜感懷 (↓一〇五頁)	一五	七律	淳熙十年秋	一一八三	五九	山陰
雨夜	一八	五古	淳熙十三年秋	一一八六	六二	嚴州
雨夕	一九	五古	淳熙十四年冬	一一八七	六三	嚴州
雨夜四鼓起坐至明	二〇	五律	淳熙十五年秋	一一八八	六四	山陰
雨夜南堂独坐	二五	七古	紹熙三年秋	一一九二	六八	山陰
雨夜排悶 (二首)	二七	五律	紹熙四年秋	一一九三	六九	山陰
雨夕焚香	二七	七絶	紹熙四年秋	一一九三	六九	山陰
雨夜	二七	七律	紹熙四年秋	一一九三	六九	山陰
雨夕排悶 (二首)	三〇	五律	紹熙五年秋	一一九四	七〇	山陰
雨夜書感 (二首)	三二	五古	慶元元年春	一一九五	七一	山陰
雨夜 (二首)	三三	七律	慶元元年冬	一一九五	七一	山陰
雨夜有懷張季長少卿	三三	七律	慶元元年冬	一一九五	七一	山陰
雨夕独酌書感	三三	七律	慶元元年冬	一一九五	七一	山陰
雨夜	三四	七律	慶元二年夏	一一九六	七二	山陰
雨夜讀書 (二首)	三五	七古	慶元二年秋	一一九六	七二	山陰
雨夜感旧	三八	五古	慶元四年冬	一一九八	七四	山陰
雨夜 (↓一三八頁)	三八	七律	慶元四年冬	一一九八	七四	山陰
雨夜讀書	四二	五律	慶元五年冬	一一九九	七五	山陰

○ 陸游の詩題に於ける「雨夜」および「雨夕」の例

夜雨	八一	七律	嘉定二年春	一二〇九	八五	山陰
夜雨寒甚	八〇	七古	嘉定元年冬	一二〇八	八四	山陰
夜雨	七八	五律	嘉定元年秋	一二〇八	八四	山陰
晚雨	七二	五古	開禧三年夏	一二〇七	八三	山陰
晚雨	七一	五律	開禧三年夏	一二〇七	八三	山陰
夜雨	七〇	七絶	開禧三年春	一二〇七	八三	山陰
夜雨	六七	七絶	開禧二年夏	一二〇六	八二	山陰
夜雨	五七	五律	嘉泰四年夏	一二〇四	八〇	山陰

雨夕枕上作	四三	七律	慶元六年春	一一〇〇	七六	山陰
雨夜	四三	七絶	慶元六年夏	一一〇〇	七六	山陰
雨夜	四三	五律	慶元六年夏	一一〇〇	七六	山陰
雨夜歎	四七	七古	嘉泰元年秋	一一〇一	七七	山陰
雨夜	五〇	七律	嘉泰二年春	一一〇二	七八	山陰
雨夜觀史	五一	七律	嘉泰二年夏	一一〇二	七八	山陰
雨夜	五一	五律	嘉泰二年秋	一一〇二	七八	臨安
雨夜	五一	五律	嘉泰二年秋	一一〇二	七八	臨安
雨夜作	五二	五律	嘉泰二年冬	一一〇二	七八	臨安
雨夜起行室中	六三	七律	開禧元年秋	一一〇五	八一	山陰
雨夜枕上作	六四	五古	開禧元年秋	一一〇五	八一	山陰
病中雨夜	六四	五律	開禧元年冬	一一〇五	八一	山陰
雨夜	六七	七律	開禧二年夏	一一〇六	八二	山陰
雨夜思子虞	七六	五律	嘉定元年春	一一〇八	八四	山陰
雨夜	七六	五律	嘉定元年夏	一一〇八	八四	山陰
雨夜	七七	七絶	嘉定元年秋	一一〇八	八四	山陰
雨夜与隣翁飲、用前輩韻	八一	七古	嘉定二年春	一一〇九	八五	山陰

○ 陸游の詩題に於ける「聞雨」「聽雨」および「雨声」の例

詩題	卷	形式	制作時期	西曆	年齢	場所
聞雨 (↓一二二頁)	二	五律	乾道四年 <sup>①</sup>	一一六八	四四	山陰
雨声 (↓一二五頁)	五	雜古	淳熙元年夏	一一七四	五〇	蜀州
中夜聞大雷雨 (↓一二六頁)	七	七古	淳熙三年春	一一七六	五二	成都
夜聞雨声 (↓一二六頁)	八	七律	淳熙四年春	一一七七	五三	成都
冬夜聽雨戲作二首 (↓一二七頁)	一〇	七絶	淳熙五年冬	一一七八	五四	山陰
聞雨	一二	七絶	淳熙七年秋	一一八〇	五六	撫州
夜聞竹間雨声 (↓一三〇頁)	一七	五古	淳熙十二年夏	一一八五	六一	山陰
秋夜聞雨	一八	七律	淳熙十三年秋	一一八六	六二	嚴州
齋中聞急雨	二〇	七絶	淳熙十五年秋	一一八八	六四	山陰
雨声 (↓一三四頁)	二四	七古	紹熙二年冬	一一九一	六七	山陰
枕上聞急雨	二七	七絶	紹熙四年秋	一一九三	六九	山陰
十二月二十六日夜聽雨 (↓一三七頁)	二九	五古	紹熙四年冬	一一九三	六九	山陰
聽雨	六四	七絶	開禧元年秋	一二〇五	八一	山陰
五更聞雨思季長	六六	五古	開禧二年夏	一二〇六	八二	山陰
夜聞雨声	六九	七律	開禧二年冬	一二〇六	八二	山陰
枕上聞雨声	七〇	七絶	開禧三年春	一二〇七	八三	山陰
聽雨	七一	七絶	開禧三年夏	一二〇七	八三	山陰

① ここでは便宜的に乾道四年とする。

○ 陸游の詩句に於ける「空階」または「空塔」の例（西暦は略す）

第二章では表記を「空階」に統一したが、ここでは本来の表記を尊重する。ただし、陸游がいかなる基準で「空階」と「空塔」を使い分けているのかは不明である。念のため、明汲古閣本の宋板翻雕『劔南詩稿』を調べてみたところ、すべての詩について表記が完全に一致していることが確認できた（錢仲聯『劔南詩稿校注』は汲古閣本を底本とする）。

詩題	言及箇所	卷	形式	制作時期	年齢	場所
雨夜懷唐安（↓一五六頁）	雨滴空階別是愁	四	七律	乾道九年秋	四九	嘉州
明日開霽益涼復得長句	已聞雨斷空階滴	七	七律	淳熙三年夏	五二	成都
欲行雨未止	空階送雨声	一〇	五律	淳熙五年冬	五四	山陰
雨夜感懷（↓一五七頁）	点滴空塔雨送涼	一五	七律	淳熙十年秋	五九	山陰
寒夜移疾 二首其一	付与空塔夜雨声	一九	七律	淳熙十四年冬	六三	嚴州
雨中作（↓一五八頁）	忽聽空階点滴声	二二	七律	紹熙二年夏	六七	山陰
秋雨 三首其二（↓一五七頁）	尽在空塔点滴中	二三	七律	紹熙二年秋	六七	山陰
憶昔（↓一五九頁）	西窓忽聽空階雨	三三	七律	慶元元年冬	七一	山陰
閉門	灯昏共度空階雨	三八	七律	慶元四年冬	七四	山陰
寒雨中偶賦 二首其一	空塔滴雨又經秋	三八	七律	慶元四年冬	七四	山陰
雨悶示兒子（↓一五八頁）	浙浙空階声	三九	五古	慶元五年春	七五	山陰
夜雨（↓一五九頁）	空階雨声夜転急	三九	七古	慶元五年春	七五	山陰
望霽	夜雨勿厭空塔声	三九	七古	慶元五年夏	七五	山陰
書意（↓一五九頁）	床頭酒滴空塔雨	四二	七律	慶元五年冬	七五	山陰
喜晴（↓一五八頁）	点滴空塔実厭聽	四三	七絶	慶元六年夏	七六	山陰
枕上作 二首其一（↓一五六頁）	詩在空塔雨滴中	四四	七律	慶元六年秋	七六	山陰
夜雨有感（↓一五六頁）	空塔点滴何由止	四六	七律	嘉泰元年夏	七七	山陰
夜雨（↓一三九頁）	南朝空塔語	四八	五古	嘉泰元年秋	七七	山陰
苦雨 二首其二	空塔滴不休	五一	五律	嘉泰二年夏	七八	山陰
雨夜作（↓一五九頁）	空塔点滴声	五二	五律	嘉泰二年冬	七八	臨安
秋曉（↓一五八頁）	一秋最恨空塔雨	五五	七律	嘉泰三年秋	七九	山陰
夜雨（↓一五七頁）	空階点滴送清愁	五七	七絶	嘉泰四年夏	八〇	山陰
新晴（↓一六〇頁）	夜雨空塔滴到明	六五	七律	開禧二年春	八二	山陰
春雨 四首其四（↓一四二頁）	疎点滴塔雨	六五	五絶	開禧二年春	八二	山陰
雨（↓一五八頁）	実厭空塔点滴声	六六	七律	開禧二年春	八二	山陰
喜晴	臥聽空塔声	七八	五古	嘉定元年秋	八四	山陰

## 陸游詠雨詩年表

ここに陸游の雨の詩を整理し、「陸游詠雨詩年表」とする。作成にあたっての基本方針は、次の通りである。

一、陸游の詩題に初めて「雨」の字が出現する紹興二十九年から、陸游が世を去る嘉定二年までの約五十年間の雨の詩を、一年ごとに整理する。

一、詩題に「雨」の字を用いない雨の詩も存在するが、ここでは詩題（副題も含む）に「雨」の字を含む作品に限定する。

一、「雨雪」「雨霰」のように「雨」が「降る」という動詞として用いられている場合は、一律に除外する<sup>①</sup>。

一、詩題には本来句読はないが、長い詩題の場合、適宜句読点を挿入する。

一、繁雑を避けるため、詩の形式、詩題の訓読、詩の書かれた季節、場所などは省略する。

一、同年に同題の作品が複数あり紛らわしい場合、初句を（ ）に入れて示す。

一、『劍南詩稿』に於ける収録巻数を、巻数の変わり目のみ（以下劍南〇）（以上劍南〇）の形で示す。また一卷に一首のみの場合は（劍南〇）の形で示す。

一、各年の陸游の略歴を、各年の最初に簡潔に記す。また陸游以外の人物の事跡および時事については「」に入れて記す。

一、本文中（注は除く）で言及した作品は太字で表示し、その頁数を付記する。ただし言及が複数箇所の場合、最も主要な頁のみとする。

一、陸游の雨の詩の、中国の主要な陸游選集に於ける収録状況を調べる。何らかの選集にその詩が収録されている場合、詩題の下に…で示す。参照した文献は次の通りである<sup>②</sup>。

〔南宋〕元代

・羅 椅 『陸放翁詩集』(前集) 『四部叢刊』所収。以下『羅氏前集』と記す。

・劉辰翁 『陸放翁詩集』(後集) 『四部叢刊』所収。以下『劉氏後集』と記す。

・方 回 『瀛奎律髓』 至元二十年(一二八三)刊。以下『律髓』と記す。

〔清代〕

・吳之振・呂留良・吳自牧 『宋詩鈔』所収『劍南詩鈔』 康熙十年(一六七二)刊。以下『宋詩鈔』と記す。

・楊大鶴 『劍南詩鈔』 康熙二十四年(一六八五)序。以下『楊氏詩鈔』と記す。

① 「雨雪兼旬有賦」(劍南二六)、「癸丑上元三夕、皆大雨雪」(劍南二六)、「雨霰作雪不成、大風散雲、月色皎然」(劍南四九)、「十二月二十九日夜半雨雪作、披衣起聽」(劍南四九)、「杜高叔秀才雨雪中相過、留一宿而別、口誦此詩送之」(劍南五〇)、「連日作陰、頗有雨雪意」(劍南七三)、「雨雪久無來客、亦不能出、作長句排悶」(劍南八〇)など。

② これらのテキストについては、拙稿『宋詩選注』に収録された陸游の作品について<sup>1</sup>参照。なお羅椅『陸放翁詩集』、劉辰翁『陸放翁詩集』および周之麟他『陸放翁詩鈔』は長澤規矩也『和刻本漢詩集成』第十六輯(汲古書院、一九七六)所収。

- ・陳 訐『宋十五家詩選』 康熙三十二年（一六九三）序。以下『十五家』と記す。
- ・乾隆帝『唐宋詩醇』 乾隆十五年（一七五〇）刊。以下『詩醇』と記す。
- ・周之麟他『陸放翁詩鈔』 享和元年（一八〇一）刊（和刻本）。以下『周氏詩鈔』と記す。
- ・曾國藩『十八家詩鈔』 同治十三年（一八七四）刊。以下『十八家』と記す。
- 〔近現代〕
- ・黄逸之『陸游詩』（商務印書館、一九三一年）以下、『陸游詩』と記す。
- ・游国恩他『陸游詩選』（人民文学出版社、一九五七年）以下、『游氏詩選』と記す。
- ・疾 風『陸放翁詩詞選』（浙江人民出版社、一九五八年）以下、『詩詞選』と記す。
- ・朱東潤『陸游選集』（上海古籍出版社、一九六二年）以下、『朱氏選集』と記す。

○ 紹興二十九年（一一五九）己卯 三十五歳

前年（紹興二十八年）より福州にあり。福州決曹に転任。

1 「雨晴游洞官山天慶觀、坐間復雨」（以下劍南二）（↓一一二頁）：『羅氏前集』『周氏詩鈔』『十八家』。

2 「海中醉題、時雷雨初霽、天水相接也」

○ 紹興三十年（一一六〇）庚辰 三十六歳

正月、福州を離任し、山陰に帰る。五月、勅令所刪定官となり、臨安で勤務。

○ 紹興三十一年（一一六一）辛巳 三十七歳

七月、大理司直兼宗正寺主簿となる。冬、山陰に帰る。冬末、再び臨安に入り史官となる。（九月、金の完顔亮南進。十一月、虞允文これを采石磯で撃破）

1 「雨中出遊夜歸」：『周氏詩鈔』。

○ 紹興三十二年（一一六二）壬午 三十八歳

九月、枢密院編修官兼編類聖政所檢討官となる。十月、孝宗に召見され、特別に進士出身を賜る。（この年六月、高宗退位し、孝宗即位）

○ 隆興元年（一一六三）癸未 三十九歳

孝宗の側近を批判し、鎮江通判に左遷される。夏、いったん山陰に帰る。

1 「秋雨」

○ 隆興二年（一一六四）甲申 四十歳

二月、鎮江に着任。

○ 乾道元年（一一六五）乙酉 四十一歳

七月、隆興通判に転任。

1 「夜宿陽山磯、将曉大雨、北風甚勁、俄頃行三百余里、遂抵雁翅浦」：『十五家』『詩醇』。

2 「夜夢從數客雨中載酒出遊、山川城闕極雄麗、云長安也、因与客馬上分韻作詩、得遊字」

○ 乾道二年（一一六六）丙戌 四十二歳

四月、弾劾されて免職となり、山陰に帰る。「師の曾幾が世を去る」

○ 乾道三年（一一六七）丁亥 四十三歳

1 「雨霽出遊書事」（以上劔南一）：『楊氏詩鈔』『詩醇』『周氏詩鈔』『陸游詩』。

○ 乾道四年（一一六八）戊子 四十四歳

1 「聞雨」<sup>①</sup>（以下劔南二）（↓一二二頁）：『楊氏詩鈔』『十五家』『游氏詩選』『朱氏選集』。

○ 乾道五年（一一六九）己丑 四十五歳

十二月、夔州通判に任命されるが、病気を理由に出発を延期。

○ 乾道六年（一一七〇）庚寅 四十六歳

閏五月、山陰を出発し夔州に向かう。途中『入蜀記』六巻を書く。十月、夔州に到着。

1 「雨中泊趙屯有感」（↓一二三頁）：『羅氏前集』『宋詩鈔』『楊氏詩鈔』『詩醇』『周氏詩鈔』『陸游詩』。ただし『羅氏前集』は詩題を「雨中泊趙屯」とする。

2 「石首県雨中繫舟、戲作短歌」：『劉氏後集』『宋詩鈔』『楊氏詩鈔』。

3 「巴東遇小雨（二首）」：其一のみ『羅氏前集』。

○ 乾道七年（一一七一）辛卯 四十七歳

① ここでは便宜的に乾道四年の項に記す。



夔州の任期を終え、失職。

- 1 「風雨中望峡口諸山奇甚、戲作短歌」：『劉氏後集』『宋詩鈔』『楊氏詩鈔』『詩醇』『詩詞選』
- 2 「暴雨」
- 3 「西齋雨後」：『周氏詩鈔』
- 4 「急雨」（以上劍南二）

○ 乾道八年（一一七二）壬辰 四十八歳

正月、夔州を離れ、南鄭に赴任。三月、南鄭に到着。王炎の幕僚となる。十月、成都府路安撫使参議官に任命される。十一月、南鄭を離れ、成都に赴任。年末、成都に着任。

- 1 「春雨」（以下劍南三）
- 2 「風雨中過龍洞閣」：『劉氏後集』『周氏詩鈔』
- 3 「嘉川舖遇小雨、景物尤奇」
- 4 「雨中過臨溪古墩」：『楊氏詩鈔』
- 5 「劍門道中遇微雨」（以上劍南三）（↓一一三頁）：『羅氏前集』『楊氏詩鈔』『詩醇』『周氏詩鈔』『十八家』『陸游詩』『游氏詩選』『詩詞選』『朱氏選集』

○ 乾道九年（一一七三）癸巳 四十九歳

春、蜀州の通判代理となる。夏、嘉州の知事代理となる。

- 1 「癸巳夏旁郡多苦旱、惟漢嘉數得雨、然未足也。立秋夜三鼓雨至、明日晡後未止、高下霑足、喜而有賦（二首）」（以下劍南四）
- 2 「立秋後十日風雨淒冷、独居有感」：『楊氏詩鈔』『十五家』
- 3 「**雨夜懷唐安**」（↓一五六頁）
- 4 「雨中至西林寺」
- 5 「晚雨」：『律髓』『宋詩鈔』。ただし『律髓』は曾幾の作とする。
- 6 「**夜雨感懷**」（↓一二五頁）
- 7 「雨後登西樓独酌」
- 8 「雨中登樓望大像」：『楊氏詩鈔』
- 9 「雨中睡起」（以上劍南四）：『十五家』

○ 淳熙元年（一一七四）甲午 五十歳

春、蜀州の任に戻る。冬、榮州の知事代理となる。年末、成都府路安撫使司参議官兼四川制置使参議官に任命される。

- 1 「晨雨」(以下劔南五)
- 2 「雨後集湖上」：『宋詩鈔』『楊氏詩鈔』『十五家』『詩詞選』。
- 3 「宿杜氏莊、晨起遇雨」：『劉氏後集』『楊氏詩鈔』『十八家』。
- 4 「白塔院 時小雨初霽」
- 5 「急雨」
- 6 「病後暑雨書懷」：『宋詩鈔』『楊氏詩鈔』『十五家』『周氏詩鈔』『陸游詩』。
- 7 「雨声」〔↓一二五頁〕
- 8 「久雨」
- 9 「作雨不成、終夜極涼、時去立秋五日也」
- 10 「池上晚雨」
- 11 「雨中作」：『楊氏詩鈔』『十五家』『陸游詩』。
- 12 「秋雨」：『楊氏詩鈔』。
- 13 「雨中出謁歸昼臥」(以上劔南五)

○ 淳熙二年(一一七五)乙未 五十一歳

正月、榮州を出発し、成都に赴任。范成大の参議官となる。

- 1 「喜雨」(以下劔南六)：『十八家』。
- 2 「自漢州之金堂過沈氏竹園小憩、坐間微雨」
- 3 「馬上微雨」(以上劔南六)：『楊氏詩鈔』『陸游詩』。

○ 淳熙三年(一一七六)丙申 五十二歳

三月、参議官を辞職する。秋、祠禄を与えられる。この頃から「放翁」と号する。

- 1 「雨」(以下劔南七)：『宋詩鈔』『楊氏詩鈔』『十五家』『游氏詩選』『詩詞選』。
- 2 「中夜聞大雷雨」〔↓一二六頁〕：『朱氏選集』。
- 3 「雨中登安福寺塔」：『羅氏前集』『楊氏詩鈔』。
- 4 「久旱忽大雨涼甚、小飲醉眠、覺而有作」
- 5 「連日得雨涼甚有作」
- 6 「昇仙橋遇風雨大至、憩小店」(以上劔南七)

○ 淳熙四年(一一七七)丁酉 五十三歳

六月、范成大が臨安に帰還するのを見送り、また成都に戻る。

- 1 「夜聞雨声」(以下劔南八)〔↓一二六頁〕
- 2 「新津小宴之明日、欲遊修覺寺、以雨不果、呈范舍人(二首)」

- 3 「次韻使君吏部見贈、時欲遊鶴山、以雨止」
- 4 「山中小雨、得宇文使君簡、問嘗見張仙翁乎、戲作一絕」…『十八家』。
- 5 「雨中山行、至松風亭、忽澄霽」…『宋詩鈔』『詩醇』『周氏詩鈔』『十八家』。
- 6 「九月十八夜、夢避雨叩一僧院、有老宿年八十許、邀留甚勤、若旧相識者、夢中為賦此詩」(以上劍南八)
- 7 「夜雨有感」(以下劍南九)(↓一二六頁)…『周氏詩鈔』。
- 8 「書雨」(以上劍南九)…『詩醇』。

○ 淳熙五年(一一七八) 戊戌 五十四歳

孝宗の詔により、成都を離れ東に帰る。春、成都を出発、秋、臨安に到着。提拏福建路常平茶塩公事に任命される。いったん山陰に帰り、年末、建安に赴任。

- 1 「南定楼遇急雨」(以下劍南一〇)…『羅氏前集』『宋詩鈔』『楊氏詩鈔』『十五家』『詩醇』『周氏詩鈔』『十八家』『陸游詩』『詩詞選』。
- 2 「雨中遊東坡」…『楊氏詩鈔』。
- 3 「小雨極涼、舟中熟睡至夕」…『劉氏後集』『楊氏詩鈔』『詩醇』『周氏詩鈔』『十八家』『游氏詩選』『詩詞選』『朱氏選集』。
- 4 「舟行蘄黃間、雨霽得便風有感」…『宋詩鈔』『楊氏詩鈔』『十五家』『詩醇』『周氏詩鈔』『十八家』。
- 5 「冬夜聽雨戲作」(二首)(↓一二七頁)…『劉氏後集』『宋詩鈔』『十五家』。
- 6 「欲行雨未止」…『劉氏後集』『楊氏詩鈔』『十五家』。ただし『劉氏後集』は「止」を「至」とする。
- 7 「大雨中離三山、宿天章寺」(以上劍南一〇)…『十五家』。

○ 淳熙六年(一一七九) 己亥 五十五歳

正月、建安に着任。秋、提拏江南西路常平茶塩公事に任命される。十二月、撫州に着任。

- 1 「雨晴至園中」(以下劍南一一)…『楊氏詩鈔』。
- 2 「雨夜(一雨遂通夕)」
- 3 「雨夜不寐、觀壁間所張魏鄭公砥柱銘」…『游氏詩選』『朱氏選集』。
- 4 「雨夜偶書」…『楊氏詩鈔』『陸游詩』。
- 5 「夕雨(二首)」…其一是『周氏詩鈔』。
- 6 「雨夜(小雨初涼夜)」…『楊氏詩鈔』『十五家』。
- 7 「黃亭夜雨」(以上劍南一一)…『十八家』。

○ 淳熙七年(一一八〇) 庚子 五十六歳

撫州に在任中<sup>①</sup>、江西地方に水害があり、役所の貯蔵食糧を放出して難民の救援にあたる。冬、任期満了して山陰に帰る。

- 1 「春雨」（以下劍南一二）…『詩醇』。
- 2 「雨中遣懷」（二首）…其一は『宋詩鈔』『周氏詩鈔』。
- 3 「雨夜（百舌千紅占歲華）」
- 4 「雨夜（兩鬢新霜換旧青）」…『楊氏詩鈔』『十五家』。
- 5 「雨後独登擬峴台」…『周氏詩鈔』『游氏詩選』。
- 6 「雨夜（二首）」…其一は『楊氏詩鈔』。
- 7 「仲夏小旱、方致禱、忽大雨連日、江水為漲、喜而有作」
- 8 「冒雨登擬峴台觀江漲」…『羅氏前集』『周氏詩鈔』『游氏詩選』。
- 9 「大雨踰旬、既止復作、江遂大漲（二首）」…『楊氏詩鈔』『周氏詩鈔』。其二は『游氏詩選』。
- 10 「雨後露坐小酌」
- 11 「聞雨」
- 12 「雨後極涼、料簡篋中旧書有感」…『楊氏詩鈔』『詩醇』『陸游詩』。
- 13 「秋旱方甚、七月二十八夜忽雨、喜而有作」…『游氏詩選』『詩詞選』。
- 14 「秋日小雨有感」…『周氏詩鈔』。
- 15 「雨夜（庭院蕭条秋意深）」（↓一二九頁）…『詩醇』。
- 16 「乾道初、予自臨川歸鍾陵、李德遠范周士送別於西津、是日宿戰平、風雨終夕、今自臨川之高安、復以雨中宿戰平、悵然感懷（二首）」（以上劍南一二）

○ 淳熙八年（一一八一）辛丑 五十七歳

三月、提挙淮南東路常平茶塩公事に任命されるが、弾劾され、任命を取り消される。以後、淳熙十三年春まで山陰にあり。（この年、江南地方に大飢饉あり）

- 1 「春晚風雨中作」（以下劍南一三）…『楊氏詩鈔』『十五家』。
- 2 「督下麦、雨中夜歸」（以上劍南一三）…『楊氏詩鈔』。
- 3 「雨晴步至山亭、欲遂遊東村未果」（以下劍南一四）…『楊氏詩鈔』『十五家』『陸游詩』。
- 4 「風雨旬日、春後始晴」<sup>②</sup>…『十五家』。

○ 淳熙九年（一一八二）壬寅 五十八歳

成都府玉局觀の祠禄を与えられる。

① 撫州では、雨乞いの祈禱文「江西祈雨青詞」（渭南二三）を書いている。  
② 「風雨旬日、春後始晴」は詩題に「春後」とあるので淳熙九年春の詩とすべきかも知れないが、ここでは『校注』の題解に従う。

- 1 「游饑之余、復苦久雨、感歎有作」：『游氏詩選』。
- 2 「久雨小飲」
- 3 「春雨復寒遣懷」：『十五家』。
- 4 「五月十四日夜、夢一僧持詩編過予、有暴雨詩、語頗壯、予欣然和之、聯巨軸欲書、未落筆而覺、追作此篇」：『楊氏詩鈔』『朱氏選集』。

○ 淳熙十年（一一八三）癸卯 五十九歲

- 1 「久雨杜門遣懷」
- 2 「梅雨陂沢皆滿」
- 3 「夏雨」
- 4 「雨夜」（以上劍南一四）：『宋詩鈔』。
- 5 「秋雨漸涼、有懷興元（三首）」（以下劍南一五）：全三首は『十八家』。其一是『周氏詩鈔』。其二是『楊氏詩鈔』『朱氏選集』。
- 6 「雨夜感懷」（↓一五七頁）：『楊氏詩鈔』『十五家』『周氏詩鈔』『陸游詩』。
- 7 「秋雨排悶十韻」：『律髓』『十五家』『詩醇』『周氏詩鈔』『陸游詩』。ただし『律髓』は作者を曾幾とし、『十五家』『周氏詩鈔』は詩題を「秋雨排悶」とする。
- 8 「雨後散步後園（二首）」：其一是『楊氏詩鈔』。
- 9 「後一日復雨」：『楊氏詩鈔』『陸游詩』。
- 10 「雨中遣懷」：『楊氏詩鈔』『陸游詩』。
- 11 「秋雨歎」
- 12 「雨中小酌」：『楊氏詩鈔』『十五家』『陸游詩』。
- 13 「雨止頓寒、遂有晴意」
- 14 「久雨道懷」：『楊氏詩鈔』『陸游詩』。
- 15 「紹興中、与陳魯山王季夷從兄仲高以重九日同遊禹廟、後三十余年、自三橋泛舟歸山居、秋高雨霽、望禹廟樓殿重複、光景宛如當時、而三人者皆下世、予亦衰病無聊、慨然作此詩」：『宋詩鈔』。
- 16 「移花遇小雨喜甚、為賦二十字」（以上劍南一五）（↓一三〇頁）：『楊氏詩鈔』『十五家』『周氏詩鈔』。

○ 淳熙十一年（一一八四）甲辰 六十歲

- 1 「雨中宿石帆山下民家」（以下劍南一六）：『楊氏詩鈔』。
- 2 「中夜雨霽、月色入戸、起飲酒一杯、作絕句」：『十八家』。
- 3 「久雨排悶」
- 4 「雨中泊舟蕭山泉駅」：『十五家』『詩醇』『周氏詩鈔』。
- 5 「江頭十日雨」
- 6 「小雨舟過梅市」
- 7 「春夏雨暘調適、頗有豐歲之望、喜而有作」

- 8 「登台遇雨、避於山亭、晚霽乃歸」
- 9 「日晚散步湖上、遇小雨」：『朱氏選集』『周氏詩鈔』
- 10 「雨中買酒鏡湖酒樓」
- 11 「雨中過東村」(以上劍南一六)

○ 淳熙十二年(一一八五)乙巳 六十一歳

- 1 「小雨」(以下劍南一七)：『劉氏後集』『詩醇』。
- 2 「南□<sup>①</sup>遇大風雨」：『楊氏詩鈔』『詩詞選』。
- 3 「芒種後經旬、無日不雨、偶得長句」：『宋詩鈔』『楊氏詩鈔』『十五家』。
- 4 「久雨喜晴十韻」
- 5 「雨中自項里夜至新塘、捨舟步歸」(二首)
- 6 「夜聽竹間雨声」(↓一三〇頁)
- 7 「雨中排悶」：『羅氏前集』『周氏詩鈔』。

○ 淳熙十三年(一一八六)丙午 六十二歳

春、嚴州の知事に任命される<sup>②</sup>。臨安に赴き、孝宗に謁見。暮春、山陰に帰る。七月、嚴州に赴任。

- 1 「久雨驟晴、山園桃李爛熳、独海棠未甚開、戲作」
- 2 「臨安春雨初霽」(↓一三一頁)：『劉氏後集』『律髓』『宋詩鈔』『楊氏詩鈔』『十五家』『詩醇』『周氏詩鈔』『十八家』『陸游詩』『游氏詩選』『詩詞選』『朱氏選集』。ただし『劉氏後集』は詩題を「臨安雨晴」とする。
- 3 「真珠園雨中作」
- 4 「雨晴遊香山」
- 5 「雨晴」：『楊氏詩鈔』『陸游詩』。
- 6 「小雨泛鏡湖」
- 7 「雨後」：『宋詩鈔』『十五家』『詩醇』。
- 8 「自雲門至上竈欲遊一二僧庵、以雨不果」(以上劍南一七)
- 9 「丙午五月大雨五日不止、鏡湖渺然、想見湖未廢時、有感而賦」(以下劍南一八)：『楊氏詩鈔』『詩醇』。
- 10 「喜雨」(二首)
- 11 「秋夜聞雨」：『十八家』。
- 12 「夜雨枕上」

① □は、木偏+養。南□は、山陰の小地名。『校注』の註釈に「山陰地名、方志失載」とある(第三冊一三〇九頁)。鄒志方『陸游研究』(人民出版社、二〇〇八)第四章「陸游家居」第三節「陸游詩地名釈義」によれば、現在は「南楊」と書き、紹興市の西北十里にあるとのこと。

② 嚴州では、雨乞いの祈禱文「嚴州祈雨青詞」(渭南二三)を書いている。

- 13 「雨夜」：『楊氏詩鈔』。  
14 「秋雨北榭作」(↓一三二頁)：『律髓』『楊氏詩鈔』『詩醇』『周氏詩鈔』『十八家』『陸游詩』『朱氏選集』。

○ 淳熙十四年(一一八七)丁未 六十三歳

嚴州で二十卷本『劍南詩稿』を刊行。「この年、前年に生まれた女兒が世を去る。また韓元吉が世を去る」

- 1 「暁雨」(二首)「  
2 「小雨出西門五里、至東嶽廟」(以上劍南一八)  
3 「初冬風雨驟寒、作短歌」(以下劍南一九)  
4 「雨夕」  
5 「小雨」：『楊氏詩鈔』。  
6 「雨中独酌」(以上劍南一九)

○ 淳熙十五年(一一八八)戊申 六十四歳

七月、嚴州の任期満了し、山陰に帰る。十月、軍器少監に任命され、臨安に赴任。

- 1 「夏雨」(以下劍南二〇)  
2 「雨中作」  
3 「梅雨初晴、迓客東郊」  
4 「休日登千峰榭、遇大風雨、氣象甚偉」：『楊氏詩鈔』。  
5 「雨中独坐」：『楊氏詩鈔』『十八家』。  
6 「雨夜四鼓、起坐至明」：『楊氏詩鈔』『陸游詩』。  
7 「齋中聞急雨」：『周氏詩鈔』。  
8 「秋雨頓寒偶書」  
9 「大雨中作」(以上劍南二〇)：『楊氏詩鈔』。

○ 淳熙十六年(一一八九)己酉 六十五歳

春、礼部郎中に昇進。七月、実録院檢討官を兼任。十一月、弾劾され失脚、山陰に帰る。以後嘉泰二年まで山陰にあり。「二月、孝宗退位、光宗即位」

- 1 「雨後復小雪」(以下劍南二一)：『楊氏詩鈔』。

○ 紹熙元年(一一九〇)庚戌 六十六歳

祠禄を領する。小軒を「風月軒」と命名。「この年、第五子の子約が世を去る」

- 1 「朝雨」
- 2 「春雨（二首）」：其一是『楊氏詩鈔』。其二是『羅氏前集』。
- 3 「梅雨」：『宋詩鈔』。
- 4 「午睡起遇急雨」：『十五家』。
- 5 「夜雨暴至」
- 6 「秋夜風雨暴至」
- 7 「晚秋風雨」（以上劍南二二）

○ 紹熙二年（一一九二）辛亥 六十七歳

- 1 「春雨絶句（六首）」（以下劍南二二）（↓一三三頁）：全六首は『宋詩鈔』。其一是『楊氏詩鈔』。其二是『周氏詩鈔』。ただし『周氏詩鈔』は詩題を「春雨」とする。其三是『楊氏詩鈔』。

- 2 「雨中臥病有感」
- 3 「小雨雲門溪上」
- 4 「曉雨初霽」
- 5 「夏雨」
- 6 「雨中作」（以上劍南二二）（↓一五八頁）
- 7 「八月一日微雨驟涼」（以下劍南二三）
- 8 「秋雨（三首）」（↓一五七頁）：其一是『律髓』。其二是『十五家』。
- 9 「苦雨歎」：『十五家』。
- 10 「紹熙辛亥九月四日、雨後白龍挂西北方、復雨三日、作長句記之」：『楊氏詩鈔』。
- 11 「重九後風雨不止、遂作小寒（三首）」（以上劍南二三）
- 12 「雨声」（以下劍南二四）（↓一三四頁）

○ 紹熙三年（一一九二）壬子 六十八歳

山陰県開国男食邑三百戸を授けられる。

- 1 「雨晴」：『宋詩鈔』『十五家』。
- 2 「六月十四日微雨極涼」（以上劍南二四）：『羅氏前集』『宋詩鈔』『楊氏詩鈔』『十五家』。ただし『十五家』は「十」の字なし。
- 3 「夏秋之交久不雨、方以旱為憂、忽得甘澍、喜而有作」（以下劍南二五）
- 4 「小雨」
- 5 「七月十七日大雨極涼」
- 6 「雨中作」
- 7 「雨多南堂独坐」
- 8 「秋雨初晴有感」：『律髓』。
- 9 「壬子八月癸卯、大風雨拔木飄瓦、通夕不能寐」



- 10 「秋雨不止排悶」(以上劔南二五) : 『楊氏詩鈔』『十五家』『周氏詩鈔』。
- 11 「十一月四日風雨大作」(二首) (以下劔南二六) (↓一三五頁) : 其二是『宋詩鈔』『楊氏詩鈔』『陸游詩』『游氏詩選』『詩詞選』『朱氏選集』。
- 12 「雨晴」 : 『十八家』。
- 13 「歲暮風雨」(二首) 。
- 14 「春雨」<sup>①</sup> : 『宋詩鈔』『楊氏詩鈔』『詩詞選』。

○ 紹熙四年(一一九三) 癸丑 六十九歳

〔この年、范成大が世を去る〕

- 1 「夜雨」(二首) : 其一是『十五家』。其二是『羅氏前集』『十五家』。其三是『楊氏詩鈔』。
- 2 「明日復雨排悶」(二首) : 其一是『楊氏詩鈔』『十五家』『周氏詩鈔』。
- 3 「晴甫一日、復大風雨連日不止遣懷」(以上劔南二六) : 『楊氏詩鈔』『周氏詩鈔』。
- 4 「雨中排悶(一春苦沈陰)」(以下劔南二七)
- 5 「雨中排悶(潤入盆山綠葉稠)」 : 『十五家』。
- 6 「喜雨」
- 7 「雨涼小飲戲作」 : 『楊氏詩鈔』。
- 8 「雨夜排悶」(二首) 。
- 9 「雨中夕食戲作」(三首) : 其二、其三是『楊氏詩鈔』。
- 10 「雨夕焚香」 : 『十八家』。
- 11 「秋雨初霽、徙倚門外有作」
- 12 「雨中作」 : 『楊氏詩鈔』『周氏詩鈔』。
- 13 「雨夜」 : 『宋詩鈔』『十五家』。
- 14 「枕上聞急雨」(二首) (以上劔南二七) : 其一是『周氏詩鈔』。
- 15 「連日風雨寒甚、夜忽大風、明且遂晴」(以下劔南二八) : 『十八家』。
- 16 「風雨」(以上劔南二八)
- 17 「十二月二十六夜聽雨」(以下劔南二九) (↓一三七頁)

○ 紹熙五年(一一九四) 甲寅 七十歳

〔六月、孝宗崩御。光宗退位、寧宗即位。この年、尤表が世を去る〕

- 1 「欲出遇雨」 : 『羅氏前集』『楊氏詩鈔』『詩醇』『周氏詩鈔』『陸游詩』。
- 2 「夏四月渴雨、恐害布種、代鄉隣作插秧歌」
- 3 「閔雨」(二首) : 其一是『楊氏詩鈔』。
- 4 「喜雨」
- 5 「四月晦日小雨」 : 『十五家』。

① 『校注』は「春雨」を紹熙三年冬の作とし、題解に「題云春雨、蓋節近立春耳」と記す。

- 6 「五月得雨、稲苗尽立」(以上劔南二九)
- 7 「時雨」(以下劔南三〇)
- 8 「雨夕排悶」(二首)
- 9 「雨中作」
- 10 「秋雨歎」
- 11 「大風雨中作」(以上劔南三〇) … 『楊氏詩鈔』『游氏詩選』
- 12 「久雨」(以下劔南三一)
- 13 「桐江哲上人以端硯遺子聿、纔寸余而質甚奇、天將雨、輒先流泚、予為效宛陵先生体作詩一首」<sup>①</sup>

○ 慶元元年(一一九五)乙卯 七十一歳

書齋を老学庵と命名。

- 1 「雨霽春色粲然、喜而有賦」(以上劔南三一) … 『周氏詩鈔』
- 2 「雨夜書感」(二首) (以下劔南三二) … 其一是『詩醇』『朱氏選集』。其二是『楊氏詩鈔』。
- 3 「夏雨初霽、題齋壁」 … 『律髓』『楊氏詩鈔』。ただし『律髓』は詩題を「幽居初夏雨霽」とする。

4 「雨中示子聿」 … 『羅氏前集』。

5 「雨中作」 … 『楊氏詩鈔』。

6 「夜雨」

7 「夏夜風雨極涼、枕上口占」(以上劔南三二) … 『楊氏詩鈔』。

8 「立秋後四日雨」(以下劔南三三) … 『十五家』。

9 「十月十七日、予生日也、孤村風雨蕭然、偶得二絕句、予生於淮上、是日平旦大風雨駭人、及予墜地、雨乃止」(二首) (↓一三七頁) … 『宋詩鈔』。

10 「遊山舟中遇風雨戲作」

11 「喜雨」

12 「雨夜」(二首) … 其二是『律髓』。ただし詩題を「夜雨」とする。

13 「雨止行至門外戲作」

14 「雨夜有懷張季長少卿」 … 『宋詩鈔』『楊氏詩鈔』『十五家』『詩醇』『周氏詩鈔』『十八家』。

15 「雨中熟睡至夕」(二首)

16 「雨夕独酌書感」(以上劔南三三)

○ 慶元二年(一一九六)丙辰 七十二歳

1 「夜雨思括蒼遊」(以下劔南三四)

2 「急雨」

3 「雨夜」(以上劔南三四) … 『朱氏選集』。

① 「桐江哲上人以端硯遺子聿…」は、広義の雨の詩と考えて収録した。

- 4 「秋雨初霽試筆」(以下劔南三五)：『羅氏前集』『宋詩鈔』『十五家』『周氏詩鈔』。ただし『羅氏前集』は「試」を「戲」とする。
- 5 「雨後出門散步」(二首)「
- 6 「雨夜読書」(二首)「

○ 慶元三年(一一九七)丁巳 七十三歳

〔この年、妻の王氏が世を去る〕

- 1 「雨中作」(三首)「(以上劔南三五)：其一、其三是『宋詩鈔』。
- 2 「雨後絶涼偶作」(以下劔南三六)：『周氏詩鈔』。
- 3 「久雨」(以上劔南三六)

○ 慶元四年(一一九八)戊午 七十四歳

十月、祠祿の延長の申請をやめる。

- 1 「大雨」(以下劔南三七)：『楊氏詩鈔』『陸游詩』。
- 2 「七月十一日雨後夜坐、戸外觀月」
- 3 「雨三日歌」
- 4 「雨中作」
- 5 「風雨」(以上劔南三七)：『楊氏詩鈔』『陸游詩』。
- 6 「雨夜感旧」(以下劔南三八)：『楊氏詩鈔』『陸游詩』『朱氏選集』。
- 7 「寒雨中偶賦」(二首)「
- 8 「雨夜」(↓一三八頁)：『楊氏詩鈔』。

○ 慶元五年<sup>①</sup>(一一九九)己未 七十五歳

五月、致仕を許される。

- 1 「中春連日得雨、雷亦応候」
- 2 「雨後微陰、光景益奇、復得長句」(以上劔南三八)：『楊氏詩鈔』。
- 3 「雨悶示兒子」(以下劔南三九)「(↓一五八頁)：『楊氏詩鈔』『陸游詩』。
- 4 「春晚苦雨」：『羅氏前集』『周氏詩鈔』。
- 5 「夜雨(空階雨声夜転急)」(↓一五九頁)「
- 6 「喜雨(幽人睡覺夜未央)」
- 7 「五月中連夕風雨、氣候如高秋、枕上有賦」：『十五家』『朱氏選集』。
- 8 「雨後過近村」

① 慶元五年の「泛舟沢中夜帰」(劔南三九)を『羅氏前集』は「泛舟沢中雨夜」として収録。

- 9 「久雨路断、朋旧有相過者、皆不能進」…『楊氏詩鈔』『陸游詩』
- 10 「喜雨（去年禹廟婦梅梁）」
- 11 「喜雨歌」（以上劍南三九）…『周氏詩鈔』『游氏詩選』『詩詞選』
- 12 「夜雨（濃雲如潑墨）」（以下劍南四〇）…『楊氏詩鈔』
- 13 「小雨釣婦」
- 14 「急雨」
- 15 「秋雨益涼写興」…『十五家』
- 16 「微雨午寢、夢憩道傍馭舍、若在秦蜀間、慨然有賦」
- 17 「子龍求煙雨軒詩、口占絕句（二首）」<sup>①</sup>（以上劍南四〇）
- 18 「雨夜讀書」（以下劍南四二）

○ 慶元六年（一一〇〇）庚申 七十六歲

〔この年、朱熹が世を去る〕

- 1 「小雨初霽」…『律髓』
- 2 「上元雨」
- 3 「甲申雨」（以上劍南四二）…『楊氏詩鈔』『游氏詩選』『詩詞選』
- 4 「雨夕枕上作」（以下劍南四三）
- 5 「雨夜（麦熟家家喜墮涎）」
- 6 「雨夜（小雨收仍落）」…『十五家』
- 7 「雨中作」
- 8 「夏五月方閔雨、忽大風雨三日未止（二首）」
- 9 「初秋小雨」（以上劍南四三）
- 10 「十月八日九日連夕雷雨」（以下劍南四四）…『楊氏詩鈔』
- 11 「十月二十八日風雨大作」…『楊氏詩鈔』『游氏詩選』『詩詞選』
- 12 「風雨」（以上劍南四四）

○ 嘉泰元年（一一〇一）辛酉 七十七歲

- 1 「春雨」（以下劍南四五）
- 2 「春雨（二首）」…『楊氏詩鈔』
- 3 「雨晴風日絕佳、徙倚門外（三首）」…全三首は『十八家』。其一是『楊氏詩鈔』。其二是『宋詩鈔』『楊氏詩鈔』『周氏詩鈔』。其三是『宋詩鈔』。
- 4 「春雨（三首）」（↓一三八頁）…全三首は『宋詩鈔』。其一是『楊氏詩鈔』『十五家』。
- 5 「春晚久雨排悶」（以上劍南四五）
- 6 「孟夏渴雨、忽暴熱雨遂大作」（以下劍南四六）
- 7 「夏雨」

① 「子龍求煙雨軒詩…」は、広義の雨の詩と考えて収録した。

- 8 「晨雨」
- 9 「連日大雨、門外湖水渺然」
- 10 「梅雨」
- 11 「夏雨歎」
- 12 「夜雨有感」〔↓一五六頁〕
- 13 「偶作夜雨詩、明日詠而自笑、別賦一首」(以上劍南四六)：『十八家』。
- 14 「七月十七晚行湖塘、雷雨大作」(以下劍南四七)：『楊氏詩鈔』。
- 15 「風雨」
- 16 「嘉泰辛酉八月四日、雨後殊淒冷、新雁已至、夜復風雨不止、是歲八月一日白露〔二首〕」
- 17 「雨夜歎」(以上劍南四七)：『楊氏詩鈔』『十八家』。
- 18 「微雨」(以下劍南四八)
- 19 「雨後至近村〔二首〕」：其一是『詩醇』。
- 20 「雨復作、自近村歸」：『陸游詩』。
- 21 「雨寒戲作」
- 22 「夜雨」〔↓一三八頁〕
- 23 「雨過行視舍北菜圃、因望北村久之〔二首〕」(以上劍南四八)
- 24 「小雨偶出、隣里小兒競隨吾後、不知其意何也」(劍南四九)：『周氏詩鈔』。

○ 嘉泰二年(一二〇二)壬戌 七十八歳

五月、実録院同修撰兼同修国史に任命される。六月、臨安に着任。十二月、秘書監を加えられる。

- 1 「雨夜(断岸輕煙著柳条)」(以下劍南五〇)：『劉氏後集』『十五家』『周氏詩鈔』。
- 2 「龜堂雨後作」
- 3 「久雨」：『十五家』。
- 4 「春雨示隣曲」(以上劍南五〇)
- 5 「夜雨」(以下劍南五一)
- 6 「雨夜觀史」：『十八家』。
- 7 「雨復作」：『十五家』。
- 8 「老学庵北作飯山、既成即雨、彌月不止」：『楊氏詩鈔』。
- 9 「苦雨〔二首〕」
- 10 「雨夜」
- 11 「秋雨」
- 12 「雨夜」(以上劍南五一)
- 13 「雨夜作」(以下劍南五二)〔↓一五九頁〕

○ 嘉泰三年(一二〇三)癸亥 七十九歳

正月、宝謨閣待制を加えられる。四月、孝宗・光宗の実録が完成。致仕を請うも許さ

れず、祠祿を授けられる。五月、山陰に帰る。以後、世を去るまで山陰にあり。

- 1 「立春前後連日風雨」(以上劔南五二)：『楊氏詩鈔』。
- 2 「上元後連数日小雨作寒戲作」(四首)：(以下劔南五三)
- 3 「春社日效宛陵先生体」(四首)：其一「社雨」
- 4 「春雨中偶賦」
- 5 「湖中微雨戲作」
- 6 「雨中別同朝諸公」(二首)：(以上劔南五三)
- 7 「湖上急雨」(劔南五四)：『詩詞選』。
- 8 「疎雨」(劔南五五)

○ 嘉泰四年(一二〇四) 甲子 八十歳

致仕を許される。山陰県開国子に進む。「この年、周必大が世を去る」

- 1 「一春風雨太半有感」(劔南五六)
- 2 「春晚雨中作」(以下劔南五七)：『宋詩鈔』『十五家』『十八家』。
- 3 「小雨」(二首)：
- 4 「夜大雨連明、晨起乃知之」
- 5 「夜雨(暮雨蕭蕭集瓦溝)」(↓一五七頁)
- 6 「細雨」
- 7 「四月廿二日微雨中次前輩韻」
- 8 「夜雨(点滴茅檐雨)」
- 9 「久雨」(二首)：其二は『羅氏前集』『律髓』『宋詩鈔』。
- 10 「復雨」：『宋詩鈔』『周氏詩鈔』。
- 11 「避雨」
- 12 「雨中短歌」(以上劔南五七)
- 13 「大雨」(以下劔南五八)：『楊氏詩鈔』。
- 14 「殘雨」
- 15 「閔雨」：『詩醇』『游氏詩選』。
- 16 「秋雨(雨声疎復密)」：『劉氏後集』『十五家』。
- 17 「雨後涼甚」：『羅氏前集』。
- 18 「雨後」：『周氏詩鈔』『十八家』。
- 19 「秋雨」(二首)：(以上劔南五八)
- 20 「風雨夜坐」(以下劔南五九)：『宋詩鈔』『楊氏詩鈔』『十五家』『十八家』。
- 21 「秋雨」
- 22 「十月暄甚人多疾、十六日風雨作寒、氣候方少正、作短歌以記之」(以上劔南五九)：『楊氏詩鈔』。
- 23 「寒雨中夜坐」(以下劔南六〇)：『楊氏詩鈔』『十五家』。
- 24 「新移竹栽、喜於得雨、而池中鵝鸕乃以水溢而去、戲以長句記之」(以上劔南六〇)

○ 開禧元年（一二〇五）乙丑 八十一歳

- 1 「自開歲陰雨連日未止」（以下劍南六一）：『宋詩鈔』『陸游詩』。ただし『陸游詩』は詩題を「自開歲連日陰雨未止」とする。
- 2 「春雨」：『律髓』『宋詩鈔』『周氏詩鈔』。
- 3 「小雨」：『宋詩鈔』。
- 4 「久雨初霽」
- 5 「雨」（以上劍南六一）：『律髓』『宋詩鈔』。
- 6 「遊山遇雨」（以下劍南六二）：『楊氏詩鈔』『周氏詩鈔』『陸游詩』。
- 7 「仲夏風雨不已」
- 8 「雨中排悶」
- 9 「雨中鋤蕪」
- 10 「大雨」：『周氏詩鈔』。
- 11 「雨後」
- 12 「殘暑得小雨頗涼」
- 13 「七月十九日大風雨雷電」：『楊氏詩鈔』。
- 14 「欲雨」（以上劍南六二）
- 15 「秋雨」（以下劍南六三）
- 16 「小雨」：『宋詩鈔』『楊氏詩鈔』。
- 17 「雨後極涼」
- 18 「雨夜起行室中」：『宋詩鈔』。
- 19 「閏月辛酉壬戌連日風雨、癸亥早晴」（以上劍南六三）：『宋詩鈔』。
- 20 「秋雨」（二首）（以下劍南六四）
- 21 「聽雨」
- 22 「雨夜枕上作」
- 23 「乙丑九月三日晚久雨驟晴、西南新月如玉鉤、重陽以八月置閏、菊花粲然滿園、喜甚作一絕記之」
- 24 「黃昏小雨中躑躅蒼頭、在傍云、初未嘗得暝、予乃甚適、若熟寐者、作五字記之」
- 25 「雨後寒甚」
- 26 「病中雨夜」（以上劍南六四）

○ 開禧二年（一二〇六）丙寅 八十二歳

〔四月、南宋 金と開戦するも敗北。この年、楊万里が世を去る〕

- 1 「春雨〔四首〕」（以下劍南六五）（↓一四一頁）：其二は『楊氏詩鈔』『詩醇』『周氏詩鈔』。其三は『楊氏詩鈔』。其四は『楊氏詩鈔』『周氏詩鈔』。
- 2 「久雨薪炭食飲俱不繼戲作」

- 3 「謝君寄一犁春雨図求詩、為作絶句〔二首〕」①（以上劔南六五）
- 4 「雨」（以下劔南六六）（↓一五六頁）：『宋詩鈔』。
- 5 「五更聞雨思季長」：『周氏詩鈔』。
- 6 「北窓雨中作」（以上劔南六六）
- 7 「雨霽」（以下劔南六七）
- 8 「大雨」
- 9 「雨夜」
- 10 「夜雨」
- 11 「急雨」
- 12 「急雨遽涼」
- 13 「秋後一日風雨」（以上劔南六七）：『宋詩鈔』『十五家』。
- 14 「雨欲作、步至浦口」（以下劔南六八）
- 15 「風雨」
- 16 「秋晚雨中作」（以上劔南六八）：『宋詩鈔』『十五家』。
- 17 「夜聞雨声」（以下劔南六九）
- 18 「雨中示隣里」（以上劔南六九）

○ 開禧三年（一二〇七）丁卯 八十三歳

渭南県開国伯に進む。（この年、韓侂胄が暗殺される。また張績が世を去る）

- 1 「夜雨」（以下劔南七〇）：『楊氏詩鈔』『陸游詩』。
- 2 「閔雨」
- 3 「枕上聞雨声」
- 4 「春早得雨〔二首〕」（以上劔南七〇）：其二是『游氏詩選』。
- 5 「五月雨」（以下劔南七一）
- 6 「五月二十一日風雨大作」：『十八家』『詩詞選』。
- 7 「梅雨初霽」
- 8 「急雨」
- 9 「聽雨」
- 10 「雨霽」
- 11 「連日雲興氣濁、雨意欲成、西南風輒大作、此夜月明如昼」
- 12 「雷雨」
- 13 「喜雨」
- 14 「晚雨」：『周氏詩鈔』。
- 15 「雨晴」：『宋詩鈔』『楊氏詩鈔』『詩醇』『朱氏選集』。
- 16 「雨中出門閑望有作」（以上劔南七一）：『楊氏詩鈔』『陸游詩』。
- 17 「晚雨」（以下劔南七二）

① 「謝君寄一犁春雨図求詩…」は題画詩であるが、広義の雨の詩と考えて収録した。



- 18 「一雨二十日」：『楊氏詩鈔』。  
 19 「入夏多雨、雖止復作、六月甲寅始大晴」：『楊氏詩鈔』。  
 20 「秋雨中作」  
 21 「秋雨書感〔二首〕」（以上劍南七二）：『宋詩鈔』。  
 22 「小雨頗寒」（以下劍南七三）：『楊氏詩鈔』『十五家』。  
 23 「十一月十一日夜聞雨声」（以上劍南七三）

○ 嘉定元年（一二〇八）戊辰 八十四歳

致仕後の半俸を辞退。〔五月、韓侂胄の首級を金に献じ、和議を結ぶ〕

- 1 「春雨」（以下劍南七五）  
 2 「開歲屢作雨不成、正月二十六日夜乃得雨、明日行家圃有賦」：『宋詩鈔』『十五家』。  
 3 「出遊遇雨而返〔二首〕」（以上劍南七五）  
 4 「雨夜思子虞」（以下劍南七六）：『楊氏詩鈔』『十五家』。  
 5 「雨夜（吳中地多雨）」  
 6 「小雨」  
 7 「喜雨」：『游氏詩選』。  
 8 「暑雨〔二首〕」（以上劍南七六）  
 9 「得雨霑足、遂有豐年意、欣然口占」（以下劍南七七）  
 10 「立秋前九日、大雨涼甚〔二首〕」  
 11 「喜雨」  
 12 「欲雨〔二首〕」：『宋詩鈔』。  
 13 「雨夜（病多漸滅灯前課）」（以上劍南七七）：『周氏詩鈔』。  
 14 「溪上小雨」（以下劍南七八）：『十八家』。  
 15 「秋雨」：『楊氏詩鈔』『十五家』。  
 16 「夜雨」（以上劍南七八）  
 17 「雨晴」（以下劍南七九）：『十五家』。  
 18 「雨〔二首〕」  
 19 「雨後快晴、步至湖塘」：『楊氏詩鈔』。  
 20 「兩日寒雨、作雪不成、夜忽大雨遂晴」（以上劍南七九）  
 21 「臘月十四日雨」（以下劍南八〇）  
 22 「夜雨寒甚」（以上劍南八〇）

○ 嘉定二年（一二〇九）己巳 八十五歳

春、弾劾され、宝謨閣待制の官位を剥奪される。年末、世を去る。

- 1 「夜雨」（以下劍南八一）：『楊氏詩鈔』『周氏詩鈔』。  
 2 「小霽乘竹輿至柳姑廟而歸」

- 3 「大雨排悶（二首）」
- 4 「雨夜与隣翁飲、用前輩韻」：『楊氏詩鈔』。
- 5 「夜聞雷雨大作」（以上劍南八一）
- 6 「雨中作」（以下劍南八二）
- 7 「明日復欲出遊而雨、再用前韻」：『周氏詩鈔』。
- 8 「暴雨」（以上劍南八二）
- 9 「雨後（二首）」（以下劍南八三）
- 10 「蒸溽作雨排悶」：『宋詩鈔』。
- 11 「五月下旬大熱、晦日夜得雨、明旦涼甚」
- 12 「暴雨」：『楊氏詩鈔』。
- 13 「連日作雨苦熱」
- 14 「雨後殊有秋意」：『楊氏詩鈔』『十八家』。
- 15 「喜雨」
- 16 「雨中」（↓一四三頁）
- 17 「秋雨」（以上劍南八三）

最後に、陸游の雨の詩の収録作品数が十首未滿の選集を示す。

- ・厲鶚『宋詩紀事』。乾隆十一年（一七四六）刊。「臨安春雨初霽」を収録。
- ・張景星・姚培謙・王永祺『宋詩別裁集』。乾隆二十六年（一七六一）刊。「風雨中望峽口諸山奇甚、戲作短歌」「雨」（卷七）「秋雨排悶十韻」の三首を収録。ただし「秋雨排悶十韻」は詩題を「秋雨排悶」とする。
- ・王士禛選・聞人俊箋『古詩箋』。乾隆三十一年（一七六六）刊。「夜宿陽山磯、將曉大雨、北風甚勁、俄頃行三百余里、遂抵雁翅浦」「風雨中望峽口諸山奇甚、戲作短歌」「劍門道中遇微雨」「雨後散步後園（二首）」其一、「臨安春雨初霽」「秋夜聞雨」「雨夜讀書（二首）」其二、「喜雨歌」「七月十九日大風雷雨電」の九首を収録。ただし「臨安春雨初霽」は韻聯のみ収録し、詩題を「京華春日」とする。
- ・嚴長明『千首宋人絕句』。乾隆三十五年（一七七〇）刊。「小雨極涼、舟中熟睡至夕」「劍門道中遇微雨」「枕上遇急雨（二首）」其一の三首を収録。ただし「劍門道中遇微雨」は「劍門」を「劍南」とする。
- ・姚鼐『今体詩鈔』。嘉慶三年（一七九八）序。「雨中泊趙屯有感」「南定樓遇急雨」「舟行蘄黃間、雨霽得便風有感」の三首を収録。ただし「雨中泊趙屯有感」は詩題を「雨泊趙屯有感」とする。
- ・陳衍『宋詩精華錄』。商務印書館、一九三七年刊。「劍門道中遇微雨」「南定樓遇急雨」「臨安春雨初霽」の三首を収録。
- ・錢鍾書『宋詩選注』。人民文學出版社、一九五八年初版。「劍門道中遇微雨」「臨安春雨初霽」「十一月四日風雨大作（二首）」其二の三首を収録。

・高步瀛『唐宋詩筭要』。上海古籍出版社、一九五九年刊。「石首県雨中繫舟、戲作短歌」「南定樓遇急雨」「小舟極涼、舟中熟睡至夕」の三首を収録。

以上、陸游の雨の詩を整理した。こうして詩題を概観するだけでも、陸游の雨の詩の多様さの一端をうかがい知ることができよう。年代別に見ると、三十代の詩は四題、四十代の詩は二十五題、五十代の詩は八十四題、六十代の詩は九十八題、七十代の詩は一二一題、八〇代の詩は一三〇題に、「雨」の字が用いられている。これらの合計は四六二題となり、九一三五首の全作品の約五パーセントに相当する。すなわち、陸游の詩の二十首に一首は、詩題に「雨」の字が用いられていることになる。

年ごとの分布状況を見ると、入蜀以前の乾道五年までは、まだ詩題に「雨」の字を含む作品は少ない。しかし乾道六年の入蜀以降は、毎年必ず何らかの雨の詩が書かれている。そして、年により増減はあるものの、基本的に晩年に向かうにつれ増加する傾向にある。特に八十代は、わずか六年で七十歳代を上回る数の作品を残している。

ついでながら、「雨」の字を含む詩題が十以上の年は二十、十五以上の年は十二、二十以上の年は五ある。二十題以上となるのは嘉泰元年、嘉泰四年、開禧元年、開禧三年及び嘉定元年で、いずれも七十代後半以降である。二十五題以上の年は、開禧元年のみである。この年の二十六題というのが最多で、三十題以上の年は存在しない。

陸游の雨の詩の詩題は、わずか一字の「雨」というものから、雨に降られた時の状況を詳細に記録する、まるで日記の一節のように長大なものまで、実に様々である。また詩を読む以前に、詩題がすでに豊かな詩情を感じさせる作品も少なくない。一例として、「中夜 雨霽れ、月色 戸に入る。起ちて酒一杯を飲み、絶句を作る」(劍南一六)などは、これ自体が短い詩たり得ているように思われる。

なお、現在の『劍南詩稿』で、詩題に「雨」の字を含む作品が確認できるのは、『詩稿』巻八十三までである。巻八十四と巻八十五の詩題には、「雨」の字は確認できない。

現存する陸游の詩で、「雨」の字が詩句に用いられる最後の作品は、嘉定二年十二月に書かれた「絶句」(劍南八五)である。この詩は、辞世「示児」(↓一頁注④)の六首前に置かれている。

山遮水隔重重堦	山は遮り	水は隔つ	重 重の堦
雨練風柔処処花	雨は練り	風は柔らかにす	処処の花
一病半年能不死	一病 半年	能く死せざれば	
又将此恨醉天涯	また此の恨みを	将て天涯に酔わん	

山はさえぎり、川はへだてる。幾重にも重なる道しるべを。

雨が練りあげ、風が柔らかくする。あちこちで咲く花々を。

ひとたび病気になって半年。もし死なずにいられるものならば、

またこの無念の思いを抱いて、天地の果てで酔いしれることにしよう。

## 第二部 今後の課題と目標

以上、陸游の雨の詩について、夜雨の詩を中心に考察して来た。論じ足りない点も多々あるが、ひとまずここで区切りとさせていただきたい。

この論文では、膨大な陸游の雨の詩を夜雨の詩で代表させるという方法を採用したが、実は、最初からそうするつもりだったわけではない。当初の計画では、より多面的に陸游の雨の詩を論じるつもりであった。夜雨というテーマも、いろいろあるテーマの中の一つとしてあつたに過ぎない。しかし、現実には厳しかった。執筆はなかなか思うようにはかどらず、時が経つにつれ徐々に可能性が狭まって行き、結果としてこのような形に落ち着いた次第である。したがって、執筆を進めて行く過程は、当初計画していたことの多くを断念し、放棄して行く過程でもあった。せめてものことに、今回断念したテーマを列挙しておこう。

- 一、陸游の「風雨」の詩について。「十一月四日風雨大作」をはじめ、陸游には風雨の詩が非常に多い。それらについて考える。
- 一、陸游の「微雨」と「細雨」の詩について。「劍門道中遇微雨」では、詩題に「微雨」、詩句に「細雨」という表現が用いられている。この句を初めとして、陸游の詩に於ける二つの詩語の用法について考える。
- 一、陸游の「春雨を聴く」詩について。「臨安春雨初霽」の「小楼一夜聴春雨」は名句として知られる。陸游以前の詩に遡り、その淵源を探る。
- 一、陸游の詩に於ける雨と「焚香」の関係について。陸游の詩には、しばしば「焚香聴雨」がうたわれる。この問題については第一章でも簡単に触れたが、陸游にとつての「焚香聴雨」の意味を、更に掘り下げて考える。
- 一、陸游の農村に於ける雨の詩について。農村での生活の時間が長かった陸游は、農村の日常に即した雨の詩を数多く書いている。それらについて考える。
- 一、陸游の植物の葉に注ぐ雨の詩について。陸游の雨の詩には、竹、蓮、芭蕉など、様々な植物の葉に降り注ぐ雨の音がうたわれている。それらについて考える。
- 一、陸游の雨の詞について。詩のみならず、陸游の詞にも雨をうたう作品は多い。それらについて考える。

もし時間と健康が許すならば、一部だけでも形にしてみたいと思っている。今後の課題とさせていただきます。

## 執筆を終えるにあたって

以上、膨大な作品数を誇る陸游の研究としては甚だ断片的なものであるが、現時点での研究成果をまとめ、学位論文として提出させていただくことにしたい。

もちろん、「范成大との交流」「夜雨を聴く詩」という二つのテーマだけで陸游の全貌を解明できるわけではないが、いずれも陸游という存在を把握する上で、欠かすことのできない要素であると思う。陸游の、これまであまり論じられることのなかった側面に多少なりとも光を当てることができたとすれば、望外の喜びである。また批判があれば、甘んじて受けるつもりである。

今さら若手のように出発の学位でもなく、かと言って、老大家のように集大成の学位でもない。五十歳という、ある意味中途半端な年齢で学位を取ることの意味を、日々自問自答しながらの執筆作業であった。作業は遅々として進まず、指導教官はじめ関係者の方々には多大な迷惑をおかけしてしまった。自分の貧しい情報処理能力の限界を超え、膨大な文献と格闘し、途方に暮れることもあったが、ともかくも粘り強く書き続け、ようやく完成に漕ぎ着けることができた。決して完全な出来ではないが、具体的な形にできたことは、やはり嬉しい。これもすべて、周囲の人たちの有形無形の協力のおかげである。苦しい思いもしたが、おかげで陸游という存在の大きさ、ひいては中国古典文学の奥行きをの深さを、あらためて実感することができた。それだけでも、貴重な経験をさせていただいたと思っている。悔いが残らないと言えば嘘になるが、現時点での持てる力を出し切ることはできたように思う。

それでも、いざ終わってみると、たくさんのかんことを書いたような気がする一方で、本当に肝心なことは、まだ何も書いていないような気もして来る。第一部と第二部の終わりに記したように、今後の課題は多い。この論文を新たな出発点とし、これからも研究を続けて行きたい。

## 主要参考文献一覧

- 一、中国語の文献と日本語の文献に分け、それぞれ著者名の五十音順に整理した。
- 一、各文献の属するシリーズ名などは、原則として省略した。
- 一、同じ著者による書物が並ぶ場合は、原則として発行年順に整理した。
- 一、発行年が年号で表記されているものは、すべて西暦に改めた。
- 一、分冊の場合、全体の冊数は一律に省略した。
- 一、陸游、范成大、楊万里以外の詩人・文人の選集、研究書は、原則として省略した。
- 一、前言で紹介した文献は、原則としてここにはあげない。ただし重要度の高いものは、その限りではない。
- 一、関連する拙稿は、すべて本文の注で紹介したので、ここにはあげない。
- 一、その他の参考文献は、必要に応じて論文の本文または注の中で言及した。

### ○ 中国語文献

- 于北山『陸游年譜（増訂本）』上海古籍出版社、一九八五年、二〇〇六年  
于北山『范成大年譜』上海古籍出版社、一九八七年、二〇〇六年  
于北山『楊万里詩文選注』上海古籍出版社、一九八八年  
于北山著、于蘊生整理『楊万里年譜』上海世紀出版公司・上海古籍出版社、二〇〇六年  
王琦珍『楊万里詩文集』江西人民出版社、二〇〇六年  
欧小牧『愛国詩人陸游』古典文学出版社、一九五七年  
欧小牧『陸游年譜』人民文学出版社、一九八一年  
欧小牧『陸游伝』成都出版社、一九九四年  
欧小牧『陸游年譜（補正本）』天地出版社、一九九八年  
王水照・高克勤『陸游選集』人民文学出版社、一九九七年  
王定璋『入蜀詩人擲英』四川出版集團・巴蜀書社、二〇〇九年  
欧明俊『陸游』春風文藝出版社、一九九九年  
欧明俊『陸游研究』上海三聯書店、二〇〇七年  
賈映斌・雍思政他『劍門蜀道詩選』巴蜀書社、一九八九年  
郭光『陸游伝』中州書画社、一九八二年  
夏承燾・吳熊和『放翁詞編年箋注』上海古籍出版社、一九八一年  
夏承燾『白石詩詞集』人民文学出版社、一九九八年  
許吟雪・許孟青『宋代蜀詩輯存』四川大学出版社、二〇〇〇年  
許瑞琪『陸游詩注評』齊魯書社、二〇〇九年  
金性堯『宋詩三百首』上海古籍出版社、一九八六年  
嚴修『陸游詩集導讀』巴蜀書社、一九九六年  
高海夫『范成大詩選注』上海古籍出版社、一九八九年  
孔鏡清『陸游詩文選注』上海古籍出版社、一九八七年

- 高洪奎他『陸游詩詞選』山東大學出版社，一九九九年
- 江守義『陸游』黃山書社，二〇〇一年
- 孔凡禮·齊治平『古典文學研究資料彙編 陸游卷』中華書局，一九六二年、二〇〇四年
- 孔凡禮『范成大佚著輯存』中華書局，一九八三年
- 孔凡禮『范成大年譜』齊魯書社，一九八五年
- 孔凡禮校點『西溪叢語 家世旧聞』中華書局，一九九三年
- 孔凡禮『孔凡禮古典文學論集』學苑出版社，一九九九年
- 孔凡禮『范成大筆記六種』中華書局，二〇〇二年
- 高利華『但悲不見九州同』河南文藝出版社，二〇〇二年
- 高利華『亘古男兒——陸游傳』浙江人民出版社，二〇〇七年
- 胡雲翼『宋詞選』上海古籍出版社，一九九二年
- 胡雲翼『宋詩研究』巴蜀書社，一九九三年
- 吳其付『宋代文豪與巴蜀旅遊』巴蜀書社，二〇〇七年
- 胡希望·覃光広『桂海虞衡志輯佚校注』四川民族出版社，一九八六年
- 故宮博物院·浙江省紹興市人民政府『陸游書法全集』故宮出版社，二〇一三年
- 吳洪沢·尹波『宋人年譜叢刊』四川大學出版社，二〇〇三年
- 顧志興『范成大詩歌賞析集』巴蜀書社，一九九一年
- 吳戰壘『千首宋人絕句校注』浙江古籍出版社，一九八六年
- 胡明『南宋詩人論』台灣學生書局，一九九〇年
- 吳明賢·蔣羅『陸游詠蜀詩選』四川文芸出版社，一九九七年
- 伍聯群『北宋文人入蜀詩研究』四川出版集團·巴蜀書社，二〇一〇年
- 蔡義江『陸游詩詞選評』上海古籍出版社，二〇〇二年
- 疾風『陸放翁詩詞選』浙江人民出版社，一九五八年
- 周啓成『楊万里和誠齋體』上海古籍出版社，一九九〇年
- 周錫□（章十復）『范成大詩選』三聯書店香港分店，一九八六年
- 周汝昌『范成大詩選』人民文學出版社，一九五九年、一九八四年
- 周汝昌『楊万里選集』中華書局，一九六二年、一九七五年
- 朱東潤『陸游傳』上海古籍出版社，一九六〇年
- 朱東潤『陸游研究』中華書局，一九六一年
- 朱東潤『陸游選集』上海古籍出版社，一九六二年
- 朱東潤『中國文學論集』中華書局，一九八三年
- 朱陸卿『陸游嚴州詩文箋注』浙江大學出版社，二〇一三年
- 蕭果忱『陸放翁晚年的生活與思想』中國書店，二〇一二年
- 紹興市越州詩社·陸游研究会『陸游論集』杭州大學出版社，一九九三年
- 紹興市文聯『陸游論集』吉林文史出版社，一九八七年
- 蕭翠霞『南宋四大家詠花詩研究』天津出版社，一九九四年
- 章楚藩『楊万里詩歌賞析集』巴蜀書社，一九九四年
- 蕭東海『楊万里年譜』上海三聯書店，二〇〇七年
- 辛更儒『楊万里集箋校』中華書局，二〇〇七年
- 沈松勤『北宋文人与党争（增訂本）』人民出版社，二〇〇四年

- 沈松勤『南宋文人与党争』人民出版社、二〇〇五年
- 鄒志方『陸游家世』北京出版社、二〇〇四年
- 鄒志方『陸游詩詞選』中華書局、二〇〇五年
- 鄒志方『陸游研究』人民出版社、二〇〇八年
- 齊治平『陸游傳論』古典文學出版社、一九五八年。岳麓書社、一九八四年
- 齊治平『陸游』上海古籍出版社、一九七八年
- 成都市文聯·成都市詩詞學會『歷代詩人詠成都』四川文芸出版社、一九九九年
- 薛瑞生『誠齋詩集箋証』三秦出版社、二〇一一年
- 錢鍾書『宋詩選注』人民文學出版社、一九五八年初版をはじめとする諸版。
- 錢鍾書『談藝錄（補訂本）』中華書局、一九八四年
- 錢鍾書『宋詩紀事補正』遼寧人民出版社·遼海出版社、二〇〇三年
- 錢鍾書『宋詩紀事補訂』（手稿影印本）三聯書店、二〇〇五年
- 錢仲聯『劍南詩稿校注』上海古籍出版社、一九八五年
- 錢仲聯『夢苕盦論集』中華書局、一九九三年
- 錢仲聯·馬垂中『陸游全集校注』浙江教育出版社、二〇一一年
- 孫啓祥『陸游漢中詩詞選（修訂本）』陝西出版集團·陝西人民出版社、二〇一〇年
- 譚其驤『中國歷史地圖集』第六冊（宋·遼·金時期）地圖出版社、一九八二年
- 湛之『古典文學研究資料彙編 楊万里范成大卷』中華書局、一九六四年、二〇〇四年
- 中國陸游研究會『陸游與越中山水』人民出版社、二〇〇六年
- 中國陸游研究會『陸游與鑑湖』人民出版社、二〇一一年
- 中國陸游研究會·漢中市陸游學會『陸游與漢中』上海古籍出版社、二〇一三年
- 趙曉蘭『成都文類』中華書局、二〇一一年
- 趙齊平『宋詩臆說』北京大學出版社、一九九三年
- 張鳴『宋詩選』人民文學出版社、二〇〇四年
- 陳延傑·王雲五『陸放翁詩鈔注』商務印書館、一九三八年
- 陳新『宋人長江遊記』春風文藝出版社、一九八七年
- 陳耀東·王小義『陸游談藝錄』浙江教育出版社、二〇〇八年
- 苗洪『陸放翁小品』文化藝術出版社、一九九七年
- 富寿蓀『范石湖集』上海古籍出版社、一九八一年、二〇〇六年
- 游國恩·李易『陸游詩選』人民文學出版社、一九九七年
- 游彪『宋代蔭補制度研究』中國社會科學出版社、二〇〇一年
- 陸忼南『陸游詩選 第三版』香港三聯書店、一九八一年
- 陸堅『陸游詩詞賞析集』巴蜀書社、一九九〇年
- 陸振岳点校『吳郡志』江蘇古籍出版社、一九九九年
- 李慶甲『瀛奎律髓彙評』上海古籍出版社、一九八六年
- 李建英『陸游閑適詩研究』首都師範大學出版社、二〇一二年
- 李劍雄·劉德權『老學庵筆記』中華書局、一九七九年
- 劉維崇『陸游評傳』正中書局、一九六六年
- 劉斯翰『楊万里詩選』香港三聯書店、一九九一年
- 龍榆生『唐宋名家詞選』上海古籍出版社、一九八〇年



○ 日本語文献

- 石川忠久『陸游一〇〇選』NHK出版、二〇〇四年  
一海知義『陸游』岩波書店、一九六二年、一九九〇年  
一海知義『陸游詩選』岩波書店、二〇〇七年  
一海知義『一海知義著作集3 陸游と語る』藤原書店、二〇〇九年  
入谷仙介『宋詩選』朝日新聞社、一九六七年  
入谷仙介『詩人の視線と聴覚 王維と陸游』研文出版、二〇一一年  
岩城秀夫訳『入蜀記』平凡社、一九八六年  
宇野直人『漢詩の歴史 古代歌謡から清末革命詩まで』東方書店、二〇〇五年  
小川環樹『唐詩概説』岩波書店、一九五八年、二〇〇五年  
小川環樹『宋詩選』筑摩書房、一九六七年  
小川環樹『風と雲 中国文学論集』朝日新聞社、一九七二年  
小川環樹『陸游』筑摩書房、一九七四年  
小川環樹『唐代の詩人―その傳記』大修館書店、一九七五年  
小川環樹『小川環樹著作集』第三卷 筑摩書房、一九九七年  
小川環樹訳『呉船録・攬轡録・驂鸞録』平凡社、二〇〇一年  
笈文生・野村鮎子『四庫提要北宋五十家研究』汲古書院、二〇〇〇年  
笈文生・野村鮎子『四庫提要南宋五十家研究』汲古書院、二〇〇六年  
河上肇著、一海知義校訂『陸放翁鑑賞』岩波書店、二〇〇四年  
興膳 宏『六朝詩人傳』大修館書店、二〇〇〇年  
佐藤 保『中国の名詩鑑賞8 宋詩附金』明治書院、一九七八年  
鈴木虎雄『陸放翁詩解』弘文堂書房、上巻一九五〇年、下巻一九五四年  
前野直彬『陸游』集英社、一九六四年、一九九七年  
前野直彬『宋・元・明・清詩集』平凡社、一九七三年  
前野直彬『春草考 ―中国古典詩文論叢―』秋山書店、一九九四年  
前野直彬『宋詩鑑賞辞典』東京堂出版、一九九八年  
村上哲見『宋詞』筑摩書房、一九七三年  
村上哲見『円熟詩人陸游』集英社、一九八三年  
村上哲見『中国文人論』汲古書院、一九九四年  
村上哲見・浅見洋二『蘇軾・陸游』角川書店、一九八九年  
山本和義・大野修作・中原健二『宋代詩詞』角川書店、一九八八年  
横山伊勢雄『宋代文人の詩と詩論』創文社、二〇〇九年  
吉川幸次郎『宋詩概説』岩波書店、一九六二年、二〇〇六年

以上の他、論文の執筆にあたっては、上海人民出版社『文淵閣四庫全書電子版』をはじめとする各種のコンピューター検索ソフトを活用した。